
勇者時々へたれ魔王

百合姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者時々へたれ魔王

【Nコード】

N2094P

【作者名】

百合姫

【あらすじ】

勇者として召喚された・・・はずの山瀬 響。
本来ならば優遇されるはずの響ではあったが・・・残念ながら勇者の才能は無しとされる。

想像とは全く違う扱いに泣きそうになりながら、王様には恥知らず呼ばわり。異世界であった初めて会った美少女には無慈悲に城から追い出され。さらには一人ぼっちで野宿。

ここまで不当な扱いをされた勇者が今までのいただろうか？

そして、所持品が「イチゴ柄パジャマ」と右腕の「黒い手袋」。

所持金ゼロ。

援助ゼロ。

一体、この最悪状態の主人公が何を成すのか・・・

行き当たりばったりで主人公が国を行き来する冒険譚もどき。

これから先、どうなることやら。

そこはまあ・・・お楽しみということだ。

第1節 不親切設計すぎるわっ！（前書き）

このサイトで勇者物を見ていたらめっちゃくちゃ書きたくなって書きました。

後悔はしてない。

もちろんそのまま勇者物じゃつまらないので、いろいろ考えて面白くしていく予定です。

とはいっても・・・僕の文才では並がせいぜいでしょうけど。よければ末永くお付き合いくださいませ。

第1節 不親切設計すぎるわっ！

さて、ここはどこか？

僕はいつの間にやらこんなところにいるのか？

不思議でならない。

いや、なにが不思議かと言うとそれを説明するのもちょっと難しいのだが……

まあとにかく落ち着こう。

落ち着いて状況を整理しようじゃないか。

まず。

身なりはパジャマである。

右腕に付けた覚えの無い黒い手袋。それも二の腕まで生地があるやたら邪魔くさい手袋を除けば……寝ていたはずの格好だ。

髪の毛も多少長めの黒色だし、体も特別変わったところは無い160センチ、45キロボディだ。

痩せ気味プラス小ぶりというのがコンプレックス。

まだまだ成長期なのでこれはまあ、いずれ伸びると信じて疑わないのが身長を伸ばすためのコツだ！！

そして、ここはどこだ？

周りは薄暗く、中央には……というか僕がいるこの場所が中央みたい。

すごい魔法陣的な魔法陣と言わずして、なんと呼べば良いのか？

そんな感じの紋様が描かれている。

かなり大きく、部屋全体の床を覆ってるようだ。

「なんじゃこら？」

と戸惑いを覚えつつ。

次にこちらを興味深げに見る人々の姿を見る。

「……人間、ですか？」

「思わず聞いてしまうような外見ばかりだ。」

「いや、もちろん人なのだが……こ、コスプレだったっけ？」

「コスプレをしてる人が殆どである。」

「あの……。おかしな人と思われるかもですが……」

「僕っていつの間にかここに来てて……。それで……。ここがどこなのか分からないのですが……。どこでしょう？」

「ここって。」

「とりあえず、一番近くにいるコスプレ美少女に少し気後れしながら聞いてみた。」

「髪はぞつとするほど深い緑で、大きな目は全てを塗りつぶすような漆黒で彩られている。」

「服装は……。なんか凄く仰々しい感じの服装を身につけている。」

「そして尻尾が……。尻尾が動いてるのだが……」

「凄いギミツクだな。」

「そして、その格好よりも特筆すべきはアイドルなんて比にならないレベルの可愛さと可憐さを持っていることだ。」

「あ、あなたは私達の勇者としてここに召喚されました。」

「は、はい？」

「あ、あの……。聞こえませんでしたか？」

「いや、き、聞こえましたけど……。ゆ、勇者？」

「勇者って何！？」

「いや、分かるよ？」

「勇者ってのは、あの勇者？」

「魔王を打ち倒すのを最終目的とするヒーロー的で英雄的な？」

「漫画であるよね。」

異世界にいつの間にか呼び出されて、勇者として生きるってやつ。ほかにファンタジックな世界で、唐突に勇者として目覚める主人公とかさ。

あの勇者？

あの勇者に僕が？

「とりあえず、詳しいお話は謁見の間にて。」

目の前の美少女は「まあ当然の反応か。」みたいな顔で謁見の間とやらへと僕を案内する。

というか慣れてる感じだ。

雰囲気は飲まれまくってた僕としては・・・情けなくも付いていくしかなかった。

「貴方様が勇者様か？」

謁見の間とやらで王様らしき人に言われた。

王様って言うより、魔王様って感じの服装だけど。

隣には王妃らしき人もいた。

なんとなく胡散臭い人間だ・・・とりあえず、首肯する。

「勇者様の名は？」

「山瀬 響やませ ひびきです。」

内心パニックながらもかろうじて答える。

「申し訳ないのだが・・・
・・・響様。」

勝手ながら勇者様に願いがある。」

漫画とかで見た展開上はここで、魔王退治を命じられる。

はいはい、分かってますよ。

魔王退治でしょ？

やり尽くされてるんだよ、そのネタは！！

それにさつきから、王様の雰囲気は・・・なんとなく違和感がある。早く話を済ませてとつとココから去りたい。

「レガート王を討伐してほしい。」

「れ、レガート王ですか？」

「うむ。」

憎い憎い東大陸の王だ。」

魔王の名前だろうか？

「拒否権は？」

「あるといえはあるし、無いと言えば無い。」

とりあえず力を見せてくれまいか？」

「力？」

「異世界人がこの世界に来たときに宿る特殊な能力のことだ。」

主なものは能力が常人よりも遥かに優れていることや強大な魔力を持つなどだ。」

なんと都合の良い。

ただ、憧れるものではある。

王様は”勇者としての力”を見せて欲しいのだろう。

僕の右の二の腕の半ばまである手袋がその力の源とかだろうか？

適当に力を込めてみたが・・・なにも出ない。

それから、30分ほど。

あれこれ試したが、うんともすんとも言わない。

とりあえず、力が上がってるなら岩を砕けるだろうとこのことで岩を殴らされたが手が痛いだけだった。

魔法が使えるのかと思えば、魔力を感じないとのことだ。

え？

なにコレ？

新手の羞恥プレイですか？

王様やその側近。

さつき案内してもらった美少女を含めて場の人間すべてが呆れの表情で僕を見ていた。

「ああ。こいつだめだな。」と言外に・・・表情で言っている。

表情に出すなよっ！！？

と言ってやりたい。

普通、こういう時つて勇者的な補正ですぐさま能力発動。

そのゆえあつて「あの力はっ！！伝説のなんちゃら！！」みたいな空気になる。

そして「ぜひと力をお貸しください。勇者様！」みたいな話になるんじゃないのっ！？

んでもってなぜか、美少女と仲間になる。

恋仲になって、笑いあり恋あり熱血あり・・・みたいな冒険がまってるんじゃないの？

身の毛もよだつ凄く冷めた空気が僕の皮膚を・・・こう、チリツと刺激すると言うか？

す、すごい居たたまれないよ。

王様は隠そうともせずのため息をひとつ。

そして驚くべきことを申し上げやりました。

「チリン。」

こ奴を下げる。」

勇者様、ないしは響様という敬称が”こ奴”という子悪党向けのな小市民に向けるであろう台詞に変わっていた。

気のせいかな？と思った・・・というか。

あつてほしかった。

だが、そんな僕の心境をあざ笑うように王様の態度をとってみても・・・礼節の欠片もなかった。

なんとなく感じた違和感の正体は、普段使わないキャラクターだったからか。

さっきまでの態度は嘘で、ネコを被っていたのだ。

もちろん、勇者の助力を得るためであり・・・

僕は勇者どこるか使えるに値しない・・・と判断したとたん手の平を返したわけか。

まあそれでも良い。

勇者気分を味わいたかったのも少しあるが、勇者ともなれば色々しんどいだろうし・・・

平和な日本から来た僕にそんな重責を背負え得るわけもなし。

ただこれだけは教えてほしかった。

「あ、あの元の世界に帰る方法は・・・」

「戯けがっ!!」

貴様を帰すこと程度の小事にいちいち労力を割いてはおれん!!

貴様は・・・一国の王が、要らぬ駒風情に”アレ”を使うと思うておるのか？

恥を知れっ!!」

小事って・・・

要らぬ駒って・・・

恥を知れって言われても・・・この世界に強制的に呼び出されたこの僕には無茶振りが過ぎませんか？

何をすれば恥なのか？アレとやらを使っちゃ駄目なのか？とかいろいろ知らない相手に言う台詞とは思えん理不尽さだ。

あまりのことに呆然としていた僕はチリン・・・もとい、先ほどの緑の髪をした美少女に促されて謁見の間を後にした。

そして謁見の間を出て、早々にこんな話を聞かされた。

「あなたはこれから城を出て行っていました。

自分に有益でないものを残しておくほど、あの王は優しくありません。

殺される前に立ち去ったほうがいいです。

死にたければ・・・別ですが。」

とね。

いや、いろいろ怒涛の展開過ぎて付いていけないところはある。

そんなパニクった頭が考えることと言えば、はじめて出会ったこの世界の女の子、しかも美少女・・・なおかつ名前まで判明した相手と恋愛フラグが立つんじゃないかな？そして手助けしてくれちゃったりなんかして・・・などということであつたが。

・・・その期待も見事に打ち破られ、ただ言われるままに行動した。

そしてギギイーといいながら閉まっていく城門を背に呆然とするしかない僕だつた。

「な、なんで・・・こんな目に遭わなならんのじゃあああああ
あああああああああああつ！！！」

だが、雄たけびをあげておくのを忘れない・・・
理不尽すぎる。

なぜこんなにも理不尽か。

普通、勇者つてもう少し”期待”を受けて迎えられるのではないだろうか？

いや崇拜、偶像視に近い”期待”なんて重荷以外の何者でもないんだけども。

もう少し情けをかけてくれてもいいじゃないか。と思う。

だって、今の僕つて最底辺状態ですよ？

今現在はパジャマ。しかもイチゴの柄が入ったもの。「ファンシーすぎるでしょ」と引かないで。単純にイチゴが好きただけだし、人の目に触れるわけじゃないから・・・。（今触れてるじゃんというツッコミは無しの方で）もちろんのこと財布など無い。ついさっきまでベッドで寝てたし。

あつたとしても日本の通貨はまず通じないだろう。
武器、防具・・・といったものも、もちろんない。これまた寝てたから。

いや、寝てなかったら装備していたのか？と問われれば、否となるけれど。

強いていうなれば鍛え上げたこの筋肉と、己の魂を込めた拳だ！
（鍛え上げたといっても・・・たるまない程度にだし、己の魂を込めたところで打撃の威力が上がるわけでもない。）

なんというか・・・絶望状態だ。

王にいきなり呼び出されて、即追い出され。手持ちもゼロ。

字も読めなければ特殊な能力もないらしい。

大抵のゲームにおける最弱防具「レザーアーマー」を越すさらなる最弱防具「イチゴ柄パジャマ」を携え、さびた剣すら持たない。
ただの素手。

今ならスライムにも負ける自身がある。

そして切実に・・・現実つて厳しいなと思う。

ここはゲームじゃない。

はつきりいえる。

小説でも漫画でも、ましてや夢でもない。

これまたはつきり言える。

そういった類のものなら・・・もう少し主人公が恵まれてるはずだから・・・。

何よりきついのが・・・”一人ぼっち”。

さらに言えば、深夜のようで町明かりすらない。
人気も無く・・・孤独感が半端ないんです！！

かなり泣きそうになりながらその日は野宿した。

第1節 不親切設計すぎるわっ！（後書き）

最初は思いつきり、底辺からのスタートにしてみました。

第2節 なぜだろう？目から汗がとまらないや

早朝。

感覚的には午前5時半と言ったところか。

寝づらくてすぐにこんな時間に起きてしまった。

昨日も思ったことだけど、朝起きてまず思ったのが・・・

「冬じゃなくて本当に良かったっ！！」

四季自体あるのかは分からない。でも、もし真冬だったら凍え死んでいた。

眠ると代謝が落ちるため、そのままコロッと逝ってしまうそうな・・・

・嗚呼怖い。

頼れる人も、宿を取れる金もない。

暖かい場所を探せば良いのだが大して変わらないだろうし、夜中に知らない街を歩き回るのは遠慮したかった。

本当に真冬じゃなくてよかった。

そのことに幸せを感じる。

昨日まで普通に日本で過ごしてた僕がこんな事で幸せを感じるなんて・・・

そもそも野宿。（単に芝生の上で寝ただけ。）

また、泣きそうになってきたが堪えた。

一晚寝たせい、多少冷静に物事を考える余裕が出来たのだ。とりあえず、お金を稼ぐ手段を見つけることから。

やることはいろいろあるが、そこから始めることにした。

まあ、内心不安だらけだが楽しみなこともある。

見たことも無い世界が自分を待っているのだと思うとワクワクが止

まらない。

もちろんこの甘い考えは後々に後悔することとなるのだけれど。

この街の散策兼職業探しを始めた。

町並みを見るとなかなか活気があるようだが少し裏路地へ行くと、ぼろ布まみれの汚らしい男や老人たちがいる。

どうも、貧富の差が激しいようだ。

あの王が治める地だしこんなものか。と妙なところで得心した。

少し同情したが、同情したわけで変わるわけもなし。

救えるわけもなし。

救えたとしても、赤の他人を見て「可哀想」とか言う様な善人氣質でも、お人よしでもない。

というか、野たれ死ぬなら勝手に死んでおけって感じである。

自慢ではないが日本にて社会人適応テストみたいのがあったのだが・
・その中のひとつの項目である人権意識が100点中10点だったのだ。

えらんだ選択肢はもちろん本心であり・・せいぜい60は良くと思っただが・・・

今思っても、わけが分からない。

というか、僕が助けてもらいたい立場だったの。下手したら僕も野たれ死ぬ危険があるわけなのだし。

今思い出しても腹が立つ。

なんども繰り返すが、理不尽すぎる。

一発あの王を、ぶん殴るまで元の世界には帰らないと固く誓う僕である。

もちろん帰れるならすぐにでも帰りたい・・・という程度の固い？誓いだが。

ここは平和な日本とは違う。裏路地に入って追剥にあつてはたまらないので、表通りらしき場所で散策を続けているとやたらとしつかりした建物が目に入る。

汚らしいが、それは生活感ゆえの下町染みた味のある汚れだ。酒場だろうか？

外から見ると分には建物内の人間の雰囲気は良いといえる。

カウンターらしきそこへ入ると、一斉にこちらを振り返る店内の人々。

なに？

入っちゃいけない場所だったの？

もしかしてイチゴ柄パジャマが気に入ったとか！？

駄目駄目っ！

イチゴ柄パジャマは渡さないよっ！！

これは僕のお気に入りベスト・・・ゲフゲフンツ。

それはおいといて・・・服装が気になっているわけではないようだ。人々の視線は「またか。」という呆れの入った物や、「ふむ・・・」と値踏みするようなもの。

「くくく。」という明らかに見下した嫌な嘲笑など。

それが大まかなものだ。

なんか感じ悪い。

とりあえずカウンターの姉さんに尋ねた。

（いろいろ聞く予定なので、出来るだけ丁寧そうな人を選ぶ。）

「あの、すみません。」

「何かしら？」

思ったとおり、感じの良い人で良かったと内心でほっと息をつく。

「あの、不躰で恐縮なのですがこの店は何ですか？
字が読めないもので・・・」

緊張のせいかな普段使わないような丁寧な言葉になってしまったけど、
むしろ良し！

「・・・えーつと・・・なるほど。」

またなのね。」

少しの戸惑いの後、苦笑するお姉さん。

「また・・・とは？」

「あなた、捨てられたのでしょうか？」

この捨てられたは色々解釈できそうだが・・・

「またなのね・・・」あたりで大体は分かる。

というかさっきの店内の態度といい、このお姉さんの発言。

一度ではないんだね？こういうこと。

僕より前に来て、捨てられた人の冥福をお祈りしたい。

死んだのかな？

怖いから聞きたくないけど。

「・・・ええと、ちなみにいままでここに来た人は何人ですか？」

「そう・・・察しの良い子ね。」

子ども扱いは少し嫌だが、まあ綺麗なので許します。

美形ってそれだけで役得だよね。

男女問わずにさ。

僕より美形な男を皆殺しにしたら、相対的に僕が一番美形に・・・

ツクツクツク。

つといけない。

少し精神がおかしくなってた。

皆殺しとまではいかずとも社会的に殺すか、顔を潰すだけでいいも

んね。

・・・いやなんでもないです。

まだパニツクが続いているのですよ。うん。

「人数は・・・おおまかにいって6人くらいかしら？
全員死んだけどね。」

といってお姉さんはニツコリ笑う。

いやいやいやいや！！

聞いたのは人数だけで、その後までは聞いてませぬぞっ！？

あれ？動転して変な言葉に・・・

てか、そんなこと聞かすなっ！！

泣きたくなってきたよう・・・

「もともと、まったくもって才能の無い勇者が召喚されることは少ないらしいから・・・呼ばれた人数のわりに少ないんだけど・・・概ねの捨てられた人はここで身包み剥がされてそのまま野たれ死ぬか、お金を稼ぐさいに魔物に殺されて食われるかよ。」

街を出た二人も、あれからギルドカードが他の街で使われた形跡もないし・・・死んだのでしょうか・・・」

いやああああああああああっ！！

ガクブルモノデスヨ！？

とつとと帰って昼寝したいっ！！

魔物とかまじパナいつす！！

まだ盗賊相手の方が良いよっ！！

自分と同じ身体構造だから、相手の動きがある程度分かるものっ！！
ドラゴンとかティラノサウルス級の生き物がバンバン出てくる世界
だったらどうでしょうっ！？

「さて、どこから召喚されたかは存じ上げませんがあなたの選択肢

は二つあります。

あなたに必要なのはまずはお金でしょう?」

「今までの文脈的に選択肢の予想は付くけどね。」

それを見てお姉さんはフフと笑った。

「まずひとつはこのまま野たれ死ぬこと。

ちなみにこの街で、安全な仕事をしようと思っても人手はすでに限界までありますから仕事は無いと思いますよ。

読み書きも出来ない以上、だまされる可能性も高いです。」

「それは言われなくても分かった。」

ここにきたという6人が死ぬ。

それはそのまま安定した生活が難しいことの表れでもある。

飯に求人が出たとしても、異世界人の僕を雇うことは無いだろう。

裏路地に世捨て人みたいな人と読み書きも出来ない子供。

どっちもどっちだが、どちらかと言えばもともとこの世界にいる住人を選ぶはずだ。

お姉さんはよろしい。といった具合に目を伏せて二つ目をいった。

「もうひとつは、ギルドに登録してモンスターハン・・・」

「ちよっ!!」

その先は駄目っ!!」

なんであのヒットゲームのタイトルをこの人がっ!?

と驚愕する僕。

「フフフ、冗談です。

簡潔に言いますが・・・ギルドに登録して魔獣を狩り、その素材を売りさばくことですかね。」

「簡単に言いますね・・・」

「あなたなら簡単かと思えますよ？」

「・・・っ！」

僕は・・・対人専門ですから・・・」

少し動揺が出るけど、それと同じくらい警戒心も湧き出た。

隠していたつもりだけれど・・・

いままで、こんな場所でも割合冷静に出来きたのは、僕の特技ゆえにだ。

日本では揮えなかった「技」があるゆえに。

なんというか、だ。

我が家の家庭環境はもとも・・・というか特に姉が異常であつた。狂つてると言つても良い。

姉は五つ年上なのだが、中学1年の頃に剣道をはじめた。

次に剣術。

その次に殺人剣を習い始めたという一見、つながるようで繋がらない経歴を持つ姉だ。

殺人剣というより、実践的な剣術というほうが正しいかもしれない。どちらにしても同じだが、スポーツではない対人としての剣術を趣味としていた。

もう少し分かりやすく言うなら、「目の前の人間を斬り捨てる方法を突き詰める剣」だ。

その腕がまた・・・名だたる戦国武将かつ！！

とツツコミたくなる腕前で、はつきり言つて化け物と称しても問題ないレベルである。

姉さん曰く。

「人を斬るのつて病み付きになるよね。」

お前はどこの快樂殺人鬼っ！？と思わず張り倒したくなる衝動を抑え、言の葉を紡ぐ。

ちなみにそのときの僕の返しは

「姉さん・・・同意はとったの？」

「うん、もちろん！」

死んでも恨まないってさ。

滑稽だよなぁ。」

恨む暇を与えてもらう気でいるのよ？」

という姉さんの目は・・・年そのままよりも無邪気なものであり・・・

思わず「そうだよなぁ。」と笑いながら答えた僕を咎める事の出来る人は居まい。

・・・斬られた相手に同情した・・・。

姉さん曰く。

「銃弾つて斬っても楽しくないよ。留学して損しちゃった。ただの時間の無駄で、ヒビとの鍛錬の方がよっぽど修行になるよ。」

ヒビとは僕の呼び名。

響と名前で呼ばれるのは友人間が多く、ヒビは家族間の呼び名。

他のところにはあえてツツコミません。

銃弾を叩き切れるか試すためにだけに留学したり、僕の鍛錬が銃弾を見切るより良いなんて・・・褒めていても微塵も嬉しくない。

姉さん曰く。

「じゃじゃ〜ん。御土産の熊肉で〜す！」

友達との出かけ先で熊が出たから斬ってみたの。

でも・・・やっぱり人が一番かな・・・。」

最後の一言は持てる全力で無視した。

でないと心がいろいろ折れそうだった。

そもそも出たからと言って、熊を殺しては犯罪に抵触するのではないか？

獵友会みたいな場所の許可が必要なんじゃないだろうか？

とまあ・・・そんな姉に実験台とばかりに物心が付いた頃から相手

させられてた僕としては・・・

一般人から見たら僕までかなりの化け物になっていたというわけさ。
才能があつた!?

バツア力をいうなああああああああああああつ!!

そこにどれだけの苦悩と・・・り、り、りり、リアルに血と汗と涙
が・・・ぐぶうふふるうつ!!

なあ、な、泣かないぞ・・・泣かないんだからな・・・。

ハッハッハッ!

笑ってくれてかまわんよ、諸君。

あれ・・・目から汗が出てくるよ・・・なんでだろうね。

くれぐれも才能の一言で語ってくれるな!!

どれほどの・・・

どれほどの・・・

「ど、どうしたの?

急に黙っちゃって?

その?

泣いてる?」

「ちよつと、良き思い出を・・・」

なんというか、今更ながらあの姉以上に理不尽な存在なんて存在しないということ进行を思い出して、やっぱり元の世界に帰らなくて良いかなとか思えてきた僕である。
そのためにも、お金を稼ごう。

その後。お姉さんに多少の話を聞いて、初のギルドミッションに出ることにした。

第2節 なぜだろう？目から汗がとまらないや（後書き）

社会人云々の人権意識の件の部分ですが、実際にそんな感じのテストが存在します。名前は忘れましたが、ちなみに僕は22点でした。（笑）

第3節 お礼をしたがるのは逆に迷惑（前書き）

人死にがでます。ご注意くださいませ。

第3節 お礼をしたがるのは逆に迷惑

ギルドミッションと言うのは、ギルドで請け負う仕事のことである。お姉さんの話によると、お金を稼ぐには魔獣や魔物を狩りまくって素材を売る方法とギルドに登録して、ギルドの仕事を請けつつ魔獣を狩ること。

この二つが今の僕に出来る金稼ぎだそうだ。

前者は組織に身を置かない為、身軽だが後者は腕利きのチェス（ギルドに登録した人のことを言うそうだ）になるにつれて、半強制的な依頼のお願いが来るという。

腕前によってランクもあり、一番下から「ギルドポーン」、「ギルドナイト」、「ギルドビショップ」、「ギルドルーク」、「ギルドキング」ないしは「ギルドクイーン」とある。

最高ランクのギルドキングとギルドクイーンは性別によって変わるだけで同列とのこと。

その分、魔物の素材を売りさばく際に多少の色を付けて買って貰えるし、簡単な支給品やギルドミッションそれぞれの報酬金額の5分の1を前金として貰えるそうだ。（前金依頼によって変わることもあるらしい。）

ちなみにミッション失敗時に特別返す必要はないってさ。

僕の持ち物はお姉さんから餞別としてもらった魔法薬が一つとこれまた餞別の無骨なコンバットナイフ、ミッションの前金である100ガルド。

右手に纏わり付く奇怪な黒い手袋に（外したくても外せない）イチゴ柄パジャマを忘れてはいけない。

そしてお姉さんから発行してもらったギルドカード。

コンバットナイフの入ったナイフケースを腰に携えて、街の外へと一歩踏みでた。

なんというか、かなり見晴らしが良く草原が広がっていた。
道が二手に分かれているが、今回の目的は左側には無く・・・木々の生い茂る「ミゲルの森」の見える右側へ向かう。

道中、なにやらトラブルに遭ってる？

らしき人たちを見つけた。

はつきり言って、かわるつもりなどなかったし、見ず知らずの人を助けるほどの正義感など持ち合わせていなかったのだが・・・

「おらあっ！！」

男どもは死ね死ね死ねっ！！」

「グハハハハッ！！」

「ケケケケケケッ！！」

「グフフフッ！！」

どうも、商人を襲っている盗賊たちだ。

あまりにもチヨイ役過ぎて、死亡キャラなんじゃないか？
と思い始めた。

というか、すでに盗賊らしき人間が一人死んでいて、馬車の護衛役らしき人もやられていた。

そして今殺されたのは商人の男だ。

が、ここまでの流れから言って僕が助けに入って良いものか迷う。
というか、手遅れ？

はつきり言って、この世界はかなりゲームとは違う。

助けに入って、いきなり盗賊の一人が

「き、きさまは何だ！？」

「通りすがりの旅人です。」

「貴様のパジャマ・・・良いパジャマじゃないか！？」

「な、なん・・・だとっ!？」

「お、俺の服と交換しないか？」

「い、いや・・・その・・・このパジャマは・・・」

そこで僕は一瞬躊躇してしまうが、イチゴ柄パジャマを好きだという初めての同士に感極まってパジャマと服を交換してしまう！

服の交換なんて潔癖症を持ってない人でも良い気分ではないだろう。もちろん他人の服は凄まじく嫌だ・・・しかし、イチゴ柄パジャマ同盟のためならば致し方ないと僕は渋々・・・あくまで渋々といった様子で交換に応ずる・・・すると盗賊が笑い出すのだ。

「くくくっ!!」

ありがとうよっ!!」

途端に交換した盗賊が笑い出した。

「馬鹿な奴だっ!!」

俺様の体にはイチゴ柄パジャマを着ないと魔力が戻らないと言う呪いがある!!

その忌々しい呪いのせいで、一度は転落した魔王の座・・・いまこそ取り戻してくれるっ!!」

という・・・いきなりの魔王登場で逆に僕に死亡フラグが立つという可能性があるっ!!

ん？

・・・ある、のだろうか？

「イチゴ柄パジャマで解ける呪いってなにそれっ!？
いくらなんでもないわっ!!」

「ああん？

てめえ・・・何を言っでやがる？」

うおおおおおおおおいっ!?

ついつい、妄想内のツツコミを現実の盗賊さんにしてしまったよっ!?

もちろんのこと、盗賊さんは僕の妄想など知るはずもなく・・・

「てめえ・・・よく見たら珍しい服をしてんじゃねえか・・・俺にくれねえか？」

「嫌ですっ!!」

だってまだ死にたくないものっ!!」

誰だって、レベル1で魔王に挑みたくなどない。死亡フラグなんて立てたくないやいっ!!

「っ!?

・・・ククク・・・わかってんじゃねえか？

まあそうだよな？

服をやったところで助かるわけじゃねえもんな。」

「ば、ばかなっ!?

イチゴ柄パジャマの呪いは効いてないのかッ!？」

「お前さっきから何を言っでんのっ!？」

なんだこいつ?という目でこっちを見る盗賊。

なんてこったい。

イチゴ柄パジャマの呪いは・・・呪いは・・・呪い・・・あれ?現実と妄想がごっちゃになってる?

いつの間に・・・

「気味の悪い野郎だ!!」

おめえらっ！

やっちまえっ！！」

と襲い掛かってくる盗賊ども。

とりあえず、魔王ではないようなので・・・ナイフを構える。

どうしよう？

こ、殺すべき？

四方八方の盗賊の剣戟を紙一重にかわす。

もちろん紙一重でなんとか・・・というわけではなく。

姉さんの剣戟の場合、無駄に動くと次にくる2撃目が避けられないからです・・・

だから最小限の動きで避ける癖が付いてるんですよ・・・

あれ・・・また目から汗が・・・

「頭っ！！

こいつ・・・只者じゃないっすっ！！」

「ちっ！

たかがクソガキ一人だろうがっ！！」

頭と呼ばれた人も混ざって、約10人がかりでかかってくるが・・・
姉さんは・・・姉さんの剣戟は・・・

「もつと怖かったぞぉー！！！！！！っ！！」

ドラゴン。ールの。リーザー風に言ってみた。

ナイフで、まず手近なひとりの喉笛を掻っ切る。

それを見て呆気にとられた一人の心臓を一突きに。

後ろから迫ってきた盗賊の一閃をかわして首を落とす。

割と、簡単に罪悪感無く斬り殺せるのは・・・姉さんに感化されたから。

わけではないと・・・信じたい。

いや、その方がいいのか？

などと思ってる合間にも一人、また一人と斬って、捨てていく。

手に残る肉を裂く感触は思いの外、なんということは無かった。魚を切るようなものである。

最後に頭と呼ばれた一人が残る。

「わ、悪かった。」

も、もう襲うなんてこともしない。

だ、だから助けてくれっ!!」

「途端に手の平を返すんだね。」

「しょ、しょうがねえじゃねえか。」

こつでもしなきゃ生き残れねえんだよ・・・

な、な？

頼むよ。

あ、有り金も置いてくからさ!!」

といって懷から出した袋を僕の前に軽く投げ入れた。

「悪いけど、僕は姉さんと違って斬りたいわけじゃないからね。」

「じゃ、じゃあ・・・」

「だから殺すのさ。」

「へ？」

盗賊の頭を躊躇無く落とした。

姉さんなら、戦意をなくした相手をわざわざ斬り殺したりはしないと思う。

まあ・・・斬り殺す可能性も否定できるわけじゃないけど・・・少なくとも僕は理由が無くちゃ殺さない。

家族が殺されて憎いとか、人の命は尊いとか・・・そんな「倫理的」な問題ではなく。

人を殺す下種はまた、殺す。

そのとき殺された人間が自分の家族や友人ではないという保障はない。

そのとき後悔したのでは遅いから……

危険だから……

危ないから……という理由で「殺しておく」。

実に合理的で良いと思うのだけれど……

あくまでも僕の価値観でしかないからなあゝなどとぼやきながら。

ぶっちゃけて言うと、この価値観は日本にいた頃から持っているもだったりする。

商人の馬車に近づくと、馬は瀕死。

商人は死亡していた。

馬が暴れるのを見てコレもまた殺しておく。

助からないのだから無駄に苦しむこともあるまい……と偽善か自己満足か。

人間を除く動物は”死の概念”を持たないと言う。

死ぬと思っ てないのだから、生きるために常に一生懸命になれる。

命をあきらめると言ったことをしない。

そんな生き物にドドメをさすというのは、正しいことなのか？とらしくないことを考える。

……うむ。

初めての人殺しで自分の予想以上に気が滅入ってるのかもしれない。

どちらにせよあまり良い気分にならぬまま、馬車を覗くと怯えた女の子がいた。

かなり可憐で美人で可愛い。

白銀の髪に赤い瞳。

並よりは確実にある胸に、おぼろげながら分かる体のラインからはスタイルのよさが伺える。

服装はヤケに豪華なのだがそれも擦り切れて、色々な苦勞を彷彿とさせる。

そして足が変な方向へ曲がっていた。
下手な応急処置がされているようだが・・・明らかに不十分な治療である。

赤くて綺麗なその瞳は恐怖に彩られていた。

体も震えており・・・恐怖で動けないといった様子だ。

まあ・・・盗賊数人を一瞬で斬り殺した僕にびびるのは当然か。
凄く傷ついたけど。

まさか、イチゴ柄パジャマにびびっておるまいな？
という気の利いた冗談でも言えれば・・・と思った。
でも残念ながら、どうみてもそういう空気じゃない。

「とりあえず・・・これでも飲みなよ。」

といって魔法薬を差し出した。

これはお姉さんからナイフとともに受け取ったものである。

お姉さん曰く、傷がみるみる治る薬とのことだ。

どんな病も治るとも言っていた。

こんなものがごろごろあるなんて・・・

異世界って便利でいいよね。

科学も違うベクトルで便利だったけども。

「ひっ!？」

ちょっと手を差し出しただけで、そこまでびびられるとは・・・思ってもみなかった。

普通、ここでは助けてくれてありがとう!みたいな感じでフラグが経つんじゃないだろうか?

今度のはかなり傷つきました。

薬をまじまじとみた白銀の・・・白銀ちゃんと呼ぼう。

白銀ちゃんは少し目を見開いた後に「本当にいいの？」と視線でたずねてきた。

「いいから早く飲んでくれる？」
もう、じれったい。

あの程度の盗賊が生きていられる地域なら僕に対応できない魔物は居ない、と判断して渡す。

あ、でも、もし出くわしたらどうしよう・・・と思って、手を引き戻そうとしたところで薬を手取る白銀ちゃん。

え！？

やっぱりいるの！？

そのままグビッと一飲み。

すると・・・擦り傷はもちろんのこと足がグキグキ鳴りながら伸びていく。

い、痛くないのかな？

というかグロいです。

足が治ったとたん・・・信じられないものを見るかのように嬉々として笑う白銀ちゃん。

やヴぁいつ！！？

こうして笑顔を見ると・・・

ど真ん中であり・・・ドストライクであるっ！！

まあどっちも同じ意味の言葉だけど。

惚れてしまいそうな笑顔だ。

悲しいことに初恋もまだという僕・・・そもそも今まで、恋というものをしたことの無い僕にとっては恋愛感情って何それ？食えんの？状態の人生でした。

たしかにグツときたけどそれだけです。

草食系男子・・・というわけではないと思う。

出会いが無いんだよっ！！

友達も1人しかいなかったしっ！！

「だ、だいじょうぶ？」

なんか・・・すごいテンションがあがってるみたいだけど？」

「は、はい。」

恥ずかしそうに俯く白銀ちゃん。

去りついでに商人の死体や馬車の残骸からお金と幅広の片刃の剣・
・ゲームで見たことあるんだけど・・・

何て名前だっけか？

ファルシオン・・・だっけ？

それらを失敬する。

もちろん盗賊の分のお金も回収。

死んでるんだから貰っても罰は当たるまい。

「んじゃ、あんたも達者でね。

近くに街があるから・・・えーっと。

このお金を全部あげよう。

これで護衛でも頼んで、どこへなりと行くといいよ。」

これから魔獣を退治していくのにお金は重くて邪魔くさい。

せつかくだから僕も一部回収しておきたいのだが・・・

魔獣がどんな物なのかも知らないまま自分の動きを鈍くするなんて、

ありえなさ過ぎる。

下手に欲張ってそれで死ぬなんて洒落にならないしね。

多少剣が振れるだけではその辺の人間と変わらないし・・・過信は

禁物である。

用心することに越したことはない。

彼女を送り届けようとふと思ったが・・・なんとも言つように赤の他人にかまつてゐる暇などないのだ。

そういう人助けは本物の勇者がやれば良い。

悪いけど、僕は自分のことで精一杯。

助けたいという気持ちがないわけではない。

とはいえ街までは遠くもないし、見晴らしも良いから問題ないだろう。

「んじゃ、またどこかで縁があつたら会おう。」

社交辞令を言つて去ろうとすると・・・

イチゴ柄パジャマの裾をほんのりとかむ力を感じた。

「い、いかないください・・・」

と上目遣いに懇願する白銀ちゃん。

すつごくドキンとして・・・可愛かった。

台詞もそうだし、しぐさも・・・やブあい。

でも、色欲か生活かと言えば生活が大事である。

そもそも僕はアイドルとかよりも動物的な可愛さの方を取る程度には色欲が弱い。

つゝわけで、それくらいで揺らぐことはない。

姉さんも「女が可愛いときは何かやましいことがあるときだけ。」
といていた。

ただの偏見の気がしないでもない。

もとい、ことあることに斬殺したがる非常識な女の人に言われても説得力のかけらもない。

「悪いけど・・・ミゲルの森でー」

あたりで二の句が告げない・・・

悪いけ・・・のあたりで裾を握る力がキュツと強まって体もそれに
応じて震える。

そんな姿を見せ付けられては・・・

鬼というわけでもない僕にはもう無理だった。

「わかったよ・・・どうして欲しいか言ってみて・・・」

「あ、あの・・・私を守って下さい！

お願いします！！

この件も含めて、いくらでもお礼はしますからっ！！」

「え・・・えーっと？

お礼を求めたわけでもないし、成り行きなのに・・・

そもそも僕にはミッシヨンが・・・」

「そ、それが終わってからで良いです！！

わ、私・・・」

どうも話が見えん。

「というか、僕は人助けをするつもりは・・・」

「お、お願いします！！」

そっいう白銀ちゃんの目は強く、そして頬が染まっていた。

とにかく、街に戻ってそこその宿をとることにした。

盗賊からと商人の分のお金で5千ガルド前後はあったからだ。

ちなみに銅貨が10ガルド、銀貨が100ガルド、金貨が1000ガルドである。

「で、順序だてて説明してくれる？」

僕って・・・異世・・・じゃなくて、遠いところの田舎から来たから文字も読めないし・・・文化の殆どを知らないんだ。」

そっぴいえば言葉が通じるのはなぜだろう？ふと思ったけど、今は考えても詮無いことだ。

「え・・・はい。」

白銀ちゃんは僕の言葉に頷く。
素直な良い子だ。

・・・もし彼女が魔王とかだったりしたらどうしよう？
今更ながら恐ろしくなったが・・・
いやいやいや、魔王が馬車にのって盗賊に襲われるわけが無いじゃないかっ！！

「あの？」

「おぬしは魔王かつ！？」

「は、はい！？」

「いや、・・・なんでもないです。」

白銀ちゃんがきょとした顔を浮かべる。

ええ、僕自身も何を言ったのか・・・ネガティブ妄想が暴走する癖を直さねば・・・と固く誓おう。

「ま、まず、先ほどのお礼から。」

先ほどはありがとうございました。

私の名前はセリア・メ・・・セリアと申します。」

「・・・それで？」

「あ・・・はい。」

なんか名乗れない理由があるようだが・・・あんな場所で盗賊に襲われかけていたのと関係があるのかな？
名乗りたくないなら別にいいや。

「私の仕事は・・・ちよつとわけありでして・・・

とある偶然から・・・反王・・・じゃなくて・・・は、犯罪集団と戦いあうことになったのですっ！！

その戦いのさなか・・・護衛の・・・じゃなくてっ！」

服装や護衛という言葉から・・・まあ・・・なんとなくやんごとない身分であることは想像は付くけど、ツツコマないでおこう。
無駄に関わって下手な厄介ことを抱え込むのはごめんだし。
今のところそんな余裕は無い。

というか・・・この子、言っでは悪いが馬鹿なんじゃないだろうか？
ばればれなんだけども。

「・・・えーっと。

・・・旅の・・・そう！！

旅の仲間とその犯罪集団と戦っていたのですが、はぐれてしまったのです・・・

その際に足を・・・」

「んで、それらの仲間の手がかりを求めて・・・商人の馬車に乗せてもらっていたところに盗賊がやってきて、殺される・・・ないしは手籠めにされるところを運良く僕が通りかかったと？」

「は・・・はい。」

商人の方にはご冥福を祈るしかありません．．．せめて、私の足が．．．」

悔しげに唸るセリア。

「それで．．．盗賊から助けてもらった僕の腕を見込んで、守って欲しいと？」

「は．．．はい！」

それはそれで達成していただいた時に、お礼をしたいとは思いますが．．．

ま、まずは今回、助けていただいたお礼からです！！

私は．．．その．．．家がちよつとした．．．お金持ちでして、私の護衛をしていただければそれとあわせて．．．」

「い、いや、礼なんていいってば．．．」

礼なんて別にどうでもいい。

そもそも守るかどうかも決めていない。どうもきなくさいし、もし地位の高い人間ならば恩を売っておくべきとは思うが、そういう打算は好きじゃない。そもそも今は当面の生活費を稼ぐのが優先だ。というか、僕は少し刃物の扱いが上手いだけだし。

「で、でも．．．

私が受けた多大な恩や．．．エリクシールなんて高価な薬も使わせて頂いたのに．．．

それらの恩はかなりの．．．」

「え、エリクシール？」

「ご、御存知なかったのですか？」

．．．私が頂いた魔法薬は．．．軽く5万ガルドの価値があるのですが．．．」

「ご、ごま、まんっ!？」

そんなに高価なもんだっただのっ!？

てか、それくらいじゃなきゃ目に見えて傷が回復するなんてありえんわなっ!？

ふははははははは！

「あ、あの・・・」

「い、いやいいよ。」

気にしないで。

所詮成り行きだからさ。」

てか、そんなものを選別につて、お姉さん何者ですかっ!？

第4節 セリアの心境は揺れるピンクストーム

私は目の前の男性、というにはいささか幼すぎる少年を畏怖で見えていました。

一見ただの少年ですが・・・彼は私の目の前で情け容赦なく盗賊を斬殺しました。

今まで人死に見たことが無いわけではありませんし、盗賊といえど殺すのは良くない・・・などと甘いことを言うつもりもありません。

ただ、その姿は華麗で優美で・・・

一つの舞踏のように軽やかに盗賊を斬り捨てていく姿は恐ろしさと頼もしさ。

その両方を感じます。

最後に残った一人を殺した時、その目には何も伺えませんでした。ただ少しだけ気分を害してるようです。

次に馬を殺します。

なぜ殺したのか？

その瞳の揺れを見れば、すぐに分かりました。

優しい方です。

どこことなく暖かさを感じるのに・・・不思議な冷たさを感じるのはそのせいでしょうか。

少年が私へと歩み寄ってきます。

身が凍えるように動きません。

情けなくも・・・盗賊に襲われた時点で・・・身が震えて言うことを聞かないのです。

助けてくれた今もその時の恐怖で身が石のように重いのです。

私は無力です。

従者と離れても、盗賊の一人や二人・・・実際は11人でしたが・・・その程度でこうなるとは・・・

いかに未熟かを心身ともに染みました。

少年が助けてくれずに・・・彼らに暴力を振るわれ、蹂躪された場合を考えて・・・本当に・・・本当に恐ろしかった。

震えが止まらないのです。

もちろん・・・商人さんを助けたかった。

ここまで怪我をした私を無償で送り届けてくれるという・・・今の時代、今の国々の状況にしては珍しい良き人でした。

少々、下心が透けてもいましたが・・・男性なら致し方ないとベリルから聞き及んでいます。

とにかく、この足で扱える武器も無く・・・霊力も枯渇している状態。

どうすればいいのか？

いえ、この足でも、武器が無くとも誇り高い私の血筋の人間にとって恩を返すことは至極当然。

命を賭してもその恩に報いるべきだったのです。

しかし・・・だけれど、私には・・・ただただ震えるしかなかったのです。

なんと情けないことかっ！！

怯えるしかない私の目の前で、少年が手を差し出してきました。

つい声が出ました。

「ひっ！？」

単に驚いただけなのですが・・・

今の私の喉は驚いたものではなく・・・引きつったものです。それを聞いて怯えさせたと勘違いしたのか、少年は少しだけ目に戸惑い

を表しました。

助けていただいたのに・・・私という人間は、なんと小さいのでしょうか。

すぐに謝罪を・・・謝罪を・・・と思うのですけれど・・・
彼と目が合うと、痺れた様に体が動かないのです。

そして、胸に沸く弱くはない熱。

一体なんなのだろう？

今までの震えが収まり始めるのですが・・・なぜでしょうか？

震えが止まる気配など微塵もなかったというに・・・

と少々 of 熱感とともに自分の気持ちを整理し、出来るだけ・・・出来るだけありがたく・・・ありがとうという気持ちを態度に出して薬を受け取ります。

薬はエリクシールでした。

これは私の剣術の師匠から知っておけということ一度だけ見せてもらったことがあります。

すべての怪我を・・・病を治すという魔法薬でも最高峰の物だということです。

一部の地域・・・特に国境付近である”レヴァンテ”を含む近辺の街では・・・特に小競合いによって魔法薬の需要が増し、一番効果の低い魔法薬自体かなりの高額な物であるはずなのに・・・

そんな中から最高級に高価なものを・・・これは下心があると判断してよろしいのでしょうか？

リネティアが言っていました。

男が高価なものをやるのは自分の気を引きたいときだけだ。と。

とにかく、先ほどの良くない態度もありますし・・・せつかくのご好意を無下にするのは失礼ですのでご好意に甘えることにします。
あとでお金を請求されても今回の礼とあわせて払わせてもらえば良いだけです。

もしかしたら毒かもしれませんが・・・

この人なら大丈夫・・・という安心感があります。
そもそも私の顔を知らないみたいなので、ここでわざわざ毒薬を使う意味も無いでしょうし、睡眠薬ということもなさそうです。
魔法薬の場合魔力の流れでいたい分かりますし。

とにかく、一気に飲み干すと足がたちどころに治りました。

治っていく過程は自分の足ながら痛々しいというか・・・気持ち悪かったですけど。

立ち上がってみると足を折る前よりも頑丈になった気がします！

久々に自分の足でしっかり立てるのと、鈍い鈍痛からおさらばして一気に恐怖が吹き飛んでしまいました。

毒とか睡眠薬とか・・・少しでも思ってた自分が恥ずかしいです。

もちろん、ある程度の警戒は大切でしょうけど・・・

「だ、だいじょうぶ？」

なんか・・・すごいテンションがあがってるみたいだけど？」

「は、はい。」

は、恥ずかしい・・・

その後、すぐさま私に興味を無くした様で・・・去っていきこうとしました。

自分の戦果であろう盗賊のお金や商人さんの・・・はすこし行儀が悪いと感じましたが、そんな奇麗事ばかりは言ってられませんしね。自分が取って良いだろうお金を全て私に渡して去っていきこうとしたのです。

どうも・・・下心はないみたいですが・・・
残念です・・・あれ？

どうして残念・・・なのでしょう？

もちろん私は引き止めました。

彼にお礼をしてないし、彼に守ってもらえば国に帰れると感じたからです。

ベリルやリネティアを探すのも私一人では荷が重く・・・本当に情けない。

何より私が彼と居たいと感じたのですから・・・

彼は渋々といった様子で一緒に街まで着いてきてくれました。

なんだかんだいって人一倍優しいのかもしれない。

私が懇願した・・・というのももちろんありますけど。

私の願いが届いたと思うとこれもまた嬉しかったのです。

自分勝手なことを言ったのは理解してます。彼を巻き込むとしてるのも気がひけます、がその反省よりも嬉しさが強くて・・・

どうにもこうにも、反省しなければなりません。

でも、これが私にとって初めての我尽ですから・・・きっと神様も許してくれるはずですよ。

命の危険に出くわせば、私をおいて逃げていくでしょうし。

見ず知らずの人を死なない程度に巻き込むくらいいいですよ？

・・・私ってこんな悪魔染みた考えを持っていたでしょうか？

護衛だつて、ロロリエの街までの予定ですから大丈夫なはずですよ。

宿では事情を話して護衛を頼みました。

彼は嫌がっています。

礼も受け取らないといいますが・・・

その彼の類は薄っすらと紅に染まっていました。

照れ屋さんのようですね。

エリクシールの件は知らなかったようですが・・・

気にしないで良いの一言。

コレは照れてるとかではなく・・・本当に心底からそういつてるように聞こえました。

お金ではなく・・・お金では買えないもの・・・が欲しいのでしょうか？

でも・・・お金で買えない・・・物？

なんでしょう？

か、かか、体・・・でしょうか？

だ、駄目ですっ！！

私はやっぱり好きな人が・・・い、いえ・・・想像してみると・・・この人なら良いような・・・

ま、待ってくださいっ！！？

そういうのはやっぱりいけないと思いますっ！

いけないと思いますが・・・

それ以外に・・・礼となると・・・？

わ、わかりません。

わ、私にはわかりませんっ！！

と、とにかく護衛を頼みましょう。

国に帰ってから礼を考えれば良いのですっ！

か、体を求めると決まったわけでもないですし・・・

か、かか、体なんて・・・ふ、不潔ですっ！！

「どうしたの？」

「あ、いえ。なんでもありません。」

うつかり顔に出ていたようです。

それに・・・なんとなく確信しています。

礼はともかく私の依頼は聞いてくれる・・・

なんだかんだいつて最後にはやっぱり助けてくれそうな・・・そんな確信が私の胸の内にはあるのです。

第5節 ヤルルクは天使様？

「はあ。」

僕は深いため息を付いた。

たかが剣を振れる程度の男に何を期待してるのか？
理解に苦しむ。

が、ここまで関わった以上、知らんぷりはできない。
何をするにせよ危ない橋は渡らなければならないし。
ここで一丁、大きな仕事を請けるのもまた一興だ。

それにこの世界の住人としてばらく行動をとにするのは大切なことになる。

主に地理や文化についてだ。

「・・・僕は 山瀬 響。」

いや、ヒビキ ヤマセって言った方が良いのかな？
セリア・・・さんだっけ？

請けるけれど、期待はしないでね？」

「は、はい。」

よろしく願います、ヒビキさん。」

「さんは知らない。」

「では私もその様に。」

お互いにクスクス笑いあう。

あ、そう言えばギルドミッションがまだ中途だったな。

「セリアさ・・・セリアはこのまま、宿で休んで。」

「あ、はい。」

えーっと・・・ミゲルの森に行かれるのですか？」

「まあね。」

やんなくちゃいけないことあるし。」

「わ、私も行きます！」

「いや、盗賊ぐらいでびびるセリアは足手まとい。」

「うっ……で、でも命の恩人を……それに、私は奇跡を使えますっ!!」

「奇跡？」

僕の口から疑問の声を出すと、うっとなやむセリア。

「あ、いえ……ま、魔術でした！」

魔術とちよつと間違えちゃいましたっ!!

本当ですっ!!

奇跡なんて一度も使った事がないですっ！」

わたたと両手を動かしながら急に焦り始めるセリア。

「使った事がない……って言い方だと使えないわけじゃなくて、使えるけど使ってない……っていう風に聞こえるけど？」

「ひ、ひうっ!？」

「……えと……ヒビキは意地悪です!!」

「あっはっはっは。」

会話できるってのはいいなあ……うん。

一人ぼつちはつらいもんなあ……

それで……奇跡って何のこと？

「……白状しますと、私は奇跡が使えます……けど……

ここ、西の大陸……えと、私たち東大陸の民は魔大陸と呼んでいます。

その魔大陸ではただの人間は見つかり次第殺されると……聞いていましたから……

一応、隠していたんですけど……別に良いです。」

「はい？」

どうも彼女の話では、この世界では現在戦争中真っ只中であり、西

大陸の・・・通称「魔族」と東大陸の「人間」。

その二種間が争ってるそう。

ちなみに現在は西大陸の魔族の「とある秘術」により、東大陸が押されてること。

とある秘術ってのは多分、勇者召喚のことだろう。

そして、西大陸の魔族は大抵が異形・・・ないしは体の一部が獣じみており、色々な種族がいる。

吸血鬼、竜人族、ゴーレム、魚人族、魔力を持つ人間（魔族という場合、大抵これを指すらしい）、幻獣などなど。

そして魔力を用いて「魔術」を行使すること。

一方の東大陸は人間を中心にした大陸。精霊、エルフ、獣人族というのが主な種族であり、西に比べて数では圧倒的である。霊力を用いて奇跡という術を行使する。

しかし、多くは身体能力で負けており、数があるゆえにまだ残っているという状況だ。

ちなみに僕がいるのは西大陸。

そしてこの街はレヴァンテというらしい。

国境付近の街だそう。

「別に良いっていうけど・・・僕が殺さないなんて保証も無いのに白状しちゃうの？」

最後まで誤魔化しとけばいいのに。」

もうちょつと意地悪なことをいつてみた。

もちろん、殺すだとか、そんなことは日本から来た僕にはどうでも良い。

セリアは一瞬ビクツとするが覚悟を決めたように僕から目線を外さない。

・・・なんていうか、照れる。

「・・・あそこまで言ってしまったては、誤魔化しても無駄だと思い

ましたし・・・ヒビキが盗賊を殺したときに言っていました。

人を殺す下種は、また殺す・・・だから、盗賊を殺したんですね・
・後から仕返しされる可能性を排除するために。そのときに自分の周りの人間が巻き込まれないように。そのためにきっちり殺しておく・・・それって、ヒビキなりの正義・・・優しさでしょう？

・・・今この場で私を殺すのはヒビキにとっての正義ではないと思いますから。

でなければ、言ってしまった時点で逃げます。」

うむう・・・なんか負けた気分だ。

正義・・・ね。

正義って大層なもんではないんだけども・・・そして、優しくは無いと思う。

単なる防衛本能というか、身を守るためってのが一番だし。

「それに田舎からきたって嘘ですよね？」

「どうしてそう思うの？」

「いくらなんでも奇跡、魔術のことは知らないのはおかしいです。」
まあそりゃそうだ。

それを知らないってのはまず可笑しすぎるわな。

とりあえず、せつかく白状してもらったんだしこっちも異世界から召喚されたことを話した。

少し驚いたようだが・・・

「だったら、なおさら私が付いていきますっ!!」

この世界や魔獣のことを全く知らないんですから・・・それにこう見えてもそこそこの腕はあるんですよ？

盗賊にびびったのだって・・・足を怪我してたのと、いつもいたベリルとリネティアがいなかったから・・・」

といって目を伏せるセリア。

すこし泣きそう・・・はぐれた仲間を心配してか？

とりあえず、その頭をなでてやる。

「ふえ？」

「とにかく、護衛の依頼も受けたんだし・・・その護衛対象を危険地にみすみす連れて行けるわけ無いよ・・・」

「い、いえ・・・あの・・・だ、だったら明日から護衛の任務を依頼しますっ！！」

ですから、今はただの私の友人ですっ！！

友人を見捨てると私に言うのですかっ！？」

セリアは超必死・・・そこまでついていきたいものかね・・・

「・・・はあ・・・わかったよ。

ただし。

僕は本当に自分の手で一杯だから・・・いざとなったら僕を捨てて逃げてよ？」

「え・・・つと？」

普通、逆では？」

「でなければつれてかないよ。」

「は、はいっ！！」

という顔は満面の笑みであり・・・笑みを見て、なんとなく胸がチリツとした。

なんだこの気持ち？と思ったけど・・・とりあえずミゲルの森へと発つことにする。

準備中、終始ウキウキしてるセリアを見て・・・一抹の不安がよぎったが致し方あるまい。

ちなみに詳しいギルドミッション内容は「ミゲルの森に生息するヤ

ルルクの牙を納品せよ」とのことだ。

ヤルルクというのは羊を大型化させたような魔物であり、初心者のチエスの登竜門だそうだ。

体長は約200cm。体重は約120キロ。

ただ、羊と違い雑食となっており、それにもなつて歯が雑食特有の形になっている。

獲物を引き裂くための犬歯と、噛み砕くための羊そのままの歯があり、その内の犬歯が目的の物。

犬歯は魔術の触媒や魔法薬の材料、防具の装飾やお守り、漢方薬と使い道が多岐にわたり、一部では養殖されて家畜化されている。

一頭から4本しか取れないため、割合貴重。

気性は特別凶暴ということはないが大人しいというわけでもない。

オスとメス、数匹の子供と少数の群れで居ることが多く、どう分断するかがキモとなる魔獣である。

ちなみに一匹一匹自体は牙とその巨体から繰り出される体当たり以外は特別脅威と言うわけではないらしい。

ちなみにギルド内の書庫の魔獣図鑑から得た知識＋セリアの話である。

魔物図鑑と言うのもあったが・・・どう違うのかはセリアに聞けばわかるだろうか？

などと魔獣についての情報を反芻しながら歩いていると、ミゲルの森に到着する。

「うわ・・・蒸し暑・・・」

森の入り口に入ってすぐに蒸し蒸しとした湿気に体を覆われた。気持ち悪い。

獣道らしき場所を歩いていると早々にヤルルクを見つけた。

「さて・・・どうしようか？」

数は5頭。

オスメス2頭に子供が3頭だ。

手持ちの武器はナイフにファルシオン。

セリアはショートソードと簡易式の鉄の盾を持っている。

街の武器屋で買ったものだ。

皆殺しもいけそうだが・・・牙は四本で十分。

一頭でいいし、無駄に殺生はしたくない。それに今はセリアがいる。どんな動きを見せるのか知らない初見の相手に、下手に博打をうつとそれで死にかねん。

デモン。ソウルで言う、蛸看守の初見殺しは辛かった・・・などと少し日本を懐かしく思ったり。

結局塔の攻略は最後の方に回したんだっけ？

これはゲームじゃないし・・・おなじみのイチゴ柄パジャマしか身を守るものがないのだ。

防御力ゼロのこれしかね。

足を滑らせて一撃貰えば・・・想像したくないな。

「私が囫に・・・きゃんっ!？」

セリアの頭を軽く小突く。

「何いってんの？」

んな心臓に悪い作戦却下だ、却下。

僕がまず、一撃を不意打ちであてるからそれで殺せれば御の字。

そこで親がどういう行動をとるのか・・・子供を守るように立ちほだかるのか？

逃げるのか？怒りくるって襲い掛かってくるのか？子供を逃がしたら親も逃げるのか・・・なんにせよ、僕が囫になって他の奴を引き剥がすから、セリアがその間に殺した奴の牙を剥ぎ取る。取ったあとは即離脱で。

それでいこう。」

「そ、それは私の心臓に悪い作戦ですっ!!
ヒビキが死んだらどうするんですかつ!？」

「そのまま返してやるわっ!」

「わ、私は良いんですっ!!」

奇跡がありますからっ!!」

「そんなに便利なのか？」

「いえ・・・それほどでもないですけど・・・」

「じゃあだめじゃんっ!!」

「で、でも・・・命の恩人なのに・・・」

「・・・命の恩人じゃなくて、君は僕の事を友人だと言ってくれたでしょ？」

友人ってのは対等な立場。

命の恩人だから・・・とか、僕を立てなくて良いから。
適材適所って奴だよ。」

ちなみに僕にとって友人なんてのは久しぶりに出来た・・・

だって・・・姉が・・・いるから・・・

体育のときなんて刀傷がね・・・うん。

姉さんは”巧く”斬るから刀傷なんて残らないんだけど、斬られた
刀傷がすぐ治るわけも無く。

姉さんと僕の試合・・・というか死合は普通に真剣です・・・

そして、斬られます。

文字通り血と汗と涙を流し・・・

もちろん、斬られたくない。

しかし、相手は姉さん。

人外の化け物です。

その化け物に勝つ・・・というか勝つのは無理なので、一日の死合
で受ける刀傷を出来るだけ少なく・・・そんな方向性の特訓を重視

して・・・

刀傷を受ける可能性を極力少なくするために学校でも屋上や体育館裏で一人で特訓。

帰っても特訓。

そして死合。

斬られたくないので必死に見切りの技や身のこなしを熟達させます。だが、しかし、姉さんも負けじと技を熟達させていきます。

こっちが回避の技術を高めても、すぐさま姉も追いつき追い越し、すぐ斬られまくる。

斬られたくないのでより腕をあげる。

姉さんも上がる。

また斬られ始めたので、また腕をあげる。

姉さんも上がる。

・・・無限ループ・・・ぶはあううううおおおっ！！

泣いてない・・・泣いても・・・解決しないんだから・・・泣いてどうするんだ・・・

ああ・・・そういえばこの世界に姉さんはいないんだよな・・・

やば・・・泣けて・・・きたよ・・・

もちろん・・・うれし泣きだよ・・・

「どうしました？」

「いや、なんでもない。」

すぐさま気を持ちなおし・・・そんな場合でないことを自覚する。

姉さんに比べたらヤルルクなんて、ヤルルクなんて・・・ヤルルクが天使に見えるようっ！！

「ああ・・・天使様・・・後光がお見え・・・」

「あ、あの？」

「す、すまんすまん。」

ちよっと故郷を思い出してね。」

「ヒビキ・・・」

なんか同情の視線を受けるが・・・勘違いしてるね。これ。

「まあとにかく、いくよ。」

といって立ち上がる。

そして、地面を蹴りぬけ瞬時にトップスピードに。

縮地という技である。

ちなみに、この技は僕の十八番であり一番熟練度が高い。

姉さんという化け物と戦う上でどれほど世話になったことが・・・
どういう原理かはそのうちに。

一刀のもと子供のヤルルクを切り捨てた。

胴体が真つ二つになる。

子供を狙ったのは子供を守るべき親を殺してしまうと他の子供が生き延びれないと考えたからだ。

すぐさまヤルルクも反応。

「クルオオオオオオオオンッ！！」

怒りと悲しみをないませにした雄たけびが上がる。

角があるからオスか。

メスは子供を引き連れて森の奥へと入っていく。

どうやら、オスが気を引く役のようなのだ。

おそらくは時間稼ぎだろう。

これならこいつを引き連れるよりもこの場で相手をしていた方が良いかもしれない。

下手にセリアから離れる必要はないと判断して僕はファルシオンを構えた。

角の一つでもへし折れば逃げてくれるだろう。

「クルオオオオオオオオッ！！」

突進してくるヤルルク。

背後で様子をみるセリア。

だが・・・突如、そのヤルルクに襲い掛かる赤い影が舞い降りた。

第5節 ヤルルクは天使様？（後書き）

デモンズソウルの蛸看取、始めての時は本当に不意打ちでした。

近づいて叩き切ってやろうとしたら、イキナリの全方位攻撃（球状に放つ術）で成す術もなく吹き飛ばされ、起き抜けに痺れ玉。んで、口吻で一つき。

死亡する。（笑）

何度やっても全方位ないしは痺れ玉で玉砕という。（笑）

第6節 卑屈とは良くない物よね

赤い影の正体。

それは赤いドラゴンだった。

「うおっ!？」

瞬時に飛びのいたが、ヤルルクのオスはかわせなかったようで、そのまま噛み千切られて赤いのに咀嚼される。

大きさはワゴン車くらいだ。

形はワゴン車に腕と足をつけたような感じ。

口・・・というか頭が馬鹿みたいに大きい。

・・・なにより怖い。

「ひあっ!？」

ヒ、ヒビキッ!

その魔獣はバルバトです!

こんなところに出てくるなんて・・・」

「ば、バルバト?」

「上位竜種のレッドドラゴンに擬態するツリードドラゴン科の下位竜種ですっ!!!」

いろいろ初めて聞く単語が出てきたが、とりあえずそこは流そう。

「で、特徴はっ!？」

「魔力を持つので物理攻撃が通りづらいのと、鱗が固くて物理攻撃が通りづらいことですっ!!

ひゃあっ!？」

こっち見てますうっ!？」

その説明だと物理攻撃が通りづらいということしか分からないよ!？」

「しょうがない・・・セリアは逃げてっ！」

ちよっと逃がしてくれそうにないし、僕が囿になる。

「え、でも・・・」

「いいからっ!!」

あとで、僕も逃げるっ!!」

と叫びながら先手必勝。

姉さん曰く

「剣は力で振るものじゃないわ。」

とのことだ。

そう。

技術。

姉さんによると技術があれば非力でも斬れない物は無いらしい。

本当かな・・・

と、とにかく斬ろうっ!!

居合いの型をとって試しに普通に斬ってみた。

ギイイイッンッ!!

「う、うそっ!?

は、はじかれたっ!?

下位の竜種・・・といってもたかが爬虫類と思っていたが、刃が入らない。

てか、僕の技量はタングステンだろうとステンレスだろうと叩き切れるのに・・・

せめて手傷ぐらいは負わせられると思ったんだけど、これはやばい。人類の英知が結集された合金以上の固さを生物が持つとかファンタ

ジー侮りがたし！！

「ちっ！！」

バルバトの顎が襲いくる。

そこをターンしながらかわしてナイフを投擲。

そこそこ業物だからもったいないけど、眼球めがけて放った。

キンッ！！

「うえっ！？

またっ！？」

はじかれるナイフ。

そっついや、魔力でも守られてるんだっけか？

魔力・・・反則すぎるよ。

眼球も堅いなんて、どこを狙えつつうのさ！？

また襲い掛かってくるバルバトの顎。

動作が見え見えなのでかわすのは苦ではないが、なんせこっちの攻撃も通じない。

一応もう一度斬りつけるが、やはりはじかれる。

今度はファルシオンを腰に構えて、少し腰を落とす。

再臨。居合いの型である。

姉さん直伝の居合い剣パート1。

「桜花烈蹴斬っ！！」

子供っぽい名前は勘弁願いたい。

姉さんの技なので姉さんの技名そのままだ。

ちなみに「桜花」の部分は単にその単語が好きというだけで剣の軌跡が桜色とか、どっからともなく桜が舞い散るというわけではない。名のとおり斬って蹴る技。

力の入れ方が普通の居合いと違い、固いものを斬るための居合い剣。鎧を着込んだ相手専用の技である。

あくまで対人技なので、蹴りがあるが今回はそれを省略。 あんな堅

い魔獣相手に蹴りなんて無駄な動作をつけるだけだ。

「グルアツ!!」

「ちいっ!!」

ギヤリンつと良い音を奏でるが、ビクともしない。

一応傷はつけたが、鱗を2、3枚剥がし、一筋の浅い傷を入れただけだ。

やっぱり堅い。

セリアの叫びが聞こえた。

「ヒビキ、かわしてくださいっ!!」

叫びと同時に変な圧力が背にかかる。

後ろを振り向くと、なんか光る直径30センチくらいの棒・・・槍？がセリアの周りを浮遊していた。

セリアが続けて叫ぶ。

「ホーリーランスッ!!」

棒の先が尖って、射出。僕はあわてて斜線上から飛びのく。光の棒はバルバトに見事命中。突き刺さった。

「ギヤアアアアオオオオンッ!!」

断末魔をその大きな口から吐き出して、倒れるバルバト。
・・・なん・・・ですと？

「な、何？

今の？」

「今のが奇跡ですよ？」

いやそりやなんとなくわかる。

ただ・・・ただ言いたい。

僕の苦勞は何だったのだろうか。
はなから使ってほしかったよ……。

結局、その後にバルバトに食われたヤルルクの残骸と最初に仕留めた子供から牙を8本入手。

バルバトの素材もできるだけ剥ぎ取って、その場をあとにした。

宿に戻る途中でギルドに寄り素材を売り払って、牙も納品。

お姉さんから意味深な笑みを受けたが……よくわからない。

周りの連中は僕に対する興味をすでに持ちあわせていなかったようで、無視していた。

商人達から取ったお金も合わせて、5万ガルドというそこそこの大金を手に来た。

セリアによると、バルバトは特殊な繁殖法を用いており、その特異な繁殖形態から個体数が少ないため滅多に出会うことが無く、素材が高値で売れるのはそのためとか。

難易度としては魔術、奇跡を使える種族にとっては割りと楽な相手のため、ギルドナイトクラス以上のチェスにとっては絶好の鴨らしい。

可哀想に。

ちなみに、彼女の奇跡「ホーリーランス」は奇跡の中でも上位の攻撃力を誇る物だそうで、準備に時間がかかる、燃費が悪いという欠点をのぞけば使い勝手が良い術らしい。

エリクシールのおかげで霊力が満タン近くまで回復したから使えたとのこと。

まあとにかく。

「当面の目的はセリアの仲間探し？」

「い、いえ・・・おそらくですが、私の故郷に戻る道中の街で出会えると思います。」

「そう。」

「んじゃ、明日は・・・とりあえず、お互いの服装を変えよう。」

「そ、それもそうですね。」

「い、いちご？という果物の柄は少し男性の召し物には向かない気がします。」

「ばっ・・・バカいうな・・・っ!!」

「べ、別に似合うとか似合わないじゃなくて、好きだから着てるわけ・・・」

「というか、パジャマだから良いんだよっ!!」

「ぱじゃま・・・？」

「寝巻のことだよっ！」

「人目に付かないからいいじゃないかっ!!」

「凄く人目についてたと思いますけど・・・」

「あえて描写しなかったが、街の人の視線が痛いのは・・・し、しかたないんだ・・・」

「これしかないから・・・決して内心、気に入ってるわけではない。」

「セリアだって変わらず目立ってたじゃんっ!？」

「わ、私はまだマシですう!!」

「一緒にしないでくださいっ!!」

「へ、変態さんっ!!」

「へ、へんた・・・」

「ぐはあっ!!」

「今のは・・・心にグリグリ・・・ザクザクと刺さってきた・・・」

女の子に変態って・・・かなりきつい。

「変態か。」

「あ、え、．．．えと、物の弾みで言ってしまっただけで．．．その、あまりそうは思って．．．」

「き、気休めはよしてくれええええええええええつ！！」

そのまま街中を走り回ったのは言うまでも無い。

次の日。

ノックが聞こえた。

十中八九、彼女だろ。

「……ん？」

「あ．．．えと．．．昨日はごめんなさ．．．」

「いや、変態だからね。」

「気にしないよ。」

もちろん気にしてます。

「ふうえつ……あの……本当に……」

「大丈夫……大丈夫だから……」

服屋に……いっ……と……い……で……ぼ……僕……は……変……態……だ……も……の……」

我ながら情けないと思うが……凄くグツサリきたんだ……分かってるよ。

イチゴ柄パジャマが邪道な・・・邪道なことくらい。

内心、気に入ってたのも認める。

実は全身映るくらいの大きな鏡見て「やつぱりイチゴ柄パジャマは最高——僕かつけえええええつ！似合いすぎだしっ——！」と言つてたのも認めるよ。

気に入ってた……気に入ってたからこそ……傷つくんだ……

うん。

そして似合っているほうが恥だということも分かるよ。
今更ながらこの世界に来て早々に出会った王様の「恥知らず」という言葉が身にしみる。

きつとこの僕の変態性を一瞬で見抜いて、オブラートに包んで言っていたに違いない。

他にも色々理不尽なこと言ってた気がするけど、きつとそれらは力モフラージュであり、本当に伝えたかったのはその恥知らずという言葉だったんだ。

さすが王様・・・ぼ、僕は・・・変態で恥知らずなんだ・・・。

「・・・恥知らずでごめんなさい。」

「あ、あう・・・謝らねばならないのは私のほう・・・」

「いや・・・いいんだ・・・グズ・・・恥知らずの変態に謝らなくても・・・」

「わ、私・・・そ、そんなに傷つくとは思ってなくて・・・」「ごめ・・・」

「いや・・・いいんだ・・・いいのだ・・・変態でごめんなさい。」

この世界にて溜まったストレスのせいか、やけに情緒不安定もとい卑屈になる僕。

後日談になるがこの時の僕はどうかしていたとは思えない。

「う、ごめ・・・ごめんなさいごめんなさい・・・ごめんなさい・・・ぐず・・・ひう・・・ぐ・・・うぐ・・・ご、ごめ・・・」

だって、セリアを泣かせてしまったんだもの。

慌てて立ち上がる僕！！

「いや、いや・・・ちょ、な、泣かないで・・・ぼ、僕が悪かった・・・悪かったからお願い・・・泣き止んでくれっ！-!-」

駆け寄って頭をなでなでしながら（後から思うとこの行為もおかしかった）必死になぐさめる僕。

結局彼女が泣き止んだのは30分後だった。

卑屈には二度とならない・・・そう固く誓う・・・固く誓うことが多いな・・・と思いつつ誓う僕だった。

服は彼女に選んでもらった。

彼女自身あまり目立ちたくない事情があるので、（隠したいのは東大陸の人間ということだけではないみたいだが）目立たない村娘の格好を少し冒険者風にしたもので・・・それでも白銀の髪が目立ちまくりだけでも僕はその辺の冒険者って感じである。要所要所に鎧片がついているものだ。

イチゴ柄パジャマは綺麗にたたんでバックパックに入れた。

魔術により作られてたバックパックらしく、見た目以上に大量に入るとのこと。

便利だな・・・魔術。

この段階で3万ガルドほど。

バックパックが高かったが、これは確実に必要なので致し方あるまい。

余ったお金で彼女のショートソードを少し良質なものにして、盾も魔力が備わっているものに変えた。

僕はそのまふアルシオンと無骨なナイフ。

日本刀があればなおよかったのだが・・・さすがになかった。

一応、スレッドシールドという幅広の小型両刃剣を購入してバックパックに入れておく。

僕かセリアの武器が壊れたとき用だ。
投げナイフ用に10本ほどナイフを購入。

食材もある程度買うつと・・・かなりの量になったが全てバックパツクに入った。

残額は1000ガルドほどとなったが、宿に一人一晩で150ガルドほどなので大丈夫だろう。

「バックパツクすご・・・」

「ヒビキの国には無かったのですか？」

「無かったよ。」

こんな便利なもの。

ただ、馬車より便利なものはあつたけどね。

それより、次の目的地はここから北東にある口・・・なんだっけ？」

「ロロリエ、です。」

錬金術の盛んな都とも呼ばれていますね。

錬金術によって作られた珍しい武器、防具が多いそうです。

私の出身は東大陸ですし、あくまでも聞いた話ですけど。」

錬金術とは銅を鉄に。鉄を金に。金をダイヤモンドにといった具合に、全く別の物質に変化させる術。

日本では考えられない物理法則の無視である。

ただ、そこには色々な制約があるらしい。

なにはともあれ準備は万端。

あとはロロリエへ向かう馬車の護衛のギルドミッションを受ければ良いだけ。

馬車に乗せてもらい護衛しつつ、ついでに移動をしちやおうという作戦だ。

商人の出入りが激しいのですぐにミッションは出るだろう。

ギルドへ向かった。

「あら？」

今度は何を受けるのかしら？

そちらのお嬢さんもこんにちわ。

素材の換金の時にあったわよね？

というか、あのお洋服はやめてしまったの？可愛かったのに……」

お、お姉さん……あんたって人は……

ここにきて初めて得た理解者がっ！！

やはり、イチゴ柄パジャマがわかる人にはわかるのか……と嬉々としていたら、不機嫌な声でセリアが言った。

「デレデレしないでください……あくまでも私の護衛がメインなんですからね！」

何を怒っているのか？

馬車の護衛はあくまで移動手段に過ぎないのは分かっているし、彼女の護衛を優先するのは分かっている。

……卑屈になっていたことに今更ながら怒ってるのか？

服と一緒に買いに行く時はむしろ上機嫌だったのだけだ。

お姉さんは含みのある笑顔を見せるだけだ。

「あいも変わらず可愛いお嬢さんね。」

「べ、別にそんな……」

「そう？」

かなり可愛いし、僕は好きだけど？」

「ふうえっ！？」

「お姉さんの前で見せ付けてくれるのね。」

ぶはあっ!?

ち、ちが・・・そんな意味では・・・見た目が可愛いつて話だったよねっ!?

「ち、ちが・・・」

「照れなくて良いじゃない。それで。」

今日はどのようなご用件かしら?」

・・・からかって遊ばないでほしい。

気を取り直してお姉さんに馬車の護衛のミッションがないか聞いてみた。

「ふふ。ちょうどあるわよ。」

報酬も良いし、お勧めね。

となるとしばらく会えないことになるわ・・・残念。」

「つつても、まだ会って3回目くらい・・・」

「そうなんだけどね。」

お姉さんはフッフと色っぽく笑っている。

「それじゃがんばって。」

応援してるわ。」

「あ、ありがとう。」

「ありがとうございます。」

あ、と。

言っておかなくてはならないことがあった。

「あの、エリクシルやナイフとか・・・ありがとうございました。」

「

「いいのよ。」

ただの気まぐれなもの。」

「僕の前に来たという6人にもやったんでしょう?」

かなり高価だったと・・・」

「いいえ。」

「あなただけよ？」

「ど、どうして？」

「言っただけでしょう？」

「気まぐれだって。」

「はあ・・・とうなずくしかない。」

「なんにせよありがたかった。」

「背後でまた不機嫌になってムツとしてるセリアがいるが・・・なんなんだろう？」

「ではまた。縁があつたら・・・」

「ええ。次に会うときが楽しみよ。」

「次に会うなんてのはまず無いですっ！！
行きましようっ！」

「ヒビキっ！」

「ちょ、ちよつと・・・腕が痛い・・・いた・・・いたたたた・・・力強いってばっ！」

「ふふふ。」

「勇者となるか魔王となるか。」

「楽しみよ。」

「山瀬 響君。」

「ギルドの受付嬢たる彼女の独白は誰も聞いていなかった。」

第6節 卑屈とは良くない物よね（後書き）

錬金術の都「ロロリエ」の名は錬金術繋がりで「ロロナのアトリエ」から持ってきた物です。

Amazon評価が高かったのでプレイしてみたのですが、個人的にはハマらず・・・残念です。

第7節 月の魔力より「ばか」の魔力

護衛をする商人の名前はグスタフといった。

感じのよさそうな中年のおっさんである。

ただ、額に水晶が付いていて何かと聞いたら、変な顔をされた。

「彼はポポイ族みたいですね。」

数は少ないけど、唯一西大陸と東大陸を行き交いすることが許されている種族です。」

とはセリアの談。

特別大きな力を持たないが、商才に秀でたものが多いらしい。

ほとんどの商人はポポイ族だとか。

「ははは。私の一族を知らないとは・・・」

君の故郷は人が行きづらい場所だったのかな？」

とはグスタフの談だ。

途中、ちょこちょこと魔獣とであった。

ソルトドッグとフラワーラビットである。

ソルトドッグは体表に塩を形成し、他の捕食者から身を守っているそう。

大きさは柴犬程度。

塩分の過剰摂取はそれだけで死ぬ原因にもなるし、食べたものでもないだろう。

だが、塩自体は表皮から生成されるので、肉自体には塩気が無く、その肉は柔らかい。

なおかつ、さつと脂がのった美味なもので少し大き目の街では盛んに養殖されてるらしい。

昨日の晩の食材はソルトドッグの肉だった。

実に美味しいものだ。

（ただソルトドッグの解体は見れたものじゃなかった。）

フラワービットは頭頂部に花を咲かせる以外はただのウサギで、この魔獣も養殖がされてるらしい。花の花粉は魔法薬の原料だそうで、それなりの値段で売れるのと。

2日ほど経ち、ロロリエの手前の山道でまたもやバルバトと出くわした。

本当に個体数が少ないのだろうか？

馬車には遠くで停車してもらい、もう一人のフルアーマーで重装の護衛（名前は忘れた）に馬車を任せて、交戦。

「セリアはあいつに見つからないところで待機してて。

僕が囷になって注意を引き付けるから、その間に馬車を先に。後から追いつく。」

「はい。

他の人がいなければ私の奇跡で殺せるのですが……き、気をつけてくださいね。」

「言われるまでもないよ。」

という僕の言葉にとりあえず、といった具合で頷くのだが……本当に分かってるのか疑わしいところがある。

どうも、いまだに「命の恩人で借りがある」という水臭いことを思ってるらしいのだ。

恩人をおいていくわけには……と目で言っていたがそこはあえて無視。

そもそも西大陸に住む人前では奇跡を使えないからいても足手まといなだけだ。

「女の子を危険にさらすわけにはいかないっ！」みたいないじらしい他意はなく、護衛対象だということと、足が速い僕が囷役をする方がより安全というだけの話で、倒せなくとも僕一人なら余裕で逃

げられるのである。

姉さんのせい・・・おかげでね。

姉さんといえば、夏休みの合宿を思い出した。

一年前の高校2年の夏だったか？

たまたま修学旅行ということで、山に行くことになったのだが・・・

そこに姉さんがいたのだ。

僕は戦慄したよ・・・

姉さんがいた理由は熊の駆除依頼。

その山では少し前から規格外の熊が暴れまわっていて、賢く、地元の猟友会でも苦戦していたらしい。

そこにどこからか姉さんの話を聞きつけた人が姉さんに依頼したということで・・・

そんな熊が居る場所を旅行先にすんと言いたかったが、学校側は知らなかったとのこと。

そして、何が戦慄したって、その姉さんが熊を斬り殺したところを偶然にも僕の友人・・・姉さんの顔を写真で知っていた友人が見てしまったということにある。

熊の返り血で真っ赤になった姉さん。

しかし姉さんは水準をはるかに上回る美人なので、触れてはならない艶やかさ、美しさ・・・というものを友人は感じたらしい。

もちろん僕の姉さんではないと誤魔化したが、危うく僕のクラス内の見方が変わるところであった。

小学校の頃のような思いはしたくは・・・ぶほううつ！！

やば・・・泣けて・・・いや、唐突に目から汗を噴出しなくなってしまった。

小学校の頃のエピソードはまたそのうちにしたいと思う。

肝心の二度目のバルバト戦だが、ここまでの戦いでどうも身体能力

が2〜3倍くらいに向上しているらしいことに気づいた僕がそれを意識して桜花烈蹴斬を放つと、難なく斬れた。

蹴りもつい入れてしまったのだが、予想以上に威力があり、鱗が弾け飛んでいた。

首を落とすのは物理的に・・・ファルシオンの刀身の長さよりもバルバトの首の太さの方が勝っていたので無理だったが、リベンジを果たせたのはちょっと満足。

ただファルシオンは少し欠けてしまった。

少し力が入っていた証拠である。

自分はまだまだ姉さんに適わないと感じながらセリアに一言声をかけようとする・・・

「ひ、ヒビキ・・・す、すごいんですけど・・・なんというか・・・私、必要なかったですかっ!？」

「い、いや・・・別にそういうわけでは・・・」

「なんか不機嫌・・・？」

「前は手を抜いてたのですか？」

「いや・・・だんだん力を使いこなせるようになった・・・って感じかな？」

意識すると身体能力が増すみたいで・・・」

「ふうん・・・心配してた私がバカみたいです・・・」

「な、何？」

「別に何でもありませんっ!」

「いや、そんなあからさまに不機嫌で居られると・・・理由がさ・・・」

「なんなんだろうっか？」

「意味が分からない。」

商人と、名前を忘れたフルアーマーの男性。面倒なのでフルさんと

する。フルさんも驚いていた。

「ぼ、坊主・・・すげえなオイ。

奴を単なる剣で殺したのはお前が初めてじゃないか？」

とはフルさんの言葉。

「これでポーンとは・・・

ナイトクラス以上のチェスは大体が魔術を持っていますから、決して強い魔獣ではないですが・・・」

魔術が効くのはもうすでに知っていたが、魔力を帯びた魔法剣でも有効だという。

ただの剣で斬り殺したのがとんでもなく凄いことらしいことは分かった。

でも姉さんなら、と思って考えるのをやめた。

考えるまでもなく姉さんなら簡単にぶった切るだろう。

というか、魔王というものがいても姉さんならぶった切れる。

その確信が・・・というか、どうせ召喚するなら姉さんの方を思っただけとそんな仮定に意味は無い。

バルバトの素材は鱗や牙。爪である。

それらを剥ぎ取って、もてない分は商人さんやフルさんに分けた。いいのか？と聞かれたが良いも悪いも、持てない分はどうしようもない。

そうこうしてようやくロロリエにたどり着く。

「んじゃ、まだどこかであつたらよろしくな。」

「ええ。こちらこそ。」

フルさんと別れ、商人さんとも別れる。

「次も君たちに頼みたいものだ・・・

これは今回の報酬。

少し上乘せしてもらわせたからね。」

なぜ？と言つ前に商人が言った。

「珍しいものを見せてもらったのと、バルバトの素材をいただいたからさ。」

これだけしてもらって何も礼が無いというのは私の商売魂が許さない。」

「そ、そうですか・・・では頂いておきます。」

特別必要というわけではないが、魂とまで言われてはしょうがあるまい。

ちなみに上乘せぶんや、ここまでにくる時に狩った魔獣の素材を売り払うとこれまた大分お金が溜まった。
なかなかおいしい仕事だったかな。

「僕は武器屋に行くよ。」

セリアはどうする?」

「わ、私も付いていきます。」

まあそれがいいかな。

珍しい武器があるというロロリエ・・・もとい魔法剣があるかもという期待を込めて武器屋へ。

魔法剣はあるが、やはり、刀は無い。魔法の宿った刀などももちろん無い。

刀が欲しいな。

「これなんてどうですか?」

「ん?これ?」

というのはファルシオンの魔法剣。

月の魔力が宿っており、切れ味が増し、魔法的な攻撃力を持つらしい。

確かに魔法剣としては良さそうだが、剣自体の出来は並より低いからいだ。

これでは切れ味と頑丈さが増したところで、今持つファルシオンと大して変わらないように見える。

「わ、わかるんですか？」

「なんとなく・・・魔力なのかな？」

これ。流れが見える。」

最近、どうも目がおかしい。

いや、正常なんだけど・・・セリアのホーリーランスを見て以来、魔力と霊力の流れが見えるようになってきた。僕の体には魔力、霊力が微塵も無いのだけど（異世界人だから？）流れが見えることになんとなくその力が及ぼす影響も分かるようになってくる。

「魔眼・・・ですかね？」

「まがん？」

「はい。」

通常、魔力、霊力といったものは目に見えず、感じる事が出来ません。

上級の魔術師、聖職者はその感じ方からある程度の効果がわかるらしいです。

ちなみに私にもそこそのことは・・・魔力に関しては全くわかりませんけど。

とにかく、魔眼とは上級術者のそれ以上の見極め能力を持っていて、魔力、霊力のどちらでも見極められるという特殊な力です・・・ヒビキが勇者として召喚された際の力はそれでしょうか？」

「・・・そうかも。」

でも、そしたら外れないこの黒い手袋はなんだろう？

魔眼ならこの手袋要らないじゃん。しかも外れないという呪いの装備みたいな仕様だし。

普通にこの目は実質かなりありがたいけどね。」

「そういえば、誰よりも早くバルバトを見つけてましたものね。」

ツリードラゴン科は基本的に待ち伏せ型の狩りをしますから・・・
下手したら先手を打たれて護衛が失敗していたかも・・・」
「うん。」

魔力の流れで潜んでるのが分かった。」

とか話しても解決しないので、とりあえず、剣の修理を頼んで武器屋を後にした。

「そういえば、感じるってことで分かっちゃうならセリアが奇跡を使えるってこともばれるんじゃないの？」

「それは無いです。」

き、奇跡において私は、て、天才・・・とのことみたいですから。」
少し顔を真っ赤にして俯くセリア。
か、かわいい・・・

「私は霊力の量、操作、使える奇跡の豊富さ。
全てにおいてダントツだそうです。」

日常生活で常に霊力を外に漏れださないように出来るのはちゃんとした訓練をしないとけません。私としては物心付く前から自然とやっていたんですけどね・・・

ご、ごめんなさい。

じ、自慢じゃないんですよ!？」

「じ、自慢じゃないの？」

嫌な女だな～と思ってたんだけど・・・」

「ち、ちが・・・べ、べつに・・・嫌って・・・嫌いに・・・」

どうわっ!？」

ちよつとからかうつもりが、なんか泣きそうになってるっ!!

「い、いやいや・・・冗談・・・冗談だから・・・」

「ほ、本当ですか・・・?」

上目遣いにそう言う彼女は可愛くて可愛くて・・・
つい顔をそらすと

「や、やっぱり・・・嫌いに・・・いやに・・・」

「ちょ、ちょっ・・・ちがくてね・・・あまりに可愛いからつい顔をそら・・・じゃねえっ!？」

つい本音が。

「か、可愛い・・・ば、ばかなこといわないでくださいっ!!
・・・ば、ばか・・・」

ぐふうはあああああああっ!!
何この”ばか”!?

最後の「ばか」がこれまたたまらんっ!!

なんだ・・・この気持ちいいいいいいいいいい!!

この気持ち「萌」というものなのか?!

こんな気持ちをオタクの皆さんは日々味わっていたというのか?!

なんとうらやましいいいいい!!

そして憎いつ!!

忌々しいっ!!

姉さんとの死合が私生活の殆どという僕には・・・くびり殺したくなるほど憎いいいいいい!!

「はああ・・・」

少し息が荒くなってしまった。

彼女ははまだ顔を真っ赤にして俯くだけ。

こんなに純粋な子がいままでに居ただろうか?

まあそれはともかく。

セリアの戦闘力は魔術特化型のキャラといってところか。
テイル。を思い出す・・・

弓キヤラは3Dになってからというもの・・・まあ使えない。
シュ。アーンもおっさんは別だが・・・

魔術特化型は総じて防御が薄いからな。

魔法盾をしっかりとしたものに変えたほうがいいかもしれない。

「僕の剣はいいから、次は防具屋でセリアの魔法盾を強化しよう。」

「ふうえ？」

・・・あ、はい。

でも・・・魔法盾は結構高くつきますし、今もってるので十分では・・・？」

「あそこで買った物で、しかも最安値のものじゃないか。」

「ええ・・・支度にお金がかかりましたから・・・」

「セリアの盾を強化すれば僕もその分大胆にいける。

合理的だよ。」

「私よりもヒビキが買った方が・・・」

「いや、もともと僕の使ってる剣術は盾を使うものじゃない。

使い慣れてないものを使っても、邪魔になるだけだよ。」

防具屋でかなりちゃんとしたものを購入し、宿へともどる。

「さて、それでここにベリルさんだっけ？セリアの護衛が？」

「は、はい。」

私たちが襲われてはぐれたときに一番近い街がここロロリエでしたから。

彼女たちなら行き違いも考え、ベリルを留守番させて探査奇跡を使えるリネティアが外に探しに行く・・・といったところだと思います。

とはいえ、もう10日以上経ってるのでここにいるかは分かりませんが。

私は足を怪我していたので、たまたま通りかかった馬車に乗せても

らうしかなかったのです。」

「なるほど。」

その馬車が僕のスタート地点であるレヴァンテの街行きだったと？」

「ええ。」

私の勝手で行き先を変えてもらうのも悪いと思ひまして・・・」

となれば、そのベリルさんを探すのが当面の目的となる。

「とりあえず、全ての宿に聞いてまわろう。」

「はい。」

あ、あの？

私と一緒にいてくる気ですか？」

「まずいの？」

「い、いえ・・・たしかに居てくれるのは心強いんですけど・・・私の護衛だけがヒビキの仕事で・・・人探しとか、余計な面倒をかけるのは申し訳ないです。」

「かまわないよ。」

というか、街とはいえど絡まれるかもしれないじゃないか？

セリアは可愛いから。」

「か、かわ・・・ば、ばか・・・ま、また・・・お、女たらしですっ！！」

「な、なぜそうなるっ!？」

といった僕にきよとした瞳を向けるセリアはやっぱり可愛かったのだ。

第7節 月の魔力より「ばか」の魔力（後書き）

ナタリアは微妙だった（笑）

マイソロのチェスターもね・・・ていうか、3Dのクラスと3Dで暴れる初期デザインのノームとかシルフを良い加減見たいものです。

第8節 ベリルは意地悪です

きよとんと向けた瞳は女たらしの意味を履き違えてたらしく。

彼女の中での女たらしとは女の子に向けて可愛いとか綺麗とか思っても無いことを言っただけと女性をその気にさせるプレイボーイな人のことを言うらしい。

思ったことを言っただけといたら、「……ば、ばかです……
」といって真ッ赤になって黙りこくってしまった。

今までに可愛いと言われたことぐらい彼女ならいくらでもあると思うのだが。

セリアが落ち着くのを待って、いろいろな宿を回っていく。
結論から言うと、ベリルさんとやはは見つかった。

「べ、ベリルッ！」

「セリアちゃん！」

お互いにお互いの名を呼んで抱き合う二人。
ほほえましい場面だ。

ベリルさんは肩くらいまでの赤毛で、ぱつと見おとなしそうな女の子。

身長が低めで小さい。

服装はこの世界における標準の物であり、特別戦闘をこなせるようにはみえない。

「い、今までどこにいたのっ！？」
ずっと探してたんだよ！？」

「う、ごめんなさい。」

私はこの人と一緒にしたから大事ありませんでした。」

「こ、この人？」

あ、あの・・・どちら様で？」

多少の警戒をしながら僕と向き合うベリルさん。

警戒は当然だろう。今は西大陸の街に居るのであり東大陸に住む彼女たちにとってはここは敵地である。

僕にとつてはどっちもどっちであるのは言つまでも無い。

今更ながら「そういえば、北や南には何があるのだろうか？」と思つたが然したる問題ではないのでおいておく。

「話が長くなるし、できれば中に入れて欲しいよ。」

「は、はい。」

それは気が利かず申し訳ないです。」

今は彼女がとつた部屋の扉前で話している状態だ。

「そんなことがあつたの・・・私からもお礼を言わせていただきます。」

ヒビキさん。」

「いや、さんは要らないよ。」

敬語もあまり・・・」

どうも、彼女の敬語は違和感がある。

やけに童顔なためだろうか？

それとも目の前で彼女とセリアが砕けた言葉で話しているのを見ていたからか？

多分後者だろう。

さんは呼ばれないだけだ。

「そう？」

なら、君付けで。ヒビキ君。」

「わかった。」

さんも君も変わらないが、何度も直すのも細かい男だと思われるかもしれないし、単なる気分の問題であるから良しとしてしまおう。

今までの旅路。といっても大した物ではないが話すと彼女は感心したように唸る。

「なんにせよ、長旅ご苦労さま。

それとありがとう。

セリアちゃんの子守、疲れたでしょう？」

ロリ顔の君に”子守”とか言われても。

というかそのギャップと大人ぶってる感じが可愛い。

「あはは。

まあね。

でも、ホーリーランスだっけ？

あれは格好よかったよ。

僕もあんな技つかいたいな・・・」

「あ、そういうことはここでは言わないほうがいいよ。」

少し真面目な顔になるベリル。

「どうし・・・あ、そういうこと。」

「うん。」

私やセリアちゃんにとって、ここはあくまでも魔大陸。

異世界からきたヒビキ君にはちょっと実感がわかないとは思っけど・

・

その言葉を聞いて私やセリアちゃんの出身が分かる可能性もある。

そうなる・・・まあ、良くは無いね。」

「う、ごめんなさい。」

「ははは。

ちよっとした注意だから。

実際、西大陸の人間が東に・・・またその逆につてのは良くあるし、ちよつと前ならともかく今なら絡まれる程度だよ。とはいえ戦争してる敵同士だから、樂觀視はできないけどね。

なにせよ面倒でしょ？

だから頭の片隅程度にね。」

「わかった。」

そしてここからが本題。

「ヒビキ君はこれからどうするの？」

「どうするのとは？」

「言葉どおりの意味。」

セリアちゃんの護衛はもう十分・・・ってわけじゃないんだけどね。この際だから言っちゃうけど、もう気づいてるんでしょ？

この子が東大陸のどこぞの王の娘だつてこと。」

そういうベリルの傍らにいるセリアの顔には少しの寂しさがある。

「はつきりではないけどね。」

貴族つていうのがあるかはわからないけど、それに準ずる何かだとは思つてた。

それにヒントはセリアが・・・まあこれは付き合いの長い君のほうが分かると思うけど。」

「うん。」

それはもちろん。」

「二人ともひどいですっ！」

セリアが真っ赤になって憤慨する。

「そして、貴族制度はもう50年ほど前に無くなったものよ。少なくとも、東大陸にそれを使つてる場所はない。

今では各地の国、街で王という名の一番偉い人を立ててそれぞれの

街のそれぞれの政治をするって感じかしら。

そしてそれら王をまとめる国王。

西大陸では魔王が各地に散らばっていて、それらをまとめるのが霸王。

そう言われている。

ちなみに、こっちの西大陸の人たちから見たら、私たちの王こそを魔王と呼んでいるわね。

すなわち、どっちもが相手を魔王と呼んでる事になるわ。」

なるほど。

単に自分の敵国の王を魔王と呼んでいるだけか。
ゲーム的な意味での、もとい魔力が強大で街を軽く潰せるとか、圧倒的な身体能力を持つ魔王は居ないことになる。

「どっちの国の人でもないヒビキ君を東大陸のセリアちゃんの実家まで一緒に護衛させる・・・

私としては一緒にいても良いし、護衛という目的から見ても異論はない。今回こんなことになっちゃったわけだしね。セリアちゃんもその方が良いんだろうけど、リネティアちゃんが許さないだろうからなあ。」

「リネティアってもう一人の護衛？」

「そう。護衛。」

ちなみに、さつきは護衛と言ったけど私たちは側近、お世話も兼ねてるから・・・

戦える侍女さんって感じかな。

ついでにセリアちゃんの友達でもある。」

「そ、そこがついでなんですかつ！？」

ベリルの最後の台詞に涙目で突っ込むセリア。

冗談、冗談とケラケラ笑いながらベリルはお茶を飲む。

話を始める前に入れてたお茶だ。

「ぷはあ。

つまりはもう一人が許さないだろうからこの辺でお別れてことになっちゃうかも。

許さない・・・というと語弊があるけどね。」

「だ、だったらティアを置いていきましょっ！！」

「ぶはっ！？」

リネアちゃん！？

あんた何言ってるか分かってるっ！？」

セリアの爆弾発言にお茶を噴出すべリル。

「へ？

・・・あ、あっ！？

ち、違いますっ！！

別にお友達を置いて行こうとしたわけじゃ・・・」

「おいていこうとしてたでしょうが・・・

まあ、私は良いけどね。

セリアちゃんがリネティアより男をとったと聞いたときのリネティアちゃんの顔が・・・目に浮かぶから別に見なくて良いや。」

見なくて良いんだ。

「ま、とにかく彼女って不確定要素を出来るだけ排除しようとするからさ。

もちろん今回のことがあるから護衛役が増えるってことを彼女も強く反対はしないだろうけど・・・襲ってきた犯罪組織・・・ってか政治的に彼女の親を良く思っていない奴の陰謀なんだけどね。

その組織は私たち2人で潰しておいたし。

そのへんの魔獣よりよっぽど手ごわかったよ。
ずる賢い人間のほうがより狡猾で、厄介とはなんと皮肉なんだろう
ね。

とにかく、ずーっと監視されるとは思ってたていいよ。

そんなの嫌でしょ？

今回みたいなことはまず無いだろうし・・・

念のためって気遣いで、せっかく護衛してやろうって思っても疑心
暗鬼に探られるんだよ？」

それは嫌だな。

ずっとって・・・トイレのときもだろうか？

「トイレの時はさすがに無い・・・とは言いつれないね。
というか、多分監視される。」

男性特有のエクスカリバーも見られちゃうと思って良いよ。」

「え、えくすか・・・」

ベリルの話を聞いて顔を茹蛸のように赤くするセリア。

今の比喻で分かるとは思わなかった。

純な反応からあまりそういう話についていけないタイプだと思った
のだが、ちゃんとした知識はあるらしい。

僕も面と向かってそう言われると恥ずかしいよ。

というか、僕はすぐにはピンとこなかった。回りくどすぎて。

「考えとくよ。」

「ん。そう。」

んじゃ、また明日。この時間に来て。

ちよっと急いでてね。

だから、すぐにでも彼女を旦那様に送り届けなくちゃ駄目なんだ。」
「だったら、別に・・・僕はここでお別れでもいいよ。」

「そ、それはだめですっ！！」

というセリアの声に僕はびっくりする。

が、読んでいたかのようにベリルはニヤニヤしてるだけ。

ベリルは意地悪です。と呟いているが・・・僕には何のことやら。

「なぐに、いつてんのさ。」

さつきから引き止めたくて仕方ないって顔してるくせに。

ちよつと本音を引き出せるように謀ってあげただけだよ？」

「よ、よけいなお世話ですっ！！」

どうやら引き止めたくて仕方ないということか？

恩人だからお礼がどうこうと言いたいだけだろう。

「分かつてる。」

礼をしてないってことなんだろう？

礼ならいいよ。

短い間だけど一緒に旅できて楽しかったし。」

「わ、分かつてないじゃないですか。」

落胆の様子で肩を落とすセリア。

わけが分からないとベリルの方へ助けを求めると呆れたように肩をすくめるだけ。

よ、よくわからん。

「急いでるけど、別に遅くなってもかまわないうってことさ。」

単に親バカの旦那様が・・・まあここまで言えばわかるでしょ？

とにかく一日くらいならいいよ。」

本当に良いんだけど。

でもなんとなく胸がチリツとする。

なんだこの気持ち。

前に感じたのと、ちょっと違うような嫌なような？
不快感が強いといった感じか。

「何も難しく考えることはないよ。

こっちとしては来てくれる方がありがたい。

でも、不快にさせてしまう。

言って聞かせれる相手ではないからね。

単に自分がどうしたいか？

それだけだよ。

ついでに言つと一日あげるのは君の一部があまりにも子供くさいから。

自分の気持ちを確かめてくると良い。

こちらとしてはどっちにしる迷惑はかからない。来てくれれば助かる。その程度だよ。

どのみち旅の疲れがあるでしょう？。」

一部が子供くさい？

一体どこが子供っぽいのか？

全くもってわからん。

ううむ。

そのうち大人っぽくなるのかな？

というか、見た目小学生の彼女に見透かされてる僕ってなんなんだろう。

まああくまで見た目だから、気にすることはないけど。

一体何のことを言っているか？

悶々としながら僕はその日を終えるのだった。

第8節 ベリルは意地悪です（後書き）

「・・・」を無くすことに意識してみました。

セリフ内はともかく、一人称視点の部分は多すぎだということに指摘されて始めて違和感に気づきました（笑）

第9節 ドラゴントラブル

結局、いろいろぐだぐだ悩んだ挙句。

一緒に付いて行くことを決めた。

こっちの世界での初めての友人なので、安全な場所まで送り届けてあげたいという心配と、今の何も知らない自分の状況的に知り合いから離れるのはいささか心細いものがあつたからだ。

いや、いささかというか、かなりの心細さだけれど。

寝る前に悶々と考えて分かったことといえば、彼女の振る舞いが心の癒しになっていたこともあり多少の依存心ないしは甘えが出ていたのでは？と考え、いつまでも頼っていてはこの世界で生きていけないと結論付けて一旦、距離を置こう。

・・・とも思つたよ。

思つたんだよ。

思つたんだけど、それが無くなったときの事を思うとそれだけで胸の奥がチリツとする。

その「チリツ」がまた、不愉快で好きでなくて、イラついて、なんとなく不安で、何に対してというまでも無く焦燥に駆られて。

一言で言うなら嫌なのだ。

こんな気持ちになるのは初めてで、きつと心細いからだと自分の気持ちに折り合いを付けて眠る。

一晩たつた今日。

ベリルに「なんとなく一緒にいたいからついていくよ。」といったところ。

「ふむ。

やっぱり駄目か。

まあいいや。

なんとも言っただけで監視されても文句言わないでね？」

「もちろん。」

なんでもそう言われると暗に「ついてくんな」と言われてる様に聞こえたが、少なくともそのニュアンスは無いように思える。

「やっぱり駄目か」の部分は良く分からなかったのでスルー。

結論を言つと、僕の目的地は東大陸となったわけだ。

もともとの目的はお金を稼ぐことだったと思うのだがいつの間にやら紆余曲折したものだ。

ま、たのしいからいいんだけど。

何より姉さんがいない日常が良い！

最初こそボロボロだったが、そのことに観点をおいてみると幸せすぎるくらいだ。

「さて、では改めてよろしく願いしますね。」

「私も期待してるよ。」

「こちらこそ、よろしく。」

などと順調にいけるはずだったのだが、ここで問題が発生した。

国境を越えるに当たり、国境を結ぶ街ではなく、魔獣が生息する広大な森を抜けるという荒業を使用する。

というのも確かに問題なのだがそれではない。

「どうやら、リネティアちゃんがまずっとならしいんだよね。」

とはベリルの談。

「まずったって？」

ここに来れなくなっただってこと？」

「ん・・・まあそういうこと。」

彼女はここから西の街、ルベルークを2日前くらいから拠点にして、セリアちゃんを探しに言っただけ・・・

その北にあるラバム遺跡で足止めを食らっちゃったらしくてね。どうも、そこに一人の女の子が入ってたという情報があって、それを・・・」

「セリアじゃないか？と思って確認しに言ったらなんらかのトラブルで出れなくなっただって？」

「そうなるわ。」

ルベルークは伝承の街と呼ばれてるんだけど、これは数々の伝承があることからそう呼ばれててね。

ルベルークに伝わる伝承の一つに「闇人の家」ってのがあつた。

その伝承の話の舞台がそのラバム遺跡。」

へえーと唸りながら、彼女の話聞いてると当然の疑問がわく。

「どうやってそんなこと知るわけ？」

手紙・・・じゃないよな？」

「もちろん。」

私の奇跡に遠聞えんぶんつてのがあつて、これはあらかじめ自分の霊力を対象の相手に打ち込むことで、遠距離会話をする奇跡よ。

距離や遮蔽物を完全に無視できる、協力かつ便利な意思疎通手段ではあるんだけどね。

大気の霊脈を相手につなげるという特殊なやり方ゆえに対象は打ち込んだ相手一人のみっていう、限定された術なの。」

霊脈？

特殊といわれてもなにがなにやら？

「2人に対してこの術を使おうとしても、1人だけにしか成功しないってことよ。」

はなからその結論だけ言ってくれば良いのに。

「それで？」

助けにいくってこと？」

という僕の言葉に首を横に振るベリル。

その顔は真っ青である。

「自分でなんとかするから、先にセリアちゃんを本国へ……ってさ。」

「セリアはなんて？」

「伝えてないわよ。」

助けにいくでしょうから。」

妥当な判断だろうな。

リネティアさんもそれを分かって、自力でがんばるつもりだろう。

だが、自分でなんとかするといっても無理じゃないか？

多分、やせ我慢。

なんとかできるくらいならベリルに伝える間もなく何とかしてるだろうし。

できるなら、初めからこんな話をしてくるわけあるまい。

「わかってると思うけど、主人であるセリアちゃんを放って助けにいくことはできない。」

私は彼女の侍女であり友人であり従者であり護衛でもある私だけであくまでも私の一番は護衛であること。

護衛役としてここに居るの。

かといって、自力で脱出も期待できない。

リネティアちゃんの声……かなりくぐもってた。

きつと軽くは無い怪我してる。

私が助けにいつてる間にここで待ってもらつこともできるけど、もちろんそんな勝手なこととはできない。

そもそも私が助けにいつて、死んだらどうするのか？

それを考えるだけでも論外。

でも、私の姉のような存在でもある彼女を助けたいと思う。

見殺しになんてしたくない。

でも、セリアちゃんをみすみす危険にさらすことは出来ない。

このまま、あなたと一緒に本国へ帰るのが利口なのもわかつてる。

王がお叱りになると思う。

というか打ち首レベルの勝手だとも思う。

でも・・・どうしても、見殺しになんて出来ないの・・・。」

そもそもそれを僕に言ってくるという時点で魂胆が見え見えである。

というかそんな顔で・・・先刻と一転して今にも泣きそうな顔にな

って言われては・・・。

どうしようもあるまい。

特大のため息をこれみよがしにつきながら言ってる。

「僕が助けに行けば良いんだろ？」

関わった手前、それくらいいいさ。」

彼女は目を見開いて驚きながら口を言った。

「い、いいの？」

お、お礼ならもちろん用意するけど・・・

命の危険があるんだよ？」

なぜ驚く？

助けに行つてほしくてこんな話をしたのだろくに。

というか泣き落としまでしてさ。

もう、泣かれると困るの何のって。

「礼なんて良いわ。」

てか、そこまで驚く意味がわからん。

もともと頼むつもりだったんだろ？」

「そ、そうだけど・・・その・・・断ってくれるのを期待してたつて言うの？」

断ってくれば、諦めが付いたというか・・・

断るだろうと思ってたというか・・・

分かってないみたいだけど、トラブルつてのは、上位竜種の三体に囲まれたっていう・・・状況だよ？」

「そ、そんなもん頼むつもり！？

そりゃ、護衛の立場のベリルは助けにいけないわなっ！？」

「あ、そういえば、異世界から来たんだっけ？

ララバイ遺跡は西、東問わずに上位竜種の住处で有名なの。」

ベリルがどれほどの実力かは分からないが、いくらなんでも上位竜種は無理だろう。

下位竜種のバルバトでさえあの強さ・・・というか堅さなんだから、てか先にそれを言えよ。

はあーしゃーない。

「・・・戦って殺すのが目的じゃないしな。

足の速さなら自信がある。

まずは気配を殺して潜入。

その後、リネティアさんとやらを探し出して、脱出。

こんなところだろ？

わざわざ先に行かせるって事は、自分が生きて帰れない。

もしくは生きて帰ったとしても遅れる・・・すなわち、まともに歩けないくらい弱ってるってところだろう。

担ぐのは辛いけど、なんとかなる。と思いたい。」

「・・・上位竜種の超感覚は知ってる？」

「はい？」

上位竜種は魔力の壁と堅い鱗で鉄壁の守りを誇り、プレスといった強力な魔術を駆使する。

さらには超感覚という特殊な力を備えていた。

これは自身の肉体のいずれかを一時的に強化するという能力であり、視覚、聴覚、触覚などの感覚はもちろん、敏捷性などの肉体的性能を驚嘆に上げる奇跡らしい。

やっかい過ぎる。

そんなのが三体。

リネティアさんの血の臭いで常に周囲をうろついてるらしい。

「リネティアちゃんは遺跡内部に立てこもって、隙を見て脱出するつもりらしいけど・・・」

3体が同時に現れたってところから見てツガイと子供が一匹って所だと思う。」

「てか、上位竜種とやらは奇跡も魔術も使うのか？」

「似たようになって言った方が正しいけどね。」

そして、もう一つ脱出しにくいのが・・・交互に見張ってるってこと。」

「人間相手にそこまで執着したいものかね・・・」

「人間は美味しいから・・・」

特に魔力、霊力を持つ上位の魔獣ほど人間を好むらしいわ。」

賢くもあるわけだ。

なんにせよ、見てみるしかあるまい。

「わかった。」

とにかくできるだけがんばってみるさ。

セリアにとっても大切な人だろう？」

「頼んでおいてなんだけど・・・本当にいいの？」

あなたには関係ないことよ?」

「問題ない。」

姉さんに比べたらまだ、良いほうだ。」

「姉さん?」

「いや、なんでもない。」

こうして、僕は伝承の街「ルベルーク」へ急遽向かうこととなる。

第9節 ドラゴントラブル（後書き）

主人公は一時的にセリアたんとはお別れです。

そして、東大陸に行った後はしばらく西大陸に行くことが無くなる
っぽいので西大陸内のイベントをもう一つくらい入れたいなと
いうことでした。この話は続きます。

第10節 ドラゴントラブル？

さて。

助けに行くとは言ったものの。

遺跡までなかなか遠い。

ここからルベルークの街には5日ほどかかる上、そこから遺跡に1日ほどかかるそうだ。

リネティアさんにはベリルから僕が救出に行くことを伝えているらしく、持ち合わせの水と食料で1週間は持つらしい。

ロロリエまで来たときと同じ手法で、ルベルークには丸3日かけて到着。

町並みは中世ヨーロッパのような外観で、個人的にはゆっくり観光したいね。

すぐさま準備を整えて、ベリルから渡された物を確認する。

一つは魔法薬の中でもエリクシールの次に効果が高いといわれる「ビトモン」というもの。

ある程度の重症を直すほか、滋養強壮の効果もあるらしい。

これが5つほど。

内一つはリネティアさん用。

そして受け取った物のもう一つは錬金術の街ロロリエの特産品である、魔力無効型モデルのショートソード。

もちろん修理に出していた愛用のファルシオンも武器屋から受け取っている。

さらにはここ、ルベルークの特産品である「女神の指輪」と携帯食料を買い込んで旅支度を済ませた。

ちなみに、ルベルークは上位竜種の巣であるラバム遺跡から近いため、たびたびルベルークは襲われることがあるという。

そんなルベルークが独自に作り出したのが「シエル」。

魔獣の攻撃を弾き、寄せ付けない見えない障壁らしい。

それを元に作り出されたのが女神の指輪で、使用者の治癒能力や防御力を上げるものだそうだ。

セリア用にも一つ買っておいた。

プレゼントってわけじゃないぞ！

断じてない！！

本当に、なんでもない物だ！！

・
・
・
僕は誰に言い訳してるんだろう？

そんなこんなでそのまま休むことなく、僕は遺跡を目指した。

「さて・・・遺跡に付いたわけだが・・・遺跡というより、ジャングルだな。」

ラバム遺跡は遺跡があつた痕跡がところどころに見えるが、人が滅多にこないのか木々がめっちゃめや繁茂して、邪魔くさいんだコレが。

邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔ばじゃまつ!!!

と叫びたくなるほど森が茂っていた。

正しい発音が似ていたせいかな「ぱじゃま」と言ってしまったが（正確には脳内再生）、やむをえない。

僕ぐらいのパジャマリストともなると自然と出てしまうのだよ。

い
い
い
い
い
い
つ
い。

玉砕粉砕ばじやまつさいつ！！とも言つて見たい。

まあちと無理があるかな。

「ぱじゃまでお邪魔……これはっ!!」

面白い、愉快痛快な駄洒落を思い出してしまった。

内容が意味不明なのは仕方ないが、駄洒落なんてのはそんなもんだよ！

うん、大概そんなもんだっ！！

などとのんきにしていられるのもそこまで。

ベリルがリネティアの話を書いた地図によると、この辺である。気配を殺して様子を伺う。

もちろんベリルに言われた通り、風下側から接近する。

なんだかモンスターハ。ターをリアルプレイしてる気分だ。

違うところといえば、敵が三体、ゲームオーバー不可。

なおかつ防御や攻撃がチート性能ってところか。

超感覚なんていう特殊能力で一時的に攻撃や防御力も上がると思うとなおのこと辛い。

「グルルルル・・・」

「うなってるなあ。」

どっか、いかなのかなあ？

まじ怖い。」

思いつきり遺跡に視線を向けて待ち伏せしている竜がいた。

竜の姿は翼は小さく、足がかなり太い。

ワイバーンみたいな翼竜がティラノサウルス型に進化した感じ。

もちろん、体長は一軒家並。色は漆黒だ。

さらには角が一本生えていて、魔力の流れが体全体を覆っていることがわかる。

はつきり言ってるめちゃくちゃ怖いです。

アースドラゴン科のアースヘッドという種らしい。

特徴は大きな頭と上位竜種では珍しい、地上棲の空を飛ばない竜であること。

アースは地面を意味するそう。

それにしても美味だからといって、そこまで人を食いたいのかとその執念には脱帽の思いを抱く。

そして、待ち伏せしてるのは必ず、出てこざるを得ないことを知ってるのだろう。

頭もいいとは厄介極まりない相手だ。

「もう二匹は・・・いないみたいだ。
さて・・・どうするか。」

もともと女の子を追っていてこうなった、という話だが・・・女の子の話は聞かなかったな。

女の子はリネティアさんが着く前に食われたんだろうな多分。

「よし。」

どう考えても一体だけのうちに仕留めた方が良い。

と思ったけども、やっぱりやめた。

もう二匹が駆けつけてくる前に仕留められる自信はないし、仕留めること自体難しそうだ。

というのはまあ分かったことなんだけどね。

石を投げて注意を引いた瞬間、縮地を使って距離を詰める。

遺跡に突入してリネティアさんの治療と確保をして出口付近に待機。タイミングを見て、僕が出て注意を引いてる隙にリネティアさんに脱出してもらう。

そして2人でかく乱しつつ、戦線離脱。

木々に隠れながら遺跡の出口で合流後、ルベルークに帰る。

こんなところかな。

大きな目の石を選んで、投げる。

大きいほうがより大きな音をたてられるはず。

ゴッッ！とそこそこ大きい音だったので、少し声に出そうになった

けど、すんでのところで止める事が出来た。僕って偉い！

「グルッ!?」

すぐさまそっちの方向へふりむくアースヘッド。

多少賢くとも所詮は爬虫類だな。

爬虫類といえば、ミドリガメは意外と大きくなることを知っているだろうか？

オスで15センチ〜20センチ。

メスで25〜30となるので、最終的にはかなり大き目の水槽が必要となり、なおかつ日光浴でビタミンD3という必須栄養素を合成してるので日光浴（正確には光というより紫外線が必要となる）をしなければすぐに死んでしまうのだ。

なぜこんなことを知ってるかというと、昔亀を飼っていたことがあったのさ。

姉さんが「亀の甲羅を斬ってみたくて・・・買ってきちゃった。」という凄まじく不純かつ動物虐待的精神的な動機のもと買ってこられたミドリガメであった。

もちろんのこと僕は庇ったさ。

さすがに動物虐待はやめてほしかったし、毎日姉さんに斬られてる僕としては人事にはとてもじゃないけど・・・ぐぶばあうふうっ!?

ぐぐ、うぐ、ぐず、放っておけなかったさ。

泣いてない。泣いてないよ。ばかあ泣いてない。

良い子も悪い子もまねしちゃいけないよ。うん。

でもってそのミドリガメには「にとり」という特に根拠もない名前をつけて可愛がって育てた。

僕は「にとり」を溺愛していた。

弟に向ける物ではない殺気とか殺気とか殺気とか、あと具体的には殺気とかで荒みに荒みまくってる僕の気持ちを癒してくれる唯一の

存在だったのだ。

父さんは良くいる親バカで娘のことなら何でも許しちゃうって具合の勢いだっただし・・・まあ姉さんからはめっちゃめっちゃ嫌われてたけど・・・母さんは母さんでのんびりし過ぎていた。

僕が目の前で血を噴き出していても「あらあら、まあまあ。ヒビキさんたら噴き出し芸が上手くなったのねえ。」の一言でいそいそと家事に戻ってしまう始末。

今更だが刀傷から血を噴き出すなんていう噴き出し芸なんてあるか
ああああああああつ！！

良く考えてみてくれっ！

いきなりステージ上で真剣おっぴろげて自分の腕を斬り、ピューピュー噴き出す血を観客に見せて「どうです！？これがアッシの噴き出し芸でさっ！！」という芸人を！！

シュールすぎて笑えるかつ！！

あの時は中学１年のときであり、初心であり、世間知らずな僕は「こんなことを芸にしている芸人さんがいるのか・・・」と尊敬したもののだが、んな芸人いてたまるかっつて話である。

閑話休題。

そういえば、にとりはどうしてるかなあ。

母さんが面倒見てくれてるといいけど。

「とかなんとか考えてる間に結構奥まで来たな。」

遺跡内部には「く所詮爬虫類だな」あたりですでに入っているからして。

中は古代都市といえるようなかなり広い空間が広がっていた。

不思議と明るいのは天井の石が発光しているからだろっ。

どういう仕組みなんだか。

光る苔の群生箇所もちらほらあって光が全く届かない地下にしては

かなり明るい。

ただ、光が格別強いというわけではなく、幻想的な雰囲気醸し出していて個人的にはここに家を作りたいくらい。とはいえ。

「これはまた・・・探索が面倒な。」
本当に広いのだ。

さらに言えば、ところどころに黒い人形像が造られていて、その立ち並ぶ姿が不気味過ぎる。
そして怖い。

この遺跡は「闇人の家」だそうだから、闇人を象った者なのか？
やっぱり家は却下だ却下。
てか、怖がつてばかりだな。僕。

そこそこに歩いてしばらく経つと人の気配ではない何か近づいてくる。

ファルシオンを構えて待ち構えると、近づいてきたのは魔獣。
「なんだこいつ？」

これまた奇怪な魔獣だ。

光を飲み込むような深い黒さを持つ人形である。
全身真っ黒で動きは鈍い。

ギギギと音を発ててこちらを見る・・・見てるはずだ。
目がないから分らんけど。

ダツと駆け出してくるが、あせらずに回避。
回避と同時に斬り捨てた。

「ヴオオオオオオ・・・ヴオヴオヴオヴオオオ・・・」
変な音をたてて崩れ落ちた魔獣。

魔獣なのかも分らん。
そもそも生き物じゃないっぽい。

とりあえずそれはほつといてさらに奥に進む。

するとなにやら、またもや出てきた黒い人形魔獣。

今度は三体もいる。

けれどこちらには気づいてない様なので迂回。

あんな不気味な奴といちいちやり合ってらんないのです！

決して怖いわけではない。

断じて無い。

単に効率優先なだけで、合理的な男なのだ。僕はね。

「さて、ベリルが聞いた地図によると・・・このあたりなんだが・・・
・やっぱり大まかにしか絞り込めんか。」

どの辺にいるかなどはリネティアから遠隔通信で聞いていようと口では限界がある。

本当に大まかにしか分からない。

もともとは都市があつたのか家らしき残骸がいたところであり、
彼女はこの辺のどこかで休んでいるはずだ。

出口付近にいないのは竜が臭いで居ることがバレるからだと思うが、
ずっと外にいたことから見て超感覚でおそらく臭覚を一時的に上げ
ているのだろう。

血の臭いは比較的強いものだし、もともと概ねの動物というのは色
調と味覚以外の五感が人間に比べて鋭い。なおかつそれを強化する
手段のある竜にとってはバレバレってことになるんだろうな。

本当に厄介なチート性能だ。

もちろん、僕が入り込んだこともばれているだろうし。

今更だけどなんであんな願いを受けてしまったのか、本当に今更な
から思う。

いや、答えははっきりしてるけどさ。

結局甘いつてことなんだよね。僕も。

などなど他愛の無いことを考えながら10分ほど歩くと焚き火の音

が聞こえた。

どうやら、目的地にいたようだ。

もちろんのこと、ここからが本当の勝負所だけど。

第10節 ドラゴントラブル？（後書き）

ちなみにミドリガメなどの爬虫類を無下に扱ったり捨てたりすると罰金ないしは実刑判決が下ることもあります。もちろん哺乳類もですが。

そして有名な狩りゲー、モンハン。

初心者にとっての登竜門であるイアンクック。

僕が初めてモンハンをプレイしたのは中二の時ぐらいでしょうか？

イアンクックで詰むという（笑）

このお話はあと二回くらい続きます。
ドラゴントラブル

第11節 ドラゴントラブル？

魔獣を遠ざけるための焚き火だろうか？

あの黒い人形には通じそうに無いのだが。

「誰・・・？」

僕の気配に気づいたのか、女の人の声がある。

「ククク我はここに住まう闇の霸王！

貴様らを滅ぼしにきたわっ！！」

ちよつとふざけてみた。

「っ！？」

は、はおう！？

うわさは本当！？」

声の具合からしてかなり辛そうである。

もとい、こちらに襲い掛かってくる女性。

先手必勝しかないと思ったのかな。

「うおっ！？」

ちよ、ちよつとまって、冗談だつてばっ！！」

ギャリンッ！！

瞬時にファルシオンを構えて彼女のロングソードを受け流す僕。

ファルシオンなんかでロングソードみたいなゴツイ剣を受けたら即壊れる。

危なかったです、はい。

「じよ、じようだんっ！？

・・・！？・・・えと？」

混乱してますね。

ごめんなさい。ちょっとふざけてみたというか、ここにくるまで結構怖かったせいで人と会えた事が嬉しいというか、それは言い訳にしかないし数日こんなところに籠ってる怪我人相手にすることではない酷い事なので。

とどのつまり、ごめんなさい。

「ご、ごめんなさい。えと、救出に来たヒビキって者なのですが・
・
ベリルから聞いてない?」

「ベリルから・あなたが・・そうなの?」

「まあ一応。」

今のはちよつとふざけてみたというか・・怪我人相手にすることじゃなかったね。

めちやくちや反省してます。」

すっごい胡散臭そうな目でこちらをみる彼女。

第一印象からして最悪ってことだね、これは。

今のやり取りにこの人がリネティアさんで間違いない。

見た目もベリルから聞いた、赤髪で身長は140センチほど。

細く、黒のゴスロリファッションでロングソードを武器とするという特徴に合致する。

そして、その目立つ赤髪とは裏腹に気弱そうな瞳が印象に残る。

いまさらだが、体の節々が擦り傷だらけで脇腹からドバドバと血が出てた跡があり、今は止まってるみたいだが僕はなんと不謹慎なおふざけをしてしまったのだろうか?

実に申し訳ないことであつた。

誰が見ても重傷なのであるからして。

「そ、そう・・来てしまったのね。」

助けが来たゆえに気が抜けたのか、わざわざこんな場所まで1人の

ほつとけば死ぬような人間相手に滅ばしに来る霸王なんてものは居ないと考えたのか・・・十中八九後者だろうが、彼女はそのまま気絶してしまった。

「うおっと!？」

すぐに抱きかかえ、地面に倒れこむのを防ぐ。

なんか甘い香りがしてこんな時でもドキツとした自分に多少の呆れを感じつつ。

焚き火の近くまで行って寝かせることにした。

そのまま起きるのを待つつもりだったのだが、僕の服やところどころの鎧部分に思い切り血がグツチョリと付いている。

どうやら、今の一連の行動で傷口が開いたらしく彼女の脇腹を見るともう大量に鮮血が流れ出ていた。

「ちょ、ちょ!？」

これって僕のせいで殺しちゃうことになるっ!？」

さっきのおふざけは本当に猛省ものだ。

こういう状況では二度としないでおこう。

「お、おいっ!？」

起きれるか!？」

というかコレを飲んでくれ!!」

ベリルから渡されたビトモンを差し出すが、意識が戻らず血色も引いていく。

「や、やばっ!？」

めっちゃピンチである。

ピンチ過ぎる。

いったいどうすればと頭をフル回転させるが、いかんせん頭が良いというわけではないので何も思いつかない。

脇腹の部分を何かで絞めたところで、なんの意味も成さないだろう

し回復魔術的な者も使えない。

本当に剣を振るう位しか取り得が無い自分に苛立ちを覚えるが、魔法薬も自力では飲めそうにない。

となれば人工呼吸の要領で飲ませるしかない、わけ、だが。
うむ。

「ど、どうすれば・・・」

はつきり言えば人命救助といえども唇をつけることには抵抗がある。嫌というわけではなく、やっぱりこういうのは好きな人が・・・とも言っていない。

なんせこの状況は僕の引き起こしたことであり、100パーセント僕のせいである。

なおかつ、彼女は年頃の女の子だ。

命が懸かっているにせよ、そういったことに対する抵抗は男の僕以上にあるはず。

意識を取り戻してからきつとその事実にかなりの愕然とした思いを抱くはずで、助けられた手前文句も言えないという葛藤で非常にストレスフルな心境になるはずだ。

もちろん僕のせいであるゆえに怒られるかもしれないし、下手したら殺されるかもしれない。

そこまではさすがにいかないだろうが、乙女の純潔を奪った報いとして仮に本当に殺されたとしても好きでもない男とき、きき、キス的なことをしたという事実が消えるわけもなく。

本当に申し訳ないです。はい。

とはいえ、このまま死なれてはそれもそれで非常にまずいので、やむをえない。

こんなところまで来た意味すらなくなるし、死ぬよりは多分マシだろう。

でも、穢されたっ！！もうお嫁にいけないっ！！と言って自害されたら・・・どうしよう。

自己嫌悪で死にそうだっ！！

死にたくなってきたっ！！

まずいっ！！

こんなところで自害するわけには行かないっ！！

今は顔色良く、僕の膝枕でぐっすり眠ってる彼女を1人残して死んだら、彼女自身色々わけがわからなくなるだろう。

もちろん彼女の近くではなく目立たない場所でひっそり自刃しようと思うが、もし見つかったら「なんでこの人助けにきいて自殺しちゃったの？気持ち悪い。」と言われる凄まじくヘタレな人生の終わりを告げることになる。

それはちよつとというか、なによりも遠慮したいし、「なんで死んだのよっ！！どうせ死ぬなら私に殺させなさいよっ！！」と鬼の形相で僕を憎み続けてその先、生きていくかもしれない。

どうせ命を捨てるのなら彼女の刃にかかるのが筋だろうと考え、化け物染みてた異常者の姉さんや親ばかりで僕なんて居ないことのように扱った父さん。そして僕が稽古と言う名の姉さんの試合ならぬ死合をさせられて「あら？楽しそうね」の一言の感想しかないある意味一番破綻してる母さん。

家族の顔が頭に思い浮かぶ。

そんな家族よりも一番強く頭に残ってるのはミドリガメの「にとり」の姿。

毎回、僕が水槽の前にいくとワタワタと焦りながら寄ってくるにとりのあの仕草。

そして僕が餌をやるとパクパクと焦って食べ始めた時のあの子の笑顔。

もちろん人間とは違って顔に筋肉のない亀が笑顔になるわけないのだが、飼い主である僕にはわかる。

あれは笑っていたと！

僕の家族愛と呼ばれる類の愛情は全てにとりに向かっていているといっても過言ではない。

最後にとりの姿を拝み・・・ついでにせ、セリアの顔も思い浮かぶ。

なんとなくセリアの顔を思い出して気恥ずかしい。
走馬灯ってこういうことを言うのかな。

「ううん・・・ここは・・・っ!？」

ご、ごめんなさいっ!

えと、膝枕なんて・・・初めて・・・」

膝枕されるのが恥ずかしいのか、意識を取り戻してすぐにあわてて起き上がるリネティアさん。

最後の方は良く聞き取れないが、とにかく本題に入る。

「起きた？」

体調は大丈夫そうだね。

起きて早々悪いけど、僕はすでに切腹の覚悟はできているよ。

君にとっては憎い憎いゴミムシである僕だけど、できれば介錯をお願いしたい。

そんな楽な死に方させたくない・・・というなら君の言う方法で自害しよう。

ご、拷問は勘弁してほしいけど・・・やむをえないよね。うん。

それも覚悟キメマス・・・。」

男たるものの覚悟を決めるときには決めるのさ。

にとり・・・嫁さん探してやれなくてごめんよ。

家のスペース的にもう一匹ミドリガメを飼うことはできなんだ。

いつかあんな家を出て、お前さんの嫁さんを探してやるつもりだったけど、それも土台無理な話。

せいぜい達者で暮らしてくれ。

我が家の面子的に難しそうだが。

ちなみに死に装束として常にバックパックに入れてあるイチゴ柄パ

ジャマを着用している。

ふ。相棒よ。僕の血で汚してしまうことになるが死ぬその時まで一緒に居てくれ。

笑ってくれるなよ。

お前がいなきや足が震えていまにも逃げ出したくなっちまう僕だが、お前がいてくれるからここに居られるっ！！

ふふふ。まったく僕って奴は情けない奴だ。

「そんなことねえよ！」

俺はお前のパジャマで幸せだった。」

「そうか・・・ありがとう・・・ぐず。」

「なくんじゃねえ！」

男なら死ぬその時まで胸はって生きろっ！

それが男の粹ってもんさっ！！」

「あいぼっ・・・ああっ！！」

そのとおりだっ！！」

くそっ！

こんなことなら最高級のクリーニング屋さんと名高い「貴族の嗜み」でクリーニングしておけばよかったぜっ！！

「あの・・・１人で何を喋ってるの？」

１人・・・芝居？」

「ふ。相棒と喋ってたのさ！」

決戦前の別れってやつかな・・・」

「あの・・・その・・・気持ち悪い・・・」

何が気持ち悪いものか。

目の前のリネティアさんには分らないんだろうな。

僕は単に我が生涯の相棒である、イチゴ柄パジャマとの会話を楽しんでただけだつてのに。

イチゴ柄パジャマの言葉を僕が代弁してたから勘違いされちゃった

かな？

決して大きな独り言ではない。

演劇の稽古でもない。

それだけは言っておこう。

「さあ！！

やってくれ！！

僕に未練は無い！！」

「は、はい？」

どうやら意識を取り戻したばかりでいまいち状況が理解できてないらしい。

リネティアさんにはどうしてこんなことを僕が言ってるのか全く分かってないらしい。

まあ気絶していたのだから仕方ないといえば仕方ないが。

事情を説明すると、リネティアさんは顔を真っ赤にしてプルプル震え始めた。

右手の人差し指は唇を触れていて、その手も震えている。

わかってるさ。

怒り心頭ってことなのだ。

ここまで乙女心を理解してるナイスガイは僕以外には10人としていまい。

「わ、私としては別にそれくらいは・・・

せ、責任とって、とも言っ気はないし・・・そもそもあなたが来てくれないければ死んだ。

だから、そ、その・・・」

「え？

いや・・・その・・・遠慮なくていいんでございますよ？」

予想外の返答に驚いた。

きつと初対面の相手に遠慮しているのだ。
なんていい子なんだろう。

目の前の男のせいでキ、キ、キス的なことをされたというのに許す
気で居る。

本当に良い子だ。

「あの・・・話を聞いてる？」

「聞いてる。」

内心、殺したくてしかたない僕を・・・そんな風に許すなんて
本当・・・すいません。」

「・・・聞いてない。」

呆れたような目を向けてくる彼女。

しょうがないと諦めが付いたのだろうか？

「・・・そ、それに君くらい可愛ければ彼氏くらいいるよね？
その人にも、・・・申し訳ないです。」

「あ、い、いえ・・・あれが初めて・・・じゃなくてっ！！
人命救助だからアレはカウントに入らないっ！！
でもなくてっ！！

とにかく忘れてよっ！！バカっ！！」

忘れてというなら忘れよう。

きつと彼女もすぐにでも記憶の奥底に封印したいだろうし。

「わ、わかったよ。」

「そ、それでいいの。」

などなどのやりとりを終え、僕たちはここからの脱出に挑むのである。

第12節 ドラゴントラブル？

「それじゃあ僕の作戦通りでかまわないね？」

「えと・・・私としてはありがたいけど・・・本当にいいの？
命の恩人にそこまで体を張ってもらうこともない。」

「はあ・・・また主従そろって命の恩人だ、礼だと・・・まったく
もってうつとうしい。」

こんなところまで来た時点でそんなことはどうでも良いんだよ。

てか、リネティアさんが死んだら僕がここまで来た甲斐が無くなる
じゃないか。」

「でも・・・」

「いいから。いいから。」

どうしても礼がしたいってんなら感謝に思わないようにしてくれた
方が僕にとってはとてもありがたいし。」

「・・・変人ね。」

そんなつもりはないのだけれど。

本当に礼がほしいという訳じゃないのだからどうしようもない。
むしろ礼だ何だと言われても、鬱陶しいだけである。

そもそもここが日本ならともかく、ゲームや漫画といった娯楽の少
ないこの世界で欲しい物自体が無い。

だから礼だと言われても特別見返りに要求したいものが無いのであ
る。

何より欲しい「安寧」もとい姉さんという化け物がない世界に行
きたいという願いはすでに叶えられてるしね。

上位竜種にしたって、姉さんと本気でやりあうよりはマシなのです。
もう・・・姉さんがいないってのは・・・本当に幸せだ。

こっちに呼ばれて当初はそれこそ帰巢本能よろしく、家に帰りたか
ったが今となつては

強いて言うならお金だが、これに至っても特別誰かから貰わなけれ

ばならないほど苦勞するわけじゃない。

なにせよ脱出の作戦は当初の予定通り、2人でかく乱しつつ木々を盾に戦線離脱。

これでいくことになる。

本当なら僕が1人で囷になつても良いのだが、そっちのほうが効率が良いし成功の確率が高いため、彼女がそれを望みでもしない限りこれにする方針だ。

仮に僕が1人で抑えるにしたってあの一体ですら引き止めれるか、微妙なところである。

また仮に僕が囷としての役割を演じきる前に僕が食べられる可能性というのももちろんあるのだ。

一度も戦った経験のない上位竜種なのでここは慎重に事を運ぶ。

作戦、というほど大仰なものではないが脱出は明日。

血を流しすぎたのか彼女の体力回復のために一晩休んでからとなる。

「り、リネティアさん？」

「ティアでいい。」

「あ、うん。」

ティア・・・さん？」

「呼び捨てで。」

「そ、そう。ティア」

「ん。」

彼女は頷いた。

彼女の外見上、さん付けは違和感があつたのでありがたい。

「ティアは僕の闇の霸王うんぬんっていう冗談に噂がどうのって言うてた気がするんだけど噂って何？」

「・・・闇人の家という伝承を知ってる？」

「えゝ。とりあえず、名前とこのラバム遺跡が舞台になったとい

うことだけは。」

「そう。」

それで十分。

闇人の家という伝承は、ここが今は居ないとされる闇人の都やみびとだったという話。

私たちの住む東大陸には数々の精霊が居るけど、その精霊の上位の存在が闇人と呼ばれてた存在で、彼ら精霊のもとの住処はここだったそうよ。

なぜ滅びたのかは不明。

彼ら精霊の世代交代は約300年ごとだから、その精霊たちにも分からなくなるほどはるか昔に滅びたんでしょうね。

もちろん、なぜ西大陸から東大陸へと移り住んだのかも分からない。

「

ふうん。」

「それで、ここ自体は発光する苔の「ウェティッシュ」と発光する特殊な鉱石「ゼンベルゲン」を除いて大した物は無いとされていたわ。」

「確かに。」

もうすでに荒らされてる感じだし。」

「ええ。大分前に苔とゼンベルゲンを除く金目のものは盗賊や山賊あたりに根こそぎ奪われていったんでしょね。」

残った苔はここ以外では育たない特殊なものらしいし。ゼンベルゲンはここしかないと言う訳ではないから。」

なんだ。苔はここ以外では育たないのか。

少し採取していこうと思ったのだけ残念だ。

「とはいえ、盗賊や山賊にとってここはいいところなの。」

何も無いけど、何も無いからこそ誰も来ない。

犯罪者などの表を堂々と歩けない人種にとっての拠点に向いてるってこと。」

「なるほど。」

それで、その賊軍の人からなにやら噂がということか？」

「そうなる。」

ここに一番近いルベルークが山賊たちの標的になってたのだけど、それを見かねたルベルークの魔王が大規模な討伐隊を結成。

踏み込もうとした翌日。

1人の山賊が街外れで行き倒れていたそうよ。

そして、彼は重症でそのまま息を引き取った。

その彼の死ぬ間際の一言が”闇の・・・闇人が現れて俺たちを食っちまった”って話。

それ以来

あそこには闇人の生き残りが居るんじゃないか？とか闇人の王家の封印がなんたらって感じに上手い具合に尾ひれや背びれが付いて出来た根も葉もない噂が”闇人の王がいる”となつたの。」

「なるほど・・・。」

本当に悪かったです。」

「別に良い。」

まさか僕の思いつきの冗談に似たり寄ったりな話がすでにあるとは・・・嘘をついたら、それが本当のことになってしまった時を思い出す。

あれは中学3年のころだろうか。

姉さんによる稽古と言う名の公開処刑をサボりたくてサボりたくて僕は嘘を付いた。

その嘘が「ね、姉さん。僕はちょっとそれよりも大事なことが・・・」という嘘をついた。

もちろんそんなものないし、そんな予定も無い。

「何？」

ゲームやりたいとかは却下よ。」

そんなことは分かっている。

「実はにとりが病気になっちゃって・・・病院に。」

「うううむ。」

まあ仕方ないか。

早く連れてってあげなさい。」

このときの姉さんに不覚にも感動してしまったものだが、とにかくこれでにとりを病院に連れて行くことが決まった。

実際はにとりを簡単な水槽に入れて、姉さんや母さんが通らないようなちよつと遠目の公園で時間を潰そうという魂胆だったが、実際ににとりが病気になってしまったのである。

なにやらぐったりしていて元気が無かった。

というか、その兆しはあったのだがちよつとした不調だと思っていたのだ。

病状はクル病。ないしはビタミンD3不足。

このときは日光浴はただ体を温めるだけのもの。と考えていた僕だったが亀にとつての日光浴は体温を上げるだけではなく、紫外線を受けてビタミンD3を体内で精製することが一番大事なのである。

紫外線は窓越しだと吸収されてしまい、必要量が確保できないらしく外での日光浴が・・・うんぬんの豆知識はおいておく。

とにかく亀の見れる動物病院を探し出し、急いで連れて行ったのだ。飼育本をしっかりと読むように注意されたが、にとり自体はその後に回復へむかい、大事はなかった。

嘘について稽古を逃げ出そうとしたことは何回もあり、そのたびに嘘がばれるか本当になって余計に厄介になっていたため、これを機に「僕は稽古を受ける運命なんだな」と気づきそれ以来悲しい覚悟を決めたものである。

「どうしたの？」

なにかたそがれてるけど？」

「別に・・・なんでもないよ。」

その後、他愛の無い話をして就寝して明日に備えた。

早朝。

ドラゴンが爬虫類と同じ変温動物ならば気温の上がりきつてない早朝の方が良いということで、早朝、出口付近にスタンバイした。

「そういえば、ここにはもともと女の子を捜しにきたんだよね？」
「ええ。」

念のためセリアお嬢様かもと思って探しに来ただけ……女の子どころか人がいたという形跡すら無かった。

ガセネタつかまされたのかな？」

「まあ……だろうね。」

そもそも何しにきたって話だし。」

「いらつく……。」

……準備はいいの？」

「万全。」

そうだ。ビットモンはティアが持つてるといい。」

「私だって近接戦闘タイプよ。」

あまり舐めないで。」

「まあまあ。残り三つのうち二つあげる。」

装備的に僕は一つで十分。

まだ完全に治ってないでしょ？」

「大丈夫。」

もともと自前の魔法薬があるし。

重症以外なら効果がある。」

「その重症を受けたときのためだよ。
はい。」

無理やり持たせる。

僕は姉さん以外が相手なら死ぬほどの怪我は負わない自身があるか

らね。

「・・・しょうがない。

貰ってあげる。」

彼女はこんなことで言いあいするのもバカバカしいと思ったのだろう。

渋々といった具合で自分のバックパックに入れる。

「じゃあ、行くよっ!!」

「聖なる戦乙女の女神よ

私の体にささやかな加護を与えたまえ

ヴァルキリーアーマー!!」

ティアのヴァルキリーアーマーは身体能力を数倍にする奇跡らしい。彼女の技量では10倍が限界で、それも持続時間は数秒というレベルだ。

優秀な聖者（奇跡を専門的に扱う職業のこと）でも4〜5倍が限度だというから数秒とはいえ10倍は驚異的なものといえる。

出口から一気に出て、周囲の気配を確認。

中からうかがったとおり、アースヘッドは一体のみ。

これならすぐに逃げ切れる。

「ふっ!!」

瞬時に近くに行き、後から出てきた彼女から注意をそらす。

そして攻撃を与えぬまま、そのままジャングルの茂みへ。

木々が繁茂していることにこれほどの感謝をすることになるとは・

・邪魔とかいって申し訳ない。

彼女もそのままジャングルと化した木々に向かうが、そこは上位竜種。

そんなに上手くいくはずが無かった。

僕は彼ら上位の力を見くびっていたのだ。

アースヘッドの体から靈力に酷似した流れが見えた。

「超感覚を使う気かつ!？」

「グルルルッルラアアアアアアアアッ!！」

雄たけびを上げながら僕の方へ来るアースヘッド。

その巨体からしてありえない速度で突っ込んできた。

超感覚による奇跡で筋肉の性能を引き上げたらしい。

というか、予想外すぎるスピードだ。

特急車の2.5倍くらい。

僕にとっては問題ないが。

すぐにかわして後ろから接近。

とりあえずファルシオンできりつけた。

「ちっ!!」

やっぱり堅いつ!!

てか、堅すぎだろっ!？」

バルバトに比べた体感比では約10倍。

もちろん加減など考えない全力の斬撃であることはいうまでもない。

それが簡単に弾かれる。

振り向いたアースヘッドの口腔内からかなり強い魔力の流れが見えた。

プレスとやらを使う気だ。

「チイっ!!」

瞬時に射線からずれる。

同時に極太の黒いレーザービームが脇をすり抜けて言った。

木々をなぎ倒し、はるか遠くまで飛んでいく黒い軌跡。

射程距離は約50メートル。

レーザーの太さは約1メートル50センチ。

恐ろしいまでの殺戮兵器である。

てつきり、プレスは炎的な動きをするものだと思っていたのだが、それよりもはるかに厄介だ。

なんせ早い。直線的で避け易いというデメリットをなくすほどに早い。

魔力の流れという予備動作から発射されるまで約1秒。

射速は気づいたら過ぎ去っていたというレベル。

恐ろしすぎる技だ。

魔力の流れを視認して、避けていなければ直撃コースだった。

大抵の人は感じるんだろうが、魔眼とやらを持つらしい僕は視認である。

便利な能力だ。

「とにかく・・・逃げるが勝ちだ。」

こんな化け物と戦う余裕も技量も無い。

というわけでかく乱に集中するのだが、1分、2分、3分と時間がかかって先ほどの場所から殆ど動いていない。

というより動かせてもらえないのだ。

このアースヘッドとやら、やけに戦いなれてるらしく僕たちを逃がさないように上手くけん制をして立ち回る。

本当に頭の回る魔獣だ。

僕とティアのお互いに対する気遣いのせいもある。

というか、これが一番の理由だ。

「しょうがない。」

ここからは僕1人で注意を引くよ。

ティアは先に逃げて。」

「な、なっ!？」

い、いえ・・・だけど・・・」

「あゝ・・・そういう漫画にありがちなリアクションは良いから。ティアはセリアの護衛役でしょ？」

セリアのためにも死ねないでしょうに。

ただそれだけ。

そして、僕には奥の手があるからね。」

「確かに死ねないけど・・・お、奥の手？」

「そう、ベリルから聞かなかった？」

僕は勇者として召喚されたって。」

「か、簡単な経緯は聞いた。」

「その勇者のみに伝わる必殺技があるのさ。

ただ、周りの人を巻き込みかねないから、使えない。

というわけで、生き残るためにも先に逃げて。

それだけに集中して。

いいね。」

「わ、わかった・・・そういうことなら・・・」

「そのまま、ロロリエに向かって彼女たちと先に戻ると良いよ。

ベリルが急ぎの用事とか言ってたし。」

「そ、そう・・・ありがたいわ。」

言わずもがな、奥の手なんてのは真っ赤な嘘なのだが。

とにかくあつても無くても今の状況ではお互いに動きづらいので、やむをえない。

別れた方がまだ良いという判断のもと、行動を開始する。

逃げやすいように、ここでもオリジナル技を披露目というこつ。

「ふっ！！」

瞬時に僕が分身する技。

”陽炎”である。

言わずもがな本当に分身するわけではない。

霊力や魔力といったものがあるこの世界では本物の分身ができる人もいるかもしれないが、すくなくとも僕のは違う。

プラスチック製の定規の片側を持って、片側に力を込めて曲げる。

片側を離れた時の反動で定規が二つに分裂してるかのように見える。これを人体で行った目の錯覚を利用した技が陽炎だ。

もちろん日本にいた頃は、体がぶれる様に見せて、せいぜい2〜3センチほど目標を見誤らせるとというのが質量的にも物理的にも限界だったが、こつちにきてからというものの身体能力が2〜3倍は上がっている。

だからこそ完全に分身したように見せれた陽炎・改……。とても呼ぼう。

アースヘッドはおもむろに惑わされていた。いいさまである。

もちろん、この技を編み出したのは姉さんから斬られたくないという思いゆえの努力の技であって、決して才能ではないといっておこう。

そして、これを見せた瞬間に見て覚えた姉さんこそ天才だ。

僕がコレを会得するまでにどれだけの……。どれだけのおおおおおおおおおっ！！

労力と時間と汗と執念を割いたか……。次の瞬間に技を見破られるどころか、コピーされた僕の立場はなんなんだろうと思った苦い思い出しが無技である。

などと苦い思い出に浸っているとすでにティアは逃げ出したらしく、あとは僕が逃げるだけとなった。

第12節 ドラゴントラブル？（後書き）

動物豆知識

爬虫類には昼間に行動する昼行性の者と夜行性の者がいます。

ミドリガメは前者。

前者は日光浴を必要とし、後者は必要としません。

また、日光に含まれる紫外線にも種類があり、大まかに分けて二種重要視されるのが二種と言い換えましょうか。

そのうちの一つ。

ビタミンD₃を生成するのに必要な紫外線がガラスに吸収されてしまふのです。

ビタミンD₃はカルシウムと連結して丈夫な骨を作るのに必要な大切なビタミン。

それがないとカルシウムを骨にできないので、山瀬 響の飼う「にとり」はクル病となったわけです。

第13節 闇人

「ほらほらあっ!!」

どうしたどうしたっ!!

僕はこっちだぞっ!!」

すっかり惑わされているアースヘッド。

分身の有効時間は約0.5秒。

すぐに消えてしまうので、僕は常に分身を作り出していく。

臭いで追ってくるだろうから、彼女がかなりの距離を離れるまで引き付けないといけない。

僕は逃げようと思えば縮地でアースヘッドを振り切ることが出来るので問題ない。

怖いくらい簡単に作戦が上手くいったものだ。

「さて、このまま、練習もさせていたどうか。」

姉さんが相手だとしても攻撃より防御を重視してしまうが、こいつ相手はいい攻撃の訓練になると思う。

というわけで、腰を落として膝を軽く曲げる。

ファルシオンを脇に添えて居合いの型をとる。

身をかめて縮地。

瞬時に間合いを詰めて、ジャンプ。

アースヘッドの背中に飛び乗り、力を込めた。

「桜花烈蹴斬っ!!」

会心の一刀だったのだが、やはり傷一つ付かない。

だったら、違う技を使うまで。

ファルシオンを上段に構え、構えた勢いそのままに振りかぶる。

「奥義イツ!!」

桜花斬っ!!」

これは姉さんに教えてもらった技のうち、一番威力の高いものである。

まさしく奥義。

気の運び、筋肉の動かし方、関節の連携、体重移動、筋力、器用、呼吸法、すべからく全身を使った袈裟斬り。

それが”桜花斬”。

姉さんが言うにはミサイルだろうと、爆風だろうと断ち切れるとかなんとか。

ギイイイイイイイイイイイイインッ！！

金属と金属が打ち合い、擦りあう甲高い音が響く。

「おおうつ！？

これでも傷一つ付かないのかっ！？」

恐ろしい防御力である。

そしてアースヘッドもそうそう攻撃をさせてくれるはずもなく、僕を振り落としにかかる。

体をコレでもかと振り回す。

もちろんそんな不安定な場所に立っていられるはずもなく、飛び降りて着地。

どうにかこうにか無傷でいられているがこちらの攻撃も通じない以上、ジリ貧である。

もとより鍛錬のつもりだからいいけどさ。

「しっ！！

桜花瞬連斬っ！！

続けて、桜花連華弾っ！！」

三連斬りの後に、打撃ならどうだとはかりに三連の蹴りを加えるがこれも効果なし。

ゲームなら打撃属性とか斬撃属性とかが設定されてるんだけどなあ。

残念ながらゲームで無いここでは如何せん大して変わりようが無いなどとやっていたら、遠くからズシズシンとかなりの勢いで近づいてくる巨大生物の影が二つある。

残りの二匹が集合してきたのだった。

「うお・・・マジか・・・」

音で寄ってきたのかよ・・・どうしよう。」

口調こそ落ち着いていたが、内心かなりのドキドキを抱えていて、愛の告白でもこんなに緊張することはないんじゃないかと思う。

愛の告白なんてしたことがないから、じっさいのところは分からないけどこれ以上に心臓が波打つことがあるのか？

少なくとも僕の人生では一番の緊張具合。というより、絶体絶命のピンチモード。

はつきりいつて図がどのとか言ってる場合じゃない。

かといって、まだ時間的にあと一分は引き付けておきたい。さて。

繰り返すけど、本当にどうしよう。

心臓がバクバク言っていて、今にも爆発しそうな勢いで動いている。エンジンで言うならエンスト状態だ。

エンジンで例える意味がわからないし、エンストは壊れてる状態なので自分でも何言ってるのやら訳が分からないがとにかく僕が言いたいのは早くも疲労してきているということである。

陽炎はその技の特性から体力を多く使うし、命がけの状況という緊張状態もその原因だ。

本当にエンストするのも時間の問題で、予想以上に体力精神ともに消費が激しい。

「うおっ!？」

ちよっ!やばっ!」

ここで更なるトラブルが発生。

早い話つまづいた。

ももとは人工的な建物に長い年月をかけて草木がこびり付いたという場所なので、足場がなかなか悪い。

つまずくのも無理は無いがタイミングがとても悪いです。

ちようど、敵が突進してきたところでつまづくって、運が良いやら悪いやら。

いや、もちろん悪いのですけども。

何も今このとき、このタイミング、場所でドジッ子スキルを発動しなくてもいいじゃないかっ！！

というか世間様はドジッ子萌えだとか良く言うが、実際のドジッ子はとても危険であると声を大にして言いたいっ！！

現に今の僕はとても泣きたい状況にあるではないかっ！！
とかなんとか嘆いてる間に、ダンプカーにぶち当たった様な衝撃が腹にぶちあたる。

「っごはっ！！」

骨が軋む嫌な音が、骨自体を伝って耳骨、鼓膜に届き脳に音として認識される。

もちろんその場に留まれるはずも無く。

バガツバガツゴゴン！！

力を受けた方向にバウンドしながら吹っ飛ぶ僕。

木々とかもなぎ倒す勢いで吹き飛ばされるのは、その勢いだけでダメージを受けるレベルだ。

ジェットコースターに乗ったときのあの中身がグワリと引っ張られる感じを痛いくらいに強くしたものと言えば分かってもらえるかな。

太目の大樹に当たってようやく止まったけど全身打撲です。

「ぐはっ！

ごほっ・・・ごほごほっ！

・・・凄く痛い。

動きたびに全身に響くような肋骨の痛みが・・・いてっ・・・いだっ・・・」

防御力を上げるといふ女神の指輪が無ければ、内臓破裂でショック死というところだろう。

ルベルークで買っておいでよかった。

「グルアアアッ!」

止めとばかりに大口を開けて突っ込んでくるアースヘッド。

「僕を食らう気だろうがこの時を待っていたっ!」

体をひねって大顎の攻撃を避ける。

空ぶったアースヘッドはそのまま大樹に齧り付く。

ここが最初で最後の好機。

そのままの勢いでバックバックから魔力無効型のショートソード――ベリルから譲り受けたもの――を左手に取り、一番の柔らかな場所、急所にもつながっているであろう唯一の弱点。

”眼球”にショートソードを突き立てるっ!!

「うおおおおおおおっ!」

バルバト戦のときも眼球は狙ったがあの時は魔力の障壁で防がれてしまった。

もちろん、上位種であるアースヘッドにしてみればより強い障壁を持っているだろうが、そこは魔力無効型ショートソードの定番。

文字通り魔力を無効化するっ!!

「グルガアアアアアアアアアアアッ!」

ザクともサクとも付かない嫌な感触が腕に伝わり、その感触の引き換えとばかりにズリりと眼球奥へ突き進むショートソード。

いかんせんでかいので脳に届くのかはわからないが、届いてくれなければこちらが困る。

根元まで突き刺した後、そのまま横に薙ぐ。

が、剣が根元から折れた。

鱗や皮を切るのは無理のようだ。

「だったら、もう片方もっ!」

今の一撃でアースヘッドの魔力の流れが乱れて防御が甘くなってい

た。

バックパックから最初にいた街で買った幅広の小型の西洋剣。

スレッドシヨルドを出してもう片方の目にめがけて飛びあがり、突き立てるっ！！

「とったっ！！」

かに思われたが頭を振り回し、そのままの勢いで僕にぶつかる。

「・・・ぐがっ！！」

ごほっ！！こなくそっ！！」

吹き飛ばされ、地面に叩きつけられたが先刻の一撃に比べればアリの一撃のようなものだ。

いや、言いすぎだけどね。

すぐに体制を立て直して、再度飛び上がる。

犬の本噛みレベルのダメージはありましたよ。

「今度こそとったっ！！」

ザクっとおっけない音を発てて、ずっぷりと吸い込まれるように突き刺さっていくスレッドシヨルド。

これで終わりだと。

一瞬気を抜いたのがまずかった。

「っ！！？」

超感覚かっ！？」

さらにはブレスの気配。

今は空中で回避不可能。

超感覚で聴覚か、嗅覚を強化して僕の位置を認識してブレスを放つつもりだっ！！

着地したところにちょうどぶち当たる１０年来のバンドグループが織り成すオーケストラのような絶妙なタイミング。

「くっそたれがっ！！」

つい毒づくが今の手持ちはファルシオンのみ。

ショートソードがあれば無効化できたかもしれないが、刀身は敵の

眼球内。

せめてもの抵抗にファルシオンを盾代わりに構えてそこで僕の意識は一度途絶えた。

「ごぼはっ！！」

・・・どこだここは。

血反吐を吐いて、それをきっかけに意識を取り戻したようだが、あまり意味はなさそうだ。

体の感覚はほぼないと言っている。

せいぜい、全身を包む内臓から焼き焦げていくような熱感くらいしか感覚がない。

霞む目を見開いて、軋む首をめぐらせて、今にも強制シャットダウンしそうな意識を力いっぱい手繰り寄せて”現状”を確認する。

場所は、古代遺跡の中。

玉座のような物のすぐ前で僕は倒れ伏せているようだ。

あのプレスは地下まで突き抜けて僕をこんなところまで押し込んだのだろう。

上を見上げると、ぼつかりと穴が開いている。

天井までは50メートルほどなので、あんな高さから無防備に落ちて生きているだけでも奇跡といえる。

右手にはファルシオン。

刀身は無く、原型をかるうじてとどめている柄があるのみ。

あの一撃を受けて生きているとは、幸運と言うべきか死ぬ苦しみが長引いただけというべきか。

女神の指輪様様だ。

今まですっかり忘れていたのは秘密である。

あたり一面光る苔。

ウェティッシュといったはずだが、それがびつちり生えていた。

ティアがいたあの空間にはちらほら群生してる場所があるという程度だったのだけど、ここは僕が倒れてるところ含めてびつちりと生え揃ってる。

一体ここはどこ？と思案をめぐらせるがそれよりも魔法薬のビトモンを飲むのが先決だ。

生まれたての子馬のように震える体を鞭打ち、体を起こす。

自分の体を見ると酷く酷く醜い様相となっていた。

左腕はひしゃげてまるでゾンビの腕のようだし、腹は皮膚や腹筋の一部までめくれ上がって内臓が少しはみ出していた。

右足は大きな裂傷を伴い、左足は見た感じなんとも無いが、動かないところを見ると内部の神経が切れているようだ。

右手も似たようなもので、指が開かない。

ひしゃげていても指は動く左腕を使ってビトモンを飲む。

とりあえず、血が止まり、動ける程度には回復したがあくまでも動ける程度だ。

すぐに死ぬレベルなのは変わらない。

「はぁ・・・油断したなぁ・・・」

1人ばやくことしか出来ない。

「いつの間にか訳の分からない世界に来て、面倒な人助けをして、それが上手くいったからって調子に乗って、また助けてみた結果がこれか・・・」

全くもって下らん人生だったな。うん。」

それでもそのことに後悔は無い。

自分自身くだらないと思いつつもどこかで満足していた節があった。どこかで必要とされていることに喜びを感じていた。

自身の剣をふるえること。

命がけの戦い。

勝つ喜び。

そういった類の物も初めて理解し、喜びに震えた。
結局のところ僕はあの姉の弟なのだ。

盗賊といえど人間を殺した夜は眠れなかった。

魔獣といえど、命を刈り取ることに抵抗がないわけではなかった。
あんな姉さんでもないことに泣きそうになった夜もある。

なにが言いたいのか。

自分でもわかんなくなってきたが、とにかく一言だけ言える。

「・・・死にたくないなあ。」

ああ。

わりといい人生だったかもしれない。

「人の真ん前で何をたそがれておる？」

「あ、すいません。」

ちよつと死に間際だった物で・・・」

「死にたくないなあ・・・とか黄昏ながらいつとると、はつきりいつて気持ちわるいのう。」

「いうか滑稽じゃ。」

「こ・・・滑稽っ!？」

死に間際の人間相手にそんなこと言うのは良くないと・・・って誰？」

いきなりでなんだけど、僕の前。

玉座の前に裾の長い黒いドレスを纏う黒髪の女性が突っ立っていた。
黒いその髪は鎖骨あたりの位置で切りそろえてあり、瞳は何もかも飲み込むような黒い髪に対するように白い。

常識的に、人体の構造的に白い眼球というのは白内障にでもならない限りありえないのだが。

そして、その言葉遣いに反抗するように背が小さい。

女の子をみかけたという話のタネはこの人が原因だったんじゃないかと直感的に理解する。

「人に名を聞く時はまず自分からという”まな”を知らんのか？」

「ご、ごめん。」

えと・・・僕は・・・

「山瀬 響じゃろ？」

「知ってるのになぜ聞いたのっ!？」

「いや突っ込みどころはそこじゃないと思うのだが？」

「それもそうだね。」

こんなところに君みたい年端も行かない子供がいたら危ないよ。

お家に帰りなさい。」

「たわけが。」

「ぐはっ!？」

ビンタされた。

「じゃから・・・まあよい。」

妾はフェロー。^{わらわ}

結論から言つと闇人と呼ばれる存在じゃの。
ちなみに主らのことはずーっと見ておつた。
じゃから名前もしつとる。」

「へえ」。

それで・・・何か？」

「いやなに。」

主が面白い物を持つてるでな。」

といってこちらの右腕を指すフェロー。

「えっつと。」

確かに面白い崩れ方をしてるけどそれが何？」

ファルシオンの柄は確かに面白い形をしている。

「たわけが。」

「ぐひよっ!？」

またもやビンタされた。
というかこの子苦手。

「その黒い手袋のことを言っておる。」

「これ？」

こっちの世界にきてからというものの、脱衣不能なこの黒い手袋。
はつきり言って邪魔です。

「簡単に簡潔に言つとじゃ。」

それは精霊契約が出来る唯一の魔具。

いや、神具と言っても良いじゃやろうな。」

「はぁ・・・。」

なんか説明してくれてるのはありがたいのだが・・・いや、簡潔過ぎる上に新しい単語まで出ちゃって説明になってないけど。

そもそも今から死ぬような人間に説明しても意味が無いと思う。

「そこでじゃ。」

高位精霊である妾が契約をしてやろうというのじゃ。」

「遠慮します。」

「たわけがあつー!!」

「ぐはあつー!!」

今までで一番痛いビンタだ。

殺す気かっ!!

「問題ない。ちょこつと触れるだけじゃ。」

ちよつと先っぽが触れれば良いんじゃ。

ちよつとだけ特殊なやり方で触りあうだけでいいのじゃ。」

「なんかえつちい言い方でぶろつさむっ!？」

「た、たた、たわけが。」

変な想像するではないっ!!

これじゃから、男という生き物は・・・」

またまたビンタ。

何？この顔を真っ赤かにしてる暴力自称高位精霊は、死にますよ？

本当に死んじやいます。

というか、その幼児体系で変な想像をしまつほど僕は特殊な性癖をしていない。

「たわけがっ！！」

「なぜにがふっ！？」

再度ビンタ。

泣いても良いですか？

「無礼な想像をしたじやろ？」

「鋭いことで・・・それで・・・契約とやらをしたら、何が起ころのさ。」

「おや？」

気が変わったのか？

本当に良いのか？

後悔しても知らぬぞ？

妾の力は強大ゆえに・・・」

「じゃあいいです。」

「たわけがっ！」

「舐めるなっ！」

たとえ満身創痍でもその程度のこっげぶっ！！」

一度ビンタを避けたらそのまま引き戻した手の平の甲側がぶち当たった。

この人本当になにがしたいのっ！？

「まあ冗談はともかくとして。

た、単純にじゃのう・・・妾はここ100年ほど誰とも話してなくて・・・

そのう・・・昔はちらほら人が来てくれたのじゃが、単に永劫の話し相手が欲しいというかの？

そろそろいい年じゃし、婚約相手が・・・というわけではないが・・・

・そ、その・・・婚約相手とまではいかずとも・・・い、いや、もちろんさびしいとかそういうわけではないのじゃっ！！

そんな子供ではないっ！！

本当じゃぞっ！？」

顔を真っ赤にしてそんなことを言われも説得力の欠片もない。

さびしかったのか。

こんな場所にずーっといたら、そりゃ寂しいわな。

もじもじしながら、両手を遊ばせて・・・なんと可愛いしぐさだろ
うか。

ただその白い瞳には照れと同時にやはり寂しさも混じってる。

「わかった。わかった。

それで。

どうすりゃいいんだ？

というか僕、もうすぐ死ぬんだけど。」

「それなら大丈夫じゃ。

妾と契約すれば、主はほぼ人間を逸脱できるからのう。」

「は？」

「それではさっそく。

両者の合意が必要なのじゃが今言質はとった。

さあこちらをむけい！！」

「ちょ、ちよっとおま、聞き捨てならんこむうっっ！？」

真ん前に顔が来る。

よってくる。

よる。

よる。

どんどんよる。

ちよつと！？

このままじゃキス・・・

と思いきや額と額をくっつけあう。

これが契約っ！？

確かに先っちよだけどもっ！！

第13節 闇人（後書き）

少しありきたりになっちゃったかも？

第14節 精霊契約

「さて。」

これで契約が完了したわけじゃ。

その手袋を見てみい。」

「ん？」

うおっ!?

なんか発光してるっ!?

真っ黒な手袋がぼんやり光っている。

紋様が浮き上がって、なんか不気味。

「ちなみに一つの精霊契約の魔具につき、一人の精霊しか契約できんからの。」

「まじでっ!?

ていうか、この手袋そんな性能があつたのかっ!?

今更だけどびつくりだ。」

「そして精霊と契約した今、主は全盛期の魔王と同じ力を得ることが出来る。」

数秒じゃがの。」

「魔王・・・の全盛期といわれても。」

この世界の魔王のことを良く知らない内ならばともかく、魔王が各街を統べてる各々の王たちのことを言っていると聞いたのだからそんなことを言われてもあまり嬉しくない。

すくなくとも僕が初めてこの世界に来たときに見た王様は弱そうだった。

それと同じ力と言われても下手したら弱体化するんじゃないだろうか。

「どうしたのじゃ？」

嬉しくないのか？

まあ、数秒じゃ大したこともできんしの。」

「いや、魔王って言ってもこの世界じゃ――」

魔王のことを話すとプクククと笑われたっ！

一応言っておくけど、他人から聞いた話なんだから僕を笑うのはお門違いだ！！

僕にこれを教えた彼女を笑えっ！

それはそれで嫌だけど。

「す、すまぬ・・・くく。」

くくく・・・なに。

時代も移りおうたなと思うてな。

ふふひひっ・・・」

「感じ悪いぞフェロー。」

「す、すまぬといって・・・ひいひい・・・おる。」

ふ・・・ふふ・・・ふう。

・・・おほん。

落ち着いたところで。

今の時代にあれを知る精霊も、人間も、というより全種族を通して
おらぬだろうしな。

エルフ族かダークエルフ族の一部が伝え聞いておるといっれべるか
の。」

「含みのある言い方されるとちよっつといらつくなあ・・・

説明するつもりはあるの？」

「ないの。」

必要が無いし、そもそも説明が面倒じゃ。」

「なら言っなよ・・・」

「すまぬすまぬ。」

魔王と同じというのは言い換えよう。

そっじゃのう・・・上位竜種を軽々と倒せる力を手に入れられると

「いつてよい。」

「へえ。」

でも今の状況をなんとかしないとこのまま死ぬだけなんだけど・・・

「

契約と言われても死にそんな身である僕にはなんとも意味が無い。

結局のところ今の状況をどうにかしなければ、意味はなさないのでから。

「それも問題ない。

そろそろ実感できる頃合じゃろ？」

「ん？」

何が？」

「にぶちゃんよのう。

体をちと動かしてみい。」

「いや、動くも何も・・・ってあら？」

普通に動く？」

「そうじゃろうそうじゃろう。

妾の力が主の体にめぐり、物理的な身体能力はもちろん、治癒能力といった目に見えない部分も上がっておる。

人間ではとても考えられぬべるでな。

とはいえ、あくまでも人間と比較した場合だからの。そこまでの重症だと、まともに動けるように3日はかかるじゃろうが、その頃には体力もある程度回復するだろうて。」

「こんな場所で3日間か・・・嫌だねえ・・・」

「失礼な。

妾の部屋だというに。

女子の部屋に居座っておいて、ひどいことを言う。」

頬を膨らませてブスとするフェロー。

話を聞くに大分長い時間を生きていたようだが、見た目相応の可愛さを感じた。

「え・・・そうなの？」

「ご、ごめんなさい。」

「よいわ。」

それに久方ぶりの地上じゃ。」

「ど、どういうこと？」

「ん。」

あ、ああ。

妾はここに閉じ込められておったからの。」

「閉じ込められ・・・監禁されてたってことっ!？」

「言いて妙じゃが・・・ちと違う。」

悪い意味での監禁ではない。

妾を救うための・・・監禁といったところか。」

「えと・・・話が全く見えません。」

「簡単に・・・至極簡単に言えば、ここ付近には暴君がいたのじやよ。」

妾はその妃となる身分の閼人じゃった。

俗に言う政略結婚じゃな。」

そういう彼女の白い瞳に揺らぐ感情が何なのか僕には分からない。

「何。」

その暴君はかなりの問題があつての。

とくにその強大な力、他者を冷徹に害することの出来る価値観。

早い話。

その暴君への生贄といつてもよかつたかもしれん。

妾は覚悟を決め、その男に嫁ぐつもりだった。

あわよくば寝首をかくつもりでな。

だが、奴の方が上手じゃった。

もともと妾達、閼人側にはそやつと仲良くするつもりなどはなから微塵も無い。

はつきりと言うなれば、政略結婚という友好に見せかけた時間稼ぎ

だつたのじゃ。

そやつを殺すための戦力を集めるためのな。

それを見破ったあ奴はそのまま世界を混沌に至らしめた。

しかし、もちろんのこと妾達にも多大な犠牲が出る。

時にはごつそりと。また時にはぽつりぽつりと守るべき民草が死んでいったよ。」

そういう彼女の白い瞳に揺らぐ感情は複雑な・・・決して他者には分らないような轟々と渦巻いたものだ。

「いつの間にやら闇人は数十名が残るのみとなったわけじゃ。

そして中でも力の強かった妾は、とある理由から主と妾がこの

”永劫の時部屋”に閉じこもったわけじゃ。」

「よくもまあ・・・なんというか・・・偉いね。」

「そ・・・そうか？」

「そうだろうか？」

「うん。」

偉いと思う。

僕にはとてもじゃないけど、どんな理由があってもこんな場所で一人きりつてのは耐えられなかったよ。」

「なに。」

妾は魔力体を切り離して外へ行き来できるからな。

大した苦行ではない。

せいぜい人が恋しい・・・それくらいじゃ。」

そういう彼女はなんだか酷く儚げで、今にも壊れそうな氷細工のようで、瞳はいつ泣くかも分からないような不安定な揺らぎを出していた。

彼女の身上話は僕にとって途方もなく実感に沸かない話だ。

でも不思議と。

さめざめと。

さんと。

僕は涙を流していた。
ただただとめどなく。
悲しさや無念さや後悔や悔恨や恨み辛み、喜び、虚しさ、せつなさ、
愛情。

いろいろな感情の奔流が右腕の手袋を伝って頭が割れそうになりながら泣いていた。

彼女の代わりとばかりに泣いていたのだった。

「それで・・・何を泣いておるのじゃ？」

「いや・・・なんでもないよ。」

とりあえず僕は寝る。

実はさつきからなんだけど、なんだか眠くなってきた。」

「そうか・・・そうじゃな。」

その傷でよう意識を保ったというところじゃ。

ゆっくり休むが良い。」

体が睡眠を欲していた。

傷を治すべく。

体力を戻すべく。

生きるべく。

またセリアたちに会うためにも。

まどろむ意識の中、さわりと僕の髪を撫でる力を感じた。

それは不思議と家族の温もりを彷彿とさせて、僕は意識を手放したのだった。

「・・・うん？」

「起きたのか？」

寝坊助さんめ。

さしもの妾でも足が痺れてしもつたわ。」

「ああ・・・え・・・ええと・・・」

意識を覚醒させるが、いかんせん記憶が混濁している。

昼寝と称して寝て起きる頃には真夜中で寝すぎた時のだるさに似ていた。

というよりそれより強めのダルさと軽い頭痛で顔を顰める。

眼前には僕を覗き込む少女・・・フェローの顔。

そんなに近く覗き込まれると少し恥ずかしい。

「起きたのならどいて欲しいのじゃ。」

まあ、妾の膝枕が気持ちいいのは分かるがの。」

「うん・・・なんだって・・・なんだってっ!？」

「ひゃんっ!？」

こ、こら!

もそもぞ動くでないっ!!

こそばゆひんっ!？」

「うあっ!？」

やわらげブフっ!？」

フェローに膝枕をされていたようでフェローの膝枕から、ついという感じで落とされた僕の頭。

重力にしたがってゴチンとぶつけた。

苔が敷き詰まってるせいもあって直接床に落ちるよりは痛くないけど、痛くないと言うには少し無理があるといった具合の微妙な痛烈打である。

「一気に目が覚めた・・・」

体を起こして体調を確かめる。

一眠りしただけで、殆どの傷が塞がり、骨もあらかた修復されているようだった。

すごいな。精霊契約の力。

いや、フェローの力が僕の体を廻るというから、これが彼女の力か

もしれない。

「すごいね・・・精霊契約ってのは。」

「いや、妾も予想外じゃ。」

一日でここまでとは。」

「そんなに早いのか？」

「・・・多分、女神の指輪の効果もあるから・・・って一晩っ!？」

「女神の指輪か。」

なるほどのう。

それならば相乗効果でこのくらいの効果はあつて当然か。

本来なら即修復されるれべるじゃが、おそらく死に掛けておつたら命の維持に力の大半がいったから・・・ん？何を驚いておる。」

「いや、一晩も膝枕してくれてたのかなあ・・・と・・・。」

「う・・・うむ・・・」

嫌だったか？」

という彼女の上目遣いはなんだか見た目に反して色っぽく、むしろ見た目が年端もいかない少女というのがこれまたギャップになっており・・・すごく悩ましい魅力を醸し出していた。

なんだろうこの気持ち。

これが背徳感!？」

彼女の頬は軽く染まっていた。

結構な年月を過ごしているらしいが、こういったことには免疫がないようだ。

「いや。」

むしろ悪いと思ってます。」

「気にするな。」

響は妾の契約者じゃからな。

気遣うくらい当たり前のことじゃ。」

「ああ・・・そういえば精霊って個人的には実体の無い神聖視されるような存在という偏見・・・？」

そういう文化のもと育ったんだけど、精霊ってそもそも何？

東大陸に住んでるってことは分かる。」

「ふむ・・・その詳しい説明はおいおいじゃな。」

今は寿命の長い人間の亜種・・・霊力と魔力を併せ持つ存在とでも考えておけば間違いない。」

「そう。」

で、契約ってのは？」

「精霊と人間を結びつけ、両者を足して2で割ったような存在になる儀式・・・かの。」

メリットデメリットはもちろんあるが、手っ取り早く強くなれる方法の一つじゃ。」

もちろん精霊契約のための魔具が必要となる。

この魔具の性能もまた契約における加護の大小を決める要素となるから高価なものほど良いな。」

そして、精霊と契約した人間は俗に”精霊士”・・・そのままじゃな。」

そう呼ばれる。」

大陸にこの精霊士は50人もおらんだろうから誇ってよいぞ。」

「誇ってもといわれても・・・特別誇りたいとかは・・・」

「さて、ここからが本番じゃ。」

妾の力を使いこなして、上にある三匹の竜・・・ではなかった。一匹は力尽きておるな。」

二匹の竜を相手に練習をするといい。」

「あ、あれを・・・二匹でデスカ？」

勘弁して欲しいんですけども。」

「さあ、出口は向こうだからの。」

「ちよつと、人の話を聞きますせんか！？」

「あとで聞いてやろう。」

「いや、今聞いてもらわにゃほぼ意味がない、じゃなくてすべての意味が無くなるだけど！？」

「なんじゃ。」

妾の契約者ともあるう者が、たかが二匹のトカゲ相手にみつともないとは思わんのかっ!？」

「僕としてはもう縮地あたりで逃げ出せばそれで万事おっけーなので遠慮願いたいというささやかな願いを知ってほぶしっ!？」

「たわけが。」

「またビンタするし・・・結構痛いのがってる?」

「何を言う?」

響が大事そうにしていたイチゴ柄パジャマに頼まれたから厳しくいくというに。」

「どういうこと!？」

「そのままの意味じゃ。」

妾の力でイチゴ柄パジャマと話せるようになったのじゃよ。バックパックから出して話しかけてみい。」

「ほ、ほんとうかっ!？」

喋るパジャマ。

それはそれでパジャマとして機能するのか若干、不安なところだ。

「貴様の裸をなんで俺が被覆してやらなければならないんだっ!!全部おっぴろげとけやっ!!」とか主人を選ぶパジャマとかになっちゃったら、愛するイチゴ柄パジャマを二度と着用できなくなる。そんなことになれば発狂してしまいそうだが、僕のイチゴ柄パジャマは僕のことをどう思っ被覆してくれているのか。

それもまた不安と同じくらいの期待だ。

その不安と期待があつて、この場からいつそのこと逃げ出したい心境に駆られながら魔法にかかったように手が動く。

そのままおそろおそろパジャマを出す。

「・・・話しかけてはこないな・・・」

やはりここは改めて自己紹介からいくべきか。

「僕は・・・知ってると思うけど、山瀬 響。」

その・・・こうして改めて話すと・・・そのなんか照れるよね。」

パジャマに向かって話しかける僕。

端から観るとちょっとアレな人に勘違いされるだろうが、ここはフアンタジー。

なおかつ喋るといふのだから問題はない。

パジャマは相変わらず反応しなかった。

最近、着てやらなかったから拗ねているのかな。

「そ、そんな黙ってないでお話しようよ。」

僕は前々から君の事を愛していたよ？

そ、その確かに最近是他の子（今来ている冒険者の服）にカマかけていたけど、け、決して浮気じゃなくて・・・ほ、本当に違うんだ。僕が愛しているのは君だけさっ！！

でも、世間はそう見てくれない……。

僕の愛、君の愛を気持ち悪いと観る人が殆ど。

いや、わかってるよ。

そんな他者の視線なんて気にしなけばいいことは。

でも、君と愛し合っていると（着用すること）まわりから・・・いや、本当に違うんだけど、目立つわけにもいかないっていうかつ！」

台詞だけとってみれば、女たらし様様のプレイボーイ発言だ。

この台詞の相手がイチゴ柄のパジャマだっというんだから客観的に見ればかなりのシニール映像である。

主観的には自然なのだが。

$\begin{matrix} \nearrow & \searrow & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \searrow & \searrow & \searrow & \cdot & \cdot & \cdot \end{matrix}$

[illegible]

おもしろっ！！す、すぎ、すぎるっ！！！

うく・あふ・はははははっ！

わ、妾の予想、．．を、う、上手く．．越え、て、くくく、くれ
おったわっ！！」

背後でやけに笑いこけるフェロー。

うむ。

これはもしや。

いやもしかしくなくても。

う・そ。

ではないだろうか。

「気づいたか？」

じよ、冗談のつもりじゃったんだが・・・くくく・・・ふふふ・・・
はっはあはは。

う、う、嘘だというに可愛い奴じゃのうっ!!

ええ!?

もう一度いつてくれんか？

前々から君のことを・・・なんじゃて？

ただの動かぬ布切れに”前々から君のことを・・・アイシテル”！

くはははははっ!!

け、けけ・・・傑作じゃっ!!

見事な傑作じゃっ!!」

「お・・・おま・・・な、なんて・・・」

やばい。

こつちにきて・・・というか、いままで生きてきた中で一番恥ずかしい。

なんというか酷すぎませんか？

「ふえ、ふえ、ふえろ、ふえろーの・・・ふえろーの・・・ばが
あああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああっ!!」

男って奴はな。

泣いて走りたくなる時ってのがあるもんなのさ。

うん。

二度と他人にイチゴ柄パジャマを見せないと誓ったその日である。

第15節 怒れる魂も次には俺のターン（前書き）

タイトルはニュアンス重視です（笑）

第15節 怒れる魂も次には俺のターン

「ぐず……」

「ああ。」

えつと……じゃな。

すまんかった。」

その程度の謝罪で僕のピュアピュアハートが受けた傷を治せるのなら、精神科医やカウンセラーという職種は存在しないよう。

そして、僕は今にも死にそうなくらい心の傷を負っている。

「……うむ。

しかないのう。

本当にしゃべれるようにしてやるから、機嫌を直してくれんか？」

「なんですとっ！？」

「うおっ！？」

凄い食いつきようじゃのうっ！？」

フェローの肩を持って揺さぶりまくる。

フェローの頭がガクガク前後に動いてるが、それどころではない。

ま、まさか本当にしゃべれる——はずがない。

分かっている。

分かっているさ。

また嘘でからかっているに違いない。

「うん？」

どうしたのじゃ？

その胡散臭いものを見るような目は？

今度のは嘘じゃないから安心せい。

とはいえ、多少の時間は必要になるがの。」

「そ、そう？」

本当？」

「今にも泣きそうな上目遣いでこっちを見るのをやめいっ！
かわい・・・き、気持ち悪いわっ！！」

「ぐはあっ！！」

き、気持ち悪いだとうっ！？

気持ち悪い—— 気持ちが悪い—— そうか！

「僕は・・・気持ち悪かったのか・・・」

あの仕打ちの後に、この暴言。

もちろん普段ならばこれくらいの悪口をいちいち気にするほど柔な
神経はしていない。

ただ今はちとまずかった。

今先の出来事がこれまた辛く苦しく悲しくて。

はつきり言って泣き出さないだけ良く頑張っていると言っているレ
ベルなのだ。

傷口に硝酸塩をぶちまけるようなものである。

ぶちまけられたことがないからどんなものは全く持って分からない
けれど。

「約束するから・・・頼むからそんな目をするでない。

・・・思わず抱きしめたくなくなるくらいに保護欲というか、母性を
くすぐられる・・・いや、なんでもないのじゃ。」

後半はごもごも言ってて聞こえなかったけど、いつまでもいじけて
いても仕方がない。

いい加減男らしくいきたい。

男とは得てして見栄っ張りなのだから。

「本当に可能なの？」

「もちろんじゃ。」

妾を誰だと思つておる。

余裕綽々・・・とまではいかずとも一ヶ月くらいあれば十分じゃ。」

「一ヶ月もかかるのか・・・」

「うむ。」

とりあえず。その布切れを貸せい。

妾が常に身に着けることで、魔力が宿る。

そこに妾の力を精霊化させ、その布切れに精霊の力を転写する。

魔力を宿らせるのに一ヶ月ほどといったところか。

妾の力は強い故にな、一般的な魔法具とは違った作り方をせねばならぬ。」

「魔法具？」

「魔力、霊力の宿った武具のことじゃ。

そのままじゃな。」

「ふううん。」

んじゃこれ。

それとこの服はパジャマって言うんだ。」

「ぱじゃま、か？」

へんてこりんな名前じゃのう。」

「ほつとけ。」

イチゴ柄パジャマを凝視するフェロー。

確かにこの世界には存在しないのだろうが、そこまで変なものを見られるよう目で見られると少し悲しくなってくる。

この世界でパジャマの良さが分かったのは、セリアを襲った盗賊の1人と、ギルドで世話になったお姉さんのみとなる。

ふ。

このセンスを理解できるのは、それこそパジャマをこよなく愛するものだけさ。

お姉さんにパジャマを作ってプレゼントするのもいいかもしれない。パジャマを愛する同士を増やすために。

もちろんそんな下心を読まれないように、いつぞやのお礼ですとでも言ってカモフラージュするのを忘れてはいけない。

フフフフフフフフ。

パジャマリスト量産計画の手始めに彼女を巻き込めば、彼女の口利きでギルドを出入りする冒険者達に広めることができる。

冒険者達はその職種の特色上、ひとところに留まる人はあまり居ないだろう。

お姉さん越しにパジャマを知った冒険者達は、その冒険者越しに他の町の住人や冒険者へと広まっていく。

こうすることでイチゴ柄パジャマが全世界に広まり、パジャマリストが――などと考えてる間に、フェローはパジャマを着用してるドレスのスリット・・・かな？

彼女のドレスは上半身と下半身で分かれてるタイプで、スカートは足の太ももが見えるようにパツクリ割れてるチャイナスカートのような形である。

そのパツクリ割れてる場所にパジャマを畳んで入れた。

ポケットではないのだから、すぐに落ちてきそうなものだが落ちないところをみると大丈夫なのだろう。

僕が着ていた衣服が、彼女のそんな場所に入るところを見るとなんとなく変な気分になるが気のせいだろう。

うん。気のせいだ。

「それで・・・出口はどこ？」

「入ってきたところから出れば良いじゃろう？」

ここは先も言ったように、妾が監禁されておった・・・というと語弊があるが、とにかく出れない場所であることには違いないのじゃ。この部屋には特殊な魔術と奇跡が施されておつてのう。

この中では物理的な時の流れがないものとなる。

・・・この場所だけ老いという概念が消える。といった方が分かりやすいかの。」

「え〜と。つまり？」

「つまりはじゃ。」

外からは出口が用意されておるのじゃが、中からは響が落つこちてきたあの――」

フェローは言葉を一度切つて、上のぼっかり開いた穴を指し示す。

「穴からでるしかないってわけか・・・」

「そのとおりじゃ。」

ちなみに、時の概念をなくす術式も主がこの部屋の本来の入り口を無視して入ってきたせいで壊れてしまったが・・・まあよいか。」

「暗に責めてない？」

「というか、もともと」とある理由”とやらでこんな場所に居たんだろ？」

こ、壊して大丈夫だったなの・・・とか気になったりして。」

時を無くすとか、そんな素人目で見ても大それた魔術を使ってまでわざわざこんな場所にかなり昔からいたっぽい彼女のその理由いかによつては、とりかえしのつかないことをしてしまったんじゃないだろうか？

だとしたら、かなり申し訳ない。

いや、かなりなんてものじゃない。

彼女の口ぶりからして、この場所に居た時間というのは100年や200年という単位ではないだろう。

下手したら1000、10000年とも言える長い年月だろう。

その年月の積み重ねをすべて無駄にしたことになる僕は土下座――

程度ではまず足りまい。

死んで詫びるしかないのだろうか？

「ん？」

何を死んで詫びるしかない。みたいな顔をしておるのじゃ？」

「て、的確についてきた!？」

こゝ心を読めるのか!？」

「んなわけなからう。」

見れば分かる。

・・・多少時期尚早な気もするが、ちょうど良い頃合だとも言えようタイミングじゃ。

気にせんで良い。」

「い、いや、まあ、その・・・でも、悪いことした感は否めないよ・・・うん。」

「そうか。」

ならばあれじゃ。

侘び代わり・・・といったはなんじゃが、響の旅に付き合わせてくれるだけでよい。

それで十分じゃ。

魔力体で外出できるとしても他の人間と喋ることはおろか、他の人間からしたら妾の姿が見えないからの。

今の町並み、人と形を見てみたい。」

というフェローの顔にはなにか誇らしげなものがある。

まるで、自分の子供の成長を確かめるような母親のような表情のようで、一生懸命に作った仕事を誇るような目でもあり、まるで・・・僕のように異世界から来た人間が全く見たことのないこの世界へのワクワクを押し込めるように、楽しげな雰囲気放っていた。

「んま。」

付き合うよ。

でも、1人でもよくないか?それ。」

「何を言う?

旅は道連れとも言っただろう?

それに、仲間がいてこそより楽しい。

そうは思わんか?」

それもーそうだな。

「とりあえず、ここを無事に突破しますかね。
ふっ！」

天井の穴への距離はざつと50メートル。

日本にいた頃はもちろん、こっちに来て身体能力が強化された今さつきでも無理であつたろう距離を、僕は一回、そこそこに力を込めた跳躍で飛びあがつた。

「んな！？」

予想以上に身体能力が上がってる？」

フェローとの契約で身体能力がアップする的なことを聞いたがこれは予想以上である。

「これ。

妾を置いていく奴があるか。

完全に忘れおつたな？」

「あ、ごめ……つて飛んでるっ！？」

彼女による非難の声を受けて、さっきの部屋に戻ろうとして振り返ると、プカプカ浮かぶフェローが僕の目の前にいた。

「な、なにそれ？」

「何って……普通に飛翔の奇跡じゃが？」

ちなみに、妾などの高位精霊は魔力と霊力をともに有しておるから、魔術でも奇跡でも使えるのじゃ。

うらやましかろう？」

「た、確かにそういう魔法とかはゲームみたいで使ってみたけど……というか空飛べるなら空からもう逃げて良くないかな？」

「……暗に妾に主を抱えて飛べと？」

「いや……まあそう言いたいのもあるけど、僕としては女の子に

抱えられるのはちょっと遠慮したい。」

見た目10〜12歳の女の子に抱えられる、大の男。（大というほどの身長はないけど。）

ちよつと拒否したい画ではある。

「魔術や奇跡とかをフェローが使えるなら、フェローの力がめぐってる僕にも使えるってこと？」

「まあ・・・そうじゃが、要特訓じゃな。」

そうそう覚えられるほど簡単なものではない。」

「ぜ、ぜひと教えてくださいつ!!」

別に攻撃魔術とかはあまり要らないけれど、飛翔の魔術とかは使ってみたい。

凄く使ってみたい。

魔力や霊力を感じるのではなく、視認できる力”魔眼”の力が宿つてからは大抵の人の体から魔力の流れは見えていたけど、自分の体にはその流れがなかった。

これすなわち僕の体内に魔力やら霊力やらは宿ってないことになる。セリアに聞くまでもなくあきらめていたけれど、これは本当に嬉しい。

魔眼を意識して自分の体を見ると、やたら濃い魔力とやたら猛々しい霊力が体に渦巻いてるのがわかる。

霊力だけで言えば、軽く見積もってもセリアの3倍はある。

セリア自体も、ベリルに比べたら10倍は軽くあったのだが、凄まじい量だ。

高位精霊って凄い。

「ほれ。」

ちよつと、後ろに良い感じに練習相手がおるぞ?」

「え？」

振り返ると、そこには2体の上位竜種、アースヘッドがいた。グルグルと唸りながら血走った目と殺気を向けている。

「仲間が殺されたことを知っているようじゃな。

上位竜種というのは総じて賢い。

それは今も昔も変わらぬな。」

「のんきに実況してる場合！？」

「何をいう？」

「のんきではない。

懐かしんでおるのじゃ。

妾がちよつと竜の巢に攻め込んだ時なんて50体は軽くいての。

一匹一匹、ちまちま潰していく作戦にしようとしたのじゃが、一匹殺した段階で気づかれてしまったの。

なんと、まあ。

驚くことに常に点呼を取り合うという社会性を・・・」

「そういう解説をはさんで、べらべら余裕綽綽に経験談をかたるその姿こそそのんきというっ！！

自覚してくれっ！！」

「何を言う？」

「これものんきではない。

これは・・・・・・

あれ・・・まあ・・・

すまん。

ボケが思いつかなんだ。」

「のんき過ぎる！？

この状況でボケを考える貴方の神経いかに！？」

「ふ。

よいツッコミだ。

そんな主とならいけるっ！！

芸人におけるヒエラルキーの最高峰へとっ!!」

「いかへんわアホ!!」

「なんだってっ!？」

ならば聞こうっ!!

過去の雪辱を晴らさないで生きていけるのかっ!？」

「一体、僕達の過去に何がっ!？」

「ふふふ。」

あなたは忘れているかもしれないけど、私・・・実は貴方の母親だったの。」

「衝撃の事実過ぎるっ!!」

そして、こんな幼女母嫌過ぎるっ!？」

「ノリいいのう・・・」

「・・・ついツツコンでしまった。」

ちよつと自己嫌悪。

こんなことになぜ付き合わなければならぬのか？

そもそも付き合ってしまったのか？

まっつつつことバカな行為である。

「グルルラアアアアアアアアアッ!!」

「グルルルルルッラアアアアアアアッ!!」

二匹ともお怒りである。

それはそうだろう。

こんなバカな会話を聞かされて、無視されていたら竜だっって怒る。というか、逆の立場なら僕も怒ると思うし。

「さて、真面目に言うんじゃ。

今の響の力を試すには良い相手・・・かもしれぬ。

じゃから、全力でやってみるとよいじゃろう。

ほれ。

右腕に魔力と霊力を・・・イメージで固めていくのじゃ。

その間は妾が足止めをするでしょう。」

といって、飛んでいるフェローは手の平から、黒い液体を滴らせる。

「・・・何それ？」

「不思議そうな顔じゃのう？」

これは妾の・・・というよりは闇人と呼ばれる高位精霊が持つ特別な魔術での。

いろいろ使い勝手がいいのじゃ。

今回は縄代わりとして使う。」

といった瞬間、凄まじい速度で黒い液体は縄状になり、そのまま二匹をがんじがらめにする。

「こ、殺さないとだめか？」

「ん？」

こやつらは主を食おうとした奴らじゃぞ？

哀れみ・・・か？」

「いや・・・いや、哀れみかはわからない。

けど、今ここで生き物相手に試す必要はないじゃないか。

フェローがそのまま捕まえてくれれば、あとは簡単に逃げられるし。」

「ふむ・・・まあ、確かにそうじゃな。」

「こいつらが盗賊とかなら、逆恨みで僕の周りを傷つけるかもしれないけど、すくなくともこの竜たちはそんなことしないだろ？」

僕が殺すのは身を守るため。

自分と周りの身を。」

「・・・優しいのう。」

「優しい人間なら、最初の一匹だって殺さずに逃げることを考えていたと思うよ。」

そういや、あのアースヘッドは死んだ・・・んだろっね。」

「その優しさは違うと思うがのう。」

生きるか死ぬかの瀬戸際で、殺す殺される覚悟を持たぬ者はそれすなわち”甘さ”じゃ。」

優しいのではない。」

「そ、そうかな・・・。」

「そうじゃ。」

少なくとも妾はそう思う。

主は十分優しい部類に入ると思うぞ。」

「そう・・・かな。」

そうだったらいいな。」

「そうじゃ。」

・・・とはいえ、こやつらも身内を殺されたのじゃ。

黙ってはおるまい。」

この会話の最中も、がんじがらめで全く動けないにも関わらず吼えて叫んで、雄たけびをあげる二匹。

その声にはもの悲しさと憎しみがあるような気がした。

「下手したら臭いでも嗅ぎながら、追ってくるってこと？」

「そうじゃ。」

となれば、簡単な話。

主の力を見せ付けてやればよい。

どちらにせよ少し、力を使うべきじゃ。

殺したくないのなら、振るう方向は真上でよからうて。」

「わかった。」

えと・・・魔力と霊力を右腕に・・・だったね。」

まずは魔力の流れを意識する。

目で視認出来るためか、イメージは簡単ですぐに右腕に集められた。

次に靈力の流れを意識して同じ要領で右腕に集めた。

すると、手袋が一瞬膨れ上がって、右腕を飲み込むようにぐにやぐにやと変形して右腕が右腕でない何かへと形を変えた。

それは禍々しくも神々しくて、力強く美麗で鈍く輝く刀身を持つ腕と一体化した黒い”刀”であった。

「うむ。

上出来じゃ。

それを空に向けて軽くふつてみい。」

言われたとおり振ってみた。

右腕はすでになく、手首から先には黒い刀がある。

簡潔にいうなれば、右腕に直接刀が融合している、とっていい。だが普通に手で持つのと同じように振れた。

そしてそれをみた二匹の竜は、寄り添うように縮こまって震えていた。

無理もない。

僕自身、特にこれといった力を込めているわけでもないのに体の節々が痛むほどに強力な威圧感を放っていた。

「・・・妾が思う以上に相性が良いのう。

魔具自体の性能もちろんあるじゃろうが・・・これは予想以上じや。」

一見、なんともないように見えるフェローだが、いささか顔色が悪いのは気のせいではないだろう。

なんだ、この刀は。

「まあ大丈夫だとは思うが、決して全魔力と靈力を右腕に込めるでないぞ。

今は全体の一割も出してないものじゃからよいが、まともに扱えないうちにそんなことをしたら・・・街一つ一振りで消えかねん。」

「そ、そんなにっ!？」

「上位竜など軽く殺せる力と言ったじやろう？
それに、体自体もただでは済むまい。

1振り2振りもすれば・・・限界といったところか。

もしくは、魔具が細胞れべるで融合しておるから異形の化け物へと化するかもしれん。」

「り、リスク多いんですね・・・」

「当然じゃ。

”のーりすく、はいりたーん”のような都合の良い力など滅多にありはせぬよ。

いい加減、その状態を解くのじゃ。先ほどから気の毒なくらい竜たちが覚えておる。」

といわれて竜の様子をもう一度見ると、確かに気の毒なくらいにおびえていた。

さっきまでの怒りはどこ吹く風。

目にはおびえ一色。

恐れしかない。

僕自身も僕の腕が怖い。

こんな経験は始めてである。

当然だが。

「”もどれ”と念じれば戻るじやろうて。」

「う、うん。」

刀が崩れ落ち、右腕が出てきた。
うっむ。

これは危なすぎる。

できるだけ使わないようにしよう。

その後、僕が一番初めにやりあつた個体の死骸から、適当に鱗や牙、皮、肉などいろいろなものを剥ぎ取って、そのララバム遺跡を去る僕達。

命を粗末にはしない主義なのだ。

素材を売つたお金で馬車を買おうと思いつつ。
ルベルークへ向かうのだった。

第15節 怒れる魂も次には俺のターン（後書き）

今回はちよつと盛りだくさん？

ようやくラバム遺跡から離れることが出来ました。

主人公の響君は今回で結構な力を手に入れましたが、もちろんそうは問屋がおろさない。

強さバランスって大事。

少し壊れつつあるけどね。

漫才部分を書いて一番楽しかったです。

第16節 サメ肝油が雨あられ

「遺跡の出口はこっちな？」

「そうじゃ。」

そこは左じゃな。」

遺跡というよりジャングル化してるラバム遺跡から、一時間かけてようやく出口付近にまでこれた僕とフェロー。

いい加減、ここから離れて宿のフカフカベッドで休みたい。

というものの、ここ一週間ちよっとほどベッドで寝ていないからである。

ティアにはセリアがいるロロリエへ戻るようにとティアを逃がすあの時に言っておいたから、問題はない。

一応、僕が生きて変えるのを律儀に待つかも知れないが、彼女の最優先目標はあくまでもセリアの護衛だろう。

セリアはどっかの王様の娘らしいから、その娘に付ける護衛はちゃんとしたプロであるはずだ。

プロの護衛ならば、自身の感情よりも護衛対象への安全や合流を優先するだろうから、今もルベルークにいる可能性はかなり低い。

ちょうど、今頃ルベルークから発つところではないかな。

それはともかくとして、とにかくにも早く宿でゆっくり寝たい。というのに、だ。

なぜまた面倒ごとが迷い込んでくるのか。

こつも連続で面倒ごと続きだと呪われた装備をいつの間にかつけているのでは？と勘繰りたくなってくる。

もちろんそんなのにはこころあたりはない。

「ふむ……」

女子^{おなこ}じゃのう。

あ奴は確か、数日前にも見かけた女子じゃ。」

「女の子が遺跡へ行くのを見かけた」っていう話に出てきたのは彼女かな？

デマではなかったんだな。

・・・なんかあからさまに雑魚の魔獣に追われてるけど、助けたほうが良いのかな？」

「必要ないと思うがな。」

目の前にはツリードッグというウルフ科の魔獣が10数匹、彼女を追いついてた。

ツリードッグとは森林などの木々の生い茂る場所でよく見かける肉食魔獣、と図鑑でみた。

ありふれた魔獣であるが、周りの木々に擬態をしながら獲物に近づいて昆虫類や小型両生類、哺乳類を主食にするらしく、擬態自体の完成度は人間や鳥などの視力の良い生き物にとっては恐れるほどではないらしい。

じつさい、その姿は若干作り物っぽく、人間の目からなら見分けるのは難しくはないというレベルのカモフラージュである。

そしてそのツリードッグに襲われている14〜16ぐらいの女の子。片側でまとめた・・・青い髪色のサイドテールに身軽な軽装でもって背には弓を。手には大きめのナイフを抱えている。

釣り目が印象的で、動きや表情からしても気の強そうな女の子である。

危なっかしいが、その動きからして冒険者だろう。

ギルドのランクで言えばポーンを脱して間もないナイト、という動きだ。

ツリードッグは魔物の強さのランクで言えばポーン？クラス。（ギルドに登録した冒険者^{チェス}同様、魔獣にもチェスの駒になぞらえた階級

があるらしい。最近になつて図鑑の写真右下にそのランクが書かれているということを知った。魔獣の場合、さらにポーンやナイトの後に？、？、？の三段階評価が付く。数が大きいほど弱い。）
彼女の腕ではポーンと言えど、2、3匹なら余裕。でも5匹では辛くなり、8匹になると逃げることを念頭にいけそうならいく。
10匹以上は逃げることを最優先に。そんな感じの腕だった。

「必要じゃないの？」

「まさかのう。」

あの女子はああ見えて、種族固有の魔法を使いこなしておったぞ。すくなくとも妾が見たときはそうしておった。」

「種族固有？」

「その名のとおり、その種族にしか扱えない、特殊な魔術・・・とも奇跡とも付かない不思議な神業。

それを俗に”魔法”と呼ぶのじゃ。

ちなみに、妾がアースヘッドを縛るために使ったあの魔術っぽいのも魔法に含まれるのう。」

「へえ。」

それで、彼女の魔法とやらはなんなの？」

「見てればわかる・・・はずなのじゃが・・・」

「きゃーっ！きゃーきゃーっ！！

こっちこないでようっ！！

いや、やめてっ！！」

姦しく騒ぐだけの青髪少女。

はつきり言つて、かなり切羽詰つてるような印象を受ける。

少なくとも僕の目には普通にピンチに陥つてるとしか思えない。

まあ、ここでいちいち助ける義理もないし、面倒ごとに出くわした

からとそれに関わる必要は無いのだ。

そう。ここは春の小川のせせらぎがごとく、流すまで。
ないしは荒れ狂う海のような雄雄しき怠惰に身を任せてこのまま先に進むまで。

二度目となるが、僕はとにかくベッドが恋しいのである。

そもそも現在の服である冒険者風味の服装は血だらけでボロボロで、早く着替えたいというのもあり、血が固まってパリパリ言うぐらいなのだから本当に良く生きていたなあ。僕。と自分で自分をほめつつ、すなわち、ここから立ち去るのである。
簡潔に言つと、シカトしてしまおうつてことさ。

「ち、ちよつと!?!」

そこ行く冒険者さんっ!?!

あなた、ちよつとこの可憐な美少女を助けてみないかな!?!」

うお!?!

目に留まってしまった。

ここはあれだな。あれといえば、あれである。聞こえてないフリだ。
「あれれえ?」

どこからか妖精さんの声が聞こえるやあ。

はははっ・・・まてまてえゝこのおゝつかまえちゃうぞおゝ!」

「いくらなんでもそれは無理があると思うぞい。

というか気持ち悪い。」

「ちよつとっ!?!」

また言っただね!?!」

「なんどでも言ってやろう。

気持ち悪いキモイキモイキモイキモイキモイキモイキモイキモイキモイキモイ
キモッ!?!」

「ちよつとおっ!?!」

最後の方、そっちのほう明らかに気持ち悪いよっ!?!

というか、キモキモ言われてると、あつちの内臓的な意味での”肝”を想像しちゃうからっ!?”

「いや、そっちの肝だったのだから?」

「なぜこのタイミングでっ!?”

「生き肝を食べると若返るといふ話をテレビで見たことないかのう?」

「テレビをなぜ知っているっ!?”

そしてそんなテレビを真に受けちゃ駄目だよっ!?”

これがテレビっ子の怖さなのかつ!?”

「何?」

では、サメ肝がアンチエイジングに一役買うというのは嘘じゃったのかっ!?”

「フェローの言ってた肝ってサメの肝っ!?”

肝のチョイスが斬新過ぎるっ!?”

というか、それって肝油のことじゃねっ!?”

「実は、フォアグラのことじゃ。」

「一気に健康に関する関心が薄れましたねっ!?”

「肝っ玉母ちゃんから肝を抜いたらどうなるのかのう?」

「おっけえええっ!?!どうでも良すぎることにまず気づこっつ!?!」

「玉しか残らなくな・・・はっ!?”

実はオカマだったのかっ!?”

「もう、わけがわからないっ!?!」

などと、やけに手馴れた軽快なフェローのボケにツッコミをしつつ、襲われていた青髪少女の方に向きなおすと、彼女はさっきよりも殺気だって・・・ってこのギャグ!!

”さっきよりも殺気だって”。

これは新発見のギャグだ!!絶対面白いに違いない、大爆笑必死のギャグだ。

僕が僕の才能が怖い。

よし、まずは披露目のタイミングから考えー

「ちよつとおっ!？」

あんたら、何を漫才しちゃってくれてんのっ!？

そんな場合じゃないでしょっ!？

助けを求めている人が目の前にいるんだから助けないさいよっ!！」

「ちよつとまってくれっ!」

今、大爆笑必死のギャグを思いついたんだ。

どういうときにこのギャグを活用するべきかを、検討中だな。

すこし、待っててもらえないだろうか？」

「えええええっ!？」

あなたツツコミ役じゃないのっ!？」

あなたがそこでボケちゃってどうするのよっ!？」

ツツコミがボケてはいけない？

何を馬鹿なことを。

「ふっ。

おいおい。

商談はよしてくれ。」

「そこは商談ではなく冗談、ではないかのっ?」

「おつと間違えた。

ははは。おつちよこちよいだな。僕は。」

「まったくじやのう。ふふふ。」

「あ、あほおっ!！」

あ、あんたら、絶対わざとでしょっ!？」

わざとやってるんでしょっ!？」

このあほんだらどもっ!！」

ふう。

まあとにかく冗談はもうやめにしよう。

少し、おちよくりすぎた感がある。

「わかったわかった。」

真面目に答えよう。

ツツコミがボケるということに関してだが、僕は”アリ”だと思う。
今日の芸人こんじんにおいて重要視されるのは、漫才の腕はもちろんのこと
トークのセンスもー」

「何をいつてんのっ!？」

ばかあああああああああっ!!

あぶっ!？」

あっ。こけた。

さてと。今度こそ真面目に助けてあげますか。

武器は久しぶりのナイフ。剣タイプの武器はすべて使用不能になっ
てしまったためだ。

お姉さんからの饞別でもらった、地味に品質の良いコンバットナイ
フである。

まずは、彼女とツリードッグの間に”縮地”で割り込む。

そして向かってきた一頭の飛び掛り攻撃を半身でかわし、懷から一
気に刺し貫き、すぐに蹴りを入れて吹き飛ばす。

続けてきた二頭目も同じく飛び掛ってきたので、タイミングを合わ
せて頭を力チ割った。

絶命する。三頭目は、突進してきたので”陽炎”で分身を作って気
をひいた一瞬のうちに足を切り取り転倒したところで、頭を蹴り潰
す。

脳漿と眼球などが飛び散り、頭蓋骨を踏み碎いたバキバキという音
と共に、残った7、9匹のツリードッグは逃げていった。

「す、すごい・・・」

「・・・そんなに凄いことじゃないよ。」

青髪少女は僕を見上げて凄いという。

だがしかし、命を刈り取る技術がいくら凄くても嬉しいものではない。

というのは、やはり甘さか。

「甘さじゃ。」

わかっておるのう。

・・・難しく考える必要はない。自身の命を守る術でもあるのじやから素直に喜べばよい。」

というのはフェローの後日談。

それは僕だつて分かつてるけど、実際に経験するのと頭の理屈ではやはり違う。

例えるならば、映画館に行ったときの臨場感などが良い例ではないだろうか。

映画館での大画面プラス大音量、そして場の雰囲気。それらが一緒になって初めてあの空気と感覚が味わえる。コレを知らぬ人に言葉でいくら説明したところで分かるまい。

どんなに忠実にあの感覚を伝えたとしても、実際に経験して初めて理解できる、予想外の実感が沸くという経験は誰しもが少なからず経験するだろう。

以外に楽しかったとかそんな感覚でもいい。

理屈では殺して当たり前。

相手は殺しにきているのだから、そこで躊躇して殺されるなどもつてのほかであることは言うまでも無い。

早い話、”命のやり取り”にまだ慣れていないということなんだろうな。うん。

「んじゃ、まあ。」

僕達はこれでルベルークに帰るので・・・」

「ま、まってよっ……！」

このまま立ち去りたかったのになぜに引き止める!?

第17節 美少女を泣かせるやつは俺が許さねえ（前書き）

よし、ようやくセリアと合流だと思いきや。
一度勇者を出したいなと思って書きました。

第17節 美少女を泣かせるやつは俺が許さねえ

「なにか用でも？」

「あのね？」

美少女である私からのお願いなんだけども・・・」

「美少女・・・ぷっ・・・」

「わ、笑うなっ！？」

何かおかしいことをいった！？」

「言った言った。」

美少女とか美少女とか美少女とか。あと具体的には美少女とか。」

「美少女美少女と連呼すなっ！！！」

「いちいちからかっていては話が進まぬぞ？響。」

「それもそうだね。」

なんていうか、からかいがいのある雰囲気醸し出していたから、
ついついからかい気味になっちゃってね。というか心のオアシスだ
わ。この子。」

「すっごく嬉しくない言葉ねソレ！！！」

僕を引き止めた理由を聞いてみるとしよう。

「で？」

なんで僕を引き止めたの？」

「あ、あなたの腕を見込んで、協力して欲しいことがあるの。」

「悪いけど、断る。」

「ま、まだ何も言っていないじゃない！？」

「面倒くさい。」

それじゃね。」

「ふふふ、ひどいのう。」

酷いとは失敬な。

単にベッドが、布団が恋しいというだけだというのに。

そして、こういうのはやはり無視に限る。なんだかんで助けてしまったが、あまり深く関わるつもりは毛頭無い。

セリアのこともいささか心配だ。

大丈夫だろうけど。

「うううう。」

待ってってばっ！！お願いっ！！

待ってえっ！！

待ってっ待ってっ待って待って待って待ってっ！！

ただでさえボロボロの服を引っ張って駄々をこねるように僕を引き止める青髪少女。

正直うっとうしいよ。

そして、そんなに引っ張られると破れます。破れちゃいます。

「わ、わかったっ！！

とりあえず待つから、服を引っ張るのをやめてくれっ！！」

「ほ、ほんとっ！？」

「ほんとだからとにかく離してっ！？

破れるからっ！！」

とりあえず、離してもらってその直後にすぐさま逃げ出そう。彼女が僕に追いつけるなどということはあるまい。

「いや。

逃げられたら、困るもん。」

見事に見抜かれた。

「はあ。」

とりあえず、話を聞こうか。」

「私の美少女っぷりに根負けしたのね!？」

「超絶阿呆だな貴様！」

「そのマジトーンツッコミやめてよっ!？」

わ、私、そんなに美少女じゃない!？」

「僕にソレをいわせるの？」

僕はパーフェクト紳士だからね。

ちよつとその質問には答えられないな。」

「答えられないという言葉がすでに答えの気がするんだけど!？」

「そんなことどうでもいいから、とつと話を進めてくれる？」

僕は早く、ルベルークに戻ってフカフカのベッドで寝たいんだ。」

「私の美少女っぷりがどれくらいよりもフカフカベッドの方が大事なの!？」

「いい加減にせい、たわけどもがつ!!！」

「ぶげらっ!？」

「ひんっ!？」

ぐだぐだ無駄話をしていたことに腹を立てたフェローが僕と青髪少女をビンタしてようやく本題に入ることとなった。

「私は、とある勇者様と旅をしていた1人だったんだけど・・・」

「”とある”勇者様？」

つてレヴァンテって街で召喚された人のうちの1人？」

「冒険者^{チエス}なだけにやっぱり知ってるのね。」

一応、機密事項に当たるんだけど捨てられた勇者から噂が大陸上に広まったらしいから・・・

まあそれはどうでもいいの。

話を戻すけど、私って、もともとはエールゲン村に住んでた、ただの村娘だったんだけど。

私の一族はちよつと特殊な一芸を持っててね。その一芸からレヴァンテの王の兵に徴兵されて、あのバカのお供に命じられたの。

良い迷惑よ。」

「勇者・・・最近どこぞの遺跡から発掘されたとかいう陣式の”魔法”に分類される秘術で呼び出された者達のことかのう。」

というフェローの言葉に頷く青髪少女改め、エンデ・フラッセイン。僕もその一人だったりするけど、勇者の才能なしということで捨てられた結果ここにいる。

そういえば、フェローに話してなかったな。

エンデと別れたときにでも、話しておこう。

「その人が、ちょっとアレだね。」

「アレじゃわからん。」

「大方、力に溺れて偉そうにしてるとか、そんなところではないか？最近良く聞く話じゃ。」

「そう。」

あのバカな奴が私に命じたの。

”とりあえず、アースヘッドの一匹でも狩ってこいよ”ってね。」

「とりあえずで狩れる様な相手ではない気がする。」

僕なんて死に掛けたからね！うん。

今着ている服が全てを物語っていると言って良い。

「自身の力を基準に上位竜種を雑魚認定してるのよ。

あのバカっ！！いえ、あのバカに限らず異世界から来た奴らなんてバカばかりよ！！

とくにあのバカなんて女を侍らすだけで敵地にも行こうとしないし、”お前の能力は所詮、サポートに過ぎないからいらんな。ただ夜の相手としてなら近くにおいてやらんこともない。顔だけは良いしな”って言うてきやがったのっ！！

あんなバカに純潔を捧げる位なら、自害したほうが百倍マシッ！！」エンデの顔は真っ赤になって憤っていた。

もちろん、照れの類ではなく、怒りのあまりに赤くなっているのだ。

お気の毒としか言い様がない。

というか、勇者として実力を認められるとそんなことまで出来るんだ。

深夜の街に捨てられ追い出された僕とはまるで境遇が違う。

お金や寝床に困ることも無かったんだろ？

それらは能力に見合った報酬・・・という考えも出来るが、そんな奴にえつちなことをされる彼の周りの女性が可哀想に思えた。が、やはりそこは赤の他人の事情。

多少のイライラを感じても、わざわざぶん殴りたいと思うほどじゃない。

それに望んでそういう場所にいるということも考えられるし。そういうことを生業にしてる女性達かもしれないし。とにかくエンデの言葉には賛成である。

「僕も同じ立場ならそう考えるな。多分。」

女になったことがないから断言は出来かねるが。

「でしょっ!？」

んで、あいつが次に言った言葉は”くくく。なんだ？ 一步後ずさつたりなどして？ 身の危険つてやつか？ 確かに俺が本気を出せばお前くらい簡単に手籠めにできるからな。安心しろよ。ガキには興味ないんだ。”とか! !とかとかとかつ! !

ふざけすぎじゃないっ! ?

これって! ?

「んあっ! ?

あ、ああ、たしかにふざけすぎだね。」

いきなり身を乗り出してきたエンデに後ずさりする僕。

普通に鬼気迫る勢いで怖いです。感情を真正面からそのままぶつけられるのって、傍から見るよりもずっと怖いよね。ドラマの役者さんとか、いくら演技だと分かっていても僕には務まりそうにない仕

事だ。

「それで、私は思ったのっ！！

アースヘッドをぶったおし、あいつの前にその死体を差し出して吼え面かかせてやるうつてねっ！！

近接戦闘に優れた力で、上位竜種を倒したところでそれはあいつなら簡単に出来るわ。

でも、戦闘に向かない私のサポート能力で、あいつと同じ成果を・
・上位竜種を倒せるなら、単に戦闘能力に特化した相手がやった成果よりも数段凄いことでしょっ！？」

確かにそのとおりだ。

彼女が言ってるのは、アイテムとか特殊能力などを駆使してレベル1で魔王に打ち勝ちたいということだ。

彼女がバカだとかいう恵まれた”奴”はこの世界に来たときから、チートレベルの力を携えており、魔王にレベル1000状態で挑むようなもの。

勝って当然の結果である。

しかし彼女は、どうにかして弱いながらに戦略を考え、もてる駒をすべてフル動員し、背後からなり、斜めからなり魔王をぶっ殺そうと言ってるのだ。

大層なことを簡単にいうね。

いや、簡単ではないだろうけど。

もし可能なら、個人的には彼女こそを勇者と称えたい。
だが。

ここで僕に声をかけたということは一つの可能性を示していた。
まことに残念なのだ。

「でね・・・勢いづいてあいつに言ってやったの。

”今からあんたが馬鹿にしたサポート能力とやらでここからここから北のララム遺跡に居るアースヘッドを殺してあんたの前に差し出してあげるわよ！もし、証拠の・・・そうね。牙を持ってこれた

願いは概ね、アースヘッドの討伐を手助けしてくれとかだろう。別に助けても良い。僕が殺したアースヘッドのところへ案内すれば良いだけのだから。

もしくは剥ぎ取った素材を今、この子に渡せば良いだけだ。

でもそれだけで終わりそうにない嫌な予感がする。

関われば関わるほど、後々厄介になるとのアライトが脳内で鳴り響いているのだ。

できればすぐに見なかったことにしたい。

「わ、私だって……が、頑張ったもん。」

で、でも・・・食料はもう尽きかけだし、魔力も残ってないし、魔法薬も無い、弓矢も無くなっちゃったし・・・

ど、どうすればいいかわかなくなってきたし……あいつのことだから逃げて追ってくる……追ってくるの……

私……ど、奴隷になんてなりたくないよお……」

なのにすつごくいたたまれない。

調子に乗ってる勇者が100パーセント悪いはずなのだが、僕がいじめてるような錯覚を受ける。

逃げればいいんじゃない？と言おうとしたら、
”逃げても追ってくる宣言”を先にされてしまった。

とりあえず、アースヘッドから剥ぎ取った牙をこの子にあげればいいか。

「ふうえ．．ふええええええええええええええええん
っ！！」

ついには泣き出してしまふ始末。

これは急いで牙を取り出すしかないっ……！！

「ちよ、ちよつとっ!？」

こんなところで泣き出さないで!!

魔獣がよってくるし、ほ、ほら、これあげるからっ!!」

「あああああっ!!……やだよっ!!やだよだああああああああ……」

ひつく……ひつく……な、何コレ?」

「し、知らんのか?」

アースヘッドの牙だが?」

「はう?」

こ、これが……?」

「ああ。」

とりあえず泣き止んで……あ、あくまで魔獣がよってくるからという理由だから勘違いしないように!!」

「男の”つんでれ”は気持ち悪いだけじゃぞ?」

「や、やかましい!!」

そんなんじゃないから!!」

そんなんじゃない。

単に泣かれるのが苦手なだけで、いくなれば自分のためであるからして。

そう。自分のためなのだ。

決して心配だとかお人よしだとか、そういうことではないことを明言しておく。

その後、そのまま遺跡を出てルベルークに向かう僕達三人。

「付いてくる必要ないだろ?」

「べ、別に私が付いていつてるんじゃないくて、たまたま進んでる方向が一緒なだけよ!!」

というか、牙を持ってたんなら私が泣き出す前にくれればよかった

じゃない！！

お、おかげで・・・いえ、そのせいであんなみつともない・・・」

「ど、奴隷になりたくないよう・・・だっけか？」

「う、うるさいっ！！」

「ばかあっ！！」

「ぐはっ！！」

殴られるのは想定外だよっ！？

恩人に殴るってあんた、恩を仇で返すとは何事なのっ！？」

「うるさいっ！！」

「ぐはっ！！」

また殴られた。

結構痛いんだこれが。

「泣きじゃくる姿は確かにみつともなかったけど、可愛かったよ？」

「は、はう！？

・・・っ！！

「ばかたれっ！！あほんだらっ！！」

なおのこと殴られる。

こころなしに全く痛くないけれど。

「これこれ。

暴れるでない。今日はこの辺で野宿で、明日の日暮れ時に到着といったところかの。」

そんな僕達を見て呆れた視線を向けつつフェローは街道の端によって、野営の準備をする。

周りは岩場が広がっており、ちょうど良い具合に大きな岩と岩が重なり合うところに大きな空間が出来ていた。

ここで野宿をするのだ。

ちなみに遺跡に来るときもお世話になっていたりする。

周りに魔獣が居ないことを確認して、寝る準備にとりかかる。

街で買った綿のような物——コットンフラワーという簡易型布団になる寝袋をバックパックから出して、それを敷く。予備としても一つ買っておいいたのは、フェローに渡した。エンデはすでに持っているだろう。多分。

「それじゃあ、寝ようか。」

「そうじゃのう。妾も眠い。」

「み、見張りは立てなくて良いのっ!？」

驚いたように目を見開くエンデ。

そんなに見張りって大事なんだろうか？

「別に周りには特に敵らしい影はないよ？」

「そうじゃの。」

妾の探知範囲にも何もおらん。」

「それは今の段階であって、そのうち近くを通るかも知れないじゃないっ!？」

それも問題ないだろう。

殺気がわかる僕が居れば問題ないし、そのためにも眠りは浅く常に意識の一部は握るように寝るという技を姉さんから教え込まれた僕に不意打ちの類はまず通じない。

殺気を感じるスキルも言わずもがな。姉さんのせい、というべきかおかげというべきか。

あんなのと毎日死合いをしてる僕からしたら、殺気を感じることで造作も無いことである。

ふっ。姉さんっていつ考えてみても化け物だ。

弟にそんなスキルを埋め込むことに躊躇が無いという精神構造からしてもう、常人の枠には収まりきらない。

なぜ、あの姉の弟として生まれてしまったのか。

本当に悔やまれることである。

「いや、気配があればわかるし。」

「ば、化け物ね。」

アースヘッドを剣のみで殺したとかも含めて信じられないけど。」

「失敬な。」

それは姉さんに言ってくれ。」

「お姉さんがいるの?」

「ああ。」

僕のこういった技術も、剣も姉さんには遠く及ばないです。

そして、訓練と称した斬傷刑ざんしょうけいが・・・いやだあああああああ

ああっ!!

姉さんのっ!

姉さんのばかりっ!!

そこはらめえええええええええっ!!

そこは頸動脈らのおおおおおおおおっ!!」

「ちよっとっ!?

しっかりしてっ!!

ちよ、頭を抱えて・・・ひいつ!?

何考えてるのっ!?

頭をしこたま岩にぶつけるのをやめ・・・やめ・・・やめてっ
て・・・」

だめだっ!!

早く、早くあの日の思い出を・・・

思い出を!!

脳内から抹消せねばっ!!

僕はここから抜け出せなくなるっ!!(?)

さあさあさあっ!!

僕の記憶よっ!!ブローケンしてしまえっ!!

第17節 美少女を泣かせるやつは俺が許さねえ（後書き）

コレからの展開で色々と迷ったのですが、こんな感じとなりました。
次回はだいぶ長くなるかもです。

そして、作品の名の『一時々魔王』部分の意味がようやく分かることとなると思います

第18節 勇者フラグ

「やっとなついたあ!!」

「本当によかったあ・・・」

「ふむ。魔力体で来るのとはやはり違うのう。」

ようやくルベルークの門前まで来た僕達一行。

時刻は夜の7時といったところだろう。

「んじゃね。」

また縁があつたらどこかで会いましょう。」

「次会うときも面倒ごとに遭いそうだから遠慮しとく。」

「同感じゃ。」

「最後まであんた達って、むかつくわよね。」

ぶすつとむくれるエンデ。

可愛いと思つたのは内緒のことである。

「で、でも・・・か、感謝はしてるから・・・」

「なんだって？」

声が小さくて聞こえгүйはうつ!？」

「う、うるさいっ!!」

デリカシーがないよっ!!」

「くくく。青い奴らじゃのう。」

良く分からんが、殴られたのは理不尽なことだと思う。多分。不思議と断言できないのはなぜなのか。

そして、傍らでニヤニヤしてるフェローは殴っても良いだろう。殴らないけど。

「・・・あの・・・いや、やっぱなんでもない。」

「何？」

また何か願い事でもあるわけ？」

「なんでもないよ・・・じゃ、じゃね！」

背を向けて駆けていくエンデ。

最後まで元気一杯な女の子である。

若干、去り際の顔色の悪さが気になったが、なんでもないと言ってるんだしお節介は好きじゃない。

どうにもならないことになったら、逃げるか助けを求めてくるかしてくるだろう。

「気になるのか？」

「別に・・・せいせいしたよ。」

「嘘をつけ。」

フェローがニヤニヤしたまま問いかけてくる。

なんだ、そのニヤニヤは？

僕と冬香^{ふゆか}が一緒に居た所を見た母さんのような表情で、まことに不愉快極まりない。

冬香とは僕と中学の頃からの付き合いのおとなしい女の子である。

ひょんなことから仲良くなった挨拶以上のことができるクラスメイトでもあった。

友達と言っても良いかもしれない。相手がどう思ってるかはともかく。

大体にして、他のクラスメイトは僕を怖がって近づかない。刀傷を隠すために、必ずどこかに包帯がグルグル巻きにされてるのが常だからだ。

逆の立場だったら、僕だってそりや避ける。

これが、数日とかならまだしもほぼ毎日においてグルグル巻きの包帯野郎なのだから手に負えない。

姉さんの刀傷は治りが早く、痛みが少ない。というのも、姉さんは僕と死合っ際にわざわざ、皮膚の筋や筋肉の筋に沿って綺麗にスッ

パリ斬るのだ。

本当にあんな何者って感じ。

そのせいか、3日ほどで治るのだが如何せん毎日のように斬られているので包帯を外せる日は365日、まったくもってない。

そんな不気味な僕に対して、普通に接してくれてる唯一無二の親友といってもいいだろう。

重ねて言うが、相手がどう思ってるかは知らない。

口数が少ないので、どうにもこうにも何を考えているか分からないのだ。

概ねこつちから話しかけるのだが普通に頷いたり、口数が少ないながらも応答をしてくれている。

それが好意的に受け止められてるーと僕は解釈しているのだけど、実際は僕が怖くて逆鱗に触れないように怒らせないようにしてるだけじゃないかと疑ったこともある。

そんなことを思っ、一回距離を置いたのだがあまりにも僕の心が落ち着かなかった。

別に異性として好きだとかではないと思う。

単純にクラスで孤立してるのが寂しいのです。とりあえず、少しでも嫌がるそぶりをしたら離れようと考えて、そのことは考えないようにしたのだけど・・・今考えるとやっぱり、怖がっていたのかもしれない。

今頃冬香はどうしてるんだろうか。

僕がいなくなつて少しは寂しがってくれてると嬉しい。

なんとも思っ、てない可能性も大なんだけどね。

僕がいなくなつて寂しがる奴など、家族含めてミドリガメの”にとり”くらいしか思いつかない。

父さんは娘バカ、母さんは天然の最高峰、姉さんは・・・アレであるからして。

自分の環境を思つて、目から汗が出てくるのは仕方ないとあきらめて欲しい。

決して女々しいわけではなく、自分で自分に感動したのだ。

”ああ、よくこの環境でグレなかつたな”と。

僕つてホント良い子である。

「良い子にしてたから、サンタさんがプレゼントをくれたんだよね？」

「な、何をいつておるのじゃ？」

フェローが怪訝な顔を向けたが無視する。

サンタさん。ありがとう。僕が良い子にしてたからこの世界に呼ばれたんだと僕は信じてる。

これが本当のクリスマスプレゼントなのだろう。

念のため言っておくが、日本においてサンタが親であることは知っている。

それもかなり初期の段階で気づいたものだ。

だって、一般家庭においてサンタさんになり得るのは母親か父親なのだ。

本来ならば”子供が欲しがっているであろう玩具を予測”してクリスマスプレゼントを渡す。

他にもサンタへの手紙を書いたらどう？とか会話でさりげなく聞き出すなど、それなりに世のお父さんお母さんは子供のことを思い、考えてプレゼントを決定、枕元に置いておくものだ。

だがしかし。僕の親は人格的な意味で本来の親ではない！

娘バカ過ぎて、もはや変態の域に達している”変態”という名の父^{へん}親^{たい}。自然界であれば確実に自然淘汰されているであろうド天然の母^か親^カ。

あの2人のクリスマスプレゼントを見れば小学生でも分かる。

「あ、これってあのバカ親父とド天然の仕業だ」と。
その確信を抱いたのは小3の頃。そのころからクリスマスというものに興心が始まって、その年がクリスマスプレゼントの初だった。くしくも、初めてのクリスマスプレゼントで、サンタはいないと気づいた子供は全国広しといえど、僕だけはずだ。
だってプレゼントは”女装セット”であつたのだから。

いや、もちろん我が目を疑つたさ。

朝起きたら、大仰に装飾された箱があつて「サンタさんが来てくれたんだっ！」と無邪気に喜んだものである。

この日のために良い子となるべく、家事手伝いをして母親に「良い子ねえ、ヒビは。」とか言われたりしていた。

確実に良い子になれたと思つた僕はワクワクしながら寝たのだ。

そして次の日。

装飾された箱を開けて見ると女物の服がある。

わざわざピンクのランドセルまで入っていた。

最初こそ、サンタさんが他の子にあげるものを間違えて持ってきたのでは？と思つたが、中には一通の手紙が入っており、「女の子だったらよかったのに」と一言。

常日頃から、僕に対してこうしたことを言ってくる人間に心当たりがあつた。

・・・ぐず。

思い出したら泣けてきた。

もちろんのことそんなことを言ってくるのは父親であり、自分で言うのもなんだが比較的聡明な子供であつた僕にとって、サンタが空想の人物でしかないと理解するのはさほど難しいことではなかつた。もちろん、泣きじゃくつた。

これでもかと泣いたものだった。

てつきり冗談だと思つてた「女の子だったらいいのに」発言がわりと本気だと理解し、男としての僕は要らないと思われてることに加

え、せっかく良い子にしてたのにそれがただの無駄な努力に終わったこと。

さらにはサンタが居ない。あれだけ楽しみにしていたサンタがいな
いということに気づかされた僕はもうそれは泣いた。
近所迷惑になるほど泣いたものである。

泣きじゃくる僕に最初に気づいた姉さんが抱きしめて頭を撫でてく
れ（この時の優しさはどこへ行ったのだろうか？）、なんとか収まっ
て姉さんに事情を話すと、木刀を持ってどこかへ行った。

次に母さんが駆け込んで来て、また事情を話すと母さんは珍しく微
笑みを消してまたもやどこかに行った。

今思うと、父のところへ行ったのだらうと思うのだが真偽は定か
ではない。

僕はいじけて部屋の布団から一度も出ていかず、父がどうなったの
かは知らないし知りたくも無い。

それから、父が妙に優しくなったのは……言うまでも無い。

ド天然の方。母さんのプレゼントはなぜか木の鞘と木の柄で一見木
刀にしか見えない”真剣”である。

今思うと、どっちもどっちだが真剣というのは十万〜百万単位で買
うものであり、そう考えると息子として大切に思ってくれてはいる
のだらうと思う。この頃はまだ剣を握ったことが無く、単にカッコ
いいということで母さんの方のプレゼントはそれなりに嬉しかった
りする。

姉さんとの稽古の時にいつも使っている愛剣である。

でも、これが姉さんとの死合いのきっかけになったのだから、複雑
だ。

「……クリスマスなんて嫌いだ。」

「さっきから何を言っておるのじゃ？」

「いや、ちよつと故郷のことを思い出してね。」

とりあえず、宿を取ろう。
いよいよフカフカベッドに入れるだから。

宿に行く際に通りかかった武器屋で、バスタードソードという刀身がロングソードの倍（約2メートル）の大剣とまたもやファルシオンを買った。

ついでに簡易的な冒険者風の服も買う。

今回も軽装で、鎧板は全く無く防具らしい防具といえば足甲のみ。ちなみにバスタードソードも選んだ理由は、使ってみたからと固い敵も叩き潰せると思ったからである。
そのまま宿へ直行して次の日を迎えた。

「これからどうするのじゃ？」

フェローが起き抜けにこんなことを聞いてきた。

「とりあえず・・・武器を買って、ほぼ無一文になったからお金稼ぎかな。」

ギルドで討伐依頼の一つでも受けるついでにアースヘッドの素材と帰ってくるときに狩った魔獣の素材も売り払えば、大分まとまったお金が手に入ると思うし。」

「ギルドかのう。」

魔力体で見たことはあるが、実際に足を入れるのは初めてじゃ。

妾が普通に過ごしていた昔にはそんなもの無かったしのう。」

「ところで、ちよいちよい聞く魔力体って何？」

「ん？魔力体か？」

魔力体とは・・・あれじゃな。零体とも言われており、肉体と意識を離す高位魔術、ないしは高位奇跡じゃ。

離れていられる時間が決まっているために肉体からあまり離れられない、術中は肉体が無防備になる、話したり触れたり出来ない。

というデメリットはあるものの、見つからない触れられない、扉や壁を貫通して徘徊できるという強力な探索術の一つじゃ。」

幽体離脱を自由に出来るってことかな。

確かに便利である。

「ほれ。いくのじゃろ？」

早くいこうではないか。」

「ちよつと急かすなよ！」

僕の背に回って押し出すように急かすフェロー。

長い間あんな場所で籠っていたのだから気持ちは分からないでもないけれど。

宿屋から歩いて10分ほどたち、ギルドらしき場所に着いた。

「あのすいま・・・ってお姉さんっ!？」

僕が最初に居た街、レヴァンテのギルドにいたお姉さんが受付をしていた。

「あら？」

奇遇ね。

すっかり立派な姿になって・・・冒険者としての生活に慣れたのかしら？」

「す、少しは・・・お姉さんはなぜ？」

「ここについてこと？」

たまたま受付係が少ないってことで、ここに転勤したのよ。

つい先日ね。」

「へえ、まあいいや。

素材を売りたいのですけど・・・」

「あら？そう。

じゃあそっちの素材部屋に来て頂戴。」

「はい。」

僕達がお姉さんについていくとフェローが苦虫を噛み潰したような顔で瞑目していた。

「どうしたの？フェロー。」

「いや……どこかで感じたことのある魔力じゃと思うてな。

それも……いや、ありえるはずあるまいて。
妾ですら1000年が限界なのじゃから。」

何の話をしてるのか分からないが、勝手に納得して勝手に自己完結したようだ。

「さ、そこに素材を置いてくれる？」

「は、はい。」

えと……これとこれと……」

出したのはアースヘッドの犬歯にあたる大きな牙が数点と小さな牙が数十点。鱗が50枚ほど、肉片が数キロ。皮が5平方メートル分。太ももほどもある大きな爪が10個。へし折った角が一本。

これがバックパックに少しの余裕を持たせた限界量であった。

なんかの魔術で要領が見た目の数百倍に引きあがってるバックパックは凄い。

お姉さんもこれを見ていささか驚いたらしく。

「……あなたは魔術を使えたり、奇跡を使えたかしら？」

やけに強張った表情でこんな質問をしてきた。

「いえ、特には……」

「私と初めて会ったときには無かった、その腕の紋様が関係してるのかしら？」

質問の意図が読めない。

まるで、誰かに聞かれると困る単語を言えないがために、回りくどくそれと気づかれないうち自分の欲する答えを求めているようだ。

「いえ・・・けいや・・・じゃなくて、紋様が出る前に戦ってたし。」

フェローとの契約のことはなんとなく伏せておくことにした。
フェローはフェローでかなりの眼力でお姉さんを睨み付けている。

「ふふふ。まあいいわ。換金するからちよつと待っていて。

あ、それとそっちのお嬢さんは残ってくれないかしら？」

「え、えと・・・」

「かまわん。

ちと席を外すのじゃ、響。」

「べ、別にいいけど・・・」

フェローの顔は陰悪なままで、もしかしたらお姉さんのスタイルの良さに嫉妬して居るのかもしれない。

フェローは幼児体系だし。

「嫉妬は醜いよフェロー。」

「声に出とるわ。たわけがっ!!」

マジですかっ!?

「ひでぶっ!？」

ピンタを受ける僕。

思いつきり良いのが入ったせい気絶した。

「さて？

主の魔力に覚えがあるのじゃが？

主は誰じゃ？

いや、違うな。

主は”奴”本人か？」

フェローは言った。

「ふふふ。

やっぱりばれちゃうか。

ご明察のとおり、私は・・・いや、君が相手ならこう言う方がいいかな。

”僕”はティリア。

北大陸にある鬼神の都”風雷の郷”を統べる魔王。

それだよ。よく覚えてくれていたものだ。」

「はっ！

気色悪いのう。

女の肉体になんぞなりおって気持ち悪い。」

最上級の嫌悪感を悪びれもせずに表情に出すフェロー。

それをみて肩を竦め、苦笑するティリア。

「気色悪いのか気持ち悪いのかどっちかにしてほしいな。

それと、僕の・・・いや、私の本来の性別は女なのよ。

フィジカル的にもメンタル的にもね。」

「ふいじかる？めんたる？」

「肉体的にも精神的にもってことよ。」

「なるほどのう。

じゃから、ティリアなどという女子のような名前じゃったわけか。

そしてよくもまあ、一億年以上も騙しておったな。

妾のみならず、主の民草も。」

「ふふふ。

そうなるわね。でも、もともとは女のままだったのよ？

でも、多種族が北大陸の王族を魔王とか呼ぶようになってからは性別を変えたの。

あのごつつい汗臭そうな姿にね。

最初は発狂しそうなほどに嫌だったわ。」

その時の心情は今でも思い出せるのか、ティリアは顔をしかめてハッキリとした不機嫌さを表した。

「別に女の間でも構わぬだろうに。」

「それだと魔女王になってしまうじゃない？」

語呂が悪いつてだけで、審議にかけられて・・・」

「な、なんというか・・・のんきな国民性じゃのう。」

「そこが私の都の良いところよ。」

「まあそこまでもとなれば長所と言って構わぬじゃろうな。短所にもなるかもしれんが。」

などという他愛の無い雑談は終わりだと言っばかりにフェローは表情を引き締めた。

「それで？」

わざわざ、壁を越えてまでこっちに来た理由はなんじゃ？」

「ただ遊びに来ただけよ。」

「嘘をつけ。」

いや、違うな。

すべて喋れ。」

こやつは昔から嘘は付かない。

本当のことしか喋らないが、一部のみを喋るだけであつたな、と思つてフェローは言い方を変えた。

「い・や・よ。」

満面の笑顔でフェローの命令を拒否するティリア。

「・・・じゃろうな。」

「心配しなくてもそのうち嫌でも分かると思うわ。

私個人としては、迷惑をかけるつもりもないし。

引き止めたのは、それを言いたかつただけなの。下手に敵対視されるのも嫌だもの。

だから、また今度縁があつたらお茶でもしましょうか？」

「とか言つて、行く先々を先回りするつもりじゃろ？」

「ふふふ。そうなるかしらね。

彼・・・面白いし。

異世界に呼ばれて、ちよつとおまけ程度の肉体強化とこのそのへのありきたり装備のみで上位竜種を殺すなんて・・・普通は出来ないわよ?」

「当然じゃ。」

妾が認めた契約者なのじゃからな。」

「そうそう。それも驚き。」

紋様を見て我が目を疑っちゃったわ。

あなたの魔力と霊力が彼の体をめぐっているのを見たときも夢かと思つたもの。

あなた人間嫌いだったでしょう?」

「・・・時は人を変えるのじゃ。」

特に寂しさというのは・・・」

「ああ・・・言わなくても分かつたわ。」

すつごく優しい目をフェローに向けるティリア。

フェローはフェローで何も言うなと言外に表情で示している。

「そろそろ起こしましょうかね。というか、いつもあんな強力なピントを打ち込んでるの?それも魔力を込めながら・・・いくらなんでも可哀想よ。」

「ふん。」

バ力なことを言うからじゃ。」

「まあ・・・そのスタイルじゃあねえ・・・」

「殺されたいのかのう?」

「ふふふ。大丈夫よ。幼児体系もその道の人なら需要があるんじゃないかしら?」

「だまれ!」

バチンとティリアの頬を張るフェロー。

「はひあつ!」

痛いじゃないつ!?

てか一応、一国の女王よ?私!!」

「ふん。妾はこれから成長するのじゃ。」

少なくとも母様の”すたいる”は凄かったのじゃからな。」

「そういうことを言ってる人に限って・・・なんでもないわ。」

フェローの右手に魔力の集中が見られたためにすぐに話をそらした
ティリア。

それを見て、フェローはとりあえずと言った体で響^{てい}の方へ向かう。

「ほれ起きんか。」

いつまで寝ておる。」

「ちよつとそれは酷いと思うわ。」

「んあ・・・ふえろお？」

てか・・・どうしてこんなところで寝てたんだっけ？」

僕は一体何をしていたんだっけか？

ギルド内で寝てしまうほど、疲れてるとは・・・
困ったものである。

今日はやっぱり宿でゆつくりしようかな。と思いつつ。

「はい。これは換金された素材分のお金よ。」

「あ、どうもです。」

いくらになったんですか？」

「ざつと、25万ガルドかしら？金貨が249枚と銀貨が8枚入っ
てるから結構の間、楽しんで暮らせるわよ。

重いから気をつけてね。」

「あ、ありがとうございます。」

金貨の入った袋はかなり重い。

バックパックに入れるのも一苦勞である。

「それとギルドカードも更新しておいたわ。

ギルドポーンからナイトにクラスアップね。

実力で言えばキングの一步手前つてところなんだけど・・・上位竜
種を殺して高ランクの素材を売ってたととしても、ポイント制だから

そうも行かないの。

ミッシヨンはどんなに低ランクの物でも100以上あるのに対して、素材はどんなに高ランクのものでも一つに付き、50ポイントが限界だから・・・

ごめんなさいね。」

「それは別にいいです。」

お金は十分に集まった。

宿に戻るのも良いが、ここは馬車を買うべきだろう。かつこいい馬車がいいな。

「馬車を売ってる場所って知ってますか？」

「それならこの建物の裏にあるわ。」

すぐわかると思うから案内はいらないわよね？」

「はい、ありがとうございます。」

「馬車が・・・ふむ。」

楽しみじやのう。

一体どんな乗り心地なのか・・・」

「あ、それと私はテイリアって言うの。よろしくね？」

「あ、はい。」

「こやつに油断はせん方が良いぞ、響。」

「なんでそんなこと言うんだ？」

失礼だろ？」

「響君が私とばかり喋ってることにヤキモチを焼いちゃっただけよ。」

私は気にしてないから、大丈夫よ。」

「も、餅など焼くかつー！」

顔を真っ赤にして否定するフェロー。

そうか、そうか。

やきもちか。

漫画だけの話だと思っていたが、そんな感情が現実存在してたとは思わなかったよ。

なんせ、友達といえど前述した冬香くらいなもので。とはいえ、やきもちってどういう意味だったわけ？

しばらく漫画を見てなかったから、忘れたけど。

「今日の用事はこれで終わりかしら？」

「あ、いえ、ついでに何か依頼でも受けようかと思ひまして・・・」
「あら・・・そうなの？」

「・・・そうねえ・・・これなんてどうかしら？」

少し考えた後にティリアさんは一つのミッション板を取った。

「レッドゴブリンの討伐？」

「そうよ。」

体長は5メートル強。

腕力、知力、丈夫さ共にかなりの物で武器や防具も使う、厄介な魔獣よ。

ゴブリン科では上級の魔獣に位置するわ。

討伐任務だと素材が証明代わりになるからちゃんと切り取ってくるように。

彼らの爪か牙が売れる素材よ。

本来ならビショッププラスの冒険者チエスに頼むのだけど・・・アースヘッドを倒した響君なら簡単だと思うわ。

がんばってね。」

「は、はい。」

「レッドゴブリンとは懐かしいのう。」

一度、奴らの集まる集落に迷い込んだことがあったのじゃが・・・あの時は範囲魔術ですべて塵にしたものじゃ。

特に強くないから安心して挑むと良い。」

「・・・フェローって今更だけど凄いよね。うん。

というかさすがに可哀想なんだけど・・・」

「わかつとるよ。」

しかし、襲い掛かってきたのじゃからしかたあるまい？」

「まあ・・・それはしかたないか。」

それで、話を終えてギルドの裏手にある馬車屋へと向かう僕達である。

第18節 勇者フラグ（後書き）

長くはなっただけ、それ程でもないと言う。

響の家族の話が書いてたら予想以上に長くなってしまっで、話しが予想より進まない。

なんてことは良くあるよね（笑）

第19節 勇者フラグ？

「ごめんくださーい。」

「はいはいはいよ？」

馬車をお求めで？」

それとも馬ですか？」

はたまた修理ですかい？」

さつそく2人で馬車屋にいき、店の中に入るとすぐさま人の良さそうな店主が駆け寄ってきた。

中には馬車の見本品らしき物がところせましと置かれている。

「馬車をつくりたいのと馬・・・？を買いたいのですが・・・」

「はいはい。了解です。」

小型、中型、大型とどれにします？」

「メリットメリットを教えて欲しいです。」

「お客さん、馬車のお求めは初めてで？」

「はい。」

「わかりました。」

このイケテルお兄さん。略してイケサンが、懇切丁寧に教えてあげましょう。」

「よ、よろしく願いします。」

人当たりが良さそうだと思っていたが、予想以上に人が良いみたいだ。

身もふたも無い言い方をすれば馴れ馴れしい。

「まず小型ですが、小型は引く馬の数や種類にそれほどこだわる必要がなく、小回りが効きます。」

また、他に比べてかなり安く済むこともメリットの一つです。ですが、長旅を常とする冒険者には好まれません。

なんせ寝るスペースが少ない上に、いささか脆いところがありますからね。

魔獣に襲われたり、ちょっとした不意打ちで壊れてしまう可能性が高いんです。

もちろんウチの馬車はそのへんの小型馬車よりもはるかに頑丈ですが、それもやはり物理的・・・といえますか？

構造的な限界がありますから、そこはご勘弁と言ったところです。」

「ふむふむ。」

「少し考えれば分かると思うのじゃが。」

「フェローは黙ってて。」

「で、次に大型ですが大型は頑丈さ。」

この一点に重点を置いて作られたもんですから、それこそ上位竜種の体当たりを食らっても1度2度くらいなら簡単に耐えられる構造になってます。

また、重量が重量ですので他に比べて安定した乗り心地を持つというのも特徴の一つです。

ウチではさらに、そこから乗り心地を優先したもの、頑丈さを優先したもの、出来るだけ軽量化したものと三つに特化させたものもオーダーメイドで承りますのでその辺はご随意に。

また、複数人の旅には最適です。

寝るスペースも十分ですので、寝ることを考えると6人が定員となりますが少し無理をすれば8人くらいまで行けます。

大体が冒険者の皆さんに好まれてますね。

ただ、その分お値段が張るのと馬を複数飼う必要があること、ないしは馬よりも優れた引き手を使わなくちゃならないってのもあって、よりお金がかかります。

小回りが効かず、そのためもあってスピードが出にくいというのも欠点です。」

「ふむふむ。」

「・・・」

フェローは黙って聞いていた。

「で、最後に中型ですが、それはそのまま。どっちつかずのオールマイティーな大きさです。これは商人さんに多いタイプですね。

特徴も値段も二つの中間といった感じですから、せいぜいお金に余裕があるなら中型をお勧めするくらいです。」

ここは大型かな。

フェローが居るし、乗り心地の良い乗り物しか乗ったことの無い、生粋の日本人としては乗り心地を優先したい。

「乗り心地優先の大型馬車をお願いできますか？」

「はい。」

大体、金貨で100枚ほど頂きますが大丈夫ですか？

馬車が80枚で特化費用が20枚です。」

「大丈夫です。」

「それでは、次は引き手を選びましょう。

ここから東にずっと行った東門付近に牧場がありますのでそちらで引き手をお選びください。

馬車が仕上がるのは明日の昼頃。

そのときに選びになった引き手を連れて、ここにいらしてください。

「

は、はい。了解です。」

というわけで東に向かって歩いていくと、牧場が見えた。

小ぶりな馬から大振りな馬、ダチョウを二倍にした大きさの鳥や、大型犬みたいなものもいた。

「いらつしゃい。」

どいつにするんだい？」

「なんかかつこいいのがいいです!！」

「そ、それはどうかと思うのじゃが・・・」

目をきらきらさせて牧場主を見ているとフェローが呆れた目を向けてきた。

あくまでも、かつこいいのが一番だと思うのだ!!

僕はね。

「お前さんたちの馬車の大きさは？」

「大型です。」

「そうか・・・かつこいいの基準は人によって違うからな。適当に見て回るといい。」

ああ、ちなみに引き手に選ぶ魔獣や馬は、お前さんの大きさの最低三倍は欲しいな。

それで数はせめて2頭。

お勧めは4頭だな。

スピードを出したいなら6頭はいる。」

「・・・そんなにですか・・・」

よくよく考えれば、馬車をもてばソレを引く動物の世話も必要になるわけだ。

ミドリガメを育ててきた僕にとっては苦にはならない。

そして、これもまた良い経験である。

「何かかつこいいのいないかな？」

と呟きながら奥のほうへ行くと、竜種専用の小屋がいくつも並びたてられていた。

そのどれもが、やけに厳重な檻に入れられている。

「ほう・・・これは珍しいのう。」

こやつは白竜か。」

「白竜？」

一匹だけ、真っ白の体に赤い瞳を持つ馬のようなシルエットの竜がいた。

それを見初めたフェロー。

（モ。ンスターハンターのラン。スをイメージしてもらうつといい。）
フェローは見定めるようにじっと見る。

「極稀にこうした白い竜が種類を問わず生まれることがあったの。
同じ種類の個体でも、普通の体色の個体よりも能力が数段高いこと
が多いのじゃ。」

それこそ下位の竜種が上位並みの力を持つこともある。

そういう、全体的に能力の高まった色彩変異種のことを総じて白竜
と――そう言うのじゃ。

突然変異で生まれてくるものでな。

かなり稀少とされているのじゃが……」

「へえ。」

「グルッ……」

なにげなく手を出したら思いっきり噛み千切ろうとしてきた白竜。

「うわっ!？」

「このとおり、滅多に懐かぬ。

賢いからこそ自身より力のある者にしか従おうとせんから、扱いが
難しいのじゃ。」

今の時代では分からぬが、その希少性からして鑑賞的な価値しか成
さぬことが多かったな。

妾の知り合いにレッドワイバーンの白竜を騎竜として扱っていた凄
腕の騎手がいたのじゃが、そやつも認めさせるには数日かかったと
言っておったのう。」

「おう。そいつが気に入ったのか？」

けどそいつは無理だ。

そいつ……ブリッツドラゴンは馬力があつて、雑食、おとなしい
という騎馬としては都合の良い下位竜種なだけど……白竜つて
もんがここまで気難しいとは思ってもみなくてな。

仕入れたは良いが、騎馬としてはとても使いもんにならなくて数日

後にはその辺に捨てる予定さ。」

「捨てるって・・・下位竜種だし大丈夫だとは思いますが・・・勝手に捕まえてきて、勝手にその辺にポイってのはちょっと酷い気が・・・」

「ははは。」

痛いところ付いてきやがるな。

でも、こっちもそれが商売でな。

売り手が見つからない以上、捨てるのは当たり前さ。

俺だって、それが正しいとは思っちゃいねえ。

金があつたらこいつを故郷に返してやりてえ。とは思ってもな・・・

手間賃がかかるのさ。そこその大金がな。

お前さんたちが買ってくれるとありがたいんだが・・・どうせ捨てるんだ。

ただでも良いぜ。」

「グルグル・・・」

余計なお世話だとばかりに唸るだけのブリッドドラゴンの白竜。

もう人間なんて糞くらえだとも言いたそうだ。

僕だってこいつの立場だったらそう言いたくもなる。

うむ。こうしうか。

自分より格上だと分かせれば良いのだ。

「おじさん。」

この檻を開けてくれますか？」

「はあっ!？」

何考えてやがんだ!？」

「まあまあ。とにかく。」

「正気か？」

「ちよつと試したいことがあるだけですよ。」

「・・・何があつても責任はとらねえぞ?」

「ええ、別に構いませんよ。
それとフェローに聞いておきたいんだけど、僕の治癒力って今どれくらいなの？」

その僕の答えである程度分かったのか、少し目を見開いてフェローは答えた。

「……ふふふ。主も無茶するのう。

大丈夫じゃろう。多分な。」

「そう。ならいいや。」

僕の考えを読み取ったかのように、すぐさま欲しい答えをくれるフェロー。

さすが僕の契約相手。

つつても、付き合い浅いけど。

檻の鍵を開けてもらい、中に入る僕。

「グルグル……」

何を考えているのだ、この人間は？という感じの白竜。

今の会話の流れも理解してるのか、警戒を見せている。

僕が何かををすると思ってるらしい。

勘違いして貰っては困るな。僕は何もしないさ。何もね。

「ほらほら？

びびったのかい？

とつとつかかってきていいよ。」

「グルアツ!!」

挑発に乗ったわけではないだろうが、じりじりと近づいていく僕に痺れを切らしたのか噛み付いてくる白竜。

そこに左腕を差し出して、わざと噛ませた。

「うおいつ!？」

何考えてんだつ!？

お前さんは!？」

「黙ってみておれ。」

慌てふためく牧場主のおっさんに苛立つような眼差しで黙れと言うフェロー。

一見落ち着いてるように見えるが微妙に瞳が揺れていた。

「グルグルグルッ!!」

噛み千切ろうと顎に力を込める白竜。

正直、かなり痛いです。めちゃくちゃ痛いです。

泣きたいほど痛い。

でも、ここで泣いたら台無しなので、そんなことは微塵も感じさせない、ベストオブヤセ我慢を見せる。

さらに言えば僕の体にはフェローの力と女神の指輪で防御力、治癒力共にかなりのものとなっている。

万力に締められるように痛いだけで、特に問題はない。

いや、その痛みが問題なんだけども。

「その程度なの？」

「グギョルルルッ!!」

さらに力を込めてくる白竜。

ちよつと、これ大丈夫かな？

自分でやつという難だけど、腕がひしゃげてきてるんですけど・・・取れない？

噛み千切られない？

引きちぎられない？

バキバキ噛み砕かれてる音してますよ？

熱感しかなくて、痛みを通り越してるのがより怖さに拍車をかけてるんだけど!!？

女神の指輪の効果はどこへいったの!？

フェローの力はちゃんとめぐってるっ!？

フェローに視線を向けて”これって本当に大丈夫？”と確かめたい

んだけど、ここでこの白竜の目から視線を外してはやせ我慢の無駄づかいである。

そんなことを考えてる間にも、腕がブチブチいつてますよっ!？
本当に千切れませんかっ!？

僕の腕よっ!!

もつとがんばつてっ!!

さすがに千切れたら治らないと思うからっ!!

この間も僕は冷や汗をダクダクと流している。

それが気づかれないうちに、注意をそらすため僕は声をかける。

「つまらないな。」

「グルッ!!」

その言葉の意味を理解したのかより力を込めて、さらには引っ張ってくる。

引きちぎるつもりなのだろう。

やばいやばいやばいっ!!

それはちよつとまずいですよっ!？

僕の作戦的にここは微動だにするわけにはいかない。

しかし、相手が引っ張る方向に僕もそろっていかないと確実に僕の左腕は白竜のお腹の中へと収まってしまう。

これはまずいっ!!

とか思ってる矢先。

「グルアッ!？」

唐突に噛み付くのをやめた白竜。

何かにびびってるように見える。

それと同時に僕の背後に強烈な殺気と、魔力、霊力の奔流が渦巻いていた。

感じるという点において、鈍い僕にも分かるほどの濃密な気流。

身構えつつ振り返ると、フェローがいた。

魔眼である目で見てその奔流がかなり濃密で凄まじいことが改めてはつきりと分かった。

真隣にいるおっさんは立っただま気絶している。

「このトカゲ風情がつー！」

私の契約者の腕を食らおうとは・・・消し炭にしてくれるっー！」

ちよつとおっー！！

消し炭にしたら僕の頑張りが無駄になるっー！！とかじゃなくて、食らうっー！？

やっぱり千切られる寸前だったのか！？

そして、噛み千切られたら戻らなかつたりしたのかなあっー！？

危うく腕が無くなるところである。

すぐ、檻を出て背後からフェローを羽交い絞めにする僕。

「ちょ、ちよつとまてまてっー！？

消し炭になんかしちゃだめだってっー！！」

「ど、どうして庇うのっ！？

こんなトカゲ居なくても他の子で十分でしょっ！？」

そりゃ庇うでしょっ！？

この白竜にケンカを売ったのは僕の方からだし、得たいの知れない人間が近づいたらあれくらいい攻撃誰だってするわっー！！

それ以前に標準語っ！？

「いつものおばあちゃん言葉はどうしたのさっー！？」

「あうっー！？」

べ、べつにいいでしょ・・・じゃなくていいじゃろっー！？」

余談だが、この言葉使いはそういうしきたりとか文化とのもので、彼女の血筋の人間は男女共にあの言葉遣いにしなくてはならなかったとのこと。

もともとは標準語で喋っていたとのこと。

言われて見れば普通に過ごしてて、あんな言葉遣いになる要素はない。

少なくとも僕が見てきた、おじいさんおばあさんは1人もあんな”じゃ”とか”のう”とか言うのは見たことが無かった。

「まあまあとにかくっ!!」

ほら、見てよっ!?

すっごいおびえてるからっ!!」

白竜はかわいそうなくらいにうるたえており、檻を蹴ったり体当たりして今すぐにも逃げ出したいようである。

僕はこんな状況でも律儀に檻の鍵を閉めてきたので、出ること適わずただ檻の隅っこで身を丸めて震えている。

あの目は、僕の右腕の黒い刀を見たアースヘッドと同じ目である。

「もう十分でしょ!?

それにほら、左腕もいつの間にか元通りに……ってなんで元通りになってるのっ!?!」

いくらなんでも治るのが早過ぎない?

コレでは姉さんとは違うベクトルで化け物ではないか。

これから僕はどんな化け物になっていくのかな?と自分の体に多少の悲嘆を嘆いてから、フェローを宥め続けること、5分。

ようやく落ち着いたフェローは「すまぬ」と言っつて、黙りこくった。

結局、白竜は僕達が貰うことになりこの一匹を無料で頂いて、引き手の選別は終わった。

他の子を選ばなかったのはこの子一匹で大丈夫だからとのこと。フェローいわく、総合的に中位竜種並の身体能力があるらしい。肉体的な能力だけなら上位竜種並みだとか。

「でなければ今の響の腕を噛み千切るなんて芸当は不可能じゃ。」

というのはフェローの談。

僕の体はいつの間にか上位竜種の顎の力に、ある程度抵抗出来る頑丈さが備わっていることになっていた。

確か日本において動物の顎の力って人間とは比べ物にならないほど強くて、大型肉食獣が”トン”クラスの力だったはずだ。

竜なんてものがそれより劣るなんてことはまずないから、かるく10トンとかそこらだろうか？

人間から離れすぎたな。

そう嘆いていたらフェローが一言。

「そう嘆くこともあるまい。

響が本能的に”命の危険がある”と判断した、刺激に対してしか”女神の指輪の加護”も”妾の力”も防御効果を発揮せんからのう。でなければ、妾のただのビンタなど何の効果も出ぬよ。」

それを聞いて少し安心した。

本当に安心しました。

こうして結局のところ。

僕の作戦”何だと！？この俺のビーム的な必殺技を食らっても倒れない上に、無傷だとっ！？くそっ！！俺達と奴とでここまで戦闘能力に開きがあるのか！？こうなったら奴に従うしかない大作戦”が無意味に終わった。

もう少し簡単に言うなら、白竜に「この俺の攻撃を食らって涼しい顔をするとは大したやつだぜっ！！」ないしは「おいおい！俺のこの一撃を食らって倒れないだとっ！？くそっ！！しゃあねえ。認めてやるよ。」みたいな意識を植え付けるための作戦だったのだが、予想以上の白竜のパワーに負けてしまった形になった。

初めから、フェローのように力づくで言うことを聞かせることも出来ただけ、そこはやっぱり平和的に行きたいものであるからして。

「今日のところは……このままレッドゴブリンの討伐に行って帰って、寝る。」

「コレだけだね。」

「そうじゃな。」

バスタードソードの試用もしたいしね。

どんなもののなか少し楽しみである。

……姉さんの思考に近づいていってるのは気のせいだろう。

第19節 勇者フラグ？（後書き）

勇者フラグは？までの予定。

余談ですが、僕は小学生の頃の友達にリアルなおじいちゃん言葉の奴がいました。

一人称は『ワシ』。

彼の現在の言葉使いがどうなってるか？

気になります（笑）

ちなみにキャラ作りではなかったと思います。

小学3年くらいでしたし、かなり堂に入っていましたからね。

第20節 勇者フラグ？（前書き）

へヴィな話になります。

第20節 勇者フラグ？

レッドゴブリン討伐のため。

僕達はルベルークより西にいった背の高い雑草と針葉樹林らしき木々が生い茂る、小さな森にいた。

この辺を拠点に20匹程度が集まっているらしい。

西の方から来る商人や武装してない旅人を襲っているということで、依頼がでたのだ。

森に引っ込んでいれば殺されることにはならなかっただろうに。というのは人間視点からの勝手な理屈だな。

レッドゴブリンだって生息域の拡大の一つや二つしたいだろう。

だからといって手加減してやるつもりはないけれども。

「説得できたらなあ・・・」

「時と場所を選ばねば”優しさ”は枷じゃ。」

甘いことを行っていると痛い目を見るぞ？」

「わかってるよ。」

同じ人間とはいえ、魔獣よりも盗賊の方が殺しやすかったなと最近を感じる。

そこには純粋な悪意しか無いからだろう。

しかし、魔獣たちには悪意は無い。

生きるために捕食をするだけ。

そこには純粋な敵意、本能とも言うべき絶対欲しかない。

まあ弱肉強食と言うし、ここは致し方あるまい。

「魔獣の気配があるのう。」

「ん。ついたのかな？」

前方を見ると、5匹ほどのレッドゴブリンたちがいた。

その姿は5メートルを超える巨漢で、人型。下半身より上半身の質量がかなりでかい。

良く、あんな体系で戦えるものだ。普通逆だと思う。

肌がレッドの名にふさわしく、真っ赤に染まっ^ていて顔は般若面のように普通に怖い。

周りには食べ散らかしたと思われる人間の残骸、魔獣の残骸がある。本拠点はもう少し先なのだろう。

聞いていた数よりずっと少ない。

さしずめ、第一防衛ラインといったところかな。

「ふうむ。」

20匹まとめて妾の魔術で塵芥に化してやろうと思ったのじゃが・

ここで、派手なのを使うと警戒されてしまふかもしれんから、使えんの。

というわけで、妾は手伝えん。」

「そういえば、フェローの魔術とか奇跡ってどんなのがあるの?」

「だいたいが広域殲滅術じゃ。」

妾の魔力、霊力量は常軌を逸しているの。

そのため、初級術は大抵が暴発する。

結果的に妾の使う魔術や奇跡はどれを使っても大魔術、大奇跡と化してしまうのじゃ。

加減が難しいのじゃ。いめーじで言うところ……一ミリにも満たない細かい粒子の砂から”すぽーん”で10粒ほど取るというものじゃろう。

この調節が難しくてのう……ちなみに、響はそういった初級でも暴発はしないから、徐々に魔術を教えていく予定じゃ。」

「フェローの力がめぐつてる僕も一緒だと思うんだけど?」

「今、主に流^{ヌシ}れてる力は妾の力の一割程度じゃから問題あるまい。」

「こ、この量で一割!?!」

「常軌を逸しておると言っただじやろう?」

全てを送り込んだら・・・どうなるか妾にも想像がつかぬわ。」

「恐ろしいなフェローの力。」

「たわけが。」

「あくあまりんっ!？」

またまたビンタされた。

徐々にこの痛みに慣れつつある自分が嫌だったりする。

毎回、変な奇声がでちゃうし。

「そこは頼もしいと言っべきじゃな。」

につこりと笑って無い胸を張るフェロー。

まあ確かに頼もしくはあるよ。

「さて、んじゃ、僕が蹴散らすとしようかな。」

一応、説得もしたいんだけど・・・言葉なんて通じないよね?。」

「じゃろうな。」

そんなことが出来るのは北大陸の変態どもだけじゃろう。」

「ん?」

「気にするでない。」

「そう。」

北大陸には魔獣の言葉が分かる人間がいるのか。

ちよっと思ってみたい気がする。

「縮地。」

十八番芸の縮地。

前にも説明したと思うけど、この技は一瞬でトップスピードに至る技である。

人間が走る際に、最高速度に至るには数十メートルの助走が必要とされている。

その数十メートルを綺麗さっぱり無くするのがこの技である。

「グアッ!？」

最初に気づいた一匹が持っていた錆びてる幅広の大剣、ブロードソードを構えようとするが遅い。

バスタードソードを片手で持ち、筋力と遠心力を使って右回転気味に薙ぐ。

ザンツ!!

と音を発てて倒れ伏す下半身。

遅れて上半身が少し離れた場所に落ちる。

それを見て、他のレッドゴブリンたちがいつせいに咆哮を上げたが、それはバッドフラグだ。

そんな暇があるなら武器を構えるべきなのに。

「せいやつ!!」

今度は並んだ二頭を狙うため、両手持ちにして右回転した勢いそのままに一步二歩と間合いを詰める。

そして、もう一度右回転。

もちろん全力では振らずにある程度余力を残して、カウンターや他の個体からの攻撃に備える。

二匹は何も出来ずに下半身と上半身が裂かれて絶命する。

ほとんど手ごたえを感じないのはレッドゴブリンが柔らかいのか、バスタードソードの質か、はたまた僕の筋力がそれほどまでに強化されているのか？

そのどれもであろう手ごたえに若干の物足りなさを感じつつ他二体に向き合う。

カウンターも隙を狙うこともしない二匹はただ仲間がやられたという事実を見ている。

弱いもの虐めみたいでこれ以上はやりたくないが、これも仕事。

2匹に走り寄ると二匹は武器を構えた。

この森からどこか遠くへ逃げてくれれば追わなかったのに。

依頼背景的にも、ミSSION達成条件的にも、逃がすのはご法度な

のだけどね。

「グガアアアッ!!」

「ギアアアアッ!!」

二匹がそろって刃こぼれしまくったアックスと、やたら大きいメイスを振りましてくるがそれを避けてアックスの方の懐にもぐりこむ。そして大剣でも使えそうな、姉さんから教わった技の一つを使う。

「桜花追連っ!!」

名前はまあ気にしないで欲しい。

バスタードソードの柄で当身を食らわせて、すぐに一步身を引く。そして渾身の突きを繰り出すという突き技である。

姉さんの場合、刀身の周りにかまいたちが発生する化け物技の一つである。

受けると傷口付近がずたずたになるうえ、腕とかに食らうと腕が千切れ飛ぶというグロ技でもあったりする。

首付近を狙って打ち込む。

「ゴガハアッ!!」

姉さんは9割が技術だが、僕の場合は筋力3割、技術7割というせいかカマイタチによる斬撃ではなく、衝撃波が発生する。

レッドゴブリンの首が破裂して、頭と胴体が永久の別れを告げた。残った一匹も振り返りざまに逆袈裟斬りにして、殺す。

「・・・ふう。」

こんなものかな。」

「見事なものじゃ。」

剣技で言えば世界一かも知れんの。」

「・・・世界一は姉さんさ。」

フェローの賛辞に、自嘲気味に答える僕。

姉さんに比べたら僕なんてただの凡人なんだよ。うん。

素材の爪と牙を剥ぎ取り、バックパックに入れる。

爪と牙は少量の貴金属が混ざってるらしく溶かして抽出するのだとか。

金属アレルギーにはならないのかなとちょっと心配しつつ、奥へと進む。

すると、人の声らしきものが聞こえてきた。

「誰か居るみたいだね？」

襲われて、食べられる寸前だとか？」

「……いや。」

おそらく……っと待つんじゃない？」

食べられた後ならともかく、ちょっと急ぐだけで助けられそうなら助けるべきだ。

見捨てたとなるといくら人助けを趣味としない僕でも少々、目覚めが悪い。

まあ、ついでだしと思って雑草を掻き分けていくと、凄まじい密度の魔力を視認した。

つい息を潜めて隠れる。

本能が正面からはまずいと警戒信号を灯していた。

魔力の原因は1人の男のようである。

黒髪黒目で、この世界では始めて出くわした。

その男の対面にいるのは女の子。

周りにはレッドゴブリンの死体である。

女の子には見覚えがあった。

「エンデではないか。こんなところとは奇遇じゃの？」

いや……あやつの仕組んだことか？」

いつの間にか追いついて、僕の背後でふよふよと飛んでるフェロー。

フェローも気配を消しているようで向こうには気づかれていない。

「ってことは、あの男が勇者の1人か？」

勇者と崇められることだけあるね。

魔力の流れが濃すぎてあいつの姿がぼやけて見える。」

「ふふふ。」

それはあの男の力量不足を示しておる。

あれは自身の魔力の膨大さを持て余してる証拠じゃ。

大方、制御しきれずに漏れ出しているのじゃろ。居場所が丸わかりじゃから・・・

魔術師としては三流も良いところじゃ。

それよりもあの剣が・・・やばいの。」

男の腰にさがっている剣は特に魔力の流れなどは見えないが、良く目を凝らして”見る”と強く念じるとぼんやりと魔力と霊力が渦巻いていた。

鞘で押さえられているようだ。

「気づいたかのう？」

あれは霊宝剣、セルシウスキャリバーじゃ。

妾と同じ高位精霊が打った魔法剣じゃな。

その中でも鍛冶において天才の名を欲しいままにしておった氷人のセルシーが打った最高傑作にして最後の剣。こおりひと

自身の霊力と魔力をすべて込め、魔力霊力の源とも言える魂を打ち込んだため、意思を持ち、使用者を選ぶ意思剣・・・のはずなのじやがのう。

エンデから聞いたとおりならば、あのような男に従うような女ではないはずじゃが・・・」

「聞いてると・・・かなり厄介そうな剣だね。」

「うむ。」

持つてただけでも魔術と奇跡が扱えるようになる上に、精霊契約も

可能とするからの。

そもそもあの剣自体がセルシーと言っても良い。

おそらく、意思を封じる魔術を何重にも施しておるのじゃろって。

それでは一割の力も発揮できないというのに、人間とは愚かな種族じゃのう。」

「耳が痛いね。」

「何を言うか？」

響はとつくに妾の相棒じゃ！

人間でも特別じゃ！！」

「・・・あ、ありがとう。」

「うむ。」

恥ずかしいことを真顔で言われた。

僕だけ恥ずかしがってるのがなおのこと恥ずかしい。

と思ったけど、フェローの頬は軽く朱に染まっていた。

ここは華麗に指摘してあげよう。

「顔赤いけど？」

お酒でもものんだの？」

「・・・や、やっぱり人間は嫌いじゃ。」

すこし膨れるフェローを見て、笑う僕。

とりあえず、あの勇者の話に耳を傾けた。

「私・・・話があるのー！！」

「こんな人気の無いところにわざわざ呼び出して何のようだ？あん？

俺にレッドゴブリンなんてチンケな虫けらを殺させてまで話す事なのか？」

「それは・・・ごめんなさい。

それは知らなかっただけなの・・・ご、ごめんなさい。」

このバカはいやらしい目で騷るように私を視姦する。

このバカの方がよっぽど私に謝ることがあるだろうに。

本当にこいつは嫌い。その点ではあのちよつと意地悪だけど、たまにヤケに優しい彼の方がよっぽど好きだった。

顔も可愛かったし。もう少し男らしい方が私の好みなんだけど。とかなんとか考えてる場合じゃない。

私は自分の体を守るように抱きしめながら口を開いた。

「これを見て。」

「うん？」

「アースヘッドの牙よ。」

私はアースヘッドの牙を彼に見せる。

渡しても良いんだけど、渡す際に手が触れるかもしれないからそんなことはしない。

そもそも、この男には初めて会った時から一度も触れていない。

触れて欲しくもないし、触れたくも無い。

こいつに買われた娼婦には悪いけど、そんなことをするなら私は自害した方がましだ。

ただ触れるだけで死にたくなるほどに――それくらいに私はこのバカが嫌い。

「ああん？」

で？」

「で、じゃないっ！！

約束したでしょっ！？」

私がアースヘッドの牙を取ってきたらあんたは土下座でもなんでもするって！！」

「ああ・・・そんなこともあったっけな。」

今話してる最中も本当に胸糞悪い。

私に力があつたら問答無用で斬り殺してるのに！！

でも。でも。でも！！

そうした感情は出来るだけ奥底にしまう。

もし、こいつを怒らせて襲われたらとてもじゃないけど抵抗できない。

何も出来ずにただただ犯される。蹂躪されて、陵辱される。

でもそれも今日で終わり。こいつのご機嫌取りなんてこつちから願ひ下げだもん。

「別に謝らなくてもいい。

土下座もしなくていい。」

「抱いてくれってか？」

そんなわけないでしょっ！！

本当にバカでバカで忌々しいっ！！

「私をパーティから外してくれるだけでいいわ。」

「んん？」

そう。あの賭けに勝った私の唯一のささやかなお願い。

エールゲン村に帰りたい。

帰ってお父さんやお母さんとまた暮らしたい。

そして、かつこいい旦那さんを作って・・・もちろん私は美少女だから、旦那さんもそれなりのハンサムでなければ許さないけど。

・・・まあ可愛いってのもアリかな。

べ、別に彼のことを考えていつてるわけじゃなくて、たまたまそういう好みもあるだけよっ！？

か、勘違いしないでほしいもん！！

あ、今少し顔赤いかな？

でも、このバカは無神経だし気づかないよね。

「そうかそうか・・・別にいいよ。」

いらねえし。」

「そ、そう・・・ありがとう。」
「やっぱりだ。」

こいつはお姉さん系みたいな女の人好みらしいし、私の力もあてにしていな。

これで開放される。と思つたら涙が出てきそうになる。

でも、泣かない。

まだ泣かない。

泣くのはこいつと別れた後。

このバカに弱みを見せることだけはしたくない。

もし彼がここにいて、彼なら・・・どういつてくれるだろう？

な、何を考へてるのっ！？

わ、私はっ！！別に彼は関係ないし、今頃違ふ街に行つてるに決まつてゐるっ！！

で、でも、少し探してちゃんとお礼を言うのは大切よね。

べ、別に会いたいからじゃなくて・・・いや、会いたいつてのはあるんだけどあくまでも友達としてだからで！！

別に下心は無いもんっ！！無いったら無いっ！！無いんだからっ！！

「とはいえ・・・やっぱりもつたいねえんだよな。」

「え？」

不吉な、嫌な声が聞こえた。

声はもちろん男が発信源である。

ぞわりと身が震える。

「ほら？」

お前つて顔とスタイルだけはいいじゃん？

そのプライドが高いところだけはいけ好かないけどさ。

だから抱くきなかつただけ・・・

別れるって聞いて、やっぱり一度くらいは味見をな？」

「……い、いや……や、約束がちが……」

[illegible]

バカだなあ？

俺は強いんだぜ？

約束を守る必要なんて無い。

ついでにいうと無理やりつてのを一度経験してみたかったんだよ。

良い声で喘いでくれ。」

あとずさる私。

でも、目の前の男も同じだけ詰め寄ってくる。

怖い。

怖い。

怖いの。

[illegible]

怖い。

嫌なの。

近づかないで。

やめて。

彼ともう会えなくなっちゃう。

汚されたらもう会ってくれなくなる。

彼？

彼って誰？

彼は、今ここにいない。

居ないじゃない。

どうして？

どうして？

どうして居てくれないの？

分かってる。

本当は今このときにも一緒にいてくれるように。守ってくれるようにお願いするつもりだった。

でも、巻き込めない。上位竜種を雑魚とするこの男には彼でもきつと勝てない。

下手をすれば死んでしまう。

そんなのは嫌。

でも今の状況も嫌。

どっちも嫌だけど彼を巻き込むのはもっと嫌。

死ぬよりも、陵辱されることよりも嫌。

だから。

彼にはお願いしなかった。

お願いしなかったからここには彼はいない。

分かってる。

分かってても涙がでる。

こんなところで死ぬしかない私の運命が悲しくて。

「さようなら。

お父さん。お母さん。」

犯されるぐらいなら死んでやると思ってナイフを手に持ち、首に目掛けて差し込んだ。

「こ、こほっ！

「こほっ！！こほっ！！」

喉が少し痛いだけだった。

ナイフの刀身は根元から無い。

「どう・・・し、て？」

目の前には右手をこちらに向けた男がいた。
何かの魔術で刀身を折ったのだろう。

「死なせるわけ無いだろう？
もったいない。

舌を嚙んで死ぬのもしないだ。
そうすれば協力者を殺す。」

「や、やめてっ！！」

あの2人には手を出さないでっ！！」

どうやってあの2人のことを知ったのっ！？

まだ私も知らない力が・・・

「カマをかけてみるもんだな。」

「だ、だましたのねっ！？」

「何を言ってるんだ？」

お前の能力を使ってアースヘッドを殺す手はずだろ？

それを他の人間に頼るとは・・・先に約束を破ったのはそっちじゃ
ねえか。

オシオキがわりとでも思っておけよ。

もちろん、エールゲン村も地図から消えちまうかもな。」

「・・・ど、どうして・・・」

どうしてそんな・・・ひどいこと・・・」

「ひどいこと、ねえ・・・」

それだけお前の体に執着があるってことさ。

あと数年立てばもう俺好みになるだろうしな。

大切に飼ってやる。

むしろありがたく思っただけいいね。

・・・手始めに自分から服を脱いでもらおうか？

愛してます・・・と囁いて俺を抱きしめろ。」

・・・ああ。

どうしようもない。

どうにもならない。

こんなことなら、追いかけられたり指名手配されるのを覚悟でこいつから逃げれば良かったんだ。

本当に失敗した。

嫌だな。

これから何をさせられるんだろう。

何をしなくちゃならないんだろう。

開放されるのはいつだろう？

旦那さんが目の前のコレか。

本当に私は不幸だ。

こんなことなら彼に助けを求めていればよかったかもしれない。

けど、後悔は無い。

せめて彼らのこの先に幸がありますように。

嫌だ。

ああ。本当に嫌だ。

私は・・・私は・・・ただ、ただ・・・もうだめだ。

こいつの目の前では泣かないと決めていたけれど、もう泣きそうだ。

「一つだけ約束して。」

「なんだ？

そんな目に涙を溜めて・・・そそられる。

一つくらい聞いてやるよ。

泣きじゃくることしかできない。
泣きじゃくる私に彼はただ一言。

「守ってやる!!」

思えばコレが私の初恋だ。

第20節 勇者フラグ？（後書き）

自分で書きながら、エンデに感情移入し過ぎて泣きそうになったのは秘密（笑）

第21節 全てを投げ打つても（前書き）

今までで一番長い一頁かも？

第21節 全てを投げ打ってでも

勇者と思われる男とエンデの話を聞いていたが、上手く話が進んでいるようだった。

男の僕から見てもここまでの嫌悪感があるというのに、女の子の・
・しかも目の前であんな目で見られて良く良く無表情でいられると
思う。

大したものだ。

というか、できれば今すぐあいつを斬り捨てたい。

「バカなことは考える出ないぞ？」

今の主では負けるからのう。」

「・・・別に関わった手前気になるだけで・・・」

「腰が浮いておったが？」

「う、うるさいな。」

「さっきのお返しじゃ。」

根に持つタイプなのかな？

つと。それよりも今は彼女達の話に耳を傾けるのが先決だ。

「―――良い声で喘いでくれ。」

ん？

一体全体どうしてそうなった？

男は気づいていないようだが、彼女の肩は震えている。
しかたないなあ。

「ちよつと行って・・・」

「だめじゃ。」

死ぬぞ。」

「え？」

そ、そんなに力の差があるの？

「はつきり言おうか。」

主ではまず勝てない。

死ぬだけじゃな。」

「ど、どうして・・・」

「そんなのは決まっておる。」

あやつが勇者じゃからじゃ。

響は知らぬじやろうが、勇者として召喚されたものには特殊な力と神具が宿る。」

し、知ってたりします。

そして、勇者の力がないとのことで捨てられたりしました。

「ん？どうかしたのか？」

「あ、いや、続きを聞かせて。」

「うむ。」

おそらくあやつが神具はあの鞘じやろう。

セルシーの・・・高位精霊の意思を閉じ込める・・・もしくは消し去るなど、その辺の魔術師が一万、十万、百万集まろうとできぬ。そして、勇者としての力。

これは俗に勇者補正と呼ぶそうじゃ。

最初の勇者・・・妾の一族が健在であつた五千年前のあやつがそう言っておつた。」

ゆ、勇者補正って。

なんというか、それだけで勝てそうになんてなってきた。

もちろん負けるつもりなど微塵もないのだけど。

「勇者に詳しいんだね。」

「まあの。」

とにかくその勇者補正とは身体能力値を10～20倍ほどに跳ね上

げるといふ倍率がありえんほどの超能力なのじゃ。
肉体強化の魔術ないしは奇跡を覚えておったら、さらに分が悪いの
う。

もちろん、妾の力をすべて使いこなせるのならば負けることはない
し、余裕で勝てるじゃろつて。
しかしじゃな。

主は妾の力の一割も満足に使えていない。
切り札の右腕の魔具の力。それとて妾にも分からぬほどの秘する部
分がある。

はつきり言おう。

今ここで助けに出てもただの犬死。

あの娘の心の傷をより大きくするだけじゃ。

妾だつて助けてやりたいが妾はあくまでも魔術師タイプ。
即、斬り殺されるのがオチじゃ。」

「……くそ……見てるしか……ないのか……」

この話の間も僕はエンデの話を聞いていた。
もう。あれだ。

イラつきがとてつもないものとなっている。
というか、生まれて初めてキレそう。
プツンしちやいそうである。

そして、極めつけはこの台詞。

「一つだけ約束して。」

「ごによごによ……」

ごによごによの部分の部分は男の台詞である。
意識的に聞かないことにしている。
今にも斬りかかりそうだからだ。

「協力者の……2人には手を出さないで。」

自分が泣き出しそうだった時に。
絶望のど真ん中にいるってのに。

どれほどの屈辱と、悲哀を胸に秘めて、今その場に居るのか。
痛いほどに辛いはずのその心身で。

一体全体、どうしてどうして他人を気遣えるのか。

バカとしか思えない。

僕を感じてる屈辱、というか怒りはきつと彼女の十分の一にも満たないはずだ。

彼女の心境はそれこそ、僕には想像もつかないほどに厳しいものであるはずだ。

なんと優しくバカなのだろうか。

村など見捨てればいい。

たまたま助けてもらった冒険者の1人や2人。

気にしなければいい。

嗚呼。それに比べて僕はなんと情けない。

簡単な話だ。

今の実力で勝てないならば、あいつと戦いながらあいつを殺せるぐらいに強くなればいい。

それだけの話だ。

弱いなら、今強くなれば良い。

なんだ。

簡単じゃないか。

僕の中には強烈な殺意と、それ以上に彼女を助けたいという良く分からない強い情が猛々しく狂おしいまでに荒ぶっていた。

こんな状況で他人の安否を気にする彼女に一言だけ言ってやらねば気がすまなかった。

君が他人を守るのは良い。

でも、君はどうするんだと。

だから僕が守ってやろう。

そう僕は決心した。

「フェロー。」

「ゆ、許さないっ！！私は・・・私はもう二度と・・・とにかく
いつちやダメッ！！

二度と失いたくないのっ！！」

「標準語だね・・・ていうか、とめても無駄だってわかってるで
しょ？」

フェローの瞳は涙で歪んでいる。

でも、ここで怖気づくような育て方はされてないのだ。残念ながら。
姉さんという化け物に比べたら、まだあっちの方が勝てる気がする
からして。

常日頃から最悪を経験してる僕にとって最悪の一手手前は怖気づく
必要がない。

本当に残念な育て方をされたものである。

まあ今日だけは姉さんに感謝してもいいかもしれない。

「・・・はあ・・・仕方ないなあ・・・じゃ、じゃなくてっ！

仕方ない奴じゃのう。

まあ良い。妾もおそらく同じ思いを抱いておる。

簡単な話よのう。

今ここで主が奴を越えればいいだけじゃ。」

ふっ。と不敵に笑うフェロー。

付き合いは短くとも、さすが相棒。

僕を分かつてる。

「さあ、一刻早く助けてやらないとね。」

「そうじゃな。」

すぐに縮地で飛び出して、思いつきりあの勇者バカの顔面目掛けて僕はドロップキックを食らわせた。

思いつきり吹っ飛ぶ勇者・・・モドキ。と呼ぶことにする。

てつきり避けるくらいと思うただれど・・・本当に強いのだろうか？

とりあえずエンデに声をかけようとしたところで、わんわんと泣きじゃくるエンデ。

こいつはちよつと困る。ただ、安心したせいもあるかもしれない。とりあえずコレだけは言っておこう。

「守ってやる！！」

「て、てめえっ！？

何しやがるっ！？」

「おいおい。

もう少し勇者っぽい台詞はないのかい？

ただの盗賊と変わらんぞ。」

勇者モドキは顔を若干赤くして憤る。

パツと見イケメンにあたるが、正確にかなりの難アリといったところか。

う、うらやましくなんてないんだからねっ！！

「お前・・・俺を勇者だと知ってのこれかよ？

殺されたいんだな？」

「今の話の流れでその程度も理解できないとは・・・頭が悪いん

それを聞いて男は剣の柄に手をかける。

顔はまっかつかだ。

「俺をあんなゴミムシと一緒にするんじゃないっ！！」

という怒号と共に斬りかかって来る勇者モドキ。

いちいち勇者と付けるのも忌々しい。

ただの”モドキ”と呼びなおす。

「勘違いしないで貰いたいな。」

「ぐっ！？」

早い斬撃だ。

だが、早いだけの斬撃。

優れた身体能力に頼りきってるだけの、ただ振り回した結果の剣である。

少し、身をずらすだけで避ける。

避ける際に足を引っ掛けて、バランスを崩すモドキ。

「お前はどっから見ても、人間さ。

どんな生き物より”害悪”で”醜悪”で”下劣”であつても、人間であることには変わらない。」

目の前の男がどんなに下衆でクズだったとしても人間だ。

「だからこそ、より害悪な存在だ。

家の中に進入してちょっと不快にさせるだけのゴキブリなんて可愛いもんだ。

人間であるから、ゴキブリ以上の害を他者に与えることができる。

人間であるからより最低へと。底辺へと堕ちることができる。

だから。

僕は殺せる。

その辺の虫けらを殺すことよりも、躊躇なく、簡単に斬り殺せる。」

特に今は怒り心頭中であるからして。

「・・・で？」

だからなんだ？

俺が他者を蹂躪したところでお前には関係ないだろ？」

「そんなことは・・・どうでもいい。

謝る気はないんだな？

謝っても、二度と悪さが出来ないように腕二本は貰うけど。」

嗚呼。

胸糞悪い。

殺してやりたい。

というか、もう本気で殺しに行つていいよね。

殺す。殺す殺す殺す！！

バスタードソードを構える僕。

フェローは僕が負けるとか言つてたけど、大したことないじゃないか。

確かに斬撃の速度は大したものだ。

僕の目には軌跡がかるうじて捉えられるだけ。威力も凄まじいものだろう。

でも、なんてことはない。

目、重心、筋肉の動き、殺気、それらで先読みができる。

ただただ単調な素人の剣。こんなものに斬られるほど僕は甘くない。自身の力に慢心したものほど扱いやすい者はいない。

「んなこといつて、改心すると思つてるのか？」

あの女も俺の腕もわたさねえよバア力！」

「そう。」

話すことはない判断したのか、再度斬りかかってくるモドキ。それにあわせてカウンターを打ち放つ。

「ぐあっ!?!」

「まずは一本。」

ほら。痛がつてる暇があるのか?」

モドキの左腕を切り取った、にび色の軌跡はもう残った右腕へと襲い掛かる。

さすがにそれくらいはかわせたようで、バックステップで距離をとったモドキ。

「びびったの?」

口ほどにもない。」

「黙れっ!?!」

僕は襲い来る、早すぎて見えない斬撃を見切って徐々にモドキを切り刻んでいく。

「こ、これは・・・予想外じゃの。」

「そうね。」

まさか、これほどとは思わなかったわ。」

「なっ!?!」

「はあい。フェロー。」

奇遇ね。こんなところで会うなんて。」

「おぬしっ!?!」

「ティリアっ!?!」

エンデを保護して、勇者モドキと響の2人から離れた場所で妾達は観戦していた。

エンデはただ驚いて2人のやりとりを見ておったが、私としても驚きを隠せない。

私の目には全くもって捉えられない斬撃を軽々とかわす響こそ勇者と断ずるに値する。

最初こそ、リネティアとか言う女子と話していたのを見て話が合いそうだったから、私の契約者にといい契約したわけなのだが今更ながら私の判断は違う部分でも間違っていなかったことが確信できた。今の響の身体能力で言えば、かなりの差があるはずなのだがそれを感じさせないどころか、剣技のみで圧倒している。恐るべき腕だ。

「で？」

なぜ主がおる？」

多少、驚いたものの。

なぜかここにいるギルドの受付をしていた忌々しい（具体的にはそのダイナマイトな胸だが）女がいる。

まあ、ある程度は予想がつくが。

「またまたあゝ。」

分かってるのでしょうか？」

「まあな。」

大本の目的は分からぬが・・・主のことだ。大方、勇者の実力を測るためのかませ犬を探しておったのじゃろう？」

「大筋はあつてるけど、噛ませ犬は彼ではなくあの勇者の方。

ついでにあの勇者の女癖の悪さが女として許せなかったのよ。行く町々で良い噂を聞かないから・・・

ちようど、その彼女と一緒に街を出てくところが確認できたからね？

コレ幸いと殺しちゃおうと思って。

ついでに知り合いを助けられて良かったじゃない。」

「なるほどのう。」

勇者ではなく響の力を測るというわけか。」

「そういうこと。」

ちよつと困ったことに、西大陸の王達が揃って南大陸に対してちよつかいを出そうとしててね。」

「・・・ばかな奴らじゃのう・・・本当に。」

一体全体、どうしてそんな自惚れを生み出すこととなったのか。南大陸は不可侵にして神聖な土地。

そもそもアレのせいで侵攻は不可能なはずのだけけれど。

「ま、数十年前に”陣”を発掘したからでしょう?」

「ふん。ろくなことをせんな。力を持った人間というのは。」

「人間というより、一部の無能がねえ・・・」

「そうした無能を上に乗える民草も等しく無能でよかるうよ。」

その私の言葉に苦笑するティリア。

何をしたいのか未だ良く分からない。食えぬ奴だ。

「あら?」

もう決着がつきそうよ?」

「そうじゃのう。」

モドキは満身創痍で肩を上下させ、すぐにも斬り捨てられそうになっっていた。

止めを刺すべく、バスタードソードを振りかぶる響。

これは終わったな。

「終わりだ。」

「ふ、ふざけんじゃねえっ！！」

「こ、こんなところで死んでられねえんだよつ！」

命乞いかな？

しても助けないけど。

モドキは劔を鞘に収め、収めたままで劔を掲げた。

「みせてやるよおっ！！」

俺の奥の手をなっ！！」

「なっ！？」

劍の周りに一氣に迸る魔力と靈力。

そして、女の人と思わしき叫び声上がる。

[illegible]

「たくつ！！」

ホントに喧しいったりやありやしねえっ!!」

どうも剣から上がってる声のようだ……が……。

手袋から、ではない。正確にはフェローから手袋を中継として流れてくる痛みが僕の全身を痺れさせる。

涙がとめどなく流れる。

「や、やめてっ!!」

やめてえっ！！！！

いやあああああああああああああああああああ
あつ！！」

「ま、まさか……霊剣を力ずくで……」

げ、下衆なっ!!」

背後で、フェローが叫ぶ。ティリアさんの声もなぜか聞こえた。それと同じくしてフェローから伝わる痛み。

いや、もともとは剣の痛みがフェローを介して伝わってきているのだ。

身を裂く様で、内臓をぐちゃぐちゃにかき回されてるような不快感。生きたまま生皮を剥ぎ取られるような全身を貫く激痛。

「それを・・・それをつかうなあああああああああああああああああああああああああっ!!」

僕は何を考えるまでもなく、つつこんだ。

渾身の斬撃を・・・桜花剣を繰り出した。

剣を開放してあげるために。目の前の男を殺すために。だが。

「バカがあっ!!」

この剣に適う剣は存在しないっ!!

100パーセントでぶった切ってやるっ!!」

バスタードソードと光り輝くセルシウスキャリバーの鞘に包まれた刀身が触れ、バスタードソードの刀身が吹き飛ぶ。

そして、僕の体にめり込んだところで僕は光に飲み込まれながら吹き飛んだ。

バキヤキヤキヤキヤッ!!

木々をなぎ倒しながら吹き飛ぶ僕の体。

ちょうど、フェロー達のいた場所付近にあった一つの大木でとまる。

「がはっ!!?」

血飛沫が飛び散った。

大量の鮮血がエンデとフェローの体を汚した。

「響っ!？」

「ヒビキッ!？」

2人が駆け寄ってくる。

かろうじてバックステップで衝撃を緩和していたのが幸いである。とりあえず生きていた。

「だ、大丈夫・・・ではないなっ!？」

・・・このっ!!

私が・・・妾がここら一帯ごと焼き払って・・・あぐっ!？」

「なんだ?このガキは？」

邪魔だからとりあえず、どかしたが・・・まあいいや。

俺をここまでコケにしたんだっ!!止めを今すぐ刺してやるよ?

命乞いするなら助けてやらんでもないが・・・命乞いも出来そうにねえな。

あははははははははははっ!!」

血反吐を吐きながら、立とうとするが体がまるで動かない。

ぶるぶる震えて、力なく垂れるだけの僕の四肢。

これは困った。ピンチ過ぎる。

一応、アースヘッドに殺されかけた時すら、ある程度動いてくれたこの体も限界のようだ。

もつと冷静に行くべきだった。

剣の痛みが自分のことのように分かったからこそ、動かずには居られなかった。

今も剣は泣き続けている。

「は、はやく・・・せい、つ、も・・・すけて・・・や、らな・・・いとな。」

「ごぼっ!？」

やばい。血の量が半端ない。

血反吐はもちろん、大木にぶつかった際に放射状に広がった血がフエローとエンデの体も真っ赤に染めていた。

それだけでも大した量の血を失ってるっていうのに、今もダクダク流れ続けている。

これ死ぬんじゃない？

「どういふつもりだ？」

ん？

このモドキは何を言い出したんだ？

文脈がよくわからん。

「こ、この人には手を出さないでっ！！」

「くくく。健気だなあ・・・おい。」

どうやらエンデが僕の目の前で守るように立ちはだかってるらしい。情けないな、僕は。

守ってやるといっておいて、守られている。

「そうだなあ・・・一生、自殺を考えず、忠誠を誓うってなら見逃してもやって良いぜ？」

そこの倒れてるガキも協力者だろ？

ただし、見逃すのはそこのガキだけだ。

そいつは殺す。」

「や、やめてっ！！

お願い。」

どうして、僕はここで倒れているのか。

守りたかったのではないか？

本当にどうして僕は今ここで彼女に守られている？

助けに行くと粹がって、その結果が彼女のこれからの足かせになる

うとしてる。

自分が嫌になる。

「却下だ。

そいつがまた殺しにくるとも限らないからな？

それに、片方だけでも生かしてやるんだ。

ありがたく思えよ。」

「お、お願いだからっ！！

私、な・・・なんでも・・・なんでも言っこと・・・きく、から・・・

腰を振れって言っなら、がんばる・・・

鳴けって言っなら・・・鳴くから・・・」

今日の前で彼女が泣いてるのは僕のせいだ。

僕が今ここで倒れ付しているから。

弱いから。

謝るから、お願いだから、泣かないで。

泣かないで欲しい。

お願いするのは僕のほうだ。

泣きたくなるほどの屈辱を我慢して、唇をこれでもかと噛み締めて、ただ蹂躪されることに泣きながら――でも泣き寝入りはせず、せめてもの抵抗で、意思で僕を守ろうとしている。

小さなこの背中に、震えて仕方がないこの背中に。

僕の命を背負うとしている。

なんと気高き、情愛か。

ただ、一度の恩義と出会いをしただけの人間にここまで出来る人間が一体世界に如何ほどいるのか。

嗚呼

死なせたくない。

その震える背中を強く。

これでもかと強く抱きしめて、守ってあげたい。
それが適わないこんな体。

こんな力。
要らない。

せめて、せめて目の前の彼女を助けることの出来る、守ることの出来る力で良い。

力が――”欲しい”。

今だけで良い。

今この瞬間このときだけで良い。

その後は動かなくなっても、命尽きてても後悔はしない。

さあ、動いてくれ。

僕の体よ。

答えて欲しい。

僕の体よ。

どうせ死ぬなら、動いて死ね！！

どうせ尽きるならば、意味を持って死ね！！

どうせ失せるのならば、守って死ね！！

どうせ零れるのなら、殺して死ね！！

さあ動け。

「て、てめえ・・・その傷でどうして動けるっ!？」

「ひ、ヒビキ・・・?」

「そんな・・・グズ・・・ごぶっ!

・・・はあ・・・はあ・・・

クズに・・・エンデがお願いすることなんて一つもないっ!!

どうせ・・・お願いするなら・・・

お願いするなら僕にお願いしろっ!!

不甲斐ないのはわかるっ！！

情けないのも分かるっ！！

頼りないのだって分かってるっ！！

でも・・・で、つもっ！！

ぐぶはっ・・・ごほっ・・・ごほ。

僕に・・・守ってくれとお願いしろっ！！」

ボロボロの体にムチ打ち、右手に魔力、霊力の全てを注ぎ込む。

一割といていたが、それでも目の前のゴミを掃除するには十分だ。

いや、それどころか何かがフェローの体から無理やり僕の体へ魔力、霊力を流し込んでいて、それを吸収して右腕の黒い塊が体へと侵食していく。

さあ、後は一つだけ。

一つだけ聞かせてくれ。

君の言葉を。

一言を。

エンデは目からとめどなく涙を流しながら。

泣きじゃくる嗚咽を必死に抑えながら。

自身の震える体を鼓舞しながら口を開いた。

「守って・・・ください・・・

私の・・・すべてをあげるから・・・

私を・・・守って欲しいっ！！」

「今度こそ・・・守るっ！！」

僕は右腕の手袋が変形した”黒い刀”を構えて、もう一度だけ男と

向き合った。

「なんだその腕・・・体。てか、その傷でよく立ち上がれるもんだぜ。」

ば、化け物だな。

いや、勇者的に言えば魔王か？

だ、だがなあっ！！

正義の味方である勇者は必ず勝つて決まってるんだよ。」

「ははは。」

違ういな。

こんな姿で誰が僕を正義の味方と言う人間は1人もいないだろ・・・

「

黒い手袋は僕の体を飲み込むように全身に広がっていた。

禍々しいまでの黒い甲冑が身を包んでいる。

さながら黒騎士？

漆黒の悪魔？とも言うべき様相である。

これを見て勇者様とあがめる国王も民も居まい。

「だりやあっ！！」

「さよならだ。」

黒いフルフェイス兜のせいでくぐもった声を上げつつ、僕は刀で迫り来る男を縦に裂いた。

その間の刀の軌跡はこいつも捉えられてしまい。

なぜなら。

「はっ！

俺の斬撃にまるで反応してねえぶっ・・・」

”はっ！”のあたりでとつくに切裂いていたのに全く気づいてないからである。

これで。

これで。

これで守れたのだ。

名誉挽回。汚名返上といけたらどうか。

もし、まだ生きていたら余計な不快感を味合わせた僕の愚をエ
ンデに謝らなくちゃね。

そんなことを思ったのを最後に、僕の意識は深遠へと堕ち込んで言
ったのだ。

第21節 全てを投げ打ってでも（後書き）

いやはや。

途中で切ろうかと思いましたが、一頁にまとめました。

良いところですから一回で見ないとダメですよね？

次回は外伝（あながち外伝とも言い切れないけど）的な感じになると思います。

第22節 神崎 冬香（前書き）

そういえば、合計文字数が十万文字を超えてました。
ラノベに換算すると、ざっと200ページ分。
少し感慨深いものがありますね。

第22節 神崎 冬香

私の目の前には頭の悪そうな男が2人。
頭の悪い内容の台詞に頭の悪いしぐさ。
本当にうんざりする。

「で？」

黙りこくつてないで謝れやつ！」

「あ、それ、ど・げ・ざ！ど・げ・ざっ！！」

ニタニタと何が面白いのか。

対して見ていたくもない容姿に加えて、醜く歪むその顔についつい視線を逸らす。

それを見て何を勘違いしたのか、より笑みを深めた2人の男。

「少しぶつかっただけ。

それに謝った。」

「誠意が足りねえってんだよ。」

「もっと愛想良く出来ないのかって話だったの！」

コレだから男の子は嫌いだ。

中学生になっても対して変わらず幼稚で稚拙なまま。

もちろん、私が大人っぽいと言いたい訳ではない。

ついこの前まで小学生だったのだから子供っぽくて当然。
ただもう少しどうにかならないのかと思うだけだ。

「話がそれだけなら話しかけてこないで。不愉快。」

教室にいる他のクラスメートは見て見ぬフリをする。

それもそうだろう。

目の前の2人は担任も手を焼いている不良児だ。

とはいっても中学一年である彼らの悪事など、せいぜいがちょっかいを出しすぎるといだけのもの。

担任としてもあまり問題視にせず、強めの注意で終わっているがこうした類の頭の悪い子供がその程度で反省するはずもない。親の顔が見てみたいものだ。

担任の先生からしたらいろんな意味で見たくないのだろうけれど。

「ちよつとこつちこいよ！」

「っ！？」

痛い、離して。」

ついには手を出してくる始末。

腕を強くつかまれて引つ張られる。

女の子の私に対してここまで強引なのはいかなものかと思わずには居られない。

周りには助けしてくれる人はもちろんいない。

もともと対人関係に苦手意識を持つてる私としては当然のことで、気を遣ったり空気を読むといった行為は一番の不得意分野である。

それ以上に私の容姿は平均水準よりかなり上らしく、愛想の無さと相まって近寄りがたいのかなとぼんやりと理解していた。

同性からはお高く纏まって鼻につくといったところで、この状況を見た同性の視線は喜色すら見れた。

そもそも助けてもらうつもりはなどないから別に良い。

誰かにお礼を言うのは苦手だし、自分のことで迷惑をかけることも好きではない。

とはいえ授業が始まるにはまだ大分早いし、先生も来ない。

この男の子達が何をしたいのかは分からないが、一度殴られてやれ

ば気が済むだろうか？と考えてもいる。

そんな中、私の腕を握るバカな子達の腕を掴む手が横からぬっと伸びた。

「えーっと。間違ってたら悪いけど・・・
その子嫌がつてるよ？」

微妙に緊張した様子で1人の男の子が私を助けてくれた。

「て、てめえ。

包帯野郎が何のつもりだっ！？」

「そっだそっだっ！

たっくんに反抗するとは生意気だぞっ！！」

程度の低い怒号に、助けてくれた男の子は少しビクッとしたけれどその目に弱い影は無かった。

「そ、それ以上やるなら僕が相手になるけど？

というか、席に戻るのに邪魔だし、皆も迷惑するとおもっよ。」

「・・・ちっ！」

「いこうぜっ！！」

頭の悪い2人組みは男の子のその言葉に少し青ざめてその場を後にした。

「大丈夫？」

という男の子は確か山瀬 響と最初のHRの時の自己紹介で言っていた気がする。

部活紹介の集まりのとき、剣道部の実践体験という名目でたまたま指名されて、完膚なきまでに相手を叩きのめしたことでクラスメー

トから避けられてる男の子である。

全国出場したとか言う中学3年の剣道部員相手に初太刀で小手を決め、「あれ？この人僕より弱い？」と呆気にとられた様子で呟いていたのを私は聞いた。

ついでに「姉さんとしか試合したことなかったから、てつきり僕はとても弱いと思ってただけど・・・手加減かな？でも、本気っぽかったしな・・・」とも言っていたのを私は聞いた。

その剣道部員は骨折しており、いろいろな意味で衝撃的な中学生デビューを飾った男の子である。

さらにはその特異な見た目――包帯を常時付けているところもまた不気味さと共に怖いところでもある。

そのせいでクラスでは浮いており、目だった虐めこそないものの、私と同じく友達はい人もいそうになかった。

「助けなくて良かった。」

そんな彼に私は突き放すような態度を取る。

彼を怒らすかもしれないと内心、少し怖かったけれど私にかまっていたらそれこそ友達が出来なくなる。

私はクラス内で嫌われていると自負している。

そんな子に味方する子がどうなるのかなど分かっていていることだ。そうなると少々寝覚めが悪い。

「う、ごめんなさい。」

「今度から気をつけて。」

これだけ言えば、かまってはこないだろうと思いその日はそれ以上会話をしなかった。

ただ、私の日々は少しずつその日をキツカケに変わっていく。早い話、彼が挨拶をしてくるようになったのだった。

初めて会話をしたあのキツカケから1週間後。

私の機嫌を図る様に彼は簡単な自己紹介をする。

「えーっと・・・僕の名前は山瀬 響かなざき ふゆかって言うんだ。

君は確か神崎 冬香かんざき ふゆか・・・ちゃんだよな。

僕のことは好きに呼んでくれてかまわないよ、神崎さん。」

「なれなれしいのね。」

「ご、ごめんなさい。」

「今度から気をつけて。」

1週間前にも似たようなやりとりをしたな。とふと思ってその日は何も話すことなく終わった。

また1週間後。

この間は席が隣だというのもあって毎日朝の挨拶をしてきたので、礼儀としておはようくらいは言った。

そして掃除当番として一緒になったとある日。

「ち、ちりとり持ってくるよ。」

「もう持ってきてある。」

「そ、そう?」

「そう。」

このくらいの話は普通にするようになって、ちょうど2人きりだったということもあって私は前々から聞きたいことを聞いてみた。友達を作りたいなら私ではない、もっと明るい子を作れば良い。

彼女が欲しいなら私のような気難しい(という自覚はある)女の子ではなく、もう少し簡単な――と言っては言い方が悪いが、簡単な女の子を狙えば良い。

見た目が好みとかだったら仕方ないけれど。

でも後者の理由であって欲しくないという思いも少しある。なぜかは説明できないけれど。

そうした私の疑問に予想の斜めに行く答えを貰ったのを今でも覚えている。

「寂しそうだから、できれば友達になってあげたいなって、もちろん！」

僕自身友達が欲しいのもあるけど、それが・・・最初に思ったことかな。

その・・・偉そうだし、なれなれしいのも分かってるけど・・・」

わたたと腕を振り回しながら顔を真っ赤にして言う彼は可愛かった。

友達になりたい。ではなく友達になってあげたい・・・か。

余計なお世話とは思う。

でも、不思議と不快感は無かった。

この頃からよく一緒にいるようになり、現在高校二年生となった今でもその付き合いは続いている。

ただ、そんなある日。

一度彼が私から妙に距離をとったことがあって、その数日後。神妙な顔でこんなことをたずねてきた。

”自分にビビって嫌々一緒についてことは無いよね？”と。

あまりにばかばかしい内容で言い回しは愚か、内容もすこしおぼろげにしか覚えていない。

この言葉を聞いたときは初めて声をあげて笑った気がする。

確か、彼女の姉と包帯を毎日のごとく付けている理由を知った次の日くらいから避けられたからきつと”僕が怖くて話をあわせてるだけじゃないか？”みたいなバカバカしい勘違いをしたのだろうと私は思った。

男の子はやっぱりバカである。

そんな彼に私はただ一言。

笑顔で「バカね。」とだけ言ってあげた。

自覚して欲しい。

ただそんな悪くは無い甘くはない青春を送っている日々の中。響が連日休むと言うことになった。

今では2週間以上も欠席している。

メールの一つはあってもいいと思うけれど、私の携帯にそれらの通知はない。

いつも、話していた男の子。

いつも、そばにいてくれた男の子。

いつも、気遣ってくれた男の子。

それがたかだか数日あえないだけで不安が募る。

胸の中でどんよりとした暗雲が立ち込めて、快晴でも私の心はもれなく大雨だった。

最初の頃はただの風邪だと思って気にしなかった。

いちいち病気のことをメールで報告するような男の子じゃないし、

お姉さんのことを聞いていたからちよつと深手を負ったくらいかな？と思っていた。

あのお姉さんはなんだかんだで弟の彼を大分溺愛しているのがわかるから、（本人は分かかってないようだが）万一にも死ぬことや取り返しのつかないことにはならないだろう。

1週間ほど休んだ頃に担任から彼は家の事情でしばらく休学することになったという話を聞いた。

私はそのことに驚いた。

内容ではない。

私に対して連絡の一つもくれなかったことに驚いたのだ。

少し・・・いや、かなり悲しかったけれど、言いにくかっただけかも知れないしまたいつか会えると思ってあまり気にしなかった。

ただ、一日、二日、三日と経つことにもう会えないということにストレスを感じ始めるようになる。

彼のいない学校はとてもしゃないがつまらない。

行く意味なんて微塵も無い。

そんなことまで考え始めていた。

ここまで依存していたのかと自嘲するも、悪くはないという気分である。

ただ、それは3日目までで話を聞いて4日目くらいになると「友達の私にくらい話してくれても良いじゃないか！」という怒りに変わり初めて休学が発表されてから一週間後の今日。

響の家に向かった。

数回ほど遊びに行ったのだけれど、お母さんは40間際とは思えないほど若々しく綺麗で、お姉さんは響が話すような狂人などとは欠片も思えないほどの麗人である。

お姉さんは私を響の彼女として目の敵にしているような節が見受けられるが、私にそんな気があったとしても彼のほうにその気はないだろうから安心して欲しい。

そもそもそういう関係になりたいとは思っていない。

少なくとも今のところは。

家に着くと快く響のお母さんと私の来訪に過度に反応したお姉さんが出迎えてくれたが、話を聞くと行方不明だという。

なぜ警察に届出を出さないのかと聞くと。

「あの子が誘拐されたとは思わないのよねえ。」

「私もそう思うわ。」

というのが2人の見解だ。

2人によると、響自身は自分を凡才極まりないと思っているらしいが彼はあれはあれで鬼才であり、それは姉の実力にちょっとした努力で追いつけることが証拠となっている。らしい。

誘拐犯などのなんらかのトラブルに巻き込まれたとしてもかならず

自力で帰ってこれるはずだと言っていた。

しかし、現に帰ってきていない。

これが示すのは

「警察でなんとか出来るレベルじゃないと私は考えてるの。」

「私もそんな感じよねえ・・・夫は夫で内心かなり心配してるらしいけど・・・あの人はツンデレだからねえ・・・」

「そ、そうですか・・・失礼します。」

行方不明。

それを聞いて実感がわかなかったけれど、一つだけ分かったことがある。

”なおさら彼の声を聞きたくなった”ということだけだった。

私はお風呂を済ませ、響の誕生日プレゼントとして貰ったイチゴ柄パジャマを着用して就寝前となっている。

会いたい。

今すぐ会って話したい。

なんでもいい。

話の内容はどうでもいい。

ただ、彼のそばにいたい。

そばに行きたい。

どこにいるのかは分からないけど、とにかく彼と一緒にいたい。

これが恋愛感情なのか？

自分でもまだ良く分からない。

でも、会いたい。

会いたくて仕方が無い。

そんな私の目の前に白い扉が突如して現れた。

いきなりすることに少し呆気にとられたが、なんとなく。

本能の部分で私は分かっていた。

この扉の先に私の求めるものがある。

そんな確信のもと私はその扉に手をかけた。

異世界の扉へ。

第22節 神崎 冬香（後書き）

眠気を我慢して書き上げたので若干手抜き気味（笑）
もう少し冬香の心情の変化を書きたかったんだけど、僕の文才では
これくらいが大体にて普通です。

第23節 解説回ほどつまらぬモノはなし

「ううん？」

「ここは……」

「ん？」

「め、目覚めたのっ!？」

「……えと……おはよう?」

僕はどこかの部屋にいるようだ。

そして、目の前にはエンデ。

ちようど、部屋に来るところだったらしい。

なんか久しぶりに見た気がする。

「おはようじゃないよっ!？」

「一体どれくらい寝てたと思ってるのっ!？」

鬼気迫る勢いで僕の隣に駆け寄る彼女。

「おおっ……えと……まるで眠気がないことから、丸1日かな?」

「違っ!!!」

丸丸10日間よっ!？」

おおおっ!？」

どおりでエンデの姿が懐かしいわけだ。

10日も寝てれば懐かしくなるね。うん。

「……ううむ。」

それほどまでにピンチだったってことかな?」

「あ、当たり前でしょっ!？」

さつきからちよいちよい涙目で怒るような勢いの彼女は一体なんなのだろうか。

怖いだけでも。

「心配かけちゃったね。

まあでも心配するほどでもなかったよ？

ほら、結局生きてるし、僕。

僕は実は不死身の体を持っていますね・・・」

これ以上心配をかけたくないのと、そこまでオーバーになることじやないという事を伝えたくてわざとおちゃらけた感じにしたのだが、エンデはそれを許さなかった。

「し、心配するもんっ!!」

バカたれっ!!」

「ご、ごめんなさいっ!？」

なぜ怒られるのかな？

勝手に僕が助けて、勝手に僕が死に掛けただけ・・・なのだが。

「にぶちんじやのう・・・

心配だからこそ怒っているのじゃよ。

心配の果てには怒りがあると覚えておくと良い。」

「あ、フェロー。」

今来たの？」

フェローもエンデに遅れて、部屋に入ってきた。

「うむ。

それよりもじゃ。

妾も心配しておった。

というわけで、妾にも心配をかけた侘び代わりじゃ。

甘んじて受ける。」

「何を言ってばびろんっ!？」

痛い。

このビンタも久しぶりである。

「病み上がり相手に酷いと思うっ!！」

「そんなことはどうでもよい・・・おぬし、自身の体を見たか？」
「はい？」

言われて初めて体を見回すと、あれま？

いや、まて！

うんと!？」

なんじゃこれは!？」

傷口と思わしき部分には黒い何かが失った肉を補おうとしてるのか、体の節々が黒くなっている。

「えと・・・これはなんでしょうか？ふえろーさん？」

「妾にもよくは分からね。」

だが、結果だけを言うならば、じゃ。

響の体の重症箇所。

特に、霊宝剣”セルシウスキャリバー”の三割の力とはいえ、直撃を受けた胸部分と背中の一部。

そこに傷口を塞ぐ様に黒い手袋・・・から出てきた黒い物体がこれ幸いと侵食していると思われる。」

「・・・三割の力？」

あれで？

あの威力で？

あのモドキは100パーセントとか言ってたけど？」

「当然じゃ。」

かの神具・・・あの鞘は「クラウド・ソラス」と呼ばれる国宝級の鞘でな。

あの鞘の力は、魔法剣の力の増幅や気配の軽減じゃ。魔剣、霊剣は本来、魔力を常に帯びているために所有者の居場所を常に発信して隠密には向かぬ剣なのじゃが、その漏れ出す魔力も封じることが出来るのじゃ。

さらには持ち主を選ぶ類の宝剣を力ずくで従わせることが出来る。持ち主の力量如何に関わらずの。

意思を持つ意思剣の類は心を通わせることで、初めて100の力を発揮する。

その”心を通わせる”という手間を省けるのもこの鞘の凄いところじゃのう。」

「の割には三割の力しか出てなかったんだよね？」

「単にあ奴にクラウソラスを扱う技術とセンスが無かっただけじゃろ。」

本来ならば、剣に”あのような”負担はかからぬ・・・と思う。

妾も直に見たのは初めてで、話に聞いていただけの代物じゃから断言は出来かねるがの。」

”あのような”というのは、剣が上げた”悲鳴”のことだろう。

なまじ、フェローを通じて剣の感覚の一部を共有した僕としてはあの剣を開放できて本当に良かったと思う。

「あの剣は？」

「まあ待て。

順序だてて説明してやるからの。

それで、話を戻すが響があ奴を仕留めたところまでちゃんと覚えておるか？」

「うん、まあ・・・」

最後の方はかなり必死で記憶がおぼろげだけでも。

「その後、おぬしの体を守るように広がったその神具・・・黒い手

袋じゃが、ソレが収縮とともに響の体の重症箇所収まり、血が止まったの。

街に担いで運ぶ頃にはすっかり顔色がよくなったから、この宿屋を借りたわけじゃ。」

「フェローが運んでくれたの？」

「エンデと2人じゃ。」

「す、すいません。」

本当に面目ない。

「そ、そんなことないっ！！」

た、助けてくれて・・・守ってくれて・・・嬉しかったし・・・」

落ち込む僕に対してフォローを入れてくれるエンデ。

優しいなエンデは。

関係ないけど、フェローとフォローって似てるな。

フェローのフォロー・・・ギャグとしてはさすがに使えないな。

「くだらぬことを考えておらぬか？」

「うえっ！？」

なぜわか・・・じゃなくて、続きをお願い。」

見透かされてるな僕。

もしかしたら、顔に出やすいタイプなのかもしれない。

「まあとにかくじゃ。」

一晩寝かせても、一向に目を覚ます気配の無い妾が簡単な健康診断の魔法をかけたのじゃが、おぬしの怪我とは別に体の衰弱が激しいことがわかったの。

結論から言えば、あれは二度と使うでない。」

「あれって・・・アレ？」

「うむ、そうじゃ。」

黒手袋が体を丸々覆い、さながら黒騎士と言えるような状態のことだろう。

「そんなに危険なの？」

「……最初こそ精霊契約のための魔具とでも思っておったが……何が起るか分からの。」

「……変な手袋だな……今更ながら。」

不気味過ぎる。

「ヒビキ……」

「うん？」

「守ってくれるって言ったんだからね？」

「わかってるよ。」

何か不安に思うことがあったのだろう。

エンデが神妙な顔でそんなことを言ってきた。

勝手に死ぬようなことは無いさ。

少なくとも守ると言った手前、彼女の故郷に送り届けるまで安心は出来ない。

そしてさっきから気になるのだけれど、エンデの態度がやけに砕けてるといふか熱っぽいというか、心配だけど友人を心配する”ソレ”よりも変な深みがある。

どうしたんだろうか？

こんな態度ではなかった気がするけど。

「そして最後にあの剣のことじゃが……」

<ここにさっきからいるよん。>

ん？

やけにフランクかつ無邪気な感じの声が聞こえてきた。
幻聴とは僕も疲れてるな。
うん。

「幻聴ではないぞ。
言っておくが。」
フェローが言う。

わかってますよ。

声の元は霊宝剣であるセルシウスキャリバーからだ。

「えと・・・？」

セルシウスキャリバー・・・って名前だったよね？」

<そうよ。

セルシーとでも呼んでね。>

なんというか、活発な性格のようである。

「君はこれからどうするの？」

<あなたの剣になってあげても良いよ？>

「悪いけど、僕は片刃の剣の方が好きなんだけど・・・」

「ばかなことを言うでない。

こやつ・・・というか、コレの能力は後々役に立っし、おぬしの
強化にもつかえる。

帯剣するのにこれより良い剣は滅多にあるまい。」

「うーん・・・確かに、有利になるなら貰っとくほうがいいかな・・・」

<物扱いされるのはちょっと複雑ね。

物だからしかたないけどさ。>

「いや、剣だし・・・」

「ふん。

生前・・・というべきか？

おぬしは普通に”私の夢は剣になることなのよっ！”とかぬかしておった変態のくせに良く言うわ。」

<フェローは5千年くらい経っても全く変わらないわね。情け容赦なく毒舌を吐くところとかとくに。>

とか他愛の無い、話をするのもほどほどにして、そろそろ本題に入る。

次の目的についてだ。

セリアを追うというのは論外。

10日も経てば待つていることはあるまい。

お金も今のところ十二分にあり、特に稼ぐ必要は無い。となればだ。

彼女――フェンデ・フラッセインを故郷のエルゲン村に送り届けるのが当面の目的となるだろう。というかそうすることにした。

「次の目的だけど、エルゲン村に行こう。」

「フェンデの送り届けかの？」

「うん。守ってやるといった手前、安全を確保してやるころまでが切りの良いところかなと思ってる。」

「”ぶろぼーず”かと思っただのじゃがの？」

ニヤニヤとしながらこちらを見るフェロー。

はつきりいつてむかつく。

んなわけないでしょうに。

フェローのアホな言葉に苦笑する僕。

自分で言うのもなんだが、性格は良いほうではない。

かつ、フェンデとは特に長く一緒にいたわけでもないのだから惚れる理由じたいが無いだろう。

エンデは顔を真っ赤にして「あああ」とあえいでいる。

可愛いなんて思っていないからねっ!?

「あ、わかってると思うけど・・・プロポーズじゃないよ?」

「わ、わかって・・・え?

ち、違ったのっ!?

「う、うん。」

違ったんだけど・・・そりや会って数日の女の子相手にプロポーズなんてするわけないでしょうよ。」

そ、そうだよね・・・といって明らかに気落ちするエンデ。

ここで気落ちするということは、もしかして・・・け、結婚したいとか考えているのかな?とか僕が好きなんじゃない?とか思ってる。

僕だって一応は男の子だ。

色恋沙汰に対する興味が他と比べて薄いとはいえ、無いわけではない。

ちよっとした期待に、自分で思う以上の嬉しさに思わず口元がニヤケてしまうのを我慢して思い切って聞いてみることにした。

もし、これが自惚れとかだったら恥ずかしいので、一応期待は薄く聞いてみた。

「・・・そんなに残念がっていると、その・・・ねえ・・・?」

「ち、ちがっ!」

違うよっ!!

私はあなたのことなんか嫌いだもんっ!!

い、意地悪だしっ!!

「マジですかっ!?

顔を真っ赤にして憤怒するエンデ。

こういう時って、「勘違いしないでよね」うんぬんのツンデレタイルム。もしくは「うん・・・その、あなたのことが・・・好き、かも・

・」みたいなピンクの雰囲気立ち上ると思っていたけれど、全く持ってその期待は外れてしまった。

真っ向からの否定とは、ちょっとつらい。

いや、まあ予想してはいたけどね。

「いや・・・その・・・好きとはいかずとも・・・嫌われては居ないと思ったのですけれどもね・・・グスリ」

地味にダメージを受ける僕だった。

特に意味無く嫌われる、それも友人として見ていた相手からというのは結構泣いてくるものだとも学習した瞬間だ。

「え、いや・・・その・・・あの・・・ちが・・・くて・・・その・・・」
「というエンデの言葉は聞こえず。」

「はぁ・・・変わらず、にぶちんじゃのう。」

というフェローの独白がやけに耳に残ったのだった。

第23節 解説回ほどつまらぬモノはなし（後書き）

最近、忙しくて短めです。

クラウ・ソラスの原作は確かケルト神話に出てくるヌアダ（ヌアザ）という戦いの神が持つ、魔剣のことで「不敗の剣」だとか、光の魔剣だとか言う話ですが、ここでは鞘として登場させました。

第24節 身勝手な勇者時々へたれ魔王（前書き）

大体この辺までが第一章といった所です。
全三章を予定してます。

第24節 身勝手な勇者時々へたれ魔王

「あ、エンデにこれだけは言いたかったんだよ。」

何？と首をかしげるエンデ。

これは言っておかなくちゃいけない。

「その・・・」

守るとか言って守れなかったことがね・・・その、うん。

ごめんなさい。」

「べ、別にヒビキは・・・」

「結果的に守れたけど、その過程は最悪だ。

たまたま勝てたに過ぎないし、手袋が無ければあのまま死んでいた。君にも無駄に神経をすり減らすようなことをさせてしまった。」

僕が、死にかけたとき。

彼女が身をていして僕を守ろうとしたことは、今も僕の胸に引っかかっている。

僕のプライドというべき何かに大きな傷をつけた。

僕は善人じゃない。

自分のために気に食わないから助けてた。

そういう理由だから”こそ”人のためにと考えてる人間以上にその守ろうとして守られたという過程に口惜しさを感じるのだ。

あの時に彼女の説得が通じ、彼女の身の代わりに僕の命が助かったとしても僕にはその先のうのうと生きていられたのか？

それを考えると自分の心の奥底にある根底がざわめく。

彼女を助けようとしたのは善意からではなく、自分の”身勝手”だ。優しい人間ならば、勝てないであろう相手に挑むことは無い。

挑んで、状況をより悪化させるよりも自身の怒りや悲しみ、理不尽に対する憤りをあえて飲み込むだろう。

自身の無力さにむせび泣きながら、助けられぬ人間を思いたただき悲嘆に暮れる。

今にも跳ね上がりそうな自身の両足に重く重く枷をつけて。

知人を見殺しにするという罪悪感に自身の心を傷つけてでも、状況を悪化させる可能性を排除する。

しかし、僕はそれができなかった。

頭のどこかでは分かっていた。

勝てない相手に挑んで、僕が殺されたとき。

一番の被害をこうむるのはエンデであろうことを。

もしかしたら、僕の命を盾にとりエンデに無理難題を押し付ける可能性もある。

僕を殺したとしても機嫌を損ねたことに変わらず、それをエンデにぶちまけるかもしれない。

殺されるだけの僕はまだ良い。

彼女はこれから生き地獄を味わっていくことに比べたら天国とも言える。

もちろん、これは仮定の話だ。

守れたから良い。

でも、その過程で守られていた。

守らせてしまった。

一歩間違えたら自分の”不始末”を昨日、今日出会った相手に尻拭いをさせてしまうところであった。

それがたまらなく怖い。

それがたまらなく嫌だ。

たまらなく悲しい。

そんなことをさせてしまうなら死んだほうがマシだ。

身勝手を通した結果、失敗しかけた。その失敗の尻拭いを他人に、この場合においてはエンデにさせることになる。

僕が行った身勝手を”優しさ”だという人間も居るだろう。助けようとしたんだ、君は悪くない。と言う人間が殆どかもしれない。

ただ、もし、あの場で僕が容赦情けなく殺されていたら？

僕の身勝手を通そうとして、失敗。状況を悪化させた拳句、その被害者に庇われる。悪化させた張本人を助けようとして助ける被害者に守られるという状況。

それを思うだけで僕は泣ける。

そして、何よりも悔しい。

難しい言い回しだが、つまるところ一言で言うならば、自分の起こした行動の責任を彼女に被せてしまうということが、とてもじゃないが耐えられないのだ。

もちろん、”もしも”の話である。

”たれば”の話である。

殆どの人は気にしないだろう。

だが、気にしなければならぬ。

僕は気にする。

どうしようも無く気になるのだった。

なぜここまで気になるのか？

僕にも良く分からない。

そうした話をするとうエンデはただ必死に首を横に振る。

違うといたいのだろうか？

「ち、違うよっ！？」

私はこうして助かってるもんっ！？

ヒビキが優しくして・・・そして今言った”傲慢”があるから私は助

かった。

今の最善があつたつ！！

貴方が言うように、優しい人間なら私を見捨てることで私を最悪から助けようとしたかもしれないつ！！でもそれは最善じゃないつ！！ヒビキが助けようとしてくれたから・・・最悪を恐れずに助けてくれたから今の私がある！！

最善の私がある！！

その最善を導いてくれた貴方を・・・

貴方を侮辱するのは、貶めるのは例えヒビキ自身であつても許さないつ！！」

侮辱？

そうなのだろうか？

「響・・・妾は”もしも”の話をするとは言わぬ。

”それ”も大事じゃろうて。
だがな。

もつと大事なものは恐れを知り、それに恐れ、そしてそれに立ち向かうことじゃ。

恐れを知らずに立ち向かつて駄目。

それに怖れて立ち向かえなくても駄目。

誰が何と言おうと妾にとつての最善はおぬしの行動じゃ。

小さな”りすく”で大きな物を奪うことなど出来はせぬ。

本当の助けになどなるはずが無い。

大きなりすくを背負つてこそ、それに対する相応の救いを与えることが出来る。

だからじゃ。

おぬしが謝ることなど何もないつ！！」

「でも・・・ぶはっ！？」

結構真面目な話をしてたのにフェローにビンタされた。

「おぬしは結局怖かったのだろう？」

うだうだ小難しいことを言っても妾にはわかる。

おぬしは怖かっただけじゃ。

自分のした行為に伴う結果が。

誰かが自分のせいで迷惑を被る。

それが怖いだけじゃ。」

怖くて何が悪い。

何も悪くない。きっと誰だってそのはずだ。

「そうじゃな。」

悪くはない。

悪くは無い・・・が。

良くも無い。

響よ。

誰だってその怖さはある。しかし、その怖さを理解しつつもそれに立ち向かい、結果今の最善がある。

それをただ喜べ。

バカみたいに。

阿呆みたいに。」

いいのかな？

本当にそれで。

「良いに決まっておる。

なあ？

エンデよ？」

「もちろん！！」

2人の満面の笑みにを見て僕は思った。

僕の侘び、悩みなど白髪がいつから生え始めるのか？という疑問と同じくらいどうでもいいことなんじゃないかと。
うん。

どうでもいいね！！

「ごめんなさい。」

今度は守れなったことに対する侘びではなく、自分の馬鹿な発言に對しての侘び。

それを踏まえた2人は声をそろえてただ一言。

「許してあげる」

なんというか、こういうのも良いなと思ったしだいである。

そして、現在。

僕は宿のお風呂に入っていた。

10日も寝てれば体の汚れも目立つようになる。

特に体臭とか垢とかいったものが。

フェローが体をこまめに拭いてくれていたようだが（結構きわどいところもだ。恥ずかしい！！）、それで汚れが取りきれはるはずもなく。

「ああ・・・久しぶりのお風呂。
快適だ・・・」

湯船に浸かりながら、これからの指針を考えた。

エンデをエールゲンに送ったら、セリアに会いに行き無事かどうか

確認するのが一番だろうか？

でも、どこに行くとかの行き先は聞いていない。

東大陸に行くのに国境ではなく、国境付近の森を通ると言っていたのもあって無事なのがちょっと気になる。

とはいえ、わざわざ追うのもなんとなく癪だ。

とにかく一番初めの「当面の生活費のためのお金を稼ぐ」という目的は既に達した。

10万ガルドを使って馬車を買ったが、今は約15万ガルドある。

金貨は一枚1000ガルドであるからして金貨にして150枚ほどある。

これだけあれば当面は楽に過ごせるから、ギルドミッションをする必要もあまり無い。

そういえば、白竜とか馬車の話とかどうなったんだろう？

フェローが変わりに受け取って世話をしてくれてるとありがたいな。そして、最終目的である「元の世界に帰る」は現状、不可能。

レヴァンテ城にいた王様は帰る方法があるようなことを言っていたが、それを使用するには何らかの労力がかかるようなことを言っていた。

一体その労力がなんなのか？

彼の王が言った「レガート王」の首を持っていけば、見返りに戻してもらうことも出来そうだが、自身の勝手で人を殺すというのはさすがに出来ない。

僕が人を殺すのは「危険」だからという理由から。

自分の勝手で特に恨みもない相手を殺せるような教育はさすがに受けていないからして。

忍び込むというのも難しそうだ。

忍び込んでまず方法が分からない。

王様に聞くのは論外。

変わりに「レガート王」を殺せと命ぜられるのがオチだ。

個人的にはそのレガート王よりも僕に恥知らずだとか言っただけの王こそをぶん殴ってやりたい。でも、殴ったところで教えてくれるわけもなし。

八方塞がりである。

「まあ・・・いいか。

特に帰りたい理由があるわけでもないし。

にとりや冬香には会いたいけどさ。」

ミドリガメのにとりは今頃どうしているだろうか？

姉さんの試し斬りの標的になっていないか？

ちゃんと日光浴をさせてもらっているか？などつらつらと不安がよぎる。

あれ？

異世界に来て、心配するのがペットの亀のことってなんか哀しくない？

普通、郷愁とか感じるんじゃないだろうか？

全く持ってその類の感情がわかないことに、自分の今までの環境の酷さが改めて実感できた次第である。

口の中に垂れてきたしよっぱい何かは涙ではない。

そう固く否定する僕である。

ちなみに、部屋に戻ると2人はいなかった。

「あれ？どこいったんだ？」

＜2人は”ヒー君”がいるこの部屋の向かいに一部屋取ってるから、そこに戻ったよん。

今日はとりあえず、そのまま休めってさ。＞

ヒー君？

僕のことを指しているのか？

変な愛称をつけてくれたものよ。

「ふうん。」

セルシー、だっけ？」

<そうよ。何かお話でもしてくれるの！？>

「嬉々としてくれるところ悪いけど、そういうわけじゃないよ。」

やけにウキウキしてるのが声の調子でわかる。

あの勇者モドキに意思を封じ込められていたらしいから、会話が恋しいのかもしれない。

「これから、よろしく」

<ん？

その言葉が出るってことは・・・？>

「お察しのとおり、僕の剣になってもらいたいな。
いや？」

<まさかつ！！嬉しいよん！

ありがとん、ヒー君！！>

こうして、僕の相棒がまた増えたのだった。

次の日。

三人で集まって僕は開口一番にこういった。

「というわけで、エンデを故郷まで送り届けるよ。」

「そ、そこまでしてもらうわけにはいかないわよ。

た、ただでさえ助けて貰って肩身が狭いつて言うのに・・・」

「まあまあ。」

気にしない気にしない。

乗りかかった船という奴だし、故郷に戻りたいでしょ？」

僕があの時言った、約束なのだからきっちり守り通させてもらう。勝手だとは分かっているけれど。

「で、でも・・・貴方がしたように、私にだって”身勝手”はある。

」
「・・・？」

身勝手とな？

それだけ聞いても話が見えない。

「私は貴方があのモドキを殺す直前に、言ったもん。

私の・・・

その。

私の・・・す、すべ・・・全てをあげるって・・・だから守ってっ
て。

これは私の勝手な・・・助けられたことに対する約束・・・契約？
そんな感じなもので・・・守られた以上・・・その、あげないと・・・
あつてもっ！！

そのえっちなことは無しだからねっ！！

だ、駄目なんだからねっ！？

べ、べつにその、そういうのは順序を追って・・・

わ、私美少女だしっ！！」

顔を真っ赤にしてたどたどしくも、早口にまくし立てるエンデ。

ぱーでうん？

ほわい？

わっと？

なんですって？

もう一度言ってくれませぬかね？

最後の一言は文脈的に分からなかったし、イラついたのであえてス
ルー。

「そ、そんなこと言ってたっけ？」

「言った。」

約束したもん。

自分の全てをあげるっていったら、ヒビキもそれに答えて”今度こそ守る”って。

これって私の言葉を受けて約束したってことでしょ？」

エーーーーー！

！

初耳ですけどぉ！？

いや、聞いてはいたのだろうが、あの場の空気とノリでね。

うん。たぶん、僕としては不安を取り除くために、きっちり助けるといふ気概を示すため、自分自身を奮い立たせるために答えたただけだったと思うんだけどもっ！？

台詞の内容を深く考えず、ただ彼女の望みを受けてそれを達成する。それだけを考えて・・・うん。

勢いで突き進むのイクナイ。

「えっと・・・それでエンデは何が言いたいのかな？」

「ヒビキについていく。」

全てをささげるといった以上、中途半端では終われないし終わりにくい。

ヒビキの役に立つし、たちたい。

盾になれというなら盾になる。

矛になれと言うなら、死を恐れず矛になる。

だから私をそばにおいてください。

お願いします。」

なんですと！！

がつでむ！！

じーざす！！

おーまいごつどつ！！

え？

何？

あのモドキから開放してやったら、次は僕に縛られるとか？

この子ってエムなの！？

多分、謝礼の意識も含まれてると思うけど、重いよっ！！

別に開放されたんだから何もかも忘れて、村で幸せになればいいのにつ！！

「いや・・・別にそんな約束とか意識してなかったし・・・礼つてことならそこまでしてもらわなんでも・・・」

「そうだね。」

私のコレはただの礼で”も”ある。

だからこそ、私の”身勝手”って言ったじゃない？

私は貴方がおいていこうと、引き剥がそうとしてもどこまでも付いて行くの。

見失えば、何年かけても見つけ出す。

貴方の・・・ヒビキの意思なんて関係ないもん。

逃げられたら、もちろん私は貴方を追い求める。

逃げられたら、私は追い求めるだけという確実に不幸な日々を過ごすことになるんだけど？

おいては行かないよね？」

という彼女の上目遣いはまあ可愛くて、小悪魔的であった。

いや、小悪魔というよりは鬼の類に違いない。

身勝手なあなたに私を諫めることは出来ないでしょ？と言外に言っている。

さらには置いて行くことがあれば、私は不幸になる。

私を助けるような”身勝手”を持つ貴方ならそれは望まないよね？
と脅しまでかけてきているのだ。

なんという悪魔か？

オンナノヒト、コワイヨ。

「分かったよ・・・これからよろしくね。」

泣々僕が折れたのだった。

まあ女の人に口げんかで勝てる男はあまりいない。

旅の仲間が増えるというのも悪くは無いはずだ。

「でも、一度は戻ったほうが良いんじゃない？」

「うん、でもそれは・・・」

とエンデが言ったところで、街がなにやら騒がしい。

何事だと思って外をのぞこうとすると、フェローが不吉なことを言
った。

「この気配はある程度の錬度を持つ兵士じゃの。
おそらくは勇者を殺したことが引き金じゃ。」

そっとうフェローの顔は楽しそうだ。

第25節 フェローとエンデ（前書き）

二回、原稿が飛びました。

我が家のパソコンはポンコツなのです。

第25節 フェローとエンデ

部屋の窓から外を眺めると、重厚な鎧を着けた兵士達がザックザックと足音を立ててルベルークの街のいたるところを闊歩していた。装備が統一されているところから冒険者^{チエス}とは違うようだ。

「な、何？あれ？」

「ふむ。」

まあ、10日も経てばこうもなるのう。」

「あれはレヴァンテ王直属のレヴェンテ兵。」

たぶん、重要な駒を一つ無くした事に対する偵察隊・・・もしくはあのモドキに持たせた宝具のセルシーちゃんと神具のクラウ・ソラスを回収しに来たつてところだと思う。

あのモドキ自身は勇者の中でも中の中つてところだったけど、神具の力は絶大だからね。」

エンデが僕の疑問を答えてくれた。

あのモドキですら中の中程度とは、勇者というのはやはりそれだけでチート級の存在のようである。

二度と相手したくない敵だ。

上の上を相手にしたら僕なんて塵と化すだろうね。

もちろん、手袋の力を使えばその限りではないけれどあれは反則技のような気がしてあまり使いたくない。

そもそもアレはそうそうポンポン使えるような力ではないし。

「見つかるのは・・・まずいよね。」

「うん。もちろん。」

見つければよくても東大陸へ侵攻するように命令されるし、悪くて勇者を殺したとして指名手配プラス打ち首かな。」

エンデのその言葉に血の気が引く。

レヴァンテの王はやっぱり好きになれない。

「ん？」

東大陸への侵攻？

レヴァンテの王様は”レガート王”の討伐をしろって言うてたけど
な・・・」

「レガート王は霸王だか・・・え？」

「ぬ？」

おっと、そういえばエンデはおろかフェローにも話してなかったんだっけ。

僕の不幸な境遇を。

フェローは魔力体でリネティアと僕の会話を聞いていたようだけど、
勇者がどうのとかいう話はしなかったしね。

この際だから話してしまおう。特別秘密にすることじゃないし。

「えと・・・じつはかくかくしかじかで。」

エンデはちよつと驚いた後に、哀れみの目を。

フェローは大声で笑いやがった。

今の僕なら姉さん以外の生き物を殺せる！

よつて、フェローはジェノサアアアアアイドツ！！

というか、エンデの哀れみの目がマジで辛いです。

「あ、えと・・・ごめんね。」

あの馬鹿があんなに良い思いして、なんでヒビキはここまで・・・
って思うと余計に・・・それにヒビキが勇者だったらよかったの
に・・・」

「あれに比べたら、誰だつてマシに思えるよ・・・」

哀れみの目を向けないでくれっ！！

「おほん！」

それで、どうやってこの街から出るの？

多分、検問がしかれてるよね？」

「うむ。」

ちゃんと考えておるから、心配するでない。」

「どんな作戦？」

「強行突破じゃー！！」

「作戦って言うかなソレっ！？」

もう少し頭を使った作戦が良い。

というか、作戦もへったくれもない。

「味噌つかす頭の癖に文句を垂れるではない。」

「それはちよつと酷すぎませんかっ！？」

「なんじゃ？」

味噌は味噌でも白味噌じゃぞ？」

「僕が味噌の種類で文句を言ってるんでもっ！？

とりあえず医者いつてこいっ！！」

「ふっ。」

安心するがいい。

素でこれじゃからな。」

「手遅れなのっ！？」

「赤味噌でも良いのじゃが・・・妾の好みには合わぬ。」

「好みの問題じゃねえっ！！」

「私は赤味噌の方が好きかな。」

「エンデまでっ！？」

あれ？

エンデも混ざってますよ？

「というか、味噌の話ではないというのがなぜわからない!?
というか、君はボケ要因だったのですねっ!?

「味噌は味噌でも脳みそな味噌はな〜んじゃっ!?!」

「あれ!?

「いつのまになぞなぞへ!?

「てか、問題の段階でわけが分らないっ!?!」

「正解は脳みその形をした味噌じゃ。」

「な、なるほど・・・確かに・・・ってなるかいっ!!

「そのまんま上にシユールすぎるわっ!?!」

「脳味噌なだけにの。」

「上手くないからねっ!?!」

「その・・・でも・・・ヒビキが白味噌のお味噌汁のほうが好きだ
って言うのなら・・・そ、その、私が毎日白味噌のお味噌汁を作
ってあげても・・・イケド・・・?」

顔を真っ赤にして、ちよぼちよぼ口を動かすエンデ。

なぜ、味噌の話で真っ赤になるのか分からない。

そして、その話はもう終わってます。

「とりあえず、味噌から離れようか!?

「うん!?!」

「と言うと「・・・にぶちんばか・・・」といって不機嫌になってそ
つぽを向いてしまう。」

わ、わけがわからなすぎるのですが?

「にぶちんすぎるの・・・」

いくら回りくどいとはいえ、気づくには十分なれべるだと思っのじ
やが・・・」

「・・・?」

とにかく、話を戻すけどそれしかないの？」

「うむ。」

もともとはあれらが来る前に離れようと思ったのじゃが・・・ヒビキが倒れておったからのう。」

ごめんなさい。

面目ないです。

「ひ、ヒビキは悪くないもんっ!!」

わ、私を助けてくれただけだし、ヒビキを責めるのはお門違いでしょっ!ちびっ子っ!!」

「ち、ちびっこ言っなっ!?

妾にはフェローという気高い名前がある!!」

さらに言えば、一億歳じゃ!!」

「い、一億!?

そんな見得を張ったって信じられるわけ無いでしょっ!?」

「ほ、本当じゃもん!!」

フェローがちよっと泣きそうである。

いささか以上に気にしてることらしい。

このケンカをとめるべきなのだろうか?

僕は。

でも、女同士のケンカの仲裁なんてしたことがないし怖いし正直とつとこの場から逃げたい。

布団に包まっていたい。

一応言っておくが僕はへたれじゃない。

平和主義者なだけである。

本当の平和主義者は戦い自体を避けると思うんだ。

だからこそ、僕はここから全力全開で離脱するのだ。

決して女性同士のいさかいに関与できるほどの甲斐性を持たないと

カミニチカッテホントウダヨ。

「第一、それが本当ならババアじゃないのっ!？」

「ば、ばあつ！？」

これはちよつと見てられない。

というか、止める事が出来ない時点でここからさっさと逃げるに限る。

さて、逃げ・・・としたところで、フェローが泣いてしまったのだ。エンデもちょっとオロオロしてる。

僕？

僕はもっとオロオロしてますよ？

[illegible]

泣きたいのはこっちだぜこんちきしょうっ！！

目から溢れてくる自然的目薬を微妙に垂らしながら、僕はフェロンの頭を撫でてやる。

「大丈夫、フェローはババアじゃないよ？」

「ほ、ほんとうかのう？」

ゴボハアツ！！？

寄り添いながら、服を裾を弱い力で引っ張る。

なおかつ上目遣いというこのコンボ。

弱った可愛らしい声もまた脳髓を痺れさせる。

おもわず吐血してしまうほどに強烈な一撃であるっ！！

ロリコンの人ならば即お持ち帰りしてしまうレベルであろう。

一応言うておくと僕にその気はない。

僕の好みは……わかんないけども。

「たとえば、ババアでも僕の相棒は可愛いフェローだよ。僕は気にしないから大丈夫。」

ね？」

「う．．．うん．．．って何を言っておるかっ!？」

「ひでぶるんしっ!？」

照れ隠しと思われるビンタを受けて倒れこむ僕。

最初こそ自分から引いて威力を殺していたのだが、最近のフェローのビンタは熟練度が上がっており威力がとんでも切ないことになっていた。

僕の身はいつまでもつのやら。

「．．．甘やかしすぎだと思う．．．私も撫でて．．．いや、なんでもない。」

ヒビキなんて爆発すればいいのに．．．」

前半は聞こえませんでしたけど、後半はバツチり聞こえましたよっ!？」

爆発しろって!？」

僕ってなんでそこまで恨まれてるのっ!？」

少なくとも嫌われる行為をした覚えは全く持っていないのに!？」

「に、にぶいのう．．．」

ほんのり頬が赤いフェローはさっきまで泣いていたと思ったら、僕に呆れた目を向けてくる。

何が言いたいんだ君は？

「まあ．．．よいか。」

おいおい直していけばよからう。

「・・・そう簡単に治ると思えんが。」

「私もその時は協力する。」

何がなんだかわからないが不吉なことを言ってるのはなんとなくわかるよ？

「話を戻すがこれからすぐに強行突破として、この街を出る。

そして、次の目的地はロロリエじゃ。」

「うん。それは良いけど・・・本当にそれしかないの？

夜まで待つて検問をやり過ごすとか・・・」

「おぬしは馬車を買ったし、ブリッドドラゴンの白竜もある。

それは不可能じゃ。

馬車は代わりを買えばよいが白竜はそうそう手に入らぬし、ここで置いていけばあの白竜はこの異国の地で苦心するじゃろうな？

妾としては良いが・・・響は良いのか？」

「・・・無理だね。」

「そう言うかと思ったからこの作戦にしたのじゃ。

さらに言えば、夜まであやつらも待つまい。

すぐにでもこの宿屋に検査の手が来るじゃろう。

そのためでもある。

作戦の具体的な内容は馬車に乗って、妾がはったりの大規模魔術を外に打ち放つ。

それに検問の兵が注意を引かれてる間に、妾たちは馬車で強行進行。そのまま、振り切る。」

それが一番妥当な作戦か。

「でも、追いつかれない？

そして、下手したら指名手配されてしまうんじゃない？」

「こちとら白竜がある。」

今は牧場主にある程度の世話賃を渡して面倒を見てもらっておるが・

あの白竜ならば物理的な力で上位竜種の弱い奴並みの力を持つ。

追手を撒くという点では問題あるまい。

いざとなれば、エンデが持つてゐる弓で牽制をかけつつ走れば十中八九逃げる事ができるじやうて。」

「白竜といえば……初めて白竜を見たエンデの反応は面白かったの。」

L

「うなっ!？」

ん?

いきなりのフェローの話題フリ。
エンデの顔が一気に赤くなった。

「初めての白竜だったらしくての？
失禁したのじゃよ。」

「ち、ちがつ！？」

も、漏らしてにやんかないっ！！」

フェローはニタニタとたまに見せるイヤラシイ笑みを浮かべながら、のたまう。

エンデは舌を嚙んだ。

失禁……って？

「それって……おしつ——」

「言うなああああああああああああああつ！！」

「いや、僕はそれくらい気にしなぶるがっ!？」

拳が思いつきり僕の鳩尾にめり込んだ。

「こいつあは効くぜっ……！」

とか思ってる最中も現在進行形でプロボクサー並のボディブローが僕の鳩尾に襲い掛かる。

具体的に言っと”胃”に。

もうやめてっ！僕の胃のライフはとくにゼロよっ！！

「ぐぶはっ！？死、死ぬぐはっ！？げばふっ！？ぐぶるっしやあっ！？ちょ、がへっ！？痛いってばぶるっ！？ちよっと死ぬびんむっ！？かんべっむっ！？してくだばらがはっ！？」

あれ、お花畑が見えるや。

僕が好きな花。

百合のお花畑である。百合の形や香りがたまらなく好きだったりするのだがこれまた良い夢が見れたものよ・・・

我が生涯に一片の悔いーーーーー

「ありまくるわあっ！！

がはぶっ！？」

「ひうつ！？

あ、あれ！？

そ、その、その、ごめんなさい！？

ついやってしまったっていうか・・・い、今、治癒魔術かけるからっ！！」

ようやく照れ隠しであろう攻撃行動を止めてくれたエンデ。

女の人は決まって照れ隠し攻撃をしてくるのだろうか？

だとしたらとてつもなく嫌なのですけども。それともこの2人だけ？

「あの、そのね？

その・・・そういう・・・行動？

も、もら・・・粗相？とかそういうのって、一般男性から見たら、みっともないというよりはむしろ可愛いと思われるところだろうか
ら大丈夫だと思うよ？」

とりあえず、恥ずかしすぎて、みっともなさすぎて今にも泣きそう
って感じのエンデにフオーを入れる。

怖すぎてついついそういうことになるってのはむしろ可愛いと思う。
男の場合はだらしがない、情けないと評されるだろうけど。

「・・・ヒビキは？」

わ、私のことヒビキはみっともないとか、情けないか思ったりし
ないの？

そ、その・・・も、も・・・漏らすってことに・・・その・・・
「そんなこと無いよ。」

むしろ、それくらいの方が女の子らしくて僕は好きだよ。
竜なんて誰だって怖いだろうしさ。」

「す、すき・・・！？」

僕だって、ちびるというほどではないが怖くないというわけではな
い。

むしろ、失禁の一つや二つ当然だろう。
かくいう僕だって一度だけ失禁したことがあるんだし。

言わずもがな、相手は姉さんなのですけど・・・竜を見て漏らさ
ない僕にそれをさせる姉さんって本当に何者だろうとほんと疑問
を抱く。

というか、血がつながってないんじゃないか？

家族は皆々変態だらけだし、僕だけ常識人って・・・きっと僕は捨
て子なんじゃないんだろうか？

捨て子だとしてもまるで悲しさを抱かないのが、また不思議だ。
むしろ嬉しかったりする。

「ど、どうしたの？エンデ。」

「べ、別になんでもないよ！ー！」

顔を真っ赤にさせて、こちらをじっと見つめるエンデ。
心なしかぽーっとしてる気がする。

まだ恥ずかしさをぬぐえてないのかな？

「・・・にぶちんじやのう。」

失敬な。

僕のどこが鈍いというのか。

エンデの心情をきっちり理解しての的確なフォロー！
こんどから僕の名前は”山瀬 響”改め”フォロ瀬 響”と言って
も過言ではない。

「で、フォロビキよ。」

「名前の方に使うとなっ！？」

「そろそろ、出んと逃げる事が出来なくなるぞ？

とつと牧場で白竜を引き取って馬車屋へ向かうぞい。」

「う、うん。」

じゃあ行こうか？

準備は出来てる？

フェロー、エンデ。」

「万全じゃの。」

「私も大丈夫。」

「じゃ、行こうか。」

こうして、僕達はルベルークの町を出たのである。

第25節 フェローとエンデ（後書き）

百合の花は作者自身も大好きな花です。

作者名はそこから来てたりします。

原稿が飛んだ時のヤル気の下降具合と来たらもうね。

ぶっちゃけ、一度目二度目三度目ともに一緒なのは無かったりします。（笑）

一度目と三度目ではだいぶ違う仕様になってしまいました。

第26節 味方はシロだけ。

というわけで、僕達は現在。

ロロリエへと向かう街道を走っていた。

白竜は僕を主人と認めてくれたらしく、おとなしく言うことを聞いてくれる。

「あ、あれはやりすぎだったんじゃない？」

「そうかのう？」

あれでも3割程度じゃぞ？」

<・・・私から見てもあれはないわ。>

「やりすぎに決まってるでしょっ！？」

貴方何者よっ！？」

あんなバカ魔力で・・・しかも、あれって古代呪文じゃないっ！？」

何食わぬ顔のフェローに僕とセルシー、エンデはつつこんだ。

いや、ねえ。

作戦は”フェローのハツタリ大規模魔術（霊力も持つフェローにとつては奇跡でも良かったが、奇跡より魔術の方が得意だとのこと）で注意を引いた隙に検問を強引にすり抜ける”ということだったのだが、如何せんその”ハツタリ”がとんでもなかった。

スターブレイクという魔術だそうで、文字通り星を破壊しかねないほどの大規模魔術である。

極太の荷電粒子砲……もといビームといったところである。

どこかで聞いたことがあるのだが、荷電粒子を放つには事実上不可能なほどの電力量が必要だとかいう話から、理論的、技術的には実現可能でも、質量的に不可能とされる技術だとか。

そのために兵器への転用はもちろん人型ロボットに搭載するなど夢

のまた夢である。

だからこそ空想上にしか存在なしえない武器らしいのだが、さすがファンタジー。

たかが1人の人間（精霊だけど）が放てるとはついぞ思いもよらなかった。

しかも、これは本来の荷電粒子砲が持つ弱点である”一定距離を飛ぶと急速に減速し、停止する”という弱点を見事克服してるらしく、空に向かって放ったスターブレイクは僕の視認可能距離から離れても大空に舞い上がっていったようである。

早い話、射程距離がバカすぎて笑うしかないレベルだった。

同じようにそれをバカみたいに見上げていた検問兵達を馬車で引き飛ばし、（ごめんなさい）ロロリエに向かっているのだ。

追手は今のところいないようである。

ただ、背後で「白竜を持つ馬車を各国で指名手配しろっ!!」「みたいな怒号が聞こえたのは気のせいだと思いたい。

「まあ・・・それはいいや。

それよりも、この白竜かなり良いね。」

「うむ。

さすが、妾が認めた竜じゃ。」

「いや、フェローは認めるどころか殺す気満々だったじゃん!？」

まあ、それのおかげで僕の左腕はまだつながっているわけだけれど。

<あなたらしいのね。

ヒー君はこの子の昔を知らないようだから言っておくけど、この子って結構ぶつとんでんのよ?>

「剣になりたがるような主にそれを言われたくないわっ!!」

「いや、だいたい分かってきたよ。」

とかなんとか他愛の無い話で盛り上がっているとエンデが一言。

「・・・ねえ？」

この子に名前は付けてあげないの？」

この子とは現在、僕の目の前でドツタドツタと走り動く白竜のことだろう。

言われて見れば白竜という俗称やブリッツドラゴンという種名で呼ぶのもかわいそうな気がする。

「・・・うん？」

何が良い？」

「妾はカニミソが良いと思うぞ。」

「なぜにっ!？」

「私は赤味噌のほうが良いと思う。」

「味噌ネタ再来っ!？」

「カニ味噌といえば美味で有名。」

そのカニ味噌と同じ名前をつけられるのだから・・・」

「生臭そうだね。」

僕だったらそんな名前、死んでも嫌だ。

「カニ味噌は私が嫌いだもんっ!！見た目、気持ち悪いし!!ヒビキだってそう思うでしょっ!？」

「いや、そもそもカニ自体食べたこと無いんだよね。」

エビならともかく、我が家ではカニというものを一切たべなかった。単純に父さんと母さんがあまり好きじゃないからである。

どうも、食べた後の後味で吐き気を覚えるだとか・・・実際、父さんは吐いたことがあるらしい。

個人的には少し高級食材というイメージがあるが、エビと変わるま
いと思っていてあまり食べたいとも思っていなかった。

それにしても、この世界でも力二っているんだな。

一度くらいは食べてみても良いかもしれない。
そんな僕が力二味噌などという食材を食べたことはもちろん、見た
ことすらなく、どんなものなのかという外見すらうる覚えだった
りする。

とか言う話はどうでもよかった。

「きつとヒビキだつて嫌いだよっ!!」

あまり美味しくないもんっ!!」

「いやいや違うなっ!!」

妾の契約相手じゃ!!

妾の好きなものは響の好きなもの!じゃっ!!」

「契約つて・・・まあそれはおいといて、妾の好きなものは――
なんて無茶な理屈聞いたこと無いわよ!!」

バカじゃないのっ!?

これだからちびっこは・・・」

「ちびっこ言うでないわっ!」

「ひあんっ!?

い、痛いじゃないっ!!

美少女たる私の顔に傷がついたらどうしてくれるのよっ!?

ピンタで悲鳴をあげるエンデ。

ピンタの犠牲者がまた増えたか。

「美少女とな・・・ぷっ。

片腹痛いわ。」

「う、うるさいわねっ!?

笑うこと無いじゃないっ!!

幼児体系のくせして!!」

「た、体系は関係ないじゃろうがっ!!」

第一、単純に妾の方が若々しいというだけじゃっ!!

これからボンと大きくなっていくのっ!!

それに、どんな男だつて、すでに熟してぴーくの過ぎ気味で痛み気

味な果実など吐いて捨てるわっ!!」

「ま、まだ私は若々しい果実よっ!!16よっ!!?16!!」

まだまだ、もぎたてフレッシュなんだからっ!!」

「25ぐらいに見えたがのう。

いずれ、その胸も垂れて見れたものではなくなるわっ!!老け顔め
っ!!」

「ふ、ふけっ!?

お、女のひがみはみつともないわよっ!?

姉さんは色々なところへ武者修行するがてら力二を幾度か食べたこ
とがあるそうだが、その感想は”それほどでもないわね”だ。

僕としては、力二よりイチゴが食べたい。

あ、そういえばイチゴ柄パジャマが喋れるようになるまで、あと1
8日ぐらいだ。

楽しみだな。

目の前で言い争う2人の少女達を見ながらそんなことを思ったしだ
いである。

ちなみに、僕から見てエンデが老け顔というのはちっとも思えない。
負け惜しみだろうか?フェローの。

普段ビンタされてるので、その辺でからかおうと思ったけれど、触
らぬ神に祟りなしということわざもある。

やっぱり黙っていた。

「お前の名前は……ブリツッドラゴン……白竜……白

竜からとってシロでいいや。

どう？」

白竜にそう話しかけるとグルツと一声。

”それでいい。”という感じだ。

安直だけど、下手に意味込めて変な名前になるよりかマシだろうと思いつつ。

白竜改めシロの手綱を握りなおす僕であった。

しばらく走っていると、日が暮れたため良い感じの野宿場を探して少し街道を外れた。

今夜はここで野宿だろう。

バックパックから干し肉と数種類の野菜、そして簡素な調理器具を取り出して調理を開始する。

今日の晩御飯は野菜炒めだ。

かるく塩を振りかけて完成である。

学校の調理実習以上の料理をしたことのない僕でもコレくらいは出来る。

あと目玉焼きとか、目玉焼きとか、目玉焼き。

それが僕の得意料理だ。

あとは卵そぼろ。

低温で熱しながらかき混ぜていくのが、細かいそぼろを作りたいときのコツ。

魔術的な異空間を利用したバックパック内では卵が割れるなんてことも無く、本当にバックパック仕様である。

それでも限界容量というのはあるけれど、もう一つくらい買つのが良いかもしれない。

「さて、ご飯ができたよ。」

「ふむ・・・また野菜炒めかの・・・」

「へえ・・・ヒビキって料理できるんだ。」

「ちよつとただけだね。」

「それも偏った・・・」

「それでも男の子が料理できるってのは凄いと思うよ?」

「そ、そうかな?」

エンデのほめ言葉に悪い気はしない。

むしろ結構嬉しい。

もつと褒めて欲しいくらいだ。

いや、まあこんなことくらいであまり褒められてもかえって居心地が悪くなるからこのくらいがちょうど良いのだからうけど。

「せめて、ればーとりーがもう少しあればのう・・・」

「じゃあ食べるなよ。」

「たわけ。」

「ぐぶはあっ!?!」

「妾は成長期じゃぞ?」

その妾に飯を食べさせないなどと・・・虐待も良いところじゃ。」

「だからって、ビンタは理不尽すぎませんか?!?」

<このむちゃくちゃぶりは昔からのよ。>

「ガキ大将って感じね・・・フェローって。」

「ちみっこいくせに。」

「なんじゃと?」

「別に。」

また陰悪ムードに入っただので、ぶたれてヒリヒリする頬を撫でつつ

僕はシロのところへ非難した。

シロ・・・僕の気持ちを分かってくれるのはきつとお前だけだよ・

「シロ」。

飯だぞお？」

ちなみにシロの飯は道中に見つけたソルトドッグである。

しょっぱい皮を剥いで、それをあげる。

皮を剥ぐのもすっかり慣れたものよ。

技術的な意味でなく、精神的な意味である。

モンスターの素材剥ぎなどをやっていったり、死にかけたりしたここ数日間ですっかり大丈夫になった。

最初はもちろん抵抗があっただけで、それも今となってはどこへやら。

人間って凄い。

伊達に地球を支配してないわ。

「グルッ！」

”待ってたぜっ！！”といわんばかりの泣き声。

ちなみに、この子はメスらしいので”待ってたわ”の方が正しいかもしれない。

もちろんこの子が肉体的にはメスでも精神的にはオスという精神的病気の可能性があるかもしれないけど。

その場合は”待ってたぜ”で当たってるのだが、一体どっちが正解だろうか？

などと、”人間の産毛は何本生えているか”というのと同じくらい下らない事を思いながら僕は野菜炒めを頬張ったのだった。

ちなみに、そのことを腰に差しているセルシーに言ってみると、笑

われた。

分かっていただけね。うん。

その日はセルシーに見張りを任せて僕はいつものような浅い眠りではなく、普通にぐっすり眠れた。

追伸。シロがソルトドッグを噛み砕くグロイシーンがまぶたの裏でちらついて、中々眠れなかったのは辛い。

次の日。

早朝に馬車を飛ばし、流れる景色を尻目にしばらく走っていると盗賊らしきやつら10数人に出くわした。

なにやら話がありそうなので、聞くだけ聞いてやろう。

盗賊みたいに見えるだけかもしれないし。

「何？」

「あんたら？」

「いや・・・なに。」

金目の物と女を置いていけば命まではとらねえよ。げへへ。」

「シロ、いっちゃって。」

「グルッ」

”はいはい。”と僕と同じく呆れたような目を結局盗賊だったやつらに向けつつ、シロは足を踏み出した。

もちろん盗賊たちは跳ね飛ばされる。

「お、おいてめえっ!？」

人でなしにもほどがばふっ!？」

「か、かしらあっ!？」

だいじょうぶはらっ!？」

「ぎゃっ!？」

「おい、にげばらっ!？」

10数人の盗賊をかまわず引き飛ばしてレッツゴー！
はっはっはっ。

盗賊に人でなしと呼ばれても痛くも痒くもないね。

シロに跳ね飛ばされた盗賊4、5人は変な落ち方してたし、しばらく動くこともできまい。

魔物にでも食われておけってな。

「シロって本当にすごいなあ・・・はい、ごほう・・・いや、”お礼”の干し肉。」

「グルッ!」

ご褒美という言葉は上から目線であまり好きじゃないため、お礼と
言い直した。

結果的には一緒だけど、これから短くはない期間を共にする仲間である。

ここはやっぱりね。

それを知ってか知らずか、ご機嫌のシロ。

今回の”グルッ”は”たりめえだっ!”って感じかな。

「うん?どうしたのじゃ?」

「何でもないよ。」

ただの盗賊だった。」

「そうか、確かにの。」

その辺の盗賊なんて下手したらその辺の魔獣よりも弱い。

「いやいや、まってよっ!？」

盗賊相手になんでもないって・・・ヒビキ!

大丈夫だったのっ!？」

「大丈夫だつて。」

「というか、僕の力量は分かつてるでしょ？」

「そ、それでも・・・心配にはなるもんっ!!」

「ご、ごめんなさい・・・」

「ふん、所詮、小娘じやの。」

妾の響がそう軽々しく負けるわけ無いじゃろうがつ!!」

「誰が、あなたのヒビキよっ!!」

私のに決まつてるでしょっ!!

ま、守ってくれるって言つたし・・・私だつて・・・わ、わたし、私だつて全てをささげるって言つたんだからねっ!!」

どっちのものでもないと言いたいけど、矛先がこちらに向くと困るのでシロの手綱を握ることに集中したフリをする僕。

あれ？僕ってここまでことなかれ主義だったっけ？

否っ!!

断じて否っ!!

男たるものそんなことではダメだっ!!

やはりツツコムべきところではツツコまなければっ!!

「いや、僕はどちらのものでも・・・」

「ヒビキは黙って（おれ）っ!!」

「す、すいませんっ!!」

僕よわっ!!

我ながらよわっ!?

<情けないヒー君。>

「うるさいな・・・ほっといてくれ。」

<剣に対しては強気になれるみたいね。

情けないどころか哀れだよん。>

「・・・僕って哀れかな？」

<それなりに。>

「慰めて欲しいって言ったら軽蔑する？」

<もう言ってるじゃない。>

「ですよね。」

<まあ・・・気持ちは分かるわよ。>

「気休めはよして。」

<そうなるから言えることはなくなるわね。>

「喋る剣なんて嫌いだ。」

<私は嫌いじゃないんだけどなあ・・・面白いから。ぶつ。>

「・・・」

<一応、慰めたつもりだけど・・・どう？>

「僕の味方はシロだけさ。」

<まあそうね。

私は面白ければいいし。>

「・・・否定してよ。」

剣とおしゃべりもほどほどに、ロロリエに付くと同時にさらにも
う一つの困難が待っていたのは不幸としか言うしかないだろう。
ロロリエでも検問がしかれていたのだから。

第26節 味方はシロだけ。（後書き）

次回は挿し絵いれるかもです。

また、キャラ紹介ページももう少ししたら作るつもり。

まだ出てないキャラがいるのですよ。

既にイメージがあるから余計なことすんなや！とかトーシロの挿し絵なんざ見てられっか！とか思う方はお手数ですが、挿し絵表示設定を無しとして貰うと幸いです。

第27節 女装なへたれと愉快な仲間たち（前書き）

今回は挿し絵ありです。

前ページの後書きでも書いたように、トーシロの絵なんざ見るに足らんとか、萌え系？って言うのかな？

そういう絵柄が苦手な方は挿し絵表示設定を“しない”に変えてくださいませ。

また、めんど…じゃなくて、ペン入れはしてないので見づらいやもしれないです。

第27節 女装なへたれと愉快な仲間たち

ロロリエを目前に。

なぜに、このようなことになっているのか甚だ疑問である。

場所はロロリエから少し離れた丘の上。

その街道脇である。

そして僕の服装を見てもらいたい。

簡素な上着に、簡素なスカート。

はいそこおっ！？

思ってたね？

思っただろっ！？

なぜまた、スカートなどをはかねばなんのかとっ！！

すなわち女装をせねばなんのかとっ！？

わざわざエンデの魔法で胸を少し膨らめるといふ念の入れよう。

そしてなぜまたハイニーソックスなどという、男が着るという使用用途において滑稽としか言えないこの着衣を履いているのか？

我ながらこんな生き恥をさらしていることにほとほと泣きそうなのだ。

というか、泣いていい？

背後でバカみたいに笑いまくるフェローに対して「笑うなよおっ！？」とほぼ泣きそうになりながら言った物だが、そんな僕の悲痛の叫びを完全に無視して笑い続けるフェロー！。

エンデなら怒ってくれると期待して視線を向けてみれば、フェローのその隣でぽつと顔を赤らめて見とれてるだけ。

そんなに見とれるほどの見た目はしていないっ！！

と声高に宣言しても、「うん・・・わかってるよ・・・良い感じだもん」とまるで話の通じないエンデ。

それを見た、剣とシロだけが同情の視線を向けてくれる中。

僕はただただ、恥ずかしさを震えて我慢するしかないのであった。

とりあえず、そうしてこうなったのか。

いまから説明したいと思う。

> i 1 6 2 2 3 — 2 2 3 8 <

早い話、予想以上に手際よく指名手配されてしまったのが問題だった。

ルベルークで強行突破したために、指名手配の覚悟はしていた。

だが、各国への連絡、対策は少なくとも一週間はかかるという目論見だったのだけれど、そのあてがすっかり外れたのである。

なんと、ロロリエに到着するまでの1日半ほどで、検問がしかれるという超スピード。

これはこの世界の政治体系からすれば信じられないスピードなのだ。もともとこの世界にある街はただの街というわけではなく、各々の街が一つの小国として機能しており、その小国一つに王が1人ずつ。そして、その小各国を纏め上げる王達の王がいる。

いわば大陸の王だ。

どこかの小国で起こった事件に他の小国も連携して追い詰めるという対応が非常に取りづらい厄介な形をとっていたハズ。

そのために今回のことも、その辺の小国の王が1人わめこうと他の小国に協力を求めるにはそれなりの時間があるだろうという打算の元、ロロリエにノコノコとやってきたわけだが、そうもいかないようである。

ルベルークとロロリエの王が普段から密接な関係をとっていたのか。それとも、僕達には分からない伝達手段があるのか。

はたまた実はレヴァンテの王は西大陸を纏め上げる国王で、他の国

に言うことを聞かせる権限があったのか（東大陸側の人間からすれば霸王）。
閑話休題。

とにかく、ロロリエの検問を確認した後、すぐにこの丘まで戻って作戦会議となった。
その内容が以下である。

「これって・・・まずくない？」

ロロリエに入れないよ？」

「じゃのう・・・。」

まあ本来なら・・・入れなくても良い。」

「というか、この調子じゃ他の街に言っても多分一緒よ？」

「うん・・・その辺は大丈夫。」

ロロリエの付近に国境を越える森があるそうだから・・・そこを超えて東大陸に行くつもりだよ。

こっちで指名手配されようと、さすがに向こうでもされるってことはないよね？」

僕はこのまま表をろくに歩けなくなる犯罪者としてよりも、とりあえず東大陸に渡って身の振り方を落着いて考えるつもりである。
元の世界に戻るにせよ、このままこの世界にいるにせよ。

「・・・本気なの？」

エンデが掠れた声で僕の正気を疑うような目で見てくる。
そんなに国境付近の森を越えるのが難しいのだろうか？
確かに、簡単に超えられるような場所ならそこにも検問があるかも

しない。

簡単に超えられないなら超えられないで難しいものがあるだろう。

「そんなに危険な場所なの？」

「そ、そういうんじゃないよ．．．」

東大陸は魔王が．．．」

ああ、そういえば、この世界ではお互いにお互いを魔王と呼び合っているんだっただけ？

西大陸側の人間からしたら東大陸の王族達こそが魔王だし、東大陸の人間からしたら西大陸の王こそが魔王って話だ。

西大陸出身のエンデからしてみれば、セリアたちは悪の手先のようなものなのだろう。

まあそれは仕方が無い。

きっと、国をあげてそういう教育をするように義務付けていたりするのだろうか。

エンデの出身だって結局のところその辺の村娘だ。

東大陸など、ただの敵国としてしか認識できてないんだろうね。

「だいじょうぶだよ。

東大陸に知り合いがいるし．．．その人たちを見てたら思うんだけど、僕達と何も変わらないよ。」

「し、知り合いっ！？」

ヒビキって東大陸出身．．．なわけないか．．．勇者として召喚されたんだもんね。」

「うん。

たまたま最初の知り合いがこっちにきてた東大陸の人間だったってだけの話だよ。」

「．．．そうだよな。

ヒビキがそういうなら、きっと良い人たちだよな．．．」

「そんな話は今はどうでもいいじやろう？

問題はロロリエの検問をどう突破するかじゃ。」

そう。

問題はそこなのだ。

ロロリエを無視して森に入り、国境を越えて東大陸へ向かうことはもちろん可能だ。

だが、現在のところ食料があまり無い。

森で調達できないこともないが、出来ない可能性ももちろんある。

元来、魔獣は食用向けとそうでないものがあるが、そうでないものは殆どが内臓や脂肪、筋肉に毒を持つ。

毒といっても水銀などの重金属や、雑菌や寄生虫といったさまざまなものである。

魔獣の体は人間と比べ物理的にも、生理的にも頑丈に出来ており、多少の有害物質ならば体内に蓄積されど、問題は無いのだ。

だが、それを食べようとする人間から見たらそれは無視できないレベル。

命に関わるものが多々あるとのこと。

火を通せば、雑菌と寄生虫はどうにかなったとしても、水銀などの金属はそうはいかない。

こうした無視できない有害物質を取り込むような食生活をする魔獣は基本食用に適さないのである。

そうした知識が乏しい状態で魔獣を食用にしようなどとは無茶無謀に他ならないというわけだ。

果実も同様で、中には魔力を吸って成長する木の実などもあり不用意に食べると下痢や嘔吐を起こす。

体内魔力との反発で起きる現象らしいが、詳しいことはまたの機会に。

とにかく、食糧難が一番の問題であった。

できれば、補給しておきたいのである。

もちろんそれなりに食料はあるのだが森の道や広さがわからない以上、多めに持つのがセオリー。

通り抜けるのにどれだけの時間がかかるかわからないからだ。というわけで、僕が出した提案はこれ。

「まずは彼ら検問の人がどうやって僕達を見分けているか？ それを知る必要がある。」

「どういうこと？」

エンデの疑問の声に僕が答えるよりも早く、セルシーが答えた。くなるほど。

たとえば、男2人組みで髪が赤い・・・とか、そういう条件付けを知ってるってことなのね？>

「うん。」

そうなる。」

「それがわからぬ場合はどうするのじゃ？」

「ここで、シロを待機させてフェロー、エンデで食料を買出しに行く。」

「それはおそらく無理じゃろう・・・。」

「・・・やっぱりそう思う？」

まず僕はいけない。

シロの手綱を握るために馬車の外に出ていたのでおそらく顔が割れている。

見られてはいないと思うが、少なくとも服装くらいは覚えられたハズだ。

それとこの世界ではあまり見ない、黒髪が目立つ。

次にフェローとエンデだけの場合、馬車が無いとなると歩きでどこ

その街から来たということになる。

そうなると弓を持つエンデはともかくフェローが怪しまれる。手ぶらで旅をする人間はいないからだ。

すくなくとも何らかの武器を持っていないとおかしい。

ファルシオンを持たそうにも、検問の兵は只者じゃない感バリバリのレヴァンテ兵がいる。

十中八九、身のこなしで借り物だということがばれるだろう。

かといって、魔術師だと言うのもまずい。

なぜなら昨日、注意を引くためにつかった”ハツタリ大規模魔術”スターブレイクを使える可能性があると思われるだけで拘束されかねないからだ。

事実ここから見るからに口ロリエの検問所では魔術師らしき人間が問答無用で連れ去られてるのが見える。

じゃあ、どないしよう？

と考えたところで考えた苦肉の策がどういう条件で探しているかということだ。

まず、”白竜を引き手としてる馬車”であることは間違いが無い。男がいる。

そして馬車を使っていることから、おそらく複数人だと思われるかと考えるべき。

内1人は魔術師。

そうした条件をすべて引つかからないようにすれば、問題ないのではないかと僕は思っている。

そこで、重要視されるのが出来るだけ正確にその条件を割り出すこと。

「ここから、あいつらの話を聞いたり、観察できればな……」
とぼやいて見たがそんな便利な技があるはずも無い。

「できるよ?。」

「うん?」

そんな便利な技があるはずがな………できんのっ!?

エンデのできるよ発言にびっくり仰天の僕。

「うん……その、か、顔が、ち、近いよう……。」

「えっと……ごめんなさい。」

顔が真っ赤なエンデからすぐに離れる僕。

照れてるのかな?

爆発しろとか言うくらい嫌われてる人間相手でも、男が近づくと恥ずかしいってことかな……

初々しいね。

乙女ってこういうものを言うのか。

女の子で付き合いの長い知り合いは冬香ぐらいしかないからこの反応は新鮮だったりする。

ただ……嫌われてなければこっちも顔が赤くなるくらいはなっただけだね。うん。

というか、やっぱり無理やりにも村に返したほうがよかったかもしれない。

嫌いな相手にわざわざ”身勝手”という名の意地のためだけに付いていくなんて、見た目に反して頑固な子だと今更ながら思ったりするが、それはおいておこう。

「絶賛勘違い中って感じの顔ね……私って男運ないのかなあ……。」

「男運?」

「な、なんでもないわよっ!!」

とにかく、挙動を見たり話を盗み聞きすればいいのねっ!?

「う、うん・・・そうだけど・・・」

「問題ないわ、この距離なら。」

といって、彼女の両耳がネコ耳？犬耳？狐耳？

どれかはわからないけど、獣の耳に変化した。

「なるほどのう・・・」

お主、亜人種か？」

「・・・そんな呼び方しないで。」

「亜人種？」

「早い話、獣と同じく下等生物と見下されて迫害を受けてきた種族じゃよ。」

どこぞで細々と生きているとルベルークの街の伝承の一つにあったのう。」

「へえ・・・こんなに可愛いのに。」

「ふうなっ！？

な、ななっ！？

何言ってるのっ！？バカっ！！というか、からかわないでっ！！

ヒビキでも怒るよっ！！

この耳は・・・迫害を受けてきた私の一族の忌々しい象徴で・・・

「

「からかってないし、本心の言葉だよ？」

もし、その耳を下等の証だとかってバカにする奴がいたら、僕が斬り捨てる。」

赤の他人だったならともかく、今となつては彼女は大切な友人の1人だ。

僕は友人を後生大切にする主義なのである。

なんせ・・・少ないので。

貴重なのだ。そして、単純に彼女が好きだからでもある。

「そ、それは・・・」守ってあげる」という自分の”身勝手”を通すため？」

安心させるためにと思って言った僕の言葉を受けて、逆に不安げな瞳でこちらを見つめてくるエンデはそのようなことを言った。

その目は僕の口をさらに動かすに十分な力を持っていた。

「ちがうよ。」

いや・・・それもある・・・かもしれない。

でも、全部が全部、そんな僕の”意地”からじゃない。

単純に君が好きだから・・・好きな友達をバカにされて黙ってる友達はいないでしょ？

単純に気に食わないから・・・といったほうが正しいんだと思う。」

その言葉を受けて、嬉しそうに悲しそうな顔をするエンデ。

とどのつまり複雑な表情で僕を見つめるその視線は妙に艶やかで、熱っぽかった。

一体なにが聞きたかったのか？

とにかく、彼女の耳はかなり良いらしくここからでも十分聞こえ、視力も人間とは比べものにならないそうだ。

その彼女が見て聞いて集めた情報によると、条件や状況がより正確にわかった。

- 1、男1人を含めた複数人を対象としている。
- 2、魔術師がいることはまず間違いないと考えている。
- 3、男の人相は分らないが、服装は確認済み。
- 4、白竜を引き手としての馬車は即刻逮捕らしい。
- 5、魔術師がいた場合は問答無用で事情聴取
- 6、上記に当てはまらない人たちは基本的に多少の目線を向けられ

るのみ。

7、兵士の錬度は高めだが、ロロリエの兵が2人にレヴァンテ兵が1人。

8、女性のためのパーティはそもそもノーマーク

という条件。

ここまで言うてようやく冒頭に戻ることができる。

これらの条件を満たすべく、僕は女装したというわけなのである。

絶対にバレると言い張っても、2人してバレナイバレナイの一点張り。

あいも変わらず僕は泣きそうなのに。

風魔法で作り出した即席胸パッドは使わないことにした。

バレる可能性があるからだ。

ばれたらばれたで、そのまま馬車まで引き返して森へ行けば良いだけだが・・・どうにも納得がいかない。

まあその辺は良しとしよう。

バレたら、ふたりを思いつきり責めてやると思いつつ。

僕達は検問所へと向かった。

シロは馬車と一緒に丘付近の雑木林の中を通ってロロリエ付近に付いてるように言付けた。

さあ、祭りを始めようじゃないか・・・僕の女装祭りという酷い祭りを・・・ぐず。

泣かないんだからねっ!?

だって男の子だもん!

そんなことを思いながら検問所へ向かうと、案の定、検問所前にて兵士に呼び止められた。

「あゝおい止まれ。」

お前達……その嬢ちゃんは何も装備してないみたいだが……

「そ、それは私が彼女の護衛役ですので……」

と僕が言う。

（もともと声が高いので少し裏声を使えば簡単に声を作ることができた。）

護衛される側なら武器を持たず、魔力が無くても怪しまれないという魂胆である。

とはいえ、僕が怪しまれるだろう。

たとえ女物の服で着飾ったとしても、僕の内面から溢れる気力はそうそう隠せないはずだからだ。

ダンディズムオーラとも呼ぶ……！

それに、さつきからもう1人の兵士がやけにこつちをちらちら見ている。

ばれたかな？と思って腰に差してあるファルシオンの柄へさりげなく手を当てて警戒していると、兵士2人はニカッと笑ってそのまま「いっていいぞ、嬢ちゃんたち。」と言って終わる。

「え？」

えっと……ごくろうさまです。」

少々呆氣にとられながらもすんなりと街に入ることが出来た僕達。

あれ？

おかしいぞ？

僕のダンディズムはどこへ行った？

ふつつと滾る気力はいついかなる時を持って沈下したのだ？

入るはずが無い。

僕が男だとばれて……当たり前だったはずだったのにつ……！？

「なぜ・・・だ？」

「ヒビキ・・・可愛い・・・」

「ぷくくっ・・・しもうた。」

またはまりだしてもうた・・・ぷくくははははっ!!」

<どっからどうみても女の子にしか見えないから仕方ないと思うよんっ!?!>

バックパツクの中から話しかけてくるセルシー。

セルシーまでもが僕を女として扱うというのかっ!?

なぜまた・・・僕は・・・気づかれなかったのだっ!?

わけが分からないっ!?

はっきり言おう!!

この世界に化粧などない。

はっきり言えば僕は単に女物の服を着ただけなのにつ!?

それだけで、男だと分からなくなったとっ!?

ばかなっ!?

それでは・・・まさか・・・

<下手したら日ごろ着てる服でも”女の子が男装してる”と思われる可能性もあるってことよね？

これって。>

「い、い、言わなくてもいいじゃないかあああああああああ
ああっ!?

うああああああああああああああんっ!!」

号泣したのは言うまでもない。

第27節 女装なへたれと愉快な仲間たち（後書き）

女装ネタをするつもりは微塵もなかったんですけどね。

第28節 女物の服なのに、下着はトランクス。キター！！（前書き）

今までで一番アホな――かつ長いタイトルです。

現在キャラデザを鋭意制作中ですぞい。

ラフデザをそのまま入れるつもりですけど・・・やっぱり、ペンと色いれた方がいいかな？

第28節 女物の服なのに、下着はトランクス。キター！！

えんえんと泣いていたら、不思議とすつきりとした。
すつきりというよりは吹っ切れたと言う方が正しく伝わるかもしれない。

別に男装した女の子に見られたっていいやい！

女装が似合うのもまたどうでもいいやい！！

そう、僕は気づいたのだ。

男として足りえるかは、見た目なんかじゃない。

迸る熱きダンディズムソウル。

これをもっていれば良いのだと。

コレ一つでたとえ、女子であろうと男となりえることが出来る！！

たとえ絶世の美少女であろうと、男になれる！！

そのことに僕は気づいたのだ。

<・・・なれないと思うよ？>

「・・・うるさいな。」

成れるといったら成れるんだ！！」

「いや・・・それはさしもの妾でも無茶だと断ずることが出来るのじゃが・・・」

「か、可愛い・・・中とか見てみたいなあ・・・女物の服装なのに肌着は男物とか・・・かなり、そそも・・・いや、なんでもない。」

三者三様の反応を見せてくれる。

そして、エンデ。

僕のスカートを凝視しながら”中”とか”そそも”とか言われるとリアクションに困るんだけど？

そして、スカートをガシツッと掴むのも止めて欲しい・・・
なぜ掴む！？

「食料はもう買い込んだしのう。」

ついでに妾とエンデの分のバックパックも買った。

あとは何か必要かの？」

「あとは・・・バスタードソードをもう一度買いたいな。
できれば魔法剣の。ゲームみたいに炎が出るとか・・・

前回ここで見たのはファルシオンだったんだけどあれは切れ味が増すだけの魔法剣だったし。

そして、エンデ。

スカートを掴むの止めて。見えちゃう。」

「私も魔法弓が欲しいな。」

スカートを掴むの止めない。見てみたいもの。」

「響にはもうアヤツがあるじゃろう？」

セルシウスキャリバーのセルシーが。」

<そうなのよっ！！

私という者がありながら、私以外の剣を選ぶってっ！？>

僕の女装姿を見てからというもの、変になってるエンデの言葉をスルーしつつ。

なおかつスカートをめくろうとするエンデの腕を押さえつつ、僕はフェローとセルシーの疑問に答えた。

というか、僕と付き合ってるようなセルシーの口上にちょっとドキドキするのは僕の経験の少なさゆえだろうか？
なんとなく嬉しいような恥ずかしいような。

そして、スカートから手を離して欲しい。

「バスタードソードを使ったときに面白いと思ってね。
元の世界じゃ、十中八九使えない武器だからさ。」

というか触れることも出来ない。だから、あれをメインの武器にしようと思つて・・・」

<はいっ!？>

ちよつと、何をバカなことを言つてゐるのっ!？

せつかくの私を使わないつてどういうことよっ!？>

「いや、その・・・」

予想以上に怒られた。

そして、スカートを掴む手が中に忍び寄ってくる。

何を考へてるの!？エンデー!!

「まあ、妾は賛成じゃのう。

いまだ、妾の魔力、霊力を扱いこなせてない響がセルシーを扱いこなせるとは思えぬ。

今は妾の力を使いこなすことを重視するべきじゃろつて。

それはおぬしもわかるじゃろつ?」

<・・・確かにね。

今の響に私を持たせても、せいぜいこの剣の3割の力を引き出せれば良いところ。

全力全開で扱おうとしても・・・私の魔力、霊力がフェローのと反発して霧散するのがせいぜい。

この”セルシウスキャリバー”の一番の特徴である”高位精霊を取り込んだための異常なほどの魔力、霊力”による恩恵が半減するばかりか、下手したら現状フェローから流れてる一割の魔力、霊力すらまともに扱えない・・・

理屈としては分かるけど・・・感情としては無理なんだけどなあ・・・せつかくの使い手を見つけたと思つたのに・・・はあ。

しかたないか。>

「ええと・・・そのつまり?

・・・ひうつ!？・・・な、なんだつていうの?」

そしてエンデの手がスカートに入り込んでくるのもなんだって言うの！？

お尻から徐々に前へ前へとスルスル迫ってきてるんだけどっ！？

払いのけようとしても、尋常じゃないパワーでじわじわ追い詰められてるんだけどっ！？

ついでに、奇声を上げててもフェローとセルシーは我関せずの態度である。

「そうじゃのう・・・」

魔力、霊力と言うのは自身と他者のとで反発し、互いに互いを害するという特徴を持つておる。

そのために魔力を分け与えるということは不可能じゃ。」

「ふむふむ。」

「ただし、もちろんそれには例外がある。

治癒魔法や精霊との契約じゃ。

治癒魔法は、自身の体内で”指向”、”効果”などを定めて対象に魔力や霊力を打ち込むというものじゃが・・・契約は”りんく”・・・というべきか？

おぬしの右腕の黒手袋・・・契約用の魔具に彫られる契約の紋によって、精霊の魔力、霊力を自身の物として変換する。

この変換された魔力は響自身の魔力として扱えるのじゃが・・・」

「セルシーの剣から流れる魔力と霊力は自身の魔力として変換されないと？」

「本来ならそういうことじゃな。

しかし、この剣には魔力を持つ人間が扱っても大丈夫なように特殊な加工がされておる。」

<それが、私の柄にある魔力変換用紋様。

でも、これには欠点があつてね。>

「欠点？」

・・・ひうつ！？

ちよつと、エンデ！？

いい加減にしてくれないっ！？

というか、それ以上はまず・・・ふあっ！？」

エンデは相変わらず、僕のスカートの中をまさぐる。

このままでは僕のアレに手が届くと言うところで・・・さすがにそれはまずいと思ったフェローがビンを繰り出した。

「あうっ！？」

い、痛いじゃないっ！？

なにすんのよっ！？

ちびっ子っ！！」

「おぬしこそ何をしておるのじゃ・・・いい加減、目を覚ませ。」

頬を押さえるエンデをジト目でにらむフェロー。

今の僕にはフェローが神様のように思えるよぉ！？

僕が殴つてとめるわけにも行かなかったしっ！！

「何をしてるって可愛い男の娘をまさぐって・・・まさぐってたの？」

「妾に聞くな。」

「はう・・・はう・・・えと・・・ち、違うの！」

さ、最初はもちろん！！

女服に男物の下着という一見ミスマッチな組み合わせの黄金比的なものを見たくて・・・あれ？

わ、私ってこんな趣味だったかな？

というか、途中からヒートアップしすぎて・・・記憶が・・・私って何してた？」

「・・・知らんわ。」

「僕の口からはとてもじゃないですけどいえません。」

顔を真つ赤にしながら、言い訳？をするエンデに言えることは無い。
僕に何が言えるというのだ。

暴走しすぎて記憶が飛んでるようだし、これは好都合。

そのまま忘れてもらおう。

僕のお尻の感触とか、痴態とか奇声とか。

忘れてください。

そのまま忘れていてください。

僕も忘れるからっ！！

「何か・・・右手にちょっとやんわりとした・・・何かを触ったような感触が・・・」

「ははははあははははっ！！」

なんだろうねっ！！

さあ、話の続きをしようじゃないかっ！！」

思い出すなあああああああっ！？

全身全霊で話をそらす僕。

<顔、真つ赤だよん？ヒー君。>

「ほ、ほっというっ！！」

さあ早く、話の続きをっ！！」

<はいはい。

で、どこまで言ったっけ・・・？

ああ、柄に彫った変換陣式魔法の欠点を話したところだったかな。
その欠点が今のヒー君に私は相応しくないと理由なのよ。

本来、契約魔具を使って契約した契約者同士はお互いに自由に魔力、
霊力を分け与えあうことができるの。傷の痛みわけとかもね。

でも、この紋は私の膨大な魔力、霊力を一方的にヒー君の体に送り
込むわけで・・・擬似的な精霊契約を行うの。>

また説明が小難しくなってきたけれど・・・

「ダムにためた水を一気にコップに注ぎこむ・・・というのを想像するといいじゃろう。」

「殆ど全てが垂れ流しになっちゃうってこと？」

「そうなるの。」

あの勇者モドキが良い礼じゃ。

響が魔眼で見た時、あやつが魔力と霊力の流れで見づらいといったじゃろ？」

「うん。」

見ないようにと意識すれば、ある程度緩和できるはずんだけど・・・あの時はまるで変わらなかったな・・・」

「あのモドキがセルシーの力を3割ほどしか引き出せなかったのもそれが原因での中。」

魔力、霊力の流れはすなわち、すべて剣から漏れでてた物なのじゃよ。

あのモドキは魔力、霊力の操作に関しては素人同然じゃったからな。コップ程度の器に見合わない武具を扱った結果があれになったというわけよの中。」

「なるほど。」

魔力、霊力に関してコップ程度の器しかない僕がセルシーを扱っても殆ど垂れ流しになってしまうちょう？」

「そうなる。」

じゃが、悲嘆することはない。

そのために妾が時間をかけて響の体に大量の魔力、霊力をなじませている。

いずれ、きつちり受け切れるくらいの器が仕上がると思うぞ。」

なるほど。

だから、僕の体には常時フェローの魔力の1割が右腕の手袋を介して循環してるわけか。

「モドキを倒した時、主が黒い鎧みたいなものを纏ったときじゃが、あの時は一時的にとはいえ妾の6〜7割の魔力、霊力を完全に操っておったしのう。」

わりとすぐかと思うのじゃ。」

「あの時は・・・本当に必死で、あまりはつきりとした意識は無かったんだけどな・・・」

くとにかく、早く私を扱えるくらいになつてよ!?

まったく・・・剣は振るわれることで初めて喜びを感じるというのに・・・>

「うん。努力するよ。」

そのまま武器やへ直行して、バスタードソードを購入。

結局、炎をまとうなんて効果のあるバスタードソードは手に入らず、通常よりも重さと頑丈さが増す”地の魔力”がこめられたバスタードソードを購入した。

ファルシオンはそのまま残っているし、ギルドのお姉さんーもといティリアさんから受けとったナイフも未だ健在だ。そしてセルシーもある。

僕の装備はこれで十分だろう。

次はフェローとエンデだが、本体は手甲で、ガード時にシールドを展開する魔法盾を2人に買い与えてエンデは魔法弓も買ってあげた。当初、自分のお金でと言っていたのだがこれからも付いてくる以上、仲間である。

そんな遠慮は無用だと強引に僕がお金を出した。

僕はお金を持っただけでも、元の世界に戻ったとき意味が無い。しか

し、彼女にはこれからの生活がある。
そのためでもある。

魔法弓はエルヴァンボウ。

” ユグドラシウル ” という大樹を弓として加工した一品で、ところどころミスリル鋼というので補強してりる強弓だそうだ。

魔力を込めることによって、威力、引き安さ、連射性能、精度などが変わるらしい。

そこそこ希少な弓で、作った人が「アスタナシアの森」とかいう辺鄙なところに住むらしい・・・腕の良いドワーフ族が作った弓という事で特に価値が高かった弓である。

ロロリエの付近にアタナシアの森があるらしく、時たまロロリエの武具屋に売りに来るそうな。

ついこの前に入荷されたものらしい。

ちなみにお値段は10万ガルド。すなわち100金貨もして、ほとんどの有り金を持っていかれてしまった。

150あった金貨も今では一枚を切って、銀貨が40枚と銅貨が数枚といったところになったのだ。

「東大陸についたらまずお金を稼がないとね・・・」

「わ、私・・・こんな高価なもの・・・ヒビキ・・・本当に良かったの？」

「別に良いよ。」

また、すぐ稼げるし。それに装備に妥協しなきゃいけないでしょ？」

「そ、それはそうだけど・・・私っていつもヒビキにお世話になってるばかりで、申し訳なく思っばかりだもの。」

「気にしないで良いって・・・言っても、さすがに難しいかな。

僕も逆の立場なら恐縮しちゃうと思うし・・・とりあえず、考えなようにしてくれてたら良いよ。」

「いや、それも・・・かなり無茶じゃない？」

そうだろうか？

本当に何も思わなくても良いのだが。

そっだ、こうしよう。

いつか、どっかの漫画で聞いたような聞かないような台詞を聞かせてやれば大丈夫なはずだ。

「・・・あ、あれだよ。

好きな人にプレゼントをするのにいちいち理由があるかい？」

「ふうあうっ！？

す、すすすすすすす、ゝ、すすすすすすき、しゅきっ！？」

ボンと音をたてるように一気に上気するエンデの頬。

そんな反応をされるとまるで、僕が回りくどく告白してる気分になつてくる――じゃ、ないか？

あれ？

もしかしたら、そんな風に――取られちゃった、のかな？

「い、いや、あの！！

もちろん、友達としてだよ！？

友達として！！

ほら、あくまでも友達としてねっ！？」

「そんなに念を入れて否定しなくても良いでしょっ！？
ばかたれっ！！！」

「ごぼはっ！？」

誤解を解くための行動だったのに、なぜか殴られる僕。
少し理不尽。

「のろけておるのう・・・とりあえず、すぐに街をでるか。
嫌な予感もするしのう。」

「うん。シロが待つてるだろうしね。」

早く、女装も解きたいしね。

「おや、お二人さん？」

とエンデちゃん・・・だったかな？」

とか思つてると後ろから声をかけられた僕。

「誰で・・・ティリアさんっ！？」

振り向くとギルドのお姉さんもとティリアさんがいた。

神出鬼没とはこの人のことを指すのだろう。

そつえば、モドキと戦ったときもいたような・・・いなかったよう
うな？

「妾の知り合いにピンチに陥った瞬間、1人だけ逃げ折った薄情な
やからはおらんのう。」

誰じゃおぬしは？

気安く話しかけるでない。

おっぱい星人め。」

やっぱりいたんだね。

そして、ひとりだけ逃げ去ったと？

それにしてもおっぱ・・・ごぼごぼん。

”ソレ”はは酷いと思う。

「女のひがみはみつともないわよ？」

それと薄情なんじゃなくて、あの時は仕方なかったのよ。」

「どこぞのおっぱい星人二号と同じような台詞を吐きおって・・・
廁^{かわや}の角に頭をぶつけて死ねば良い。」

「私って不器用な方だから・・・そんな器用な死に方は出来ないわね。」

「おっぱい星人二号って私のことっ!？」

ティリアさんとフェローの会話中、BGMのようにエンデの叫びが聞こえた。

二号はエンデのことだったのかな？

確かに、二号といってもいいプロポーションはして・・・「ほんっ!」

「そんなにカッカしてたらすぐにシワができるわよ？

・・・とりあえず、助けられなかった理由は潜入調査中だったからよ。

近くに監視の手の者がいたし。

ちなみに、早くに検問がしかれたのはこれのせいね。」

「ふん。

言われずともそのくらい察せるわ。

うつけめ。」

「でしようね。

それはそうと響君?」

「な、なんでしろう?」

「強くなつてね?」

「あ、・・・えと・・・は、はい。」

いきなりわけがわからん。

<ティリアじゃないのよっ!？

おっひさーっ!!

元気にしてたかしらっ!?!>

「もちろんよ、セルシー!

超元気!!

もう少し話していたいんだけ・・・こう見えて今結構忙しいのよ。

次会うときまで、セルシーも元気だね。」

<もちろんなのよっ!!!>

旧友?に会えたのか一気にテンションの上がる二人。

それを苦虫を噛み潰したような顔で眺めるフェロー。

一体なんなんだろうっか?

そのあと二言三言交わしたあと。

ティリアさんと別れて僕達はシロの待つ場所へと戻るのである。

第28節 女物の服なのに、下着はトランクス。キター！！（後書き）

ちよつと説明じみた内容が続いてますが、次回は久々？のバトルになりそうです。

全く違う仕様になる可能性もありますが。

第29節 パーフェクトガイと変態響（前書き）

バトルシーンまで行かなかったWW

第29節 パーフェクトガイと変態響

ロロリエから30分ほど馬車でいったところに森はあった。おそらくセリア達も通ったであろう、魔獣が出る森である。

森の名は「アスタナシアの森」。

アスタナシアという”魔物”が生息してるためにこの名前が付いたらしい。

魔獣と魔物。魔獣と魔物の違いは生きているか死んでいるかという話らしい。

一般的に魔獣は人に害をなす野生生物を言う。

しかし、魔物は生物ではなく”動く死骸”である。

魔力、霊力を持つ魔獣が死ぬ間際に”生きたい”、”殺した相手が憎い”などという感情が魔力、霊力に”指向”を持たせる。

魔力、霊力には”指向”を持たせることが出来る。

指向とは”目的”や”効果”のことらしい。

魔力、霊力を扱う上で、この”指向性”が大切なのだそうだ。

この辺は魔術、奇跡といった”魔法”を扱う上でも重要な概念らしい。

たとえば、手から炎を出す魔術を使う場合、頭の中で強く”炎を出したい”と念じる。

これによって、ただの魔力が”炎”としての指向性を持つ。

つまり魔力を持った魔獣が死に間際に強く思う”生きたい”、”逃げたい”、”憎い”、”子供を守りたい”などという生存本能でもある強い感情によって魔力に指向性が生まれ、それが魔術、奇跡として発動する。

それによって死に掛けた体に魔法が付加し、無理やりに体を生かすのだ。

これが魔物という存在。

生物の理ことわりから離れた忌みすべき”魔”として各地に点在しているという。

魔法が半分潰れた頭の変わりに、魔法が潰れた心臓の代わりに、魔法が無い四肢の代わりとなる、かなり無茶な”魔法の暴走”とも言えるため生物としての機能を持つことは殆ど無いとのこと。

魔物と化した魔獣は食物をとらず、年数を追うことに体が朽ちていき果てには形を保ってるだけの魔力の塊と成り下がっていく。

「なんというか・・・可哀想だね・・・。

死んでも死に切れないと言うか。

ゾンビみたいだ。」

「・・・そうじゃの。

ちなみにじゃが、ララム遺跡の地下でおぬしが出会った真つ黒な人型があつたじゃろ？

あれも魔物じゃ。

妾の仲間が・・・志半ばで倒れたゆえのな・・・。」

僕が遺跡内部に入ったときに見つけた黒い人のシルエットをした物体か。

というか、そこからすでに見てたんだね。

魔力体とやらで。

「え・・・それって・・・人もなるの？」

「・・・。

確率としては魔獣にしる人にせよ、他種族にせよ一万に一回あるかどうかじゃ。」

フェローが泣きそうな顔で言う。

フェローの仲間、か。

確か、フェローは暴君と呼ばれていたヤツと対立してたって話だから、そいつと戦った際に死んでた仲間なんだろう。家族がいて、守るべき民がいて、守るべき国があつて、忠誠を誓った主君がいて・
・どんな無念を、思いを抱えて死んでいったのだろうか？

そういえば、いまだにフェローが時が止まるとか言うあの部屋に軟禁されていた理由を聞いてないんだよね。

あの時は、それどころじゃなかったから詳しくは聞かなかったけど。

<・・・フェロー。>

「わかつておるよ。」

「そ、それで、アスタナシアってどんな魔物なのっ!？」

とりあえず、これ以上辛気臭い空気は勘弁してもらいたい。

慌てて、話をそらす僕。

こういう気遣いが出来る僕ってなんて紳士的!

見た目、男装女子なれど・・・じゃなかった!!

僕は男だっ!!

見た目こそアレだけどしつかりとした男だっ!!

みたいな1人ノリツツコミを言ったら、十中八九スべる空気である。

「妾は知らぬのう。」

魔力体ではあの場所からせいぜい、ルベルークの街までしかいけぬからな。」

<私はずっとレヴァンテの武器庫で眠らされてたの・・・まあそれは割と幸せだったんだけどね。

それまでは、なまじ強い剣に生まれたせいで不幸だったわ。
欲にまみれた三流どもが私をこぞって奪い合うものだから。>

「私も魔物自体に関して詳しいことは・・・でもその魔物の背景ってのは御伽噺にもなつて有名だから知ってるよ。」

200年前くらいから存在する魔物で強い相手をただ求めるんだっ

てさ。」

強い相手を求める？

「その御伽噺のモデルは当時、最強と言われた”ホーマン”っていう魔法剣士らしんだけどね。」

魔法を使わせれば一流の魔術師を軽くあしらい、剣を使わせれば誰にも適うものは無しとまで言われた英雄だったんだって。

でも、あまりに力をつけたホーマンを疎ましく感じたところある王国が彼を殺すべく動いたそうなの。」

ううむ。

良くある話だな。

でも、それだけ強いって言うならもちろん。

「・・・正攻法じゃないんでしょう？」

「・・・うん。」

妹を人質にとつて、ホーマンを殺そうとしたらしいの。」

「人間と言うのはいつの時代も愚かじやのう・・・」

<・・・まあ、かならず掃き溜めと言うのはでてくるものよ。人間に限らずね。>

高位精霊という人から離れた力を持つ2人の言葉は実感が籠っているような気がする。

「妹の名はアスタナシア。」

「・・・もちろん、妹は黙ってないわよね？」

「なるほど・・・だいたい想像が付いた。」

多分、妹さんは兄であるホーマンを庇ったんだ。」

「そうよ。兄が殺される前に妹が身をていして庇って結果、後に死

ぬ。

そのあと怒り狂った兄がその国を潰して、妹のなきがらは兄妹の故郷に埋められたって話なの。

その後の兄は各国から追われて、どこかでひっそりと死んだそうよ。

「

「・・・？」

魔獣が出てくるって言うあの森が故郷？」

「・・・わからない。

御伽噺は事実を多少曲げられてるって話だし、お話自体もここまですぐでいい。

もともとこの御伽噺は子供に”どんな力があるうと王国に反旗を翻すと不幸な人生を歩みますよ”っていう教訓を与えるためのものだって話もあるくらい。

あと言い伝えられてるのは、アスタナシアの森の”アスタナシア”が確かにそのアスタナシアであることくらいかな。」

ふざけた御伽噺だ。

そして余計になぞが深まっただけみたい。

仮に、ここが故郷だとしても分からない点がまだまだある。

死んだはずのなきがらが魔物化したのはなぜかとか、強い人間を求める理由とか。

そんなことを話してる間に森のわりと奥まで来た僕達である。

「うわ・・・兵隊がいるよここにも。」

魔力の流れが見えてきたので、魔獣だろうかと慎重に歩を進めるとそこにいたのは色々な種族の混じった混成部隊だった。

角が生えていたり、顔だけが動物だったり、羽とか尻尾があるやつもいる。

装備から見るにレヴァンテ兵だ。

荒い道のりを馬車の頑丈さとシロのスペックまかせて無理やり進んできたのだが、その快進撃もここまでのようである。駐屯地みたいのを作っており、たくさんレヴァンテ兵が検問をしいていた。検問と言うよりは捕縛隊といってもいいだろう。

こんなところをわざわざ通ってまで東大陸に行こうとするヤツはこの世界の文化的にいないだろうから。必然的に何かやましいことがある人間だと決まっている。

相変わらず、一人一人の兵士の身のこなしが凄い。

錬度が高い証拠である。

とはいえ、身体能力がだいぶ強化されている今の僕なら、勇者クラスでないと束になったところで勝てないのだが・・・さてどうしよう。

殺すのは簡単。

しかしそれは無い。

彼らは仕事をしているだけであり、盗賊などとは違い家族もいるだろう。

まあ、下品なヤツもいるだろうけどそんな人間が戒律などの厳しい兵になるわけもなし。

盗賊だったら純粋な悪意をぶつけてくるだけに殺せたのに・・・とか普通に思ってしまうのはこの世界に来てそれなりに命を奪ってきたからだろうか？

ここは平和な日本とは違う。この考えが悪いこととは思わないが良いことでも無いのは確かである。

とにかく兵士を殺すのは論外。

気絶させていくか？

それも論外かな。

今のところは出くわしてないが、魔獣やいまだ良くわからない魔物”アスタナシア”に襲われて結果的に死ぬ可能性が高い。

「うぐぐ．．．どうしよう？」

「獣道を通っていくかの？」

「馬車はここで捨てないといけないのかな？」

「そうなるわね．．．がんばってっ！！」

私、バックパックの中から応援してるわっ！！>

「私としてもそれがベストだと思う。」

でもそれだと横断するのに早くても10〜15日はかかる計算ね。

しかも早いってのは、ただ森を横断する場合。魔獣に出くわすのは間違いないでしょうから遅くて30日くらいはかかる場合だってあるわよ。

．．．ああ．．．いやだなあ．．．こんなうっそうとした森をただただ歩くなんて．．．」

まじかよっ！？

そんなにかかるのっ！？

まあ、それくらい広い森でなければ早々にこの森を伐採して砦とか作ってるよね。

東大陸と西大陸は戦争中って言うてたし。

比較的森と近い位置にロロリエがあったのも、万が一森を抜けてきた勢力があつた場合に備えるためかな。

「天然の城壁つてわけか．．．」

「なるほどのう．．．西から攻めるにせよ東から攻めてくるにせよ、ここを通り終える頃には兵が疲弊して使い物にならんというわけじゃのう．．．」

くなのになににロロリエではなく、レヴァンテの兵による警備の手があるってことは．．．>

「あのモドキを倒したヒビキを逃がさないようにってところかしら？」

「……はあ。」

僕はただ、姉さんのいない世界でのんびりしたいのに……」

もちろん、元の世界に戻りたいと言う気持ちはある。

でも、家庭環境がアレなだけに未練が少ないと言うのがこの世界で暮らしてみたいという気持ちに拍車をかけていた。

いつのまにか追われているというなかなか愉快な状況になっている。せいぜい、男であることくらいしか分かってないようだがモドキと戦った際に監視の目があったって話しだし顔もある程度口伝えされているのではないだろうか？

写真と言つものがないのが幸いだった。

……無い……よね？

女装するくらいでスルーできるレベルなんだからきつと無いに決まってる。

写真に類するものがあつたら僕は捕まってるはずだもの。

「……………女装が完璧だったからかもしれないよあ？」

心の中で軟弱な部分の僕が幼女のような甘つたるい声で囁いた、気がする。

たまに見かける、心の中でせめぎあう天使と悪魔みたいな心象風景？的なものを想像してもらえると良い。

僕の場合はその天使がスーツを着込んだダンディズム溢れるパーフェクトガイであり、悪魔はイチゴ柄で地の色は茶褐色という可愛らしいワンピースを着込んでる憎たらしくもありえない僕である。

口惜しいことに、可愛い……と言ってしまつとナルシストということになるのかな？これ。

まあなんにせよだ。

ふふふふ、何を言ってるんだか？軟弱な僕よ。

とりあえず”違う！”と声を大にして言いたいっ！！
そして、天使はどこにいったっ！？
ダンディが服を着て歩いてるような僕の天使はっ！！

————どうしてそう言えるのぉ？ていうかね。男の響ちゃん
は前回の女装がバレなかったということに悲嘆を覚えていてね？泣
いてるよぉ？

だって、化粧もなにも無いただ服装を変えただけの簡単な変装だよ
！？

気づかないはずがないじゃないか！！

ってか、天使の僕はそんなことになってるのっ！？
初耳だよっ！？

————違和感が無いくらいにマッチしていた・・・ととれ
るよねえ？

にやにやして僕に語りかけてくる女装悪魔。
なんて、いや、な・・・ことをいつてくれやがる・・・

————女の子として生まれ変わってみたい？

何を言っているっ！？

————きっと皆から可愛い可愛いってちやほやされるよぉ？
私としてはそれの方がうれしいなあ。

もう一度言ってやるっ！！

何を言っているのだっ！？

僕はあくまでも男であり・・・

————女でもあるでしょ？

ち、ちが・・・

————違うないよお。きっと響ちゃんは女としての喜びに気づいてる。可愛いって言われることの喜びを・・・

う、うるさいっ！

うるさいうるさいうるさいっ！

————っおい否定は肯定の証。ふふふふ。さあ、堕ちましよう？私と一緒に。きっと幸せになれるもの。

・・・本当に？

本当に僕は・・・

————飲まれるんじゃねえっ！？この大バカやろうがっ！！

ぐはっ！？

殴ったねっ！？

親にもぶたれたこと・・・という小ネタはまあいいや。

君は天使の僕っ！？

いったいどこに行っていたんだよっ！？

傷心で出てこれないって話だったけど・・・

————・・・来ちゃったのね死ねば良いのに。邪魔で無骨で無駄に暑苦しいバカが死ねば良いのに。もう少しだったのに死ねば良いのに。

いや、女装僕よ。その語尾はおかしいぞっ!?

そして男の僕!!

助けに来てくれてありがとうっ!!

もう少して甘言(?)にだまされるところだったっ!!

————あたばうよっ!!だが、その悪魔に苦い思い出を混ぜ込んだコンクリ詰めにされて、深層心理の海に放り込まれた時はさしもの俺も死ぬかと思ったがな。

傷心中じゃなかったのっ!?

————その悪魔に暗殺されかけたのよ!まったく油断もスキもありやしないつ!!

全くだよっ!!

てか、酷いな!!女の僕!?

————もう少して女としての喜びを・・・しょうがないわねえ。今回はあきらめるわ。

今回に限らず、これから先ずつとあきらめていて欲しい。

誰だろう?

あきらめたら試合終了だとかそんな耳障りの良いことを言い出し始めたバカは。

時にはあきらめも必要だと言うことを教えるべきだと思う。

————またねえ。

————俺も戻る。また会おう。

ありがとう!

ダンディな響!!

そしてもう二度と姿を見せるんじゃないっ!!変態響!!

「くそっ!!」

あの変態響めっ!!」

「どうしたのじゃ?急に自分を罵倒し始めおって?

変態なのはわかっておったぞ?イチゴ柄じゃまに話しかけると言う奇怪な行動・・・ぶくっ!!

しもつた!!思い出してもうたっ!!」

くになになに!?

私にも詳しく教えなさいよっ!?!>

「ヒビキ?疲れてるの?

それと・・・わ、私にも教えてよっ!!フェロー!!」

「ちよっ!?

そ、それは僕のトップシークレットであって・・・」

ついつい、妄想を口にするという癖がいまだに残っていたようで(自分でした妄想にも関わらずヤケに寒気がしたが)そのせいで僕のおつちとこつちの世界を含めても一番恥ずかしい思い出を語り始めたフェローである。

おっと、涙はながさねえよ。

なぜかって?

ふっ。人間、なれるんだよ。

毎度毎度泣きたくなるほど辛い経験をしてるとね。うん。

本当・・・泣いてないんだからね。

ぐずり。

フェローから話を聞いたセルシーはフェローと一緒にあって馬鹿笑

いし、エンデはエンデで「可愛いなあ・・・ヒビキ。」と眩きながら母親のような眼差しを向けてくるのだった。

穴があつたら入りたい。

第29節 パーフェクトガイと変態響（後書き）

今回の後半は書きながらふと思いついたイベントへの伏線だったりします。

第30節 アスタナシア（前書き）

アスタナシアの挿絵が入ってますけど、かなり手抜いてますよー

第30節 アスタナシア

結局、駐屯地から少し離れた場所まで引き返した。

やはり理想は脱走したということを知られないことである。

さすがに東まで追ってこないだろうが、念には念を。

ここにきた痕跡を消すために馬車を壊そうと言う話になったまではよかったのだ。

しかし、ここで問題が発生した。

「どうやって壊そう?」

「妾は無理じゃぞ?」

前にも言ったとおり、容量がでかすぎて加減が効かぬ。馬車どころか、ここら一体を焼き払う自信があるのう。」

「嫌な自信よね。それ。」

「・・・ふん。」

そういうエンデは何かないのかのう?」

「私はサポート系の魔術しか覚えてないもの。」

もちろん攻撃魔術もあるけれど、ここまでしっかり作りこまれた馬車を壊すほどの物は無いわ。得意なのは治癒魔術や音消し、臭い消しとかそんなところよ。」

「使えないのう。」

「ふえ、フェローだって使えないでしょっ!?」

「妾は使えすぎるから困っているのじゃ。」

「単にバカみたいに大容量の魔力を持ってるっただけじゃないっ!?
」

剣で切り刻もうにも、残骸を見つけて貰っちゃうと困る。

「ふむ。こうなつては致し方ない。
響に魔法を教えようではないか。」

「ほんとっ!？」

それは嬉しいっ!！」

魔法。

やっぱり使つてみたい。

「まず、”魔法”とは妾がララム遺跡で会つた、上位竜種を縛つたあの術・・・種族特有の固有魔術（奇跡）のことを指すとは前にいつたのう？」

もう一つの意味があつて、”魔法”は魔力を使つて行使する”魔術”と霊力を使つて行使する”奇跡”をまとめた言い方でもある。

本来、人間や概ねの種族はこのどちらかのみを体内に持ち、どちらかしか使えないのじゃが響は妾の―――すなわち、高位精霊の魔力、霊力をそのまま使えるのはもう分かつておるな？」

「うん。それは大丈夫。」

「・・・フェローって高位の精霊だつたのっ!？」

「今更じやのう？」

高位と聞いて、なにやらびっくりしてるエンデ。

そんなに驚くことだろうか？

その辺の事情を知らないから分からないけど。

「つてことは・・・ヒビキは高位精霊と契約してるの？」

「・・・そこまで驚くことなの？」

高位の精霊と契約できるのは選ばれた人間のみ、みたいなことかな？
だとしたら僕は選ばれた・・・わけが無いか。
都合が良すぎる。

「驚くも何も。」

精霊だとは分かっていたけど・・・まさか、高位のだなんて・・・」

「驚いてないで説明して貰いたいよ。」

「うん、ごめん。」

ヒビキは違う世界から呼ばれたんだもんね。知らなくて当然か。うんとね。

高位精霊って六種族あるとされていてそれぞれ闇人、光人、火人、水人（氷人）、風人（雷人）、地人って言うの。」

＜前にチラツと私がフェローが言ったと思うけど、私の種族は水人みずびとないしは氷人こおりびと。正確には水人”だった”んだけどね。今はしがたい剣でっせい！＞

明るい声で補足を入れたセルシィ。

「そして、現在ではほぼすべて絶滅した・・・とされていてね。

残った精霊は10人もいないくらいってされているから、高位精霊に会うこと自体滅多にないのよ。

そして、高位精霊は力が格段に強いから契約に使う魔具もかなり上等なものを用意しないといけないの。」

「へえ〜。なるほどね。」

どうして絶滅したの？」

「かなり昔の話だから私には分からないし、そもそも高位精霊について分かってることも少ないの。今生きている精霊達は誰も知らないみたいだから。」

「そうじゃろうの。」

高位精霊とはいえ、寿命は400〜500年。当時を知るものは当に死んでいるじゃろう。」

＜当時を知るのは私とフェロー、北の4王くらいでしょうね。＞

北の4王？

その言い方をするということは西と東で綺麗に真つ二つに勢力が分かれていないということだろうか？

その疑問にはエンデが答えてくれた。

「そうよ。」

今現在は大陸は大まかに四つに分かれているの。

西、東、南、北って感じにね。

ていうか・・・当時を知るって本当！？」

「うむ、まあ。というよりその原因の渦中にいた当事者じゃ。」

そういうフェローの顔には苦渋の色が見えて、詳しく聞くのはためらわれた。

それはエンデも同じようで、知りたそうにしていたがそれ以上は踏み込まなかった。

うむ。話を変えよう。

「確か西は魔力を持つ人間を筆頭に魔族と呼ばれてるんだっけ？」

「西大陸の人間からすると、霊力を持つ人間を筆頭に東に住む種族を魔族と呼ぶって教えてくれたんだけどね。」

血も涙も無い悪魔の手先だとか。そんな感じ？」

「なるほどねえ・・・」

「誰も彼もがそれを真つ正直に信じてるってわけじゃないけど、少なくとも見下してる、ないしは野蛮人だ。という意識はあるの。」

ヒビキの話を聞いてみるに・・・違うみたいだけどね。」

僕が思ってる以上に両者の溝は深いみたい。

それに、いろいろと知らないことがまだまだあるものだ。

当たり前なのだけれども。

東大陸についたら、どこかの街でこの世界のことをしっかりと学ぶ

のも良いかもしれない。

セリアを探そうにもどこにいるかわからないし、どこの国であろうと自国の姫様をそうそう外に連れ出すこともあるまい。

僕から会ったために、尋ねた場合も門前払いを受けるのは想像に難くない。

今はじめて気づいたけど、東大陸に行ってもセリアに会える可能性はかなり低いのではないか？

もちろん必ず会う必要はないのだけれどそこはかたなく寂しいし、あの娘のことだからかなり心配しているのではないだろうか？

そう思うと、すぐにでもあつて安心させたい。

というのはうぬぼれでない・・・と思う。

とはいえ、そのことはベリルも分かっているだろうから、そもそも僕がリネティアを助けに行ったということ自体知らされていないかも。

「急の用事で彼はここから別行動で、各国を旅する。」くらいのデマを言つてると思われる。

そうなると、セリアとしてはその辺で出会った一般市民の僕なんて忘れているだろう。

少し、否。

初めて出来た異世界の友達なので、こんな終わりは結構寂しいのが致し方あるまい。

とか考えているとフェローがおほんと咳払い。

「話を戻すが、魔術の扱い方は魔法式、イメージ、魔力。この三つのみじゃ。」

ちなみに言葉による詠唱はイメージをしやすいように補助的に使うという程度じゃから、妾クラスになると初級〜中級までの魔術は1秒もかからずに発動できるのじゃ。」

「だったら、あなたが馬車を壊せば良いじゃない？」

「さっきも言つたとおり、加減ができぬ。」

初級でも上級クラスの魔術になっちゃおうからの。」

「難儀なものね。」

「天才ゆえの業・・・というやつかのう?」

「はん、ちびっこでぺちゃぱいが何を言うか。

それを使いこなせてこそその才能でしょうに。」

「じゃ、じゃからっ!!」

ちびっこであろうと、ぺ、ぺ、ぺちゃぱいであろうとっ!?

関係ないじゃろうがっ!?

第一、無駄にあるお主の乳など老いさらばえればただの醜い皮の塊と化すだけじゃっ!!」

「い、言うにことかいてなんてこと吐きやがんのよっ!?

あんたはっ!!

私のミラクルボインがそんな悲惨なことになるわけ無いでしょっ!? いつまでもピチピチボインのままよっ!!」

ミラクルボインなのかピチピチボインなのかわからないが、話がまた脱線してしまう。

というか、女の子がボインという単語を使うのはどうかと思う。

「言ってるっ!!」

乳臭いガキがっ!!」

「ちょ、ちよっとっ!!」

あんたの方がよっぽどガキでしょうがっ!!

てか、私の胸は乳臭くなんかないっ!!」

「はん、どうだか?」

「だったら、確認してみなさいよっ!!」

「妾に確認させてどうするのじゃ!?

すでに乳臭い言うておろうがっ!!

現実にそういう臭いを感じ取ったから言うたまでじゃっ!!」

「で、でたらめ言うんじゃないわよっ!!」

「響にも聞いてみいっ!!」

絶対妾の意見と同じはずじゃっ!!」

「そこで僕にフルっ!？」

「ヒビキッ!!」

嗅いで見てっ!!

そしてこのバカに言っであげてよっ!!

私の胸はミントフローラルの香りがするってっ!!」

ちよおおおおおおおおおっ!?

あなた何言ってますですかっ!?

嗅いでみてっ言葉はつまり・・・あれですっ!?

アレなんですっ!?

自分で自分の言ってること本当に理解してらっしゃるのでええええええええっ!?

嗅ぐってその、あの、あれで、胸の臭いをつてことだよね?

話の流れからして胸のね・・・ことだよね?

別に顔をうずめるとかではなく、胸の近くまで顔をもってっ嗅げってことなんだろうけどそれでもかなりの抵抗感がありますよっ!?

傍から見たら、胸の近くで鼻息をあらくしてる男。

うん!変態だねっ!!

てか、プレイボーイなイカしたナチュラル(?)ガイならばともかく僕にはそれはあまりにも蛮勇がすぎますですっ!!

そして、ミントフローラルの香りはおおよそ人体から出る香りではないだろう。

嘘をつくなっ!!

嘘をつ!!

しかし、そのさりげない虚勢がまた可愛い!!

「自分で言ってること・・・分かってる?

エンデ。」

「は、はい？」

・・・えと？

あ・・・・・・・・・・・・・・・・つと。」

僕のその言葉にみるみる赤くなっていくエンデ。

ボンと音をたてたと思うと、黙りこくってしまった。

その後、魔法式の書き方（術を発動した際に魔法陣が足元に展開される。この魔法陣のことを魔法式と呼ぶらしい。）を教わり、魔法は先刻聞いたのと日本で数あるゲームでよくある「ファイア」という言葉でイメージを強めて魔力を込めて打ち放った。

基本的に凡才である僕は魔眼のおかげで”魔力を感じる”という初心者殺しともいえる一番の壁を”視認”という人間において一番発達し、理解しやすい感覚を用い、らくらくと突破。見事発動。体内を巡る魔力を半分つぎ込んだところで馬車は塵と化した。ごめんなさい。

心中でなれなれしい馬車屋の店主に謝りつつ。

ちなみにだが、初めての魔法で有頂天になった僕だが魔力の込め方に問題があつてフェローにけなされたのは言うまでも無い。

その後、森を進行すること8日。

半分を越えて少し進んだいったところである。

これは結構早いペースになるらしい。

道中、魔術と奇跡の練習をしながら魔獣を狩りつつ、奥へ進む。

「うあ？なに？こいつ。」

周りはうつそうと生い茂っていた木々や草が少なくなっており、ここだけぽっかりと穴が空いたように開けている。

目の前にはでっかいでっかいゴキブリがいた。

しかも50匹ほどが群れている。

コロニーと言うヤツだろうか？

とはいえ、普段家庭で見る”黒い彗星”とは違う種類のゴキブリが大きく変わった感じである。

いつぞやのTVで見たのだが、ヨロイモグラゴキブリというペット昆虫として売られていたり、どこぞの国ではカブトムシ代わりともなってる人気のある（？）ゴキブリだ。

ダンゴムシに近い外見かもしれない。

ついでに言うと、動きが遅い。

ただ、大きさは大の大人ぐらいであり、なかなかグロテスク。と思いきや、ここまで大きいと金属のような光沢感があり正直言わせてもらうと、こういう形の戦車だと言われれば納得してしまう男のロマンをかすかに感じた。

普通にカッコいいと思える。

一般家庭においてゴキブリは忌み嫌われるのが普通。しかし僕は嫌いでも好きでもない。

普通に姉さんの方が怖いからね・・・ふふふふふふふふ。

そもそも自分の体の100分の1にも満たぬ虫けらにビビることなどありえない。

父さんも母さんもビビらないし、姉さんに至っては刀に真空刃を纏わせてそれで斬ると言う人間離れした技で嬉々としてしとめる。

なかなか小さな的で、すばやいために”良い練習台だわ”とか言っていた。

そんな発想をするのは姉さんだけだろうな。と改めて姉さんの変態具合を感じたものである。

しかも、わざわざ昆虫を食べるハリネズミや爬虫類の餌として売られてるゴキブリを買ってきて部屋に放すとか言うバカなことをやっていくらいだ。

さすがに僕でもそれは気持ち悪かった。

というか、いくらゴキブリであろうとそういう命の消費の仕方はよろしくないということで、珍しく母さんがぶちきてそれ以来必要以上に他生物を斬るということとはなくなった姉さんである。

ちなみに姉さんが試し斬り用にとミドリガメを買ったのはそれよりちょっと前。

万感の思いだ。

「この魔獣はブラックローチね。」

昆虫として分類される中では一番ランクの低いポーン？で、森の中の死骸を食べる無害な魔獣よ。

動きが遅い上に特にこれと言った攻撃手段もない。でも、弱い割にはかなり堅い外殻を持っていて魔力、霊力に対する抵抗効果も大きいことから、鎧はもちろん兜や剣の材料として乱獲。絶滅の危機に瀕してゐるって話よ。」

「お気の毒に・・・」

「人間なんてそんなもんじゃろう。」

<この魔獣・・・昔に比べて見ないと思ってたならそんなことになってたのね。>

地球でも結構な数の生き物が絶滅していったらしいしなあ。

人間の”手”で。

なんというか・・・なんというかである。

世界は変わっても人間は人間と言うことだろうか？

というか、日本ならば女の人はおるか、大の大人でもこれを見た瞬

間に悲鳴を上げると思っただが・・・

エンデもフェローも普通だ。

そりゃそうだよな。

魔獣の素材剥ぎ取りの方がよっぽどグロテスクなもの。

こんなところで、日本がどれほど平和であるかということを理解させられた。

「それがこんな場所に群生してるってことは・・・数少ない生き残りってわけか・・・

とりあえず、見なかったことにしよう。」

「そうね。」

「うむ。」

<達者で暮らすのよ。>

その後、さらにすすんで、森越え全工程の3分の2が過ぎたところで異変が起きた。

前方からかなり濃い魔力が急接近してくる。

「!？」

エンデ、フェローっ!!下がーっ!!っ!？」

魔力の流れから只者じゃないことが分かった。

相手の姿は四つの悪魔のような羽?を持ち。

体のほぼ半分は黒い粘土のようなもので人型が形成されている。

そして、両手には金色に輝くひし形の大剣が一つずつ。

髪は紫色。

うつろな双眸も髪と同じく紫色で、その瞳にはなんら意思が伺えなかった。

> i 1 6 7 4 3 — 2 2 3 8 <

僕は思った。

こいつが”アスタナシア”だと。

第30節 アスタナシア（後書き）

挿絵は服をきていますが、二百年前に魔物化したので身につけていた物は朽ち果ててる筈なんです。

そのことにあとから気付いたものの・・・

大人の事情（笑）で止む無しっていうのと、面倒だったんでそのままと言う。（笑）

ちなみにゴキブリの話ですが、ぶっちゃけあれらは見た目以外はほぼ無害だったりします。

それこそ生で数十匹を食いもしない限り、まず問題ないかと。

そんな人、まずいませんよね？（笑）

むしろ犬猫の方が人間に害を与える可能性が大きいというのはこれまた動物まめ知識。

野良猫なども寄生虫やら雑菌などがまあ多いので、お子さんをお持ちの方は基本的に触らせない、近くに寄せないというほうが良いと思われます。

第31節 アスタナシア？

これって戦うしかないのだろうか？
強いものを求めるとかいう話だが。

「響・・・構えるのじゃ。」

「分かつてる。」

どう考えても逃がしてくれるって空気じゃない。2人は下がってて。

「

慣れつつあるも未だ素人の域を出ない扱いしかできないバスタード
ソードをしまつて、ファルシオンを取り出す。

このアスタナシアとかいう魔物。

姉さんに匹敵する強さかもしれない。

『にい・・・』

「なに？」

アスタナシアが何か言ったような気がしたが、聞き取れない。
そして。

「きたっ！？」

『・・・』

戦闘開始の合図はアスタナシアの先制攻撃から。
右手に持つひし形の大剣を振りかざしてくる。

「しっ！！」

ギリンと派手に音をたてて、交錯する僕の刃と大剣の刃。

今の一撃で表面的な實力はわかる。
この魔物。
強い。

「桜花瞬連斬！」

はなから全力で技の出し惜しみはしない。
本気で潰しにかからないとこちらが負ける。

桜花瞬連斬は抜刀から納刀までの工程を最高速度まで極めた技であり、その速度はほぼ隙無しで三連の居合い剣を放てる。

『・・・』

一撃目を右手の剣で、二撃目を左手の剣で受けるアスタナシア。
それらを弾き、三撃目。

「とつたっ！！」

弾いた大剣はどちらも後方。
無防備になった胴を斬り抜く。

『・・・』

「なっ！？」

弾いた大剣を戻そうとせず、その場で高速回転。さながらベーゴマである。

その回転の勢いで僕の剣を受けたアスタナシア。
そのままこちらに斬り結んでくる。

上、下、斜め、フェイント、上、下、フェイント、斜めと回転して
とは思えないほど柔軟に剣筋を変えてくる。

剣の台風である。

それらを見切り、受け流し、反撃を入れるもすべて遠心力の加わっ

た大剣に阻まれる。

回転しながら、攻撃も防御もこなすと言う神業を見せてくるアスタナシア。

めちゃくちゃだ。

僕はいったん距離をとって、攻めを切り替えた。

こんなときに覚えていて良かった魔法。

まだ高度なものは無理だが、この森での戦闘ではわざと魔法を多用して戦い続けただけあって、初級魔術ならば十二分に扱うことができる。

「アースブレイクッ！」

魔力を練りこむと足元から魔法陣が展開。

効果が発揮される。

アスタナシアの周りの地面が蛇のように隆起し、もちろんのこと回転は阻まれ、体が宙に投げ出された。

体勢が崩れた今、チャンス到来である。

「桜花烈蹴斬！！」

縮地で距離をつめ、背後から烈蹴斬を繰り出す。

今度こそとつた！！

『・・・まだ・・・』

「っ！？」

体勢を崩した以上、受けれないと思ったのだが無理やり大剣を背後に回しこみ、僕の剣を受ける。

そしてもう一方の大剣でこちらに斬撃を放ってきた。

宙に投げ出され、背後に回られた相手にとんでもない対応である。

もともと蹴りも加える技なのだが、その斬撃に防がれて結局一つのダメージも与えることは出来ない。

『・・・っ!!』

「くそっ!？」

着地と同時に再度斬りかかる。

が、紙一重で見切られ反撃の袈裟懸けを打ち放ってくる。

このまま打ち合っているのもギリ貧でなかなか決着がつかない。ならば。

少し賭けに出るまで。

それを”避けず”に僕はそのまま距離を詰める。

剣は豆腐を斬るようにザクンと肉を断ち、ブシッと鮮血が産声をあげる。

肩口がバツサリと切り抜かれるがそれを痛みも含めて一切合財を無視。

鮮血が糸を引き、僕はそのまま懐にもぐりこむ。そして打ちはなった。

「奥義っ!!」

春夏秋冬!!」

”桜花剣”は姉さんの奥義。

”春夏秋冬”は僕の奥義である。

僕自身のオリジナル技。

有り体に言えばただただ速い居合い剣。

桜花瞬連斬を越すさらなる超高速度でもって抜刀、納刀を行う。それを四連で。

音速の域に達するらしく、打ちつけた刀はソニックブームもとい衝撃波をまとう。

桜花剣はとにかく早く、鋭く、重い高速度の袈裟斬り。その一刀は音速の壁を断つ。

しかし、これは音速の壁を断つのではなくわざと刀に塗りつけるように、纏わせるように、そして押し込むのだ。それを相手にぶつける。

刀に寄る斬撃と衝撃波という面の攻撃。

それを併せ持ち、なおかつ速度は桜花剣を上まる。

反応できるはずがない。

と思つてた頃が僕にもありました。

「う、うそおっ!？」

『・・・にい・・・なの?』

なんかぼそぼそ言ってるけど、構ってられない。

だって、普通に捌かれたんですけどっ!？

一体どうしたことっ!？

姉さんに唯一血を流させることも出来た僕の最高技なのに!!？

しかもこれは「ヒビ」たら・・・いつの間にこんな技を？さすが私の弟ね!!」とか言わしめた技ですよ!？

ぶっちゃけ、そのときは嬉しいやら後ろめたいやらであまり誇れた気分ではないのだが。

なんだかんだで嫌いではない姉さんを斬って（とはいえかすり傷だが）血を流させたのだから当然である。（日ごろ遠慮なく斬られる僕なのに、斬ってくる相手になんて優しい弟としての気遣い！！などと思っていたりする。）

正直、この技でも姉さん相手では服の一枚二枚を斬る程度だろうと思っていたから安心して使ったのだが、初めて姉さんが血を流しているところを見たとき、もし少しでも深かったら？と思うと複雑な心境なのである。

そうなっても姉さんなら嬉々として「これは・・・やりがいがあるわね。もう少し本気を出していこうかしら？」とか言いかねないのだけでも。

閑話休題。

とにかく、その技を防ぐとは驚嘆に値する。

まあ、刀じゃなくファルシオンだからというのがあるのだろうけれど。

とはいえ、体勢を崩すくらいのはできた。

ならばやることは一つ。

このまま攻め切る！！

「どっせいっ！！」

当身でさらに体勢を崩す。

そこに再度魔法を発動させる。

「ブラストファイアッ！！」

再度魔法陣が展開。

今度は僕の背後から魔法陣が展開される。

そして、魔法が発動。

直径10メートルほどの炎の塊が出現する。
それがアスタナシア目掛けて牙をむく。

爆発。

凄まじい轟音を発てて爆炎と爆風が対象を焼き滅ぼす。

体内にめぐるフェローの魔力もといフェローの魔力のうちの二割をすべて込めた初級魔術である。

ちなみに基本的にフェローの全容量の一割ほどしかフェローから流れていなかった魔力だが、今では二割ほどまで増量している。

魔法を使えるようになって徐々に魔力に慣れ始めたから、増量されたのだ。

二割とはいえ、元が元である。

初級とはいえかなりの威力になるはずだとは思っていたが、これはいささか威力がありすぎる気がした。

「ほぼ・・・焼け野原なんですけど・・・」

東京ドーム一個分の広さにわたって焼け野原と化していた。

この辺にいた魔獣やこの辺を住処にしていた生き物に申し訳ない。多分、アスタナシアが来た時点で逃げてはいるとは思っけど。

不幸中の幸いは魔力による炎のため、普通の炎と違って燃え広がると言う心配が無いただだろう。

しかも体内にめぐる魔力をすべて込めたつもりだったのに、実際は1割分も使われていなかった。

魔力、霊力が体外に漏れ出るということはないが、扱うとなるとコントロールがまだまだである。

要練習だね。うん。

「さすがに倒せたと・・・思っただけど・・・すごいな。」

アスタナシアは爆心地で悠然と立っていた。

文字通り肉を切らせて骨を断つはずだったのだが、ほぼ問題なさそうだ。

無論、無傷ではないけど。

ただ様子がおかしい。

『にいさん・・・やっとみつけた・・・』

「にいさん？」

しかも涙が流れ出ている。

今まであった殺意・・・というよりは敵意？

それが消えうせている。

『にいさん・・・私の・・・私のせいでにいさんが・・・う、うぐ。
うあ・・・うあああああ・・・あああああああああああ
あああああんっ！！』

そんでもっていきなり号泣しだすから困ったものである。

・・・。

・・・どどどど、どうすればいいのっ！？

これっ！？

ちよつと奥さんっ！

教えてくださいねっ！？

「あ、あの？ど、どうかしたの？」

『に、にいさん！！にいさん！！

ご、ごめんなさいっ！！

わたしが、私がいたから・・・私が捕まったからにいさんは・・・』

うおつと！？

抱きついてきたっ！？

ちよつと、肩がバツサリ切れてるんでもう少し優しくして欲しい！！

女神の指輪と精霊契約のおかげで治癒能力が劇的に上がってるとは

いえ、まだ痛いんですっ！！

あだ、いだだっ！？

ちよつとっ！？

痛いっ！！

とかなんとかやってると、手袋を介して何かが頭に流れ込んできた。

これは・・・アスタナシアの記憶・・・かな？

「なるほど・・・君が強いものを求めたのは”にいさんに会いたかった”からか。」

それが分かったとたん。

急激な感情の奔流に吞まれ、僕は気を失った。

アスタナシアの記憶と思わしき夢を僕は見た。

「あれ？ここは？」

「起きたかのう？」

ここは先ほどの場所から少し進んだ場所じゃ。

今日はここで野営じゃのう。」

「ぐるう・・・」

フェローは心配してないようだが、僕がいきなり倒れたことにシロが「大丈夫？」と不安げにしていたのでシロの頭を撫でてやった。

「ひ、ヒビキツ！？」

だ、大丈夫なのっ！？」

<大丈夫って言ったでしょ？まったく、エンデは心配性なんだから。

>

「う、うるさいなっ！！

そう言っても心配なんだもんっ！！」

エンデはあいもかわらず嬉しいことを言ってくれる。

ここまで心配してくれる友達が今までいただらうかっ！？

否！

いまい！！

本当に僕にはもつたいないくらいだ。

笑いながらエンデに大丈夫。と答えて僕は起き上がる。

「アスタナシアは？」

「あのあと、霧散した。

魔力に還ったのじゃろう。」

「還る？」

「魔物とはいわゆる魔力のみで出来た魔力体じゃ。

魔力に意思が宿ったものといっても良い。」

「ふむふむ。」

「死ぬ間際の強い意志で発動した魔術が魔物を作るといふのは覚えておるじやろう？」

そして、意思には必ず”目的”がある。

”生きたい”ならばそのまま生き続けることが目的となり、魔物は理性も何も無く、ただソレをするために行動をする。

行動原理と言っても良い。」

「なるほど。それで？」

「たとえば、死ぬ間際に”自分を殺した相手が憎い”であれば、その殺した相手を殺しにいくのが目的となる。

そしてその目的を果たした場合、ないしは目的を果たせずに振り返り討ちにあつた場合いでも。

魔力は指向性を失い、霧散し、大気に吸収される。

これを”還った”と言うのじゃ。」

なるほど。

悪霊が成仏した・・・みたいな感じた。

「アスタナシアという魔物は前者のようじゃな。」

「うん。」

手袋を介して伝わった。」

「なんじやとつ!？」

「うおっ!？」

そ、そんなに驚かなくても・・・」

「す、すまぬ。」

それっきり黙考し始めたフェロー。

一体なんなんだ？

エンデが知リたそうにしていたので、アスタナシアの死んでからの物語。

といつても簡単なものだが話す。

基本的には御伽噺と同じだ。

ただ最後の方が違う。

最強の剣士と言われていたホーマンを殺すために妹のアスタナシアを人質にとる。

ここまででは同じだが、彼女はホーマンを庇えなかったのだ。

彼女にはとある才能があつた。

それは魔術を扱う才能。

そして、兄であるホーマンには劣るものの、剣の才能も十二分にあつた。

彼女はその才能を惜しげなく使つた。

家族を・・・兄を守るためだ。

当然だ。

ところが、彼女の才能は彼女が考える以上に強大で、危険で、馬鹿げた物だつた。

自分を人質にとり、兄を殺そうとする憎き王国を助けるべき兄もろとも消し飛ばしてしまつたのである。

彼女は嘆いた。

結果、彼女は自害したのである。

自分を支えてくれた兄はもういない。

その支柱を折ったのは自分の手。

国どころか、なんら関係ない国民もろとも殺し尽くした。

何よりも愛すべき、慈しむべき、たった一人の家族すら殺した。

彼女にそれらを背負う度量も余裕も助けも冷血さも無く。

彼女はあっけなく死した。

その自害の場所がこの森。

ここには兄と妹が過ごしていた小さな小さな小屋があつたのだ。

魔獣は本能的にその力を知っていたのだろう。

魔獣に襲われることも無く。

かといって誰か人が入り込んでくることも無く。

大層、幸せに過ごしていた自身の愛すべき居場所で、その生涯を閉じた。

死ぬときにただ一つ。

”にいさんにもう一度会いたかった、謝りたかった”と願って。

「・・・反吐が出る話。」

くなる。ホーマンは強かった。だからホーマンに似てる・・・重なるほどの強い人を求めていたってわけね。見た目を気にしなかったのはおそらく・・・どこかですでに故人だということを認めていたのじゃないね。

いないと分かりながら、さまよってさまよって。無き兄を求める。

とりあえず、強ければ良い。

自分の兄にとって一番の特徴であつた”強さ”。

それが似ていれば良い。

それで兄と判断しよう。してしまおう。

本当は兄はもういない。でも死んだとは認めたくない。

もし認めれば兄を殺したという罪をずっと一人で背負い続けなくてはいけないから。

だからこそ一目会って謝りたい。

謝って自分の過ちを許して欲しい。

命を奪ったという罪荷を降ろしたい。

そんなところかしらね。>

「良く・・・わかるね。」

セルシーの言うことは的を射ていた。

そう。

彼女から流れてきたのは何よりも懺悔の心。

後悔の念が強かった。

自分を責めていた。

でも辛い。辛過ぎた。

僕と戦っていたときに魔術を一切使わなかったのもある程度察しがつく。

彼女が持ってしまったその感情は自分をも殺す魔性の狂気。

唯一のよりどころであった兄を亡くした彼女にそれに耐えられるはずも無く。

自殺した。

逃げたくて、背負いたくなくて死んでいったというのに、死んでもなお背負っていたその念を。

それを背負って2000年。

彼女は一体どんな思いで強いものを求めていたのか。

”アレ”はもちろんアスタナシア本人ではない。

ただの魔法であり、魔力の塊に過ぎない。

でも、そんな感情に振り回されていた魔力にこびり付いていたのは
紛れも無い、悲しみで悔恨で。
それは酷く僕の心を荒ませた。

そんなことを思いながら僕は寝た。

願わくば、安らかな眠りをと誰にでもなく祈りながら。

・・・ガラじゃないな。
神様とか信じてないし。

ずっと上の空で考え事をしているフェローがいやに気になった。

第31節 アスタナシア？（後書き）

ちよつとした伏線を書きたくてこの話を入れました。
手袋の真相にせまる！って感じですね。

次回からしばらくはのんびり展開になると思います。

第32節 卑屈モード（前書き）

魔獣の生態を考えるのが楽しくて仕方ない。

第32節 卑屈モード

「だりゃあっ！！」

振るったバスタードソードがフロッグマンという二足歩行のカエル型魔獣を叩き斬る。

振りぬいた勢いを無くさずにさらに一回転。

フロッグマンの背後に控えていた、もう一匹を斬り捨て戦闘が終わった。

周りにはもう二匹のフロッグマンがいた。

しかし、その二匹は頭に矢を生やして絶命している。

エンデの弓で仕留められたやつらだ。

ちなみにフロッグマンとは日本で言う両生類に属する魔獣で知能、戦闘能力共に割合高い。

体も大きく、3メートル前後。オタマジャクシは卵から出ずに中でカエルになるまでじつと耐えるという特徴的な繁殖形態をとる魔獣である。卵のなかでオタマジャクシからカエルにと変態するわけだ。その後、孵化して口より小さな他魔獣を捕食しつつ成体となる。

粘着質の舌で昆虫型魔獣や小さな魔鳥類、時には下位竜種をも捕食すると言う。

体表から神経毒を含む粘液が出ており、素手で触ると結構強めの感覚麻痺に侵されることがある。

なんて恐ろしい毒蛙だ。

元の世界のカエルにも粘液には大なり小なり毒が含まれているとテレビで見たことがある。

人を殺せるほどの毒を持つカエルは手で数えられる程度しかないというが、比較的身近なアマガエルでも毒を持つという。触った手で目をこすったりした場合、かなりきつい激痛だとか。

カエルを触ったら、手を洗いましょう・・・ってね！

剣を念入りに拭いておこう。粘液が怖い！！

ちなみにフロッグマンのクラスはナイト？。

「すごい・・・この弓。」

私の思い通りに当たると、魔力の伝達効率がかなり高い・・・」

「そんなに凄い弓なんだ？

高いだけあったな・・・

それよりも、一気に魔獣との遭遇率が上がってきた気がする。

あれからもう何十匹殺したとか・・・ちよつと気が滅入るよ。」

「おそらくじゃが、アスタナシアという高位の魔物が消えたことに関係あるじゃろうな。」

強大な存在が消えたことによつて、普段から隠れて過ごしていた魔獣達が活性化しているのじゃろうて。」

<よくあることなのね。まあ私達にかかれば余裕つて話よ！>

「お主は何もしておらんだろう・・・まあ、響の魔力の扱いが下手なこともあるのじゃが。」

「耳が痛い・・・」

あれからさらに魔力、霊力容量が増していて、現在では三割ほどが僕の体に流れていた。

これはあくまでも僕の体内から漏れないレベルというわけであり、扱うとなると2割ほどが精一杯だ。

激しい戦闘中だと一割程度。

魔力、霊力を扱う感覚はいかんせん分かりづらく、もともとそんなファンタジー要素がなかった僕には扱いづらいことこの上なかった。しかも、一割といえどそれなりに大容量であり多めに魔力を込めると無駄に破壊力があるし、かといって少ないと本来の威力や用途を満たすことが少ない。

全く持って扱いづらいものである。

ちなみに奇跡もちよいちよい併用しているが、重点的に魔術の方を訓練中。

勇者の才能があるとされた連中は簡単に扱っているのだろうか・・・と思うとなんかむかついてくる。

そして、ちやほやされてるのだろうか・・・と思うとレヴァンテの王をひっぱたきたくなる。ような気がする。

「そろそろ森の出口が見えても良いだろうに・・・」

「まだまだじやろう。」

あれから5日。ひたすら進んでおるが・・・もう5日はかかるじやろうな。」

「確かに。魔獣が良く出てくるようになったのが痛いよね。」

これから魔獣との遭遇が増えてくるかもしれないし・・・下手したらその倍かかるかも。」

「はあ・・・めんどくさ。」

それに予想以上の広さだよ。この森。富士の樹海の数百倍は軽くあるねコレ。北海道くらいの面積がありそうだ。」

「富士の樹海？ほっかいどう？」

「僕の国で結構規模の大きい森のこと。北海道は島・・・かな。」

それにしてもエンデとフェローもよくよく動けるね？

僕は契約と弱いながらも勇者としての力で大体10倍くらいの能力値になつてるにもかかわず、あまりペースを落とす必要が無いってのは凄いよ。」

「肉体強化の魔術を使っておるからの。妾の力は基本固定砲台向きとはいえ、下手な剣士よりは強いぞ。」

「私も肉体強化と疲労軽減の魔術を使ってるからね。」

「ついでに私の一族固有の”魔法”もあるから。」

「ああ・・・確か、その力ゆえにあのお下劣勇者との同行を強制されたんだっけ？」

「うん。」

本来、肉体強化の魔術は自分にしかかけられないんだけど、私の魔法”は他者の治癒能力の強化ができるの。

というか、他者に対する専用。

筋力とかが上がるわけでもなく乱発できないっていう扱いづらい能力なの。」

「なるほどね。すでに十分な肉体強化がされているから怪我の心配があまり無い、あのモドキにはあまり必要なかったわけか・・・」

「そうなるわ・・・口惜しいことにね。」

「僕としては凄く助かるけどね。」

女神の指輪と契約、エンデの力をあわせたら一時的に不死身になれそうだし、ある程度の怪我は覚悟できる・・・ってのは大きなメリットだよ。

他にもサポート系の魔術を多く覚えていて弓の腕も良い。料理の腕も良し！

そんなエンデをあんな扱いとは・・・あいつはつくづく無能だったんだな・・・いや、有能だからこそ他者の助けを必要としなかったところか？」

などとエンデをべた褒めしているとエンデは頬を赤らめて謙虚な発言を شدした。

「そ、そんなに言うほど・・・わ、私役にたってるかな？」

「もちろん。」

現に助かってるし、エンデが旅についてきてくれるって言った時はまあ・・・戸惑ったけど、結果的には僕の・・・その、と、と、友達が増えたってことだし・・・嬉しかったし・・・」

と、友達でいいよね？

僕から一方的に友達だと思いこんでるってわけじゃないよねっ！？
ちよっとドキドキ。

もし、「友達だとは思ってなかった」とか言われたらどうしよう？
というか友達ってどうやって作るんだっけっ！？

友達らしい友達を作ったことが無いからいまいち作り方がわからない。

今から「友達になってももらえませんか？」と許可を取るほうが良いのだろうか？

「友達ってのは、いつのまにか出来てるもんだぜ！キラッ」みたいなシーンを漫画で見たことがある気がする。が、そんな抽象的（？）かつ曖昧なことを言われても、実感が沸かない。

そもそも”ソレ”を経験したことがないもの！！

もちろん、日本にいた段階でこうした悩みがあったのは当然。

悩んだ挙句、友達作りのためのハウトゥー本を買っておいたはずなのだが・・・結局前提条件で挫折したのを覚えている。

前提条件が「清潔な見た目を心がけましょう」だからだ。

さらには「人間は見た目で7割ほどを判断します」とかなり穿ったことが書かれていた。（もう少し回りくどく、優しくウェッティな表現で書けよと思ったものである。）

ぶっちゃけこれが一番難しい・・・というか、これを守れない人はどうすれば良いのか？という疑問の答えを得るべく買った本なのに、「この前提条件が守れない場合はもはやあきらめろっ！！友達を作るところか、就職すらまともにできんよ小僧ども！」みたいなことが書かれており・・・著者は見た目が汚かったり、不潔なヤツが嫌いな潔癖症なんだな。と漠然と感じたのを覚えている。

分かってはいるだろうが、僕の服が特別汚いわけではない。
清潔な見た目と言うのは余裕でクリアである。

下着だって毎日違うものをはき、毎日洗っている。

手洗いだってちゃんとやっているし、アイロンだって欠かさない。

むしろ普通の人よりも清潔なくらいだ。

ただ、見た目と言う越えられない壁があった。

包帯である！！

時たま血がにじんでいたりと、帰りのホームルームになる頃には血が固まり、ドス黒くなつた包帯で体中を

包んでいるものだから・・・不潔と言えば不潔かもしれないが、単純に恐ろしい見た目が辛いのだ。

しかも包帯が毎日。

これが女の子であれば萌え〜とか言われていただろうに、僕は残念ながら男。

立派なオノコである。

顔はまあ女の子っぽいがそれよりも包帯のインパクトの方が強いのは当然。

血で黒く変色した包帯を巻いている（しかもだいたい毎日）人間に不潔も清潔もない！！

とにかく、そんな人生を歩んできた僕としては友達は貴重なのである。

今は包帯なんて無い！！

今ならば友達が出来てもおかしくない！！

と自分を振るい上げるものの、ただやっぱり不安はぬぐえない。

空想的にも性格的にも「いや、ヒビキと友達なんてありえないよ」

なんてことは言われないうが、少しなりとも「え！？・・・っ

とその・・・」みたいな反応ないしは目を向けられたらハッキリ言われるよりも堪える。

「あ、ありがと・・・」

よかったああああああああああああああああああああああ

あああああつ！！

顔が結構赤いが嬉しそうにエンデはそう言ってくれた。

もう！！

もうもうもう！！

友達だよな？と聞くのは恥ずかしすぎて出来ないが、否定しないし不快だという態度も見られない！

これは友達だと向こうも思ってくれていると考えてOKだろう！！
本当に良かったっ！！

良かったっす！！

と思いきや。

「と、友達か・・・友達よりも・・・」

と言いながら微妙に不機嫌な感じになるエンデ。

あれ？

あれあれ？

なんで急に不機嫌になつてらっしゃるの？

もしかして僕なんかまずいこと言った？

友達になつてくれないの？

やっぱり無し！とか言ってくるの！？

確かにさ。

”ありがと”だけじゃ単に自分の能力を認めてもらったことに対する感謝みたいなものかもしれないし？

友達うんぬんの部分はまさか聞いてなかったとか？

それとも私を友達だと思ってくれるなんてありがとう。みたいな意味合いなのか？

まず後者は無いだろう。

だって、後者だとなんか僕と友達になりたがってるニュアンスだ。

”友達より”という言葉も聞いた。

これは”友達なんかより”という意味が込められてるかもしれない。友達”なんか”。

友達という言葉を経視してるような感じである。

友達と言つ關係図を望まないという意味が含まれているのは間違いが無い。

というわけで、さっきの”ありがと”はまず間違いなく前者。

そして友達うんぬんと僕が行つた部分に対する返事が今の”と、友達か・・・友達よりも・・・”という部分であろう。

なおかつ”友達よりも”の”友達”と”よりも”の間にはおそらく”なんか”という言葉が入るだろう。

すなわち？

これってあれ？

友達は無理つてこと？

友達だとは思えないもとい友達とは思いたくないってこと？
えと。

なにそれ？

僕だけが勝手に友達だと思つてたってこと？

向こうはあまりそう思いたくない節がある。
つてこと？

すなわち微妙に不機嫌になつたのは「勝手に友達扱いしてんじゃねえぞ」からあ、なれなれしいこと言つてんじゃねえぞ」からあ「みたいなの？

はははあはは。なんて滑稽なんだ。

僕は。

いや、いいよ。

もういいですよ！

どうせもう少し経てばイチゴ柄パジャマが喋れるようになるし！！
僕の友達イチゴ柄パジャマだけいいよっ！！

そう思った瞬間に急に悲しくなつて涙が溢れてきたのってのは秘密。
今日の野営時に判明することだが、これは僕の誤解であり、向こう
も普通に友達だと言ってくれた。
そのときにまた泣いた（嬉泣き）のは言うまでも無い・・・という
か言いたくないことだ。

「・・・バカじゃのう妾の相棒は・・・」
とフェローに呆れられた。

こころなしかシロも呆れていた気がする。

ごめんね。バカな飼い主で。

なんだかんだでさらに8日くらいかけて森をようやく抜けると真っ
先にあつたのは大きな街であつた。

街の名前は良く分からないがとにかく街に入ることにする。

東大陸にようやくたどり着いたのだ。

後半、中位竜種の群れに出くわしたときは適当に斬り開いて逃げ出
した。

全部殺すのが面倒すぎる。

「まずはギルドで換金かな。

東大陸で新しく登録しなくちゃいけないのかな？」

「それは無いと思う。」

確か、ギルドって中立の北大陸の人たちが作った組織らしくてギルドと国にはなんら関わりはないから特別そというのは必要ないらしいよ。」

「へえ・・・それはよかった。」

そのままギルドに到着。

割と迷わずにつけた。
すると。

「はあい！

ご一行さん。

数日振りね！」

「てい、ティリアさん！？」

そこにはティリアさんがいた。

多少驚くも、まあティリアさんだし。と適当に納得しておく。

「巨乳魔人め・・・やはり先回りしていたようじゃな。」

「ミモフタもない言い方ね・・・酷いじゃない。」

まあ幼児ごめんなさい。」

「ふん！！」

右手に凄まじいほどの魔力と霊力が集まっているのに気づいたのか、ティリアさんはすぐさま謝る。

フェローをからかうのは命がけと言つことだろう。

「それで？今回はなんの用じゃ？」

「こつちのセリフだと思っわ。」

「だまれ、脂肪女め。」

「・・・酷い言い草ね。」

私泣いちゃいそう・・・だって女の子だもん！」

「やかましいわっ！！」

フェローの暴言にティリアさんはよよと泣き崩れる（演技をする）
がそれを意に介さないフェロー。

あまりカリカリするとお肌に良くないと忠告してあげるべきか？
まあビンタされるのではないけれど。

ただ、よよと崩れ落ちるティリアさんの体のしなり具合がえっち
ごほごほん！

大根演技なのだが変な可愛さがある。

ついつい手を貸してしまいたくなるような、抱きとめてあげたくな
るような。

そして大人の色気と言うものがムンムンと漂ってくる。

「顔が赤いわよ・・・ヒビキ。」

むむ！？

エンデはなぜか不機嫌だ。

「これじゃから男は・・・」

「響君？」

私と良いことする？」

「必要ありませんっ！！」

「あなたには聞いてないのに・・・エンデちゃん。」

良いことってなんだろう？

とちょっと気になったけど、いきなり不機嫌の絶頂に到達したエインデの方が気になる。
なんでそんなに怒ってるの？

聞くと「知らない！」と叫んで僕と視線を合わせようとしなくなった。
一体何だっって言っんだ。

その後、一言三言話したあとに換金して宿を取ったのである。

第32節 卑屈モード（後書き）

ちなみに卵の中でオタマジャクシからカエルになるまで成長するというカエルが実際に存在します。

第33節 あなたが着るパジャマの性格はなんですか？

ティリアさんに聞いたところによると、この街の名前はトロイア。別名「追憶の街」と呼ばれるらしい。

戦争において東大陸の最前線である二つの街がある。

各種兵士がワラワラと存在する軍撃の街”グングテール”、規模では一番大きく強固な防壁が特徴の防撃の街”ボンデール”。そしてその横に寄り添うかのように存在するトロイア。

トロイアは最前線であるグングテール、ボンデールへの補給拠点ないしは死者の回収や葬儀処理のためだけに開拓された街。

そのために”追憶”という名で呼ばれるとのこと。

町並みは特別綺麗でも汚くもなく、鎧や剣で武装してる人が多い。

最前線の一步前と言えど、戦場付近であることに変わりはなく、一般人は少ないみたいだ。

チエス冒険者ギルドの規模も小さめである。

多分、高位のクラスの冒険者は徴兵されてるんだろうか？

でもギルドは西でなく東でもない北勢力のものだからそんなことは無いのかな？

せいぜい王国兵と共に戦えみたいな依頼が出てるとかそんなところ？

少なくとも見かける兵士達は例外なく常にぴりぴりとしていてどことなく元気が無い。

最近はある秘術。もといチート能力を持つ勇者召喚の技術が西大陸側で使われるようになったところから、東大陸は押され始めたと言っし、士気が落ち込んでるのだろう。

ただ召喚されるだけで肉体に魔術的強化が10〜20倍になる。

さらに肉体的スペックが2〜10倍になると言う肉体強化の術を使えば元々が5くらいの戦闘能力しかない異界の一般人でも最大1000くらいには戦闘能力が膨れ上がる。

もつと高くなる可能性だってあるし、はっきり言えば肉体的な能力だけでもここまでばかげたところまで行くところにもならない。

僕だって最初は2〜3倍。契約で能力が上がっても、せいぜい10倍。姉さんに鍛えられた部分で元値が高いのが功をそうしたといったところだ。

それに・・・勇者にはもう一つのアドバンテージがある。

一つだけ神具（装備時に特殊な恩恵を得られるものを魔具。その中でも飛びぬけた物を神具と言うらしい）とも呼べる――僕にとつての”黒い手袋”やこないだのモドキが持っていた魔剣の力を増加させる鞘の”クラウ・ソラス”。

そういったチートアイテムまでもがこっちに呼ばれた瞬間に装備されていると言うのだから、そういった反則野郎どもを相手にする一般兵としては”冗談じゃない！”という気持ちだろう。

僕だってそう思う。

ところで！

話は変わるが現在時刻は朝の5時。

トロイアについて宿を取り、一晩寝て次の日になった早朝である。

起床して早々にこんな小難しいことを考えたのには一つのわけがある。

僕が目覚めるとヤケに抱き心地の良い物があつたからだ。

毛布をめくると・・・嫌に納得いきかねない光景が目に見え込んできたからして。

漫画とかで見たことがある。

確か、こういう時って大抵自分に好意を抱いている女の子、もしくは知らない女の子がいきなり布団の中にもぐりこんでいる。という

状況だ。

だがしかし。

それは無いだろう。

僕の布団の中に潜り込んでくるほど好いているような相手に心当たりが無いし、仮に好意を持っていたとしても布団に潜り込んでくるような性格をした女の子は僕の周りにいない。

よってエンデとフェローは却下。

シロが潜り込んできたのか？と少し思ったが、あやつは変温動物であり今は宿に備え付けられた馬小屋ですやすやと寝息を立てているはずである。

そもそもこんなに良い香りはしないし柔らかくも無い。なおかつ小さくも無い。

知らない女の子と言うのも却下できる。

知らない女の子が僕の布団に潜り込むわけが無い。

まず潜り込む動機が分からないし、戸のほうへ視線を向けると鍵もすっかりかかっている。

そもそも念のためとばかりに僕がかなりの精神集中をして現在持ちえるフェローから流れてくる全体の3割分の霊力を込めて奇跡”セイグリット”と呼ばれる結界を張ったのだから。

これは許可無く範囲内に入った部外者（物も含む）を締め出すという類の奇跡でオリジナルで作りの出したものだ。

室内にいたはずの者しかこの部屋には入れなかったはずだ。

室内には僕を含め三人。

くどいぐらいに目の前の光景を否定する理由を列ねて言ったのだが、やはりもって目の前の光景が信じられない。

知らない女の子どころか物も含めてありえる”はずが無かった”。

目の前には12歳くらいの女の子がスヤスヤと寝息を立てている。もちろん誰かなんてわからない。

「・・・寝るか・・・」

邪気も殺気も無い。

それどころか幸せそうに寝息を立てる少女を見て僕は現実逃避気味の思考からも逃避した。

害はなさそうだし。

うん。寝て覚めたらいつのまにかいなくなってるさ。
そんなことを考えつつ。

結局のところを言うと眠れない。

あれから二時間が経ったのだが、眠れない。

なぜかと言うと単純明快な話、緊張してリラックスできないのだ。
たとえ小さな女の子と言えど自分の胸あたりに顔を押し付けてきたり、思いつき抱きついてきたり、ふとした時に足を絡めてくるというのはロリコンじゃなくても大なり小なり緊張するはずで、少なくとも眠ることが出来るのは相当な猛者であろう。

服越しに伝わる体温とか、そもそも誰だっという疑問がまだ頭を離れない。

何この子？

わざとやってんの？

「現実をちゃんと見ろよ、逃げんなよ」とでも言いたいのか？

「眠るという行為で今の状況から逃れることが出来ると思ってる？」
と言いたいのか？

ソファアのほうで眠ろうにも抱きついているために不可能。

たたき起こせばすべて解決するのだがあどけない寝顔を見ると母性本能的なものが湧き上がり、無理やり起こしたくは無いと考えてしまっ

さつき、抱き心地がうんぬんと表現したが僕が抱かれてるほうだった。

僕の抱き心地は結構良いらしく、少女の顔には喜悅も見取れる。ついつい頬が緩んでしまう。

子供は生意気で少なくとも好きではないのだが、この寝顔を見るとそう思っていた頃の自分が恥ずかしくなる。もとい意外と子供好きなかもしれない。

もちろんロリコンという意味合いは微塵も含有されてないことを念のため言っておく。

母性本能100パーセントで出来てますよ？この僕は！！

とかわけの分からんことを言うのもコレくらいにして、さてどうするか？

ありきたりだけでも頬をつねって夢でないことはまず間違い無し。

かといってこの子が一体誰なのか？

どんなに記憶を辿っても見覚えが無い。

ただ、この子に抱き枕にされていると不思議と暖かく安心できる何かで包まれているような錯覚を受ける。

体格的には逆なのだが、そばにいて凄く安心できる。

ほんわかと胸が温まるようで、守ってもらいたい、守ってあげたい。そんな暖かな心を僕の奥底から引っ張り上げてくれるようだ。

あれ？

僕ってこんな見ず知らずの女の子を守りたいと思いたくなるほどフエミニストだった？

自分が自分じゃないみたいだ。

なんとかかんとか考えていると早くもこの状況に慣れてきたのか、緊張が薄まりと同時に軽い眠気に襲われる。

当初の予定通り寝てから色々考えることにしよう。

とか思っただけでおそうとしたとき。

少女の目とバツチり合ってしまった。

「……………」

お互いに無言。

口に出てぶつぶつと言っていたのかもしれない。うるさかったかな？
彼女は起きていた。

「……おはようございます。マイマスター。」

「あ、その……おはよう。」

開口一番に挨拶。

反射的に僕も挨拶していた。

挨拶って大事だね。

人間関係を築く上での大事な歯車。

それが挨拶です!!

って何を言っているんだろうか？

「マイマスターってのは僕のこと？」

「はい。貴方のことです。」

「そ、それは……やめて欲しいな。」

「ではヒビキちゃんと呼ぶことにします。」

「そっちなもキツイっ!？」

真顔で何を言ってるのこの子っ！？
ちゃん付けとか恥ずかし過ぎる！！
しかも年下（？）に！！

「ヒビキちゃんは嫌ですか？」

「嫌です。」

「では女顔童顔鬼畜野郎はどうでしょう？」

「予想外にすっごい毒吐くねっ！？この子！？」

「ご不満ですか？」

「それと呼び名として了承できる人間がいるとは認めたくないっ！

！」

「私が認めてあげます。
わたくし

貴方様は立派な女顔です。」

「一番認められたくない部分をチョイスしてきたっ！？」

「男装野郎の方がよろしいでしょうか？」

「いやまてっ！！男装って女性が男の格好をすることだよっ！？」

「・・・？」

「なぜさも『何かおかしいところが？』みたいな顔してるのっ！？
僕は男だよっ！？どこからどこを見ても男っ！！」

「……………いいえっ！！あなたは女なのよ響っ！！私は前々から気
づいて……………」

「ちよつと僕の中の変態響もとい自称女として響がうるさいな黙って
そして死ねっ！！」

「……………ちよつとっ！？扱いが酷・・・」

「ちよつと分からないですね。」

「いや、簡潔明快単純な話だったよねっ！？

僕は男。その事実確認だけだったよっ！？」

「ちょっと分からないですね。大事なことから二度言いました。」
「そこまで大事なことだったっ!？」

「というかそれ僕のセリフじゃないっ!？」

「冗談です。申し訳ありませんでした。好きで男装してるわけじゃないのに・・・マスターの気持ちも考えず。」

「ちよつとまてえっ!！」

今の発言こそ・・・というか今までの話の流れ全部において僕の気持ちなんて完全無視だよねっ!？」

呼び名うんぬんのくだりはともかくとして男装うんぬんのくだりは確実に僕をいじめてるよねっ!？」

「ええ、マスターのリアクションが面白いのがいけないのです。」

「まさかの責任転嫁っ!？」

「マスターで遊ぶのはさておいて。」

「”で”って言った! ”で”って言ったな今!！」

「マスター。人の話の途中に割り込むのは感心しません。」

「ご、ごめんなさい。」

なんか知らないけど正論を付き返された!？」

「マスターは私が誰か分かつてないのですね?」
わたくし

「うん・・・まあ・・・そしてそろそろ腰にまわしてる手どけて欲しい。」

未だにベッドの中で抱き合ってる形の僕と目の前のなぞの美少女。

彼女の外見を改めてみると将来は確実に美人になるだろうと断言できるほどの可愛さだった。

まず目立つのがその髪の毛。

見事な黒味があった。ピンクである。型はショートボブって言ったっけ? ショートボブだ。

そして理知的なイメージを受ける瞳はどこかで見たことがあるような気がする。

服装はメイド服の変形型？で子供用かつ私服に使えるように手を加えたかわいらしい服装をしていた。

そんな少女が僕の腰に手を回しつつ抱きつきながらこちらを見上げる形になってるものだからまあとかく照れる。足も絡めてきているのでなおのことだ。

「あれだけ私を好いてたくせに・・・新しい女が出来たらすぐに捨てて忘れるんですね。」

本当に鬼畜女です。」

「人聞きの悪いこといわないでっ!？」

ふうとため息をつく少女。

ため息をつきたいのはこちらのほうなんですけどね!!本当に!!というか顔が近い。抱きついてくるせいか離れたいのに離れられない。

そして女じゃないっ!!

「喋らないパジャマに話しかけたという痛い過去を持つくせにずいぶんな言い草ですね。」

もう少し優しくツツコンでくれないと・・・おしゃべりな気分になつてしまいそうです。」

「なぜそれを知ってるのっ!?!そして後半脅しですかっ!?!」

あの黒歴史をなぜこの子知ってるのですかっ!?!

「とにかく話の腰を折らないでください。」

「僕だったかな・・・折ったの・・・」

「なぜ知っているか?不思議そうにしましたが・・・私が知らないわけ無いでしょう?」

当事者ですし。」

「え？」

「まだ気づかないのですか？ マスター。」

私は貴方の身を包んでいたパジャマ。

「イチゴ柄パジャマですよ。」

⌈
•
•
•
⌋

ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ
ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ
ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ
ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ

絶叫により宿の女将さんから僕が怒られたのは言うまでも無い。

「ふむ。そろそろじゃと思っていたが、予想以上に上手くいったのう。」

まさか肉体を持つに至るとは……。」

「上手くいったっていつてもコレは無いでしょう・・・」

「高位精霊ってこんなバカげた真似がホイホイできるわけ？」

くさすがフェローのバカ魔力。その辺の具現化魔術よりなんかよっぽど精巧ね。しかも定着してるのがまた凄い。というかエンちゃん。いくら高位精霊でもこんな真似はまず出来ないわよん。魔力、霊力が高位精霊の中でも特に高い闇人で、その闇人の中でも最高位に位置する力の持ち主であるフェローだからこそ出来ることよ・・・。

私も精霊の中ではかなり高いほうだけどフェローの半分くらいしかないからね。>

さすがにあの絶叫で目を覚ました2人と1つが口々にイチゴ柄パジャマだったという少女を評した。

魔法がはびこるこの世界でも物の擬人化は常軌を逸することのようである。

ちなみにセルシーが言った”定着”うんぬんというのは簡単に言うと、一つの生物として機能していることを言ってるらしい。

擬人化するのにフェローの魔力、霊力を取り込んだがコレから先は体内の魔力霊力を使用したからといって、動けぬパジャマには戻らないとのことだ。

それどころかフェローの魔力霊力を日ごろから受けた成果、かなりの莫大な魔力、霊力を持つに至っていた。具体的に言うとセルシー並みもとといフェローに比べて7割という膨大な量だ。

もともと僕の所持物というだけあってなんか知らないが剣術まで僕の腕前の7割くらいらしい。

なんというチート性能!?

「僕の愛したイチゴ柄パジャマがこんな性格だったなんて・・・」

「私はマスターのためにマスターのお力となるべくマスターと一生を過ごすことを誓います。」

望むならば夜伽もいたします。むしろ嬉々としてやらせて頂きますよ?」

「幼女趣味はないっ!!そして『またまたあ・・・冗談を』という顔をやめいっ!!」

「じゃあなんで一緒に布団で寝ていたのかなあ?」

予想外のところから攻撃がつ!?

ちよつとっ!?!やめてっ!?!

そんなゴミムシを見るような目線で僕を見ないでエンデ!!

そして背後には黒いオーラがたちのぼっているよっ!?

「昨日は激しかったですね・・・マスター。ぽっ。」

「ちよつとおっ!?!そんな顔を真っ赤にするようなこと何も無かったでしょっ!?!」

僕がロリコン認定される前に早く撤回してっ!!!」

「ふうん・・・そうなんだあ・・・ヒビキって・・・こ、こ、こんな小さな子に手を出すほど飢えてたんだ・・・というか変態さんだったのね・・・。」

「いやいやいやっ!?!」

もつと常識で考えようっ!?!ほらっ!?!この子の服、どこも荒れてないし、裸でもなかったでしょっ!?!」

「服を着たままの方が俺のエクスカリバーが燃え滾るぜえっ!?!と言われたので服を着たままヒートしました。」

「うおいつ!?!なんでさっきから火を注ぐようなことばかり言ってるのっ!?!」

お願いだから黙っててっ!!!」

「ごめんなさい。じつはエクスカリバーってほどじゃ無かったのです。せいぜい”はがねのつるぎ”クラスでした。」

「見たことないくせに適当なこといわないでっ!?!そしてエンデも顔を真っ赤にしながら『そうなんだ?』って顔しないでお願いっ!!!」

あれ?これ逆セクハラじゃない!?!

「やきもちですか?メス豚さん。」

「うなっ!?!」

なんてこと言い出すのよっ!?!このピンクはっ!!!」

顔をちよつと赤くして少女の言葉にムキになるエンデ。

確かにメス豚は怒って良いと思う。

「まあ良いではないか。

メス豚さん。そう子供に対してムキになることもあるまい。」

同属？を庇ったフェロー。

不思議とご機嫌である。

さりげなくエンデの呼称をメス豚にしているのはさすがということところか。

火に油を注ぐその行為を人は蛮勇と呼ぶ。

僕にはちよつと真似できません。

「ちよつとっ！？あんたどっちの味方よっ！？」

「ふっ・・・もちろん妾はこやつの味方じゃっ！！」

なんせ妾が生み出したのじゃからなっ！！いわば妾は母じゃっ！！」

「それは感謝していますが、私は貴女を母とは認めていませんし、これから先認めるつもりもありません

。自分よりも胸の無い女性を母と呼ぶのは少々・・・どこるか私にはとてもとても・・・ぶっ」

確かにそういう少女の胸にはささやかながら二つの膨らみがある。

しかしフェローはおそらくもって精神はともかく肉体的な年齢は同い年であるうにも関わらず全くといって良いほど成長の兆しは見られない。

将来的にどっちが大きくなるかで言えば単純に少女の方が期待は大きい。

そして最後の嘲笑がわざとらしく、そのわざとらしさがなおのこと鼻に付いようで、フェローは怒り心頭とばかりに肩を震わせて魔力を練り上げていく。

・・・なにをカンガエティラッシャルノデスカ？

「い、いい度胸じゃのう・・・エンデと良い・・・おぬしと良い・・・
妾の乳をバカにするのがよっぽどお気に入りと思える。
じゃがのう・・・覚えておくが良い。

人には誰もが踏み入れられたくない・・・言われたくないこんぷれ
つくすというものがあることをっ！！

妾は・・・妾は・・・私は・・・もう限界よ・・・殺してあげにゆ
っ！？」

・・・大事なところで噛んだ。

締めで噛んだ。

やばい。嘔出しそう。

笑っちゃいそう。

やばすぎる。

でもここで笑ってはいけない。

笑ってはいけない24時(?!!!

殺気が渦巻いてるのは変わりないし。

そして誰が笑ったか「ふふっ」という明らかな嘲りの笑いが引き金
となり、僕は耐え切れずに笑いこけてしまった。

続いてエンデ。

セルシー。

引き金を引いた張本人は涼しい顔をしていたのである。

フェローは何かするでもなく・・・ベッドに立てこもって枕を涙で
ぬらしていた。

うむ。

とりあえず僕は巻き込まれる前に逃げるとしよう。

これ以上ここにいては女の戦いに巻き込まれるだけである。

僕ってへたれだなあ・・・と自嘲しつつ食料補充の理由をつけて街に逃げ込むのであった。

第33節 あなたが着るパジャマの性格はなんですか？（後書き）

前々から考えていたネタがようやく形に出来ました。

ようやくってほど温存させたわけではないんですけどね。

今回出た新キャラは今のところ一番書きやすいキャラです。

第34節 ベリーとお買い物

外に出てきたものの。

後ろにはイチゴ柄パジャマだった少女が付いていた。

先ほど彼女と寝ていたときに感じていた安心感は彼女がイチゴ柄パジャマだったんだろうなと思うと納得できる。僕のオリジナル奇跡であるセイグリットが効果を成さなかったのも、もともとフェローが所持していたイチゴ柄パジャマが夜のうちにこの姿となり、僕のベッドに潜り込んできたからと言うことだろう。

「そういえば君の名前はなんていうの？」

「すでに名づけていただいております。」

「誰に？」

「ふう・・・察しが悪いと言つか・・・鈍いと言っべきか。

マスターからに決まっているでしょう？」

呆れ顔でこちらを見上げる少女。

すでに名づけてもらっている？

普通に考えて僕は彼女と喋ったのは今朝が初めてなのだが？

「マスター。私はあくまでもマスターの着ていたイチゴ柄パジャマですよ？」

ここまで言っわたくして分からないなら、私がじきじきに”にぶちん”の勳章を差し上げます。」

「・・・ああ、なるほど。」

君の名前はベリーか。」

「そういうことになりますね。」

マスターの”お気に入りのパジャマに名をつけるという変態的かつ

変人的なオゾマシイ習性”の結果、私にはベリーという可愛い名前がすでに付いています。」

「そこまで言うことっ！？」

おぞましいとまで言われるほど変態的な行為だろうか？

僕は基本的に打たれ弱いものだからもう少し柔らかく表現して欲しいな。うん。

彼女——改めベリーが言う、お気に入りのパジャマに名をつける習性というのはペットに名前をつける行為や一部の人が愛刀なり愛機なりに名をつけるのと同じことであり、決して特別変態的ではないということを言っておきたい。

「それでマスターは食料の買出しに行かれるのですね？」

「うん。まあ。ついでに軽くギルドミッションも受けようかなと思ってる。」

多分、今日一日一杯はフェローが”ああ”だろうし。できるだけ外で時間を潰したい。」

「ふふふ。大変ですね。マスターも。」

「元凶だったベリーが言うことじゃないよね！？というか仲良くしてよ！！」

「命令ですか？」

「こんなことでいちいち命令しないよ・・・ていうか、命令したとしても聞くつもりないよね？」

「もちろん。私はマスター命ですから。マスターの面白い姿を見るためならば火の中の水の中。身を粉にして頑張る所存ですよ？」

「頑張り方がおかしいっ！？」

「マスター、私も手伝うので武器屋で武器を買ってください。」

「いきなり話の腰折るねっ！？構わないけどさ・・・っと、食材屋についたから食料を買い込んでからね。」

「ええ。ああ見てくださいマスター。」

店主が『・・・姉妹か？可愛いしいじゃねえか！！こんなに可愛いならせいぜいオマケしてやらねえとなグフフフ』という表情をしていますよ？」

「グフフフの部分なんかいやらしいよっ！？てか、そんなわけないだろっ！？」

そして”姉”妹ではなく”兄”妹だっ！！」

「へい、いらっしやい。」

お客さん。姉妹ですかい？

可愛いんですね・・・男装しても分かる人には分かりますぜ？まあそれだけ可愛いなら男装して身を守るのも分かりますけどね。」

あれえ？

ちよつと空耳が・・・耳がおかしくなっているのかな？

店主から何事かと言われた気がしますよお？

ははは、ダンソウ？

断層？

弾奏？

ふへへへ。わけが分からないですね。

僕を見て言ってるのかなそのセリフは？

ほほほほほ。

いっそのことマジで女の格好をしてやろうかこらあっ！？

・・・もうすでにしたことあるんだけども。

「マスター・・・おいたわしや・・・ぷっ。」

「言っな・・・ベリー。そして笑っなベリー。・・・早く買って帰ろう。」

「お、おまけしまっせ？」

「あ、ありがとうございます……ぐず。」

「ああ……マスターの泣き顔……可愛い。」

軽く泣きべそをかいていた僕に気を遣うような視線を送られた食料屋での買い込みを終えて、次は武器やへと向かった。
どうも古ぼけた今にもつぶれそうな場所である。

「何？ここは？」

「ふむ……呪いの装備店といったところでしょうか？」

「……帰る？」

「ダメです。」

即効で拒否りやがった！？

理由はなんとなく理解できるけれど。

「べ、別に普通の装備で良いでしょ？

どうしてまたそこまでここにこだわるのかなあ……と。」

「マスターが面白いからです。」

「分かってたよっ！！どちくしょうっ！！」

ばつちり予想通りの理由で泣けてくるっ！！

なにその『嗚呼……もつといじめたい……』という恍惚とした表情は。

どうして僕のイチゴ柄パジャマはこんな性格なのっ！？

もう逃げるのが一番だよね！？

よし、逃げーーーーー

「逃がしませんよ？」

「っっ！！？」

見かけによらず凄いパワーっ!？」

左手を掴まれた僕。

びくともしないんですけどコレいかにつ!？」

「肉体強化の魔術です。」

肉体強化は上級の魔法ですからね。未だ下級のものしか扱っていないマスターには振りほどけないでしょう?」

「くやしいことにまるで適わない・・・というかここまでの力はちよつと異常?」

僕は素のままで常人の10倍くらいはあるんだけどっ!？」

なにこのメスゴリラッ!？」

もとい幼女ゴリラッ!？」

「あだだだだだだっ!？」

「失礼なことを考えますね。」

「なぜ分かったのっ!？」

「口がぶつぶつ動いてたので唇を読みました。」

「無駄に高技能習得済みっ!？」

「もちろん、この力は私がゴリラというわけではないです。あんな畜生臭い下等生物と同等に扱われるなど心外も甚だしい。マスター。脳漿と延髄をぶちまけますよ?」

「おはう・・・ご、ごめんなさい。」

なにこの子?

普通に殺気はなってくるんですけどっ!？」

怖いよおっ!？」変な声が出ちゃった。

「私のこの力は肉体強化の奇跡と魔術を同時使用してるからです。」
「なんというか、僕よりもフェローよりも強くない?それって。」

「そうなりますね。」

たのも恐ろしいという言葉を実感した僕である。
ベリーは満面の笑みを浮かべてこう言った。

「というわけで、付いてきてください。マスター。」

女の子をこんな不気味な場所においていくのは男としてよろしくありませんよ？

身も心も女・・・だと言うならば・・・致し方ありませんね。

無理強いは止めます。」

「むっ！？

何を言ってるのかなっ！？

僕は男の中の男っ！！ベストオブダンディだぞっ！！

そこまで言われて逃げ帰るなんてのは男のやることじゃないっ！！
受けてたと・・・しまったあっ！？」

「はい。言質はとりました。

付いてきてくださいマスター。」

まんまと挑発に乗せられた僕である。

「おわ・・・薄暗い・・・」

店内は牢屋のように堅牢だった。

壁には色々な武器が立てかけられている。

例外なく禍々しい気配を出しているのは言っまでも無い。

「雰囲気が出ていますね。

呪いの気配がします。良い具合の武器が手に入りそうです。」

「呪いの武器を装備する気満々っ!？」

もう少しまっとうな装備をつけないっ!？」

「私はマスターとあのペチャパイ幼女から生まれた存在ですので、お2人の力をこの身に秘めています。」

しかも生まれ方が特殊でしたので・・・たとえばマスターの力を受け継いでるにも関わらず、マスターのような魔法の扱いが下手という弱点を持っていないですし、ペチャパイ幼女のように魔力霊力が莫大過ぎるゆえに下級魔術を扱っても大魔術なみになってしまう・・・という弱点はないのです。

のくせして、お2人の技能、魔力霊力の量と言った長所の部分の7割がたを引き継いでいると言う人生の勝ち組。それが私です。」

「・・・泣いて良い？」

「ダメです。」

そして、ここからが本題です。

一言で言うならそうした良いとこどりの強い私が扱う武器は、やはり良いとこの物でないと気が済まない・・・というよりその辺の貧弱な武器では私の力を発揮できないということで、普通の武器より優れてる場合の多い呪い武器をチョイスすることにしたのです。」

「なるほど・・・僕をからかっていただけじゃなかったんだね。」

「ええ。もちろん動機の8割はマスターの慌てふためく姿が見たかったと言うのが一番ですから安心してください。」

舗装された街道で干上がるミミズのごとく。」

「大半僕がらみっ!？」

そしてミミズ可哀想っ!! 助けてやってっ!？」

ベリーにからかわれていると、店の奥から1人の男が出てきた。フードを被っていて容姿はわからない。

声で男だとわかるくらいだった。

「なんだ？」

小娘と・・・男・・・か？」

「男です。」

「マスター、嘘はいけませんよ?」

「嘘付いてないよっ!??」

「珍しいな。」

この店を見つけることの出来る客は。」

あとから聞いた話だが、呪いの武器を売るのは犯罪に抵触すること
で大抵の呪い武器店は人が寄り付けない魔術なり奇跡を店にかけて
いるそうだ。

ただし、”呪いの武器が欲しい”という本心からの意思を持って歩
く人間には通じないとのこと。

すなわち本気で呪いの装備が欲しかったようだ。

ベリーは。

「それで?

どちらが望んでいる?」

「私です。」

「ふむ。」

男の質問に答えたベリーを見定めるように凝視する男。

ちよつと怖い。というか目が赤く光ってるんですけども。

この世界には目につけられる蛍光塗料があるのだろうか?

「いいだろう。」

大した人間だ。」

人間じゃなくてパジャマなんですけどね。

「どんな武器が欲しい？」

「・・・そのリボンはなんですか？」

ベリーは少し考え首をめぐらせた後、ふと目に留まったりリボンのような黒い布切れを指差した。

フタが透明な箱に入れられて、カウンター（？）の机に無造作に置かれていた。

「これは・・・」

「それが良いです。」

「・・・いいのか？」

「良いです。」

少し戸惑いを見せた男。

それに対してベリーは魅入られたように、これしかないと言っていた。

僕は怖い。

普段からこういった武器郡に囲まれて過ごしているであろう店主に戸惑いの色を出させるほどの武器。

いや、武器？

武器なのか？

武器ではないと思うけれど、ベリーは武器と見たらしい。

その黒いリボンを手にとってうつとりするベリー。

勝手に触って良いのかな？

「あ・・・」

「なんだ？」

心配なので、とりあえずあれがどんなものなのかだけでも聞いておこう。

「あれってどういった・・・武器？武器なんですか？」

「あれはダースレイブと呼ばれる特殊な”がいけん鎧剣”だ。」

「がいけん？」

「身を守る手段と剣として・・・武器としての機能を持つ武器の総称のことだ。」

あのリボンは鋭い剣にもなれば、体の一部に撒きつけて身を守ることも出来る。」

「へえ・・・どうして呪い武器だと？」

「・・・あれが持ち主を選ぶからさ。」

持ち主でないものが持てば即切り刻まれる。」

「・・・見たところ大丈夫そうですね？」

「あれは基本的に自分より格上の相手は認める。だが、斬った相手の血を吸って成長する。あれを使って敵を殺せば殺すほど、ダースレイブは成長し力をつける。」

「・・・ここまで言えばどうなるかわかるかな？」

「必ずいつかは持ち主を殺すことになる・・・ってことですか？」

「そうなるな。」

唯一、例外だった持ち主がいたらしいが・・・どうして殺されずにすんだかは不明さ。」

「・・・まあしばらくは大丈夫だよな。」

僕とフェローの力を併せ持つてるわけだからベリーにダースインスレイブが襲い掛かるのは相当先のことだろう。

今のところはなんら問題ないはずだし。

「いくらですか？」

「マジで買うのかい？」

確実に死ぬって分かっているのに？」

「まあ、いざとなれば捨てれば良いだけでしょう？」

結構気に入ってるみたいで、笑みを浮かべながら頭に巻きつけているのを見ると「止めときなさい」とは言えない。

とりあえず、リボンが一つのアクセントとなっていてより可愛らしくなったし。

そもそも僕のいうことなんて聞いてくれないだろう。多分。

「まあ・・・そうだな。

5万ガルドだよ。」

「・・・高いですね」

「性能は保証できるからな。」

「使い捨ての武器にそこまでばったくるんですか？」

「嫌なら良い。」

あそこの娘さんの笑顔を壊せるってんならな。」

ニヤニヤとそんなことを言ってくる店主。

これは確実に足元を見やがってる。

忌々しい、ああ忌々しい。

何よりもぼった食ってるって分かってるのに、それに抗えない僕の今の現状が忌々しい。

どんなに子憎たらしくても、いささか口が過ぎても、Sの気があっても彼女は僕の愛するパジャマであり、僕を慕ってくれてる（？）女の子であり・・・

「ま、マスター。どうですか？
に、似合うでしょうか？」

少し頬を染めながら、珍しく不安げに聞いてくる彼女に否定の言葉を吐けるわけも無く。

「ああ、もちろん。可愛いよ。」

「・・・あ、ありがとうございます。」

照れながらも見せてくれたこの笑顔を見れたのなら、いずれ確実に捨てるであろう武器に5万ガルドを払ってしまうというおバカな選択をした僕を誰が責められようか？

後日、普通にフェローとエンデに責められたというのは秘密である。

第34節 ベリーとお買い物（後書き）

作中のリボン。ダーインスレイブは北欧神話に出てくる魔剣ダーインスレイブを元にしたものです。

抜けば血を吸わずには居られないとか。

第35節 ベリーとミッション

「それで、貴方達だけで来たのね？」

「は、はい・・・ティリアさん。」

現在の場所は冒険者^{チエス}ギルド。

帰りづらいので、ギルドミッションで時間を潰す。

「マスター。この胸肉の塊は誰でしょう？」

「さすがにその表現は初体験よっ！？」

というか、この子初対面の人に遠慮しないのねっ！？」

「す、すいません、ティリアさん。」

さしものティリアさんもこの斬新な表現には驚いたようだ。

僕も驚いた。初対面の人間相手に胸肉の塊と称する人間は今のところベリー以外に知らない。

「まあ良いけどね。」

せっかくだからビショップクラスのミッションを選んでみる？

響君は昨日持ってきた魔獣の素材の納品で結構なポイントが加わったからね。

もう少しで現在のナイトからビショップにランクが上がるから・・・

ここで一発、ドカンといっちゃうのが良いと思うなお姉さんは。」

「もうそんなにですか？」

「ええ、そんなによ。」

ビショップまでは比較的楽なのよ。

それでも響君くらい速いのは前例が無いのだけど・・・ちなみに次のランクであるルークになるためには結構なポイントを稼がなくちゃいけないからね。

安心して良いわよ？それなりの苦勞を味わえるから。」

「あははは。」

僕、あまりランクには興味ないんです。

あまり上げると半強制ミッションが入っちゃうでしょう？

楽と言うなら特に目的も無いですし、別に構わないんですけどね。

苦勞してまで上げようと思いません。」

「あら、残念。もう少しミッションを受けるがてら私に会いに来て欲しいのに。」

残念そうに言うティリアさん。

「マスター、私もギルドに登録します。」

僕がティリアさんと話しているとベリーがやや不機嫌に話に割り込んでくる。

仲間はずれが嫌だったのかな？

だとしたら見た目相応の可愛げもあるものだと思う……

「マスターが楽しそうにしてるのは不愉快です。」

「つたりなんかしないね！！」

「うん、もちろん！！」

「いや、きつと照れ隠しに違いはないっ！！」

実は兄貴分的な僕が見ず知らずの女性と仲良くしているのが気に食わないだけ。

そうに違いない。

人の不幸を楽しんでる？

「はかくなっ！」

こんな可愛い子がそんなさっ気満開な女の子のはずが……

「マスターの困ってる顔のほうが好きです。そそられます。」

ははは。

幻聴だ幻聴。

すべて幻聴。

幻聴に決まってる。

確かにベリーは割合きついことを言う子だ。

まあSっぽいことは認めよう。

だがしかし!!

だがしかしだ。

何のマスターかは知らないが僕にだけ”マスター”と他に無い呼称で呼んでくれるのはきつと何らかの信頼の証に違いない。

信頼しているに違いない。

親愛の顯れにきまっている。

きつと嫌いではない。

仮にも好意を寄せてる相手に相手の不幸を願うようなセリフを吐く

だろうか？

答えは否だ。

普通に考えて――無い。

昨今のツンデレだってここまで嬉々とした笑顔で”困ってる顔うん

ぬん”などとは言わない。

あ、でも昔のツンデレにはあるかもしれない。

となればだ。

これはツンデレであり、今はツン状態ということになる。

すなわち、困った顔が見たいと言うのは”決して”（ここ大事）心

底から僕の不幸を願ったわけではない。

むしろ情愛を感じているからこそその照れ隠しであり、本音は”お兄

ちゃん!! 私をほったらかして他の女の人と仲良くするなんて許せないよつ!! 私以外に余所見をするお兄ちゃんなんて不幸になればいいんだ!!”といういわば愛情の裏返し。

ちょっとだけ兄に恋愛感情を抱いちゃってる可愛い妹ということに他ならない。

素直になれないお年頃というヤツだろう。
なんだ。

そういうことなら初めからそう言ってくればいいのに。
可愛いやつめ。

ただのツンデレじゃないか――

「マスター。先ほどの言葉に他意はありませんよ?」

他意って確か・・・
他意――――「別の考え・意味」。

うん、これもツンデレだね。

新手のツンデレ。

ふふふ。

分かってるって。

特殊なツンデレだね?

本来あるはずの他意は無いって言うただのツンデレ。

他意はない。

そこにデレはない。

・・・あれ?

「確かに・・・私はマスターのことを愛しています。女性としても男性としてもです。」

「僕のどこに女性としての部分がっ!？」

愛してるという爆弾発言よりも僕的にはそっちが気になるよっ!?

「ですが・・・それとこれとは”別”です。というか、好きだとか嫌いだからとかじゃないです。」

そう言い切った後、ベリーはとんでもないことをのたまいました。

「好きな女の子を苛めてしまう男の子がいるでしょう？」

私の”これ”はそれを定着ーーーーもとい完全な性癖としてーーーー私のパーソナリティの一部としてあるものですから・・・ぶつちやけて言ってしまうと。

好き嫌い関係ない私個人の性格です。

すなわち、ツンだろうとデレだろうといじることには変わらないということですね。」

というベリーの顔はーーーーありきたりの表現で申し訳ないが、それしか思い浮かばず適さずで。

うん。まあ。

天使のようだった。

結論を言おう。

誰かをいじったり不幸を見て楽しむのはベリーの趣味である！！
以上！！

ベリーはちょっと変態だった。

気を取り直してギルドミッションへ行くことにしよう。

肉体的な行使・・・ムチでひっぱたいてくるとかが無いだけありがたく思おうじゃないか。

「マスターに本気で嫌われない程度に苛めるのが私の生きがいです」との声が背後から聞こえるのは気のせいである。
気のせいに決まってる。

結局、依頼は時間を適度に潰せそうな薬草探しに決まった。

今の時間から日帰りで出来そうな依頼はこれぐらいしかなかったとも言える。

比較的簡単な依頼なのでビショップになるにはポイントが足りないが問題は無い。

強いて言えばティリアさんの落胆ぶりが問題である。

初めてギルドに寄ったときから良くして貰っているので、ちょっとだけ心が痛んだ。

僕のランクの問題であるからして別に痛む必要も、彼女がっかり来る必要も無いのだけど、ギルド職員として優秀な冒険者チエスが欲しいといったところだと思う。

「マスター、このあたりでは？」

「みたいだね。」

場所はアスタナシアの森。

近いし、当然だろう。

しばらく探していると指定された薬草を見つけた。
ついでに魔獣も一緒に見つけた。

頭に結んでいるダーインスレイブー今更だけど血を吸う呪い武器をリボンとして使うなんて気持ち悪くないのかな？ーを解いて魔力と霊力を込めたベリー。

するとダーインスレイブはベリーの右腕に数10センチ分が巻き付き、残りは剣を模^{かたど}った。

伸縮自在らしいから体中に巻き付ければ絶対防御を誇れそう。

結構な魔力と霊力を込められてるのが目でわかる。

それを喜ぶかのようにダーインスレイブはブウンとモスキート音を発て、ベリーは戦闘準備を終えたようだ。

僕もバスタードソードを構えていつでも飛び出せる準備をした。

最近覚えた魔術。武器に魔力を流し込む”付与^{エンチャント}”も使用している。剣の耐久度や切れ味が増す魔術だ。

敵は三体。

ツリーザードという魔獣だ。

日本に居たヤモリというトカゲをそのまま大型化させて緑っぽい配色にしたような魔獣で、大きさは赤ん坊くらい。

そこそこ大きい。主に昆虫系の魔獣を餌にしてるらしく、元の世界でもあるように”トカゲの尻尾きり”が健在。

トカゲの尻尾きりとはヤモリやカナヘビといったトカゲには”自切”という習性があり、自分の尻尾を掴まれた際に、自ら切り落とすことである。

自らといっても自分で噛み千切るわけではない。

切れやすいように”節”が存在してるため、簡単に切れるとか。

そして、切れた尻尾はしばらくそのまま動き飛び跳ねる。

それに捕食者が気を取られてる間に本体はまんまと逃げ出すということだ。

これは元の世界でのトカゲの習性。

ツリーザードという魔獣は生き残るためにさらに一段階進化したらしく、自切する尻尾を”美味しく”したのだ。

尻尾は罔とまでは地球のと同じ。

でも、この世界のヤモリはその尻尾を美味しくすることで捕食者にそれを食べさせ、より時間を稼ぐ。

その間に逃げるらしい。

魔獣自体の戦闘力は弱く、ポーン？だ。

こういった生態を聞くたびに魔獣学者の道を歩むのも悪くないなと思つた次第である。

ちなみにツリーザードの尻尾は珍味として高値で取引されるとか。

「マスター？」

「・・・あ、ごめんごめん。

ちよつと面白いことを思いついてね。」

「そうですか。」

私は未だにどうやって面白くするか考え中です。」

「あまり聞きたくないけど、一応聞いておこう。」

”何”を”ー”いや、”誰”を面白くするつもりなのかな？」

「マスターに決まっています。」

「・・・お手柔らかに頼むよ。」

「なんとか女装に持つていくのはお手柔らかなのに入りますか？」

「入らないよっ！？」

結構手厳しいよっ！？」

「ふふふ、そのリアクションがすでに面白いですね。」

「手の平の上で踊らされてる僕って可哀想っ！！」

「悲劇の主人公気取りのマスターもカッコいいです。」

”気取り”言っなっ！

そして、そのどこにカッコいい要素がつ！？

『あ・・・良く考えたら無いですね。滑稽なだけでした。』って顔やめてっ！！」

「今のは上げて落とすという高等テクニクなのです。」

「ずっと下げ続けでしたよっ！？」

「上げてました。」

「どこの部分に上げがつ！？」

「腕とか上げてました。」

「古典的すぎるっ！？」

「あげぱんが食べたい。」

「思いつきり話飛んだねっ！？」

「私の食嗜好においてワースト3に入っています。」

「なぜそこまで嫌いな食べ物を食べたくなつたのっ！？」

「あげぱんだからです。」

「あげぱんであるということが理由っ！？」

「とりあえずあげぱんは消えれば良いと思います。」

「そして、あげぱんの存在否定っ！？」

「私がここまで、あげぱんを嫌いになつたのは私の師匠であるスイカ柄パジャマ、”スイ”ちゃんがあげぱんによって殺されたから・・・」

・

「生きてるよっ！！」

僕の部屋のクローゼットに大切に保管してあるよっ！？というか、パジャマにとつての生き死につて何っ！？」

「マスターは知らないのですね・・・クローゼットの中には莫大なあげぱんで埋め尽くされているということ。」

「何その斬新なクローゼット使用法っ！？」

「てかあげぱんネタしつこいわっ！！」

「そうですね。こんな漫才をやってるうちに・・・左を見てください。」

「左？」

何があるって・・・うおあつ!？」

まさにツリーガードが襲い掛かってきたところでぎりぎり半身になつて避ける僕。

すぐにバスタードソードを構えて迎え撃つ。

といつても着地した瞬間を狙つて、頭を貫くだけである。

残りの二匹は？と振り返るとベリーが一体をすでに斬り捨てて、もう一体の離れた場所に居る個体を伸ばしたりボンで刺し貫いたところである。

戦闘はあつという間に終わった。

「まあ、あれだけ騒いでいればこうなります。

反省してください、マスター。」

「発端はベリーだったと思うんだけど・・・」

尻尾と牙を切り取って回収。

薬草もとつて、後は帰るだけ。

「なんか疲れたな。」

「私は楽しかったです。」

にんまりと笑う幼女見た目天使。

人間中身が大切!

そんな言葉が身にしてみた一日である。

「エンデとフェロー」には”もう少し優しく接してよ?”

「もちろんです。個人的には好きですよ。」

「・・・好きな子ほど苛めちゃうというその変態性がなければなあ・・・」

「マスターがあのお2人の分まで苛められるというのなら我慢しますけど、どうしますか？」

「・・・面白がつてるでしょ？」

「分かります？」

「わからないでかつ！？」

帰ったときには機嫌が多少良くなっていたフェロー。

本当に良かった。

「さて？」

それで、おぬしはこれからどうするのじゃ？」

朝一番。

フェローはそう言った。

「ううん・・・とりあえず特には決めてないんだよね。

お金は十二分だし、セリアに会いたいつてのはあるんだけど・・・どこにいるかわかんないし。

でも、前々からちよつと考えていたことはあつてね。東大陸の街を適当に廻って見て行こうかなと思ってる。」

「うむ。そうか。」

「フェローやエンデ、ベリーは何かしたいことはある？」

<私には聞かないのかにやつ！？>

ヒー君っ！？剣女差別だっ！！徹底抗議するぞっ！！！>

「剣女差別って何っ！？」

剣と女性を差別？

剣も女性として・・・異性として見るということだろうか？
難しいね。かなり。

「セルシーはおいといて、妾は別にどうとも構わぬ。
響の好きにすると良い。響に付いていくだけじゃ。」

「私もそうです。マスターあるところに私あり。」

「私も特には無いかな。むしろ望むところよ。東大陸なんて初めて
来たしねっ！！」

< しがな 剣には聞いてくれないのね。 >

とりあえず反対意見は出なかった。

セルシーに聞かなかったのは単に忘れーーーーごほん。
忘れてないよ？うん。

「最初の目的地は王都にしておいたほうが良いじゃろう。」

「どうして？」

「王都ならば今以上に良い装備が手に入るかもしれぬ。そのためじ
や。」

「なるほどです。どうせ各地を飛び回るなら、装備の質がどこより
も良いであろう王都で装備をしっかりとしてから旅をするというわけ
ですね？私より背が高い割いくせして私より胸の無いフェローさん
にしては良い着眼点です。」

「ふ、ふざけるでないわっ！？」

着眼点に背も胸も関係ないじゃろっ！？

そもそも胸だってほんのちよっとはあるぞっ！！」

そのセリフは逆に哀れみが増すだけとなぜに気づかないのっ！？
フェロー！！

そんな可哀想なフェローを尻目に見つつ。

僕は王都へ向かうことを次の目標にした。

願わくば何も起こりませんように。

第35節 ヘリーとミッシェン（後書き）

ヘリーは誇り高いドSです。（笑）

ドSの誇りと言うのは何か？

それについてはいつかヘリーが語ってくれると思います。

第36節 まちぼうけ（前書き）

こんな話にする予定は無かったのに（笑）

第36節 まちぼうけ

現在位置はトロイアの東門。

皆で王都へ向かうため、ここにいる。

王都”グランデ”は各街を治める”王”をさらに纏め上げる国王の街。

各街からの特産品や食材、武器、防具、さらには人材、奴隷なども入ってくると言う。

この世界での奴隷制度は”身分として生まれたときから決まっている”といった物ではなく、刑として与えられる刑罰の一種である。悪さを働いた貴族や盗賊。横領をした文官などがそうした刑に科せられる。

農民や傭兵、^{チエス}冒険者、一部文官などは貴族や他文官などと言った地位の高い人間に、冤罪をなすりつけられ易いためかそうした人たちが奴隷刑になることは滅多に無いと言う。

奴隷となると完全に人権を無視して良いということになるので、奇跡の実験台や労働力、奴隷兵として戦場へ投入されるため一番重い刑罰とされてるそう。

ティリアさん談。

話を戻すが、その王都に行くために馬車を買おうとしたけど断念。どうせなら王都でしつかりとしたものを頼もうという話になり、今回はギルドで護衛ミッションを受けることにして、王都へ向かう商人と待ち合わせるために東門にいる。

「もう1人が遅いですね・・・」

と僕がつい不満を言っていると、護衛を頼んだ商人の人も同感のようで少し眉が上がっている。

この護衛ミッションは僕たちのほかに、もう一人の^{チエス}冒険者が受け

たらしい。

集合時間はとうに過ぎており、30分遅れである。

「うむう・・・申し訳ない。」

「ゴルバさんが謝ることじゃないですよ。」

「むしろ置いて言っちゃえば？私達だけで護衛は十分だと思うけど？」

「・・・そうじゃのう。どうじゃ？ゴルバとやら。」

「そうだねえ・・・」

ゴルバさんはエルフだ。

ポポイ族の商人が多い上に、そのほかはほぼ人間の商人と言う中でエルフが商いをしているのは珍しい。

エルフって金儲けには興味ないイメージがあるのだけでも。

ちなみにゴルバさんの見た目は端正な顔立ちで、ダンディで渋いオジサマといった感じ。

とんがった耳は耳で一つのアクセントとなっており、少し歳を召した女性はもちろん下手したら妙齢の女性の受けも良さそうだ。

将来的にはこういうダンディなオジサマになりたい。

「マスターには無理です。可能だったとしても私が妨害わたくししますから。」

「無理と断言した後、さらなる駄目押しがっ！？」
「というか、なぜ心を読まれたの？また読唇術だろうか？口に出てたかな？」

妄想もそうだが、考えてることが口に出てしまう癖を直さなければ。

「無理です。私が妨害しますから。」

「それも妨害するのっ！？」

口は動いてなかったから表情で僕の内心をある程度読んだのかな！？
嗚呼、恐ろしい子っ！？

「私を目標にしてくれるとは嬉しいね。」

「あ、すいません。聞こえてましたか。」

ゴルバさんが苦笑している。

ゴルバさんにまで聞こえていたとは恥ずかしい。

「ちなみに私が商人になった動機は単に商人と言う職業が好きだからだよ。いろんな街を巡っているんな人と話し、いろんな物売る結構楽しいものさ。」

「・・・あう・・・す、すいません。」

最初の方もバツチリ聞かれていたようだ。
もつと恥ずかしい！

「ははは。構わないよ。」

少なからずがめつい同胞も居るしね。」

「あはは。・・・それでどうするんです？」

「ヒビキ君のランクはナイトだったかな？」

「あ、はい。」

「そちらのお嬢さん方は？」

「私はポー^{わたくし}ンです。最近入ったもので。」

「私はナイト。」

「妾は登録しておらぬ。が、そこそこの強さはあるぞ。少なくとも
ビショップクラスはあるじやろうて。」

それらを聞いて少し考え込むゴルバさん。
見た目子供の僕たちを信用しきれないのは当然だろう。

まあこのメンバーなら上位竜種でも余裕で狩れるだろうけど。
ちなみに僕1人では多分無理。

あの大質量と鱗と魔力による堅さ。下手な勇者よりも強いよ。
よくあの勇者モドキはアレを雑魚認定していたものだ。

一度も戦ったことが無いんじゃないかな？

魔力無効化系の魔法剣があればいけると思うけどね。

フェローは火力だけなら多分世界最強だろう。その分、汎用性がかなり低いのだけど。

敵を倒すたびにあたり一面を焼け野原にしてしまうわけにはいかない。

アスタナシアの森のときに肉体強化を使っていたから、とある日に魔力、霊力を全部肉体強化に使ったら？と言ってみた。ついでに僕にも教えて欲しいと言ったのだ。

しかし肉体強化の魔術は緻密な魔力、霊力操作が必要らしくあまりに莫大過ぎて細かい操作の出来ないフェローにとっては体が爆発するだけの自爆手段でしかないみたい。

（まだ魔力の扱いの下手な僕は論外）

もちろん魔力、霊力によって爆発するわけではなく、（それだったとしてもそもそも体内に持ち得ない）肉体強化魔術によって本来あまり強化しない部分。

たとえば一歩間違つて、心肺機能などを強化させ”過ぎて”しまうと血管や眼球といったものが凄まじい血流による血圧に耐えきれず、破裂する。

毛細血管が耐えられるはずも無く、指先や脳内でも血流爆発が起きる。

ついでに言うところ一度破裂すれば、血は他の場所には行かずにそこから血がどくどくと流れ出るわけで体内に溜まる。

造血作用も強まっているとしたら・・・そのまま皮膚なり筋肉、内臓を血液が圧迫。

下手したら皮膚を突き破ってリアルにボンツ。太い血管の多い頭か

肺か。

それとも毛細血管が先か。

そして、そこに至るまでにどれほどの痛み（ペイン）と苦しみ（ペイン）のダブルペインを受けることになるか。

・・・ヒイイイイイイイイイイイイイイイイイイツ！？

凄い怖い想像をしてしまったっ！？

下手なホラー映画よりもグロイよっ！？

これが肉体強化の魔術が高位魔法に分類される理由である。

まずは体の耐久力を高めることに魔力の大部分を使い、その耐久力を超えない程度に魔力を肉体強化に回す。

100ある魔力を器の補強（防御や耐久力強化）と強化（攻撃全般強化）の二つにどれだけ配分するか。それが肉体強化魔術のコツらしい。

一番の理想は51：49とのこと。

この配分が難しいみたい。

閑話休題。

少しの黙考の後。ゴルバさんが口を開いたので、それを聞く。

「やっぱり無理かな・・・悪いけどね。」

「そ、そうですね。」

そこまでハッキリ言われると少し傷つく。
分かってるけどね。

すると、慌てるゴルバさん。

「あ、いや！ち、違うんだよ。」

君たちを信用してない・・・と言うのも正直少しはある。あるんだが、個人的には別に問題ないんだ。」

「・・・どうのことですか？」

まあ信用できないというのは少しいかな仕方ない。

初対面の人間を100パーセント信じる人間の方がおかしい。

それよりも個人的には問題ないというのはどういう意味なのか？

「道中、特別強い魔獣が居る場所を通るわけでもないし、盗賊が出ると言う話もない。」

君たちくらいの力があれば十二分に安全だとは言える。ビショップクラス・・・というのはちょっと信じがたいけど、ここで嘘をつく理由も無いだろうから本当にそれくらいなんだろう。ビショップクラスのそこのお嬢さんが居れば、ハプニングが起こったとしてもまず問題ないだろう。でも、今回はちょっと特別なんだよ。」

「特別？」

「そう。」

今回はちよつとーいや、かなり大事なものを運搬しているんだ。

必ず届けるようにと王族の方からのお達しだね。」

「出来るだけ100パーセントに近づきたい。ということですか？」

「そういうこと。私はこれでもこの大陸一の商会”いつでもどこでも粉骨碎身”略して”いつどこ”の幹部だからね。」

何！？その商会の名前！？

センス無いっ！

「ふふふ。何を隠そうこの名前を考えたのは私の妻で会長のーーー」

「センスないですね。」

ちよつとオツ！？

それは言っちゃダメでしょベリー！？

かなりの『どうや？センス良いやろ？』顔をしていたのに！！
もとい”どや顔”だったのに！！

でも良く言つたよおっ！！

僕もツツコミたくてしかたなかつーーー

「・・・そ、そうかい？」

あ、でもゴルバさんちよつと涙目だ！？

前言撤回っ！！

そうかい、というセリフも震えていてなんか泣きそうなんですがっ
！？

良い年したオツサンに泣かれても対応に困るのですがっ！？

今ならまだ間に合う！！

ベリーッ！謝るんだっ！！

つつこむのはいつだって出来るやろっ！？

「特に面白いわけでも、耳に残ると言うわけでもないです。

ですのに・・・そんな”どや顔”を見せられても、気持ち悪いとし
か言えません。」

「そ、そうなのかい・・・？」

やめろおおおおおっ！？

もうちよつと泣いてるじゃんっ！？

そして、ゴルバさん！！

さっきから何を泣きそうになっているんだっ！？

その前に言うことがあるはずでしょっ！？

夫として妻のためにもしっかり言っつてやるんだっ！！

「俺の妻のセンスは悪くないっ!!」とっ!!
僕は悪いと思うっ!!

どうしようもないくらいに、手遅れなくらいに、「もう少しなんかあったらろっ!？」とツツコミたいくらいにセンスが無いと思うっ!!

だが、あんたは夫だろっ!？

センスの無い妻の夫だろっ!？

センスの無い妻を夫が庇わずして一体、誰が庇ってやるって言っんだっ!!

さあ、言ってやれっ!!

「俺は海賊王になるっ!!」とっ!!

「君は・・・本当に私の味方をしてくれているのかい？」

「マスター。ただ漏れですよ。ふふふ。良い具合につぶやき癖が出て私は至極楽しいです。」

見てる分には。海賊王ってなんですか？」

しまったああああああああああああっ!？

ここで僕の悪癖がっ!？

ゴルバさん、もはや結構な量の液体が・・・目から。

声なんてもう産まれたての小鹿のようにブルブルですよっ!？

「それに――」

ベリーッ!？

お前はこの期に及んで何を言っつもりなのっ!？

きつと・・・いや絶対。

僕には分かる。

彼女はゴルバさんに止めを刺そうとしている。

だって、あんなにも良い表情をしてるんですものっ！！奥さんっ！！
なんなのっ！？あの、顔だけなら天国にでもいるようなあの極上の
笑みは！！

ロリコン趣味の人でなくても惚れてしまうような女神の笑みはっ！？
一見慈愛に富んだ後光すらさす仏のような笑みはっ！？

その実・・・悪魔のような笑みは。

「これだけ妻をバカにされているのに・・・怒るところか、なんら
言い返さないというのは・・・おかしいですね。」

やめろっ！？

その先は言っちゃいけないっ！！
きつとそれは鬼門ーーーー

「時にゴルバ様。『友人の話んだけどーどうたらこうたら』
という話を誰かにされたことはありますでしょうか？
こういう時って大抵・・・」
「・・・っ！？」

ピクンと凄い勢いで震えたゴルバさん。

「自分のことだったりするわけですが・・・ゴルバ様？
もしかして・・・いえ、もしかしなくても。」

「そ、それ以上は・・・」

「『言わないでくれ？』でしょうか？

一体何を言わないでくれ、と？私には分かりかねます。

もしかして『自分で考えた名前だったけど、妻の名を借りた』とか
そんなところでしょうか？」
「ぐ……ぐう……。。」

なんとか耐えてるゴルバさん。

いや、もう号泣状態なんだけどね。

歯を食い縛って涙を流してるおっさん。

シユールな図だ。

なんとか声を上げないように耐えてるところか。

大丈夫っ！！

僕が目標とするダンディズムを持ち合わせるゴルバさんならばきつ
と耐えてーーー

「女性の名を借りるなんてーーー」

「むうっ！」

「下衆の極みですね。」

「うわあああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああんっ！！」

ちよおおおっ！？

意外な泣き声を上げてどっかいつちやったよおっ！？

ゴルバさああああああああんっ！！

そっちには噴水が……。あ。

落ちた。

「ベリー。」

「なんでしょう？マスター。」

「暇つぶしか？」

「それ以外に何か？」

ベリーも意外とストレスを溜めていたのかもしれない。

精神的に脆い僕はミッション中・・・特に気を遣う護衛ミッションの間だけは僕を苛めないように言い含めてあったからだろう。

僕をいじらないプラス待ちぼうけによるストレス。

これが今回の悲劇を招いた原因だろう。

成仏してくれ。ゴルバさん。

噴水の中でさめざめと泣いてる見た目中年のダンディなオジサマは大層目立ったとか。

第37節 人間公害兵器（前書き）

毎回文の見直しはしてるのですが、今回の見直しはかなり面倒でした。特に後半が（笑）

第37節 人間公害兵器

「すみません。ゴルバさん。」

「いや、こちらこそ見苦しいところを見せたね。」

ゴルバさんが落ち着くのに1時間はかかった。

妻の名を借りたり、存外泣き虫だったり・・・見た目と中身がちぐはぐだ。

立ち直らせるのも凄く面倒だった。

なににせよ待ち合わせ時刻から1間半経った事になるがまだもう1人の冒険者はやって来ない。

「まだ待つんですか？」

「結構な遅刻だし・・・もう1人の冒険者はあきらめて、次の人を雇うことにしたよ。

申し訳ないんだけどもう少しここで待っててくれるかい？ギルドに行ってくるから・・・荷物番を頼むよ。」

「了解です。」

と言いつつも内心結構うんざりしている。

来れないなら早くに連絡ぐらいして欲しいね。

「はろはろっ！」

ん？

何この間の抜けた声は？

「クルトさんっ！？」

遅いですよっ！？」

クルトさん？

誰それ？

ゴルバさんが説明してくれる。

「ああ、失礼しました。ヒビキさん。

この人が今回同行予定の最後の1人です。」

と言って、声のした方向を向くとそこにはイケテルメンズ。
略してイケメンがいた。

見事なまでの金髪アンド、ロングヘア！。

二つの目はパッチリ二重で、まつげも長く見つめられればそれだけで骨抜きにされそうな碧眼の瞳。

適度に小顔で身長は180センチほどで体系もモデルのように細く長い。

細いと言ってもガリガリと言うわけではなく、たるまない程度には太く、服の下には適度に締められた筋肉が伺えるだろう。

足とか半端無く長い。

もつと簡単に言うなら、イケメンかつモデル体系の忌々しい男がそこに立っていた。

さぞかし女性に言い寄られそうな容姿である。

クルトとか言うらしい。

僕もこんな人間に生まれたかった・・・もちろん女の人にモテたい訳ではない。

ただ女の子に間違われないうちに男らしい顔に生まれたかったと思うのだ。

今の顔だって今となつては愛着があるから今更変更が可能だったとしてもごめんだけれど、それでも憧れと言うのは少なからずある。その憧れをそのままにここに存在している目の前の男が僕はねたましいっ！！

「いやあ、悪かったねっ！！俺様としたことがちよつと時間を勘違いしてたみたいでさ・・・」

クルトはゴルバさんと少し話した後、僕たちに詫びの言葉を入れてきた。

彼の容姿にイラついている僕としては待たせたことについては頭からなくなっていたりする。

「いえ、・・・別に。」

そのためかいつい無愛想になってしまった。

クルトの背後で『嗚呼・・・他人の容姿に嫉妬して、つついふてくされるマスター・・・これでご飯三杯はいけます。』という顔をしているベリーは見て、一気に頭が冷えた。

紳士たる者、あるまじき狭量さだったね。うん。反省。

何より、ベリーを喜ばす態度をいつまでも取っていたくないというのが一番の理由だったりするのは秘密。

「そ、そんなに無愛想にされちゃうと俺様もさすがに反省だぜい・・・」

僕の態度を見て、自分の遅刻で怒ったと勘違いしてる彼。少ししょんぼりした。

失敬なヤツだ。そんなことで怒るほど僕は狭量じゃないっ！！

「本当にちこーい氣にしませんから・・・」

”遅刻は”を言いかけたが、それは抜いて笑いかけた。

だったら何で怒ってるの？とでも聞かれたら答えられないし。

僕よりハンサムなのがむかつきましたなどとは同じ男として口が裂けても言いたくない。

「そ、そうかい。そりゃ良かった。

こんなにかわいらしい美少女達に嫌われたら、俺様鬱で鬱なメラン
コリーになっちまうところだったぜっ！

俺様はクルト・フラッセ。好きに呼んでくれて構わないぜいっ！
ランクはキング。よろしくうっ！」

俺様俺様とうるさい人だ。

「僕は山瀬 響。ランクはナイトです。」

ん？何か気になるワードがあつたような・・・気のせいだよね。
それにしてもこの軽薄そうな男がキングとは、人間見た目じゃない
な。ベリーにしかない。

「私はベリーです。気軽にベリー様と呼んで下さって結構ですよ。
クルト様。」

「そ、それって気軽かい？ベリーちゃ・・・ひいっ！？
べ、ベリーさま？」

「気安く呼ぶな。様をつける様を。・・・ゴミムシが。」
「ご、ごめんなさい。」

彼がベリーをちゃんづけしようとした瞬間、凄まじい形相でにらむ
ベリー。

僕もひいっ！？状態だった。視線で人を殺すのを可能としそうな眼
力だ。

個人的には似たような意味だと思うのだけど、彼女の中で”気軽”
と”気安い”は別の意味の言葉らしい・・・会話から読み取るに。
もしくは”気軽”は社交辞令的な意味で言ったのであって、ホント
に気軽に呼ぶのは許さない。ということだと思う。

問答無用で様付けを強要されてるクルトがいささか惨めだ。

そして恐るべきはベリーよっ！！

初対面の相手にゴミムシ呼ばわり。未恐ろしい。

なんか、ベリーが人格を持ってからと言うもの一種の恐れを抱いてばっかな気がする。

「妾はフェローじゃ。

好きに呼ぶと良い。」

「ふえ、フェロー……ちゃん？」

「うむ。」

「ありがとう……ありがとう……」

「なんじゃ？」

妙な奴じやのう。」

恐る恐るちゃん付けで呼んだクルトが涙している。

これから先、彼は初対面の女性をちゃんづけするたびにああして、ビクつきながら呼ぶのだろうか？

そうなるともはや哀れだ。

イケメンなので同情する気にはなれないが。

――いや、これは紳士にあるまじき――以下略。

よって同情くらいはしてあげよう。

「私はエンデ。気軽に呼んだら殴るわよ。」

「は、はい……エンデ……さん。」

少し威圧する雰囲気です話すエンデに少しビビってるクルト。

気持ち分かるよ。僕も怖い。

勇者モドキの一件以降、彼女は見ず知らずの男に対して大抵こんな感じである。

宿屋や商人さんが男だとあまり話したがらない。

もちろん、今回は待たされた分もあって余計威圧的になっているの
だろう。

彼の自業自得である。

僕には普通に接してくれているのだが、アレ以来男を信用できなく
なったのだろうか？

いつか治してあげたいと思う。

そんなんじゃないつか彼女に好きな男の人が出来たとき結婚できない
だろうし。

「がぐぼおっ！？」

な、なぜ！？」

いきなりエンデに殴られた。

一体なぜ？

「別になんでもない……」

エンデ、君はなんでもないので殴ったのかい？

それでいちいち殴られてたら僕の身がもたないんだけども。

「まったく……にぶちゃんじゃのう。」

「ええ、本当に。しかもマヌケです。また声に出てました。」

フェローとベリーがなんか言ってるけど、良くわからん。

声が出ていたと言っけれど、怒らせる事を言ったのだろうか？
別に怒らせるようなことは何も無かったと思うけど。

うむう……人間関係って難しいな。

「んじゃまあ、気を取り直して俺様ハーレム一行、出発だぜいっ！
」

「気色悪いですね死ねば良いのに。」

「気持ち悪いこと言わないで。」

「ハーレムとは確か動物の習性の一つじゃったかのう？」

「一つのコロニーにオス1にメス複数の形態のことを言っただけじゃが・・・この場には二人以上の男がおるのだから、当てはまらぬぞ？」

口々にクルトの冗談（？）を批判する女の子達。

これはキツイ。

僕なら泣くレベルだねエッヘン！

フェローはフェローで的外れなことを言ってるし。

いや、むしろ的を射ているのかな？

「ヒビキちゃんだけだよ・・・俺様を普通に見てくれてるのはさ。」

「

「こつちに話を振らないでください。はっきり言っとうざいです。」

そして、なぜに”ちゃん”づけ！？

男でも女でもちゃんづけしなくちゃ気が済まないのかこの人は。

「うざいとなっ！？」

君まで俺様をそんな扱いにっ！？」

「一時間も遅刻してればある程度酷い扱いされてもしかたないと思いますけど？」

あ、勘違いしないでくださいね。僕はそれと関係なく貴方をうざいと思っています。」

「意外と毒舌だねっ！？」

「私のマスターですからそのくらいの毒舌当然です。」

「いやな肯定しないでくれるっ!？」

当然だと思われていたのかっ!？

「挨拶はそれくらいでいいかな？

早速出発したいんだけど、忘れ物は無いかい？」

「はい、僕たちは大丈夫です。」

すでにしつかり準備してここに来てるからね。

またされてる間にも数回、確認してるし。

「俺様も大丈夫。いつでもいけるぜっ!！」

こうして、ようやく街を出発できることになった僕たちの目指す先は王都グランデ。

街を治める王ではない、国をまとめる国王がいる街だ。

ガタンコトンガダンゴトンと音を発てて馬車が街道を走っていく。流れる景色と、馬車に併走するシロを見ながらぼんやりとしているとクルトが話しかけてきた。

「そうそう、ヒビキちゃんはどんな食べ物が好き？」

「え・・・っと。シジミの味噌汁です。」

またちゃんづけかい。

どうせならゴルバさんもちゃんづけにせいやと思わないでもない。

ゴルバさんはさんづけのくせに。
別にさんをつけるとは言わないが、呼び捨てかせめて君付けにして欲しい。

「ミソシル？なんだそりゃ？」

「え？し、知らないんですか？」

あれ？おかしいな。

宿とかに日本食も普通にあったんだけど。

味噌汁を食べたこと無いのかな？

それにしては聞いたことも無いって感じだけど。

「マスター、味噌汁はおそらく味噌自体が東大陸に流通してないのでしょう。」

「どういうこと？」

「西大陸は召喚された勇者達がいいますから、そうした勇者から伝えられた食文化が浸透してるのではと思われます。

あちらの世界で言う、東洋系、西洋系の人種が召喚され、その召喚された人たちの中でたまたま味噌の作成法などを知っていた人が伝えたのではないのでしょうか？」

「・・・なるほど。」

「商人だけは国境の国を超えることが出来るそうですから、多少なりとも流通はしてるでしょうけど・・・味噌の正しい使い方までは伝わらないのでしょうか。ついでに言うと、シジミ自体の流通も少ないのではないのでしょうか？地図を見るからにシジミの生息するであろう川や汽水域が少ないですから、商人が数ヶ月に一度、付近の村、街から仕入れるといったくらいかと。」

「それを聞いて早くも西大陸に戻りたくなったよ。」

まあ少なからず流通はしてるかもしれないし、向こうにいた時に買

った味噌もある。

シジミもバックパックに入ってるし、とりあえず今はおいておこう。
ちなみにベリーとのやりとりは小声だ。

東大陸と西大陸は仲が悪いから、東大陸の人間であるクルトに聞かれるはよろしく無い。

「なにになに？俺様に秘めごとお？

教えて欲しいなあ？」

なんか変にニヤニヤ顔で迫ってくるクルト。

イケメンのせいか、ニヤニヤとしたやさしい感じの笑みでも面食いの人ならばコロリといってしまいそうなさわやかさを醸し出していた。

「身の程を知ってください、ゴミムシのくせして。

私とマスターとの間でどんな秘密があってもその辺の下劣で愚鈍なイケメン的な珍獣には何も関係がないことでしょう？というより、今日会ったばかりの初対面の人間相手にいささか慣れ慣れしいですよ？

所詮、ゴミと塵とヘドロを混ぜ合わせたような、無骨で醜悪で意地汚いゲジでしかない貴方が私とマスターに話しかけるなど、王と奴隷並の身分の違いがあると知りなさい。

貴方の話で耳が腐って迷惑するのは聞き手であり、すなわち私達のほうが多大な迷惑を被るのです。

気づいてないようだから言っておきますが、先ほどから香るこの・

・香水でしょうか？

べたべたとくっつけすぎなのですよ。臭いです。悪臭です。人間公害兵器の称号をあげます。お風呂に入ってるのですか？人間清潔感を忘れたならば、どんなイケメンだろうとただの豚にしか過ぎず、家畜にも愛玩動物にも劣る需要の無さを誇るだけであり、そんな誇りしかないあなたはまさしく、バクテリアにも劣る下等生物同然。

具体的に言えば、動物性プランクトンであるミジンコやケンミジンコにも劣ります。植物性プランクトンは言うまでも無く、貴方よりは有益でしょうね。

なぜなら、彼らは二酸化炭素を消費して酸素を生み出してくれるのですからただ二酸化炭素を消費する割には、貴方のようななんら役に立たない肉の塊に比べ・・・いえ、比べるという行為自体が不遜であり、神をも恐れぬ身の程を弁えない愚行であり、そうしようとする事自体が愚考であり、無意味かつ無駄なわけです。

となれば、貴方は一体どんな生物なのかと気になってくるわけですが、知りたいですか？知りたいですよ？自分が人間ではなく、豚でもなく、ゴミでもなく、バクテリアですらない。

それらにすら劣る自分の存在は何か？気になりますよね？気になるはずです。気にならないわけがありません。そもそも貴方とこうして会話してる事自体、不愉快極まりないのですが、私は優しく、慈悲に溢れている女神のような高位の存在ですから、天使はもちろん、神も女神も見放すであろう貴方のような愚者を私は見捨てたりはしません。感動と感激にむせび泣き、私に最高の感謝と謝礼をするように。それが貴方が唯一絶対に出来る、ただ一つの善行であり救いでもあるのですから。

そして、私はそんなゴミにも劣る貴方のような愚者的な存在にせめてもの情けとして、貴方が何であるのか？教えて差し上げるのです。簡潔に言います。貴方は生きる価値の無い、生物としての形を取った何かです。それ以外の何者でもない何かであり、何か以外にありえない、生物的な何か。それが貴方です。

貴方は死ぬことでしか、救われることはなく、今すぐ死ぬべき悪臭を放っています。

死ね。今すぐ死ね。死ぬべきなんです。

はつきり言つて、貴方臭いんです。

これが私の言いたいことです。

そして、最後に死んでください・・・と言いたいのですが、今回は

お預けにしておきます。ただ一言。

これだけが言えるのです。

私のマスターに対して色目を使うのだけは許しません!」

•
•
•
○

なっげえ ええええええええええええええええええええ
ええええええええええええええええええええええええ
ええええええええええええええええええええええええ
ええええええええええええええええええええええええ

何！？この罵倒の嵐っ！？

単に最後の一言だけ言えば良くないっ！？

「ただ喋れば気が済むのさっ！？」

ほら、なんか聞き上手だったみたいですっかりとベリーの話を聞いていたクルトは泣いてうずくまってるよっ!?

「死のう・・・俺様・・・いや、様をつけるなんて俺ってヤツは・・・いや、私と言う物は死ぬしかない単なる汚物だ」とかばやいてるよっ！？」

ていうか、クルトは僕に色目を使っていたのかっ!??

確かに、今思うと話しかけ初めからやけに熱っぽい視線ではあった気がするが！？

でも男に対して色目を使うわけが……まさかっ!??

「ようやく気づいたんですね。マスター。」

そのとおりです。あのゴミムシはマスターを女性だと勘違いしてますよ?」

マジですかっ!?

「ぶっ。さすがマスター。ちゃんづけの段階で気づかないなんて。」

それでちゃんづけだったのっ!?

その後、またしてもベリーにトラウマ的な何かを刻み付けられたクルトを復帰させて、僕たちは夜を迎えたのだった。

そして、この夜。

まさかこんなことになるなんて・・・。

第38節 ドラム缶風呂が全ての元凶！？

日が暮れてきた頃に、野営地を作ってそこで休むことにした僕たち。本来なら晩御飯を食べてそのまま寝るところではあるが、今回はちよつと試したいことができたのでそれを試すことにする。

「ええと・・・この辺かな・・・あつた。」

バックパックをあさって出したのは鉄のインゴットである。

インゴットと言うのは製錬した金属（合金）を鑄型に流し込んで固めた地金のこと。持ち運びや扱いやすいようにと扱われている。

純度によりランクがあるらしいが、この世界のインゴットは70パーセントもあれば良いほうじゃないだろうか？分らないけど。

このインゴットを取り出して何をするかというと、ドラム缶を作りたいのだ。

言わずもがな風呂を作りたいから。

毎日お風呂に入る文化を持つ日本人としては毎日お風呂に入りたいのだ。

ドラム缶自体を持ち歩ければ言いのだけけど、バックパックがいくら異空間的な技術を使っているに見た目以上に入るとはいえそもその入り口が大きいわけではないので、ドラム缶が入らないのだ。

もともとは旅の道具をコンパクトに持ち運ぶために開発された収納カバンなので、かなり小さい。

そうじて、口も小さいためにとてもじゃないけどドラム缶なんて物は入らない。

適当な場所に穴を掘って水を入れると言う方法もありそうだけれど、そうそう鉋物が埋まっているわけもなく普通に地面に水が吸収されるだけだろうし。

となればインゴットをいくつか買って、ソレを加工し、ドラム缶を手に入れるしかない。

と、いうわけで。

インゴットを取り出した後、それに魔法で熱を加える。

魔物アスタナシアと戦ったさいに使った炎の魔術。ブラストファイアを発動させ、魔法陣が手元に展開。

手の平の上で炎球を作り出す。

そこそこの魔力を込めて、なおかつ熱が逃げないように圧縮をするため、熱波がかなり酷い。

暑さ、寒さと言った外的環境に適応するための魔術を扱おうと思ったのだが、ブラストファイアを発動させつつも一つの魔術を使うなんてことが初心者の僕に出来るはずも無く。そもそも手の平の上で停滞、圧縮するのに精一杯なので、魔力を扱う魔術ではなく霊力を扱う奇跡で凌ぐことにした。

魔術と奇跡の同時発動は魔術、奇跡どちらかの複数発動よりも簡単（あくまでも比較的。それなりに難しい。）なためだ。

「身に纏え、アクアオーラ。」

足元から魔法陣が展開して体の周りに薄い膜のような物が出る。

魔術と奇跡の同時発動なので、言葉による詠唱で少しでも発動を楽にさせた。

この魔法式は今即興で作ってみた。

ちなみに、オリジナル魔術というのはそうそう簡単に作れる物ではないらしい。

すでに作った僕のオリジナル第一号。結界魔法であるセイグリットをさきほど張ったらゴルバさんとクルトがちょっと驚いていた。

前回のフェローによる魔法講座は簡単に終わってしまったので、今回は少し掘り下げて説明しておく、魔法式というのは魔術を扱う魔術師、奇跡を扱う聖職者が魔法を使ったときに足元や手元に展開される魔法陣のことを指す。

この魔法式（魔法陣）の紋様を覚え、その魔法式が起こす効果を正確にイメージして、その魔法による事象を起こすに足りえる魔力、霊力を込めて初めて魔法は発動する。

例えるなら”強”という漢字があつたとして、この漢字を書けてもこの漢字の意味を知らなければ意味が無いということである。

その辺の素人の人が魔法を覚えようと思って、魔法式の紋様を覚え、頭で描いたとしても意味が分からないから発動しないと言うわけだ。魔法式の紋様は一種の象形文字のようなものであり、紋様一つ一つに炎、弾、燃え広がるといった意味があるのだ。

しかし、今ではそうした紋様を理解するしつかりとした知識を持つ物は1人としていないとされ、現在使われている魔法は単に”この魔法式はこういう効果がある”というただの暗記と化していた。

2×2が4になるという形だけ教えられ、2の塊が2個あるという意味が教えられてないのだ。

”この紋様はこうした意味を持つてるためにこうした効果を持ち、そのためにこの魔法陣にはこうした効果がでる”といった理論めいたものを少しでも理解してる人は極端に少ないという。

ここで話を戻すが、なぜオリジナル魔術なり奇跡で驚かれたかと言うと・・・。

察しが付くだろうけど紋様の一つ一つを理解しないとオリジナル魔術なんてのは作り得ない、魔法式を描けるはずがない、ということである。

どうも僕の持つ魔眼は”魔力と霊力を視認する”という地味に役立つ力のみならず、魔法式の紋様の一つ一つを理解できるという効果もあるようで。

とりあえず今度からはある程度自重しよう。

目立つし。

「とりあえず・・・えいつ!!」

手の平にあつた炎の塊をインゴット10個分に投げつけた。

爆散する熱風に肌を焦がされないか?と一瞬怖くなったけど、アクアオーラのおかげで問題なし。

インゴットが熱で溶け始め、柔らかくなったのを確認してから今度はアクアオーラを手にもみ10枚重ねにしてインゴットをドラム缶型に形成していく。

これがまた骨の折れる作業で困った。

なんせ、水のベールといっても良いこの奇跡がすぐさまインゴットを冷やしちゃう物だから再度熱して、冷えて、熱してなんてのを繰り返すのがかなり億劫だった。

そのうちに金属疲労を起こしたのか、ボロボロになって途中で真つ二つに割れたり、木々に飛び火したり、鉄の臭いに釣られたのかアイアンドックという表皮から金属を分泌する魔獣が出てきたりとか（鉱物すら食べる雑食で、性格は温厚。適当に威嚇したら逃げて行った。）

そんなこんなで苦心しつつ、小学校の成績表にて図工3（5点中）という中途半端なセンスの一端を存分に垣間見せたドラム缶もどきが仕上がった。

大まかな部分はソレっぽく見えるけれど、良く見れば明らかに雑な作りで安っぽいと感じる仕上がりだ。

さすが図工3。

それなりの成果である。うん。

度重なる急加熱と急冷凍により大分脆い感じになってしまったので、

品質的には図工1くらいかもしれない。これに強化的な奇跡をかけることにした。

「何がいいかな・・・外側からベール的な外装強化・・・でいいかな？」

イメージは強化コーティング。

物体自体の結び付きを強化するのではなく、外側から外骨格を付ける様なイメージでもって強化の奇跡をかける。

イメージはカニとか昆虫みたいな節足動物。

「中身がどんなに柔らかくても問題なし、インセクトアーマー。」

詠唱らしくない、詠唱をして名前を唱える。別名自己暗示とも言つ。軽く発光してすぐに光が消えるドラム缶。

「大丈夫かな？」

少し小突いてみるといい具合のようだ。

よし！！

これではうやくお風呂に入れるっ！！

さっそくドラム缶を適当に固定して、そこに水の魔法でもってドラム缶一杯に水を詰める。

「ブラストファイアっ！！」

炎でもって暖めるつもりだったのだが・・・爆発した。

「ぼあはあっ！？」

ちゅどーんっ！とあたり一面に爆音が鳴り響く。
え？なんで？

アクアベールが発動中でよかった。

なおかつ、皆からちよつと離れてる場所でもよかった。

下手したら死ぬレベルですよ？これ。

ついでにドラム缶風呂をサプライズ的に披露したいというちよつとした悪戯心から、防音結界を張っておいてよかった。

無駄に心配をかけるところだったよ。

周りの木々が吹っ飛んでおり、地面も結構な深さでえぐれている。

魔力の込め方を間違ったのかな？

と思ったけど、少し思い当たることがあった。

水蒸気爆発である。

確か、水が急激に温められると発生する現象だったかな。

水は凍らされることでも、水蒸気になることでも体積が膨張する。

ペットボトルを凍らせないでくださいと言う注意書きを飲料水のパッケージで見たことないだろうか？

体積が増えることによつて、ペットボトルが破裂する危険性があるから基本的にやってはいけないことだったりする。これちよつとした豆知識。

水蒸気の場合は氷にするときよりも膨張比率が顕著で、一気に熱することによつて起こる急激な体積膨張が爆発となるわけだ。

学校の理科で習ったと思う。

ならば！

火を炊いて暖めるのは時間がかかるので、焼き石を投入するまでだ。幸い、インセクトアーマーのおかげでドラム缶は無傷。

もう一度チャレンジしてみたところ、今度こそは上手く言った。ちよつと良い湯加減である。

入った後は皆を呼んでサプライズだ。

ふふふ。最近の僕は情けなかったからね！！

女性は清潔にすることに關してはうるさそうだし、ここでお風呂を提供したならば僕の評価はうなぎのぼりに違いない！！

「基本、響は情けないと思うぞ。」

「わたくし私もそう思います。」

「そ、そんなことないと思うけど。わ、私は！にぶちんなだけで」という声が聞こえたような聞こえないような気がしたが、ここは爆音すら防ぐ防音結界の中なので聞こえるはずがない。

さあ待っているっ！！

皆っ！！

そして感謝と感激でむせび泣くがいつ！！・・・というフレーズをどこかで聞いたことがある気がするが・・・具体的には身近にいる誰かさんから――これまた気のせいだろう。

「呼びに行かんで良いというのに。」

「私達はここにいますのですよ？ボケたのですか？マスター。」

「せっかくの私の手作りなのに・・・呼びにきたらこんなのもの作ってるし。」

「ひいあつ！！？」

なんで結界の中にいんの！？いつの間につ！！？」

「遮音結界に籠ってるおぬしをわざわざ呼びに来てやったのじゃろうが。飯の支度が出来たというのにいくら呼んでも返事をせんから・・・来てみれば。」

「ご飯が冷めてしまいますよ？私としては構わないのですが・・・インデさんがまあうるさくて。むしろ、後で”呼びに来てくれたって良いじゃないか！”とむせび泣きながら1人冷めた晩御飯を食べるマスターという光景を楽しみにしていました。」

「べ、別に私は何も言つて無いもんつ!？」
<私を忘れちゃーよ!>

あれ?なんか、リアクションが想像と違うよ?

フェローに関しては”夢中になるのは良いけれど、晩御飯を食べてからにしない”みたいなダメ息子を持つ親のような表情をしているし、ベリーは論外。エンデも心なしか不機嫌である。

ちなみにセルシーは、ゴルバさんやクルトの目の前で話すのは止めといった方が良かったために殆ど話せていない。

喋る魔剣は珍しく、下手したら盗まれるそう。

別に信用していないわけではないが彼らから話を聞いたほかの人がなにやらよからぬことを考えるのでは?とのことで念のため黙っている。

人の口に戸は立てられぬとも言つしね。

「シロもお預けして待つておるのじゃから、はよう来い。」

「ご、ごめんなさい。」

なんか納得いかない。

「今日はわ、私の食事当番だからね!せっかく作つたんだから冷めないうちに食べてくれないと・・・も、もつたいないじゃないっ!」

「わ、分かつてゐるって。せっかく作つた料理だもんね。」

料理を作る人間からしたら、一番おいしく感じる時すなわち暖かいうちに食べてもらいたいと思うはずだ。

「・・・分かつてない。」

「え？」

なおのこと不機嫌になるエンデ。
最近不機嫌になりすぎてない？

「分かってませんね。マスターは。好きな男性のためにと張り切って作った手料理だからこそ冷めないうちに食べて欲しい・・・という女心を。」

ベリーはニヤニヤしてそんなことを言った。

「ちょ、ちょちょよつとっ！？」

な、何を言ってるのかなっ！？この子はっ！？
本当に何を言ってるのかなっ！？」

慌てて、ベリーの口を塞ごうとするエンデだがひらりのらりとかわされる。

なんだ、そういうことだったのか。

「確かに・・・分かってなかったね。ごめんなさい。」

「ふ、ふうえっ！？」

顔を真っ赤にしているエンデ。そんなに照れくさいのかな。

気持ちは分かるような気がするけどね。

「僕だって好きな人のために・・・フェローやベリーやエンデのために腕を振るった料理が冷めるまでほっとかれるってのは嬉しくないね。」

「ばかあっ！！」

「ぐぶふるっ！？」

えええええええええつ！？

なんで殴られたのっ！？

全て分かってるかのようにつけるベリーの顔がヤケに印象的だし、フェローはものすごく呆れた表情をしている。

エンデに至っては恥ずかしさなのか、怒りなのか？

肩をブルブル震わせている。

いや、これは怒りだ。

一体なぜにっ！？

「わかっておつたな？」

「もちろんですよ。マスターの鈍さは育ってきた長年の環境から来るものですから、なかなか治らないでしょうね。空気を読む・・・程度は出来ても他者の機微を感じ取るなんてことはとてもとても。

第一、私がその辺の女にやすやすとマスターを渡すわけがありません。」

「・・・性悪め。」

「褒め言葉として受け取っておきましょうか。」

という会話が聞こえていたが、僕には理解できない。

バカにされてるのが分かるくらいだ。

そもそも、そちらに耳を傾けていられる余裕がまるで無い。

現在、殺気を全身で受けているからだ。

「甘んじて受けなさい。ヒビキ。」

「り、理不尽では・・・」

「ないわね。」

「さ、さいですか・・・」

僕はただ、ドラム缶を作っただけだったのに。

僕が満足するついでに皆にも喜んでもらえればという親切心も半分

くらいあったのに。

ドラム缶を作ろうとしたことが全ての元凶なのだろうか？

ドラム缶を作ろうとしてお風呂に入ろうとしたことは罪なのだろうか？

わ、わけが・・・わからないよ。

僕はその日。

初めて強制的に意識がシャットダウンされるといふ生涯において出来れば経験したくない経験を味わったのである。

その後、目覚めるとそこは野宿用の寝袋の中だった。

「あいたた・・・すごいな・・・あざが一個や二個じゃない。」

多分気絶してた時間は10分ほど。

怪我を負っても、負ったそばから治癒していく物だからエンデは手加減を忘れ・・・とはいえ痛みはあるものだから、痛みに耐え切れずに先に精神的なダメージで気絶したと言うところかな。

こうして考えてる間にもあざが徐々に消えていく。治っていくあざを見ながら一体、僕の何がいけなかったのだらうか？
とを考えても僕の頭で解決できるわけも無し。

ぐぎゅるるるとおなかが生理的なものを主張し始めたので、何か食べる物は無いかなと様子を見るがてら寝袋から出てみると。ベリ
ーが立っていた。

「どうしたの？」

「いえ、さすがに酷いと思いましたので。」

なんかベリーが優しいっ！？
なんかいやな予感がするけれども。

「とりあえず、お風呂がまだでしょう？お湯を沸かしておきましたのでどうぞお入りください。マイマスター。」

なんか凄い優しい瞳を見せてくれているベリー。
いざとなったらこんなに優しい気遣いが出るなんて。
やばいっ！！

惚れてしまいそうだ！！惚れないけれど。多分。

彼女はタオルを渡してきた。
準備も良いっ！！

嗚呼・・・いつもこれならなあ。

「ありがとう。」

「いいえ、これが私の存在意義ですから。」

「大げさじゃない？」

「いえ、ちつとも。」

「そ、そう？」

彼女があまりの満面の笑みでそう告げるものだからまあそうなのか。
と流してしまったのが致命的であった。

風呂場、と言っても先ほどの遮音結界の中が入った瞬間に、ちゃぷりという音が聞こえた。

虫か魔獣が入り込んだのかなと思ったのだけれども。

いや、そう願ったのだけれども。

最悪、クルトでも良かったのだけれども。

そこには裸体の・・・生まれたままの姿であるエンデがいらっしやった。

「ち、ちようど・・・上がるところでした？」

そんな間の抜けた僕の声が不自然なくらいに反響した、気がする。ちようどあがるところだったらしく、そこそこ豊かな胸や女性の体の中で一番重要な部位が・・・である。

木々で影になる場所にドラム缶が設置されてるため、しっかりと全容は見えないけれど一部はしっかりと見ることができる。

都合よく湯気が秘部を隠しているなんて事は無い。残念ながら。実際に残念ながら。

見てない、見えてないなんて良いわけは100パーセント通じない。通じる可能性が微塵もない。

え？これなんてギャルゲー？

こつという状況ではこんなきめ台詞があるらしい。

基本やるのはRPGとアクション、格ゲーの僕としてはあまりよくは分らないけどね。

そんなことを冷静に考えてる間。

エンデはただただ目を点にして、ようやく自体を飲み込めたのか徐々に顔を赤く染め上げていく。

さて。僕はどうしようか。

不思議とエンデの目から視線がずらせない。

ずらしたら、なんか負ける。

そんな気がする。

彼女の悲鳴と僕が引っぱたかれる音がほぼ同時に上がり、その後ボコボコにされたのは言うまでも無い。

追伸。

ベリーが優しかった段階でこの可能性に気づくべきだったのだ。

ベリーの存在意義は僕をいじめること。

それを痛感した夜である。

第39節 響とエンデの仲違い1（前書き）

今回はシロの一人称と三人称でもって、書いて見ました。

シロの一人称ではちと無理があつたのと、いつものにぶちゃん主人公目線から脱して、各キャラの心情の機微をしっかりと描きたかったのが理由です。

この書き方は次まで続く予定。

第39節 響とエンデの仲違い1

響についていくことになったブリッツドラゴンの白竜。

シロの朝は早い。

朝4時に起きて軽く走りこみをするのが旅の時の日課である。

別に体を鍛えているとかではなく、犬の散歩と同じようなものだ。単なる遊びのような物である。

「今日も早いのか?」

そういつてシロに話しかけるのはフェローと呼ばれる高位精霊の少女。

彼女が一番朝早く目覚める。

怒らせるととても怖いことを私は知っている。

初めて出会ったときの魔力と霊力の荒波を思い出して、シロは少し身震いした。

「別にビビらなくてもよい。もう殺そうとなどせぬからな。」

「クルル・・・」

そうは言っても怖い物は怖いのだ。

人間で言う”トラウマ”というヤツだろうか?

そんなことをシロは思いながら、その場をあとにした。

「あまり遠くへ行っではいかんからの。」

「グル。」

背後からかかる心配の声にいささか緊張を解いたシロはそのまま走り出す。

シロたちブリッツドラゴンも騎竜として家畜化された数少ない竜種の内の一つだが、最近では野生のブリッツドラゴンは絶滅の危機に瀕している。

騎竜としての需要が高まる割には人工的な繁殖が上手くいかず、やむを得ず野生の――それもまだ警戒心の少ない子供や卵ばかりを狙った乱獲が原因である。

餌の違いか野生のブリッツドラゴンの方が一回り大きく育ちやすく、力が強いという理由もある。

竜種とは言えど、下位の竜なので力も弱く、中位以上の竜種以外にも多々の魔獣に捕食されやすいために一気に数が減ってきている。

ちなみにシロはある森の入り口付近でのびのびとしていたところを捕まり、あの騎馬店で売られていた。

白竜特有の気難しさから売れ残り、その辺に捨てられるところを響に拾われたわけだ。

正直シロにとってはかなり都合が良い。

たとい力の強い白竜とはいえ、魔力を持たないブリッツドラゴンは弱い。

しかもシロはまだ幼体である。

単純な筋力だけならば中位の竜種にも劣らないがそれだけではあまりにも拙い。経験も足りない。

慣れてない土地と言うのもあって、おそらく一ヶ月も生きられなかっただろう。

そんなシロとしては響に出会ったことは僥倖以外の何者でもない。

私って運が良いな。

彼に迎えられたときにまず思ったのはこれだった。

彼は人間としては珍しく、私に対して臆さずに真っ向から立ち向かってきたーって言うのは難だが、バカだ。

恐れも無く、左腕を私の牙にわざと差し出してくるという無謀さ。

彼らの会話を聞くに考えがあつたようだが、バカとしか言えない。

予想外の私の力に慌て始めた彼。

それを見た瞬間に嗚呼バカだとなおのこと思った。

結局、屈服させられたのはフェローという少女のほうだった。

しかし響というバカ・・・とはいえ人間に好感を持ったのは初めての経験だ。

シロが走りこみを終えて戻ってくると、今度はエンデとベリーが起きていた。

「おはよう。シロ。」

「おはようございます、シロさん。」

「グルア。」

このエンデという少女。

私を見て失禁をした女の子だ。

ああいうのが普通の反応だね。他には悲鳴とか、ちょっと恐れを感じた目で見るとか。

今では普通に話しかけてくれるし撫でてくれるけれど。

「何かいけないことを考えていない？」

「グル？」

彼女にとってのいけないことというのは何なのだろうか？

シロは首をかしげる。

「・・・まあいいか。変なこと考えちゃダメだからね。」

別に考えていないはずだ。多分。

「ふふふ。シロさんも知っているであろう貴方の弱み・・・となれば、しつきーー」

「わあああああつ！？ど、どうして貴方がそのことを知っているのよっ！？」

「私はもととパジャマですから。あの時もあそこにいましたよ？
エンデさんは知らないでしょうけれど、常にグランドマスターが私を所持していましたから。」

「ぐ、ぐらんどますたー？」

「フェローさんのことです。赤の他人には”様”を。身内には”さん”を。創造主たる彼女は”グランドマスター”。私にとって唯一無二の存在である響ちゃん・・・と呼びたいのですけれど・・・彼を”マスター”と呼んでいます。」

「ふうん？」

なんか変なこだわりを持っているのね？」

「メイドですから。」

「初耳だけどっ！？」

「見ていれば分かるかと。」

「普通に分からないからっ！？というか、見てるからこそ分からないだけどっ！？」

「メイド服に見えませんか？」

「い、いや見えな・・・くもないけど、見た目の問題じゃなくて行動的に全く違うじゃないっ！？」

主人・・・に当たるのかな？主人であるヒビキにちよっかい仕掛けたり、お、お風呂を・・・の、覗かせたりとか・・・」

「そういえば・・・昨晚は私のミス（と言う名の予定調和）だとい
うのにエンデさんはマスターをボッコボコにしていましたね。

私のせいなのに。マスターは何も悪くないのに。」

マスターは何も悪くないのに。」

「な、何で二回も言うのよ。」

「大事なことですから。」

「う、うるさいなっ！？」

「これは嫌われたかもしれませんが。知っていますか？ヒステリックな女性は嫌われるそうです。」

「う、うるさいなっ！？」

「なんで二回も言うのですか？」

「だ、大事なことからよっ！？」

「ぷっ。」

「笑うなっ！？」

いつものようにベリーはエンデをからかって楽しんでいた。

傍から見れば仲が良いと言っても良いかもしれない。

本人達「――」というより、エンデからしてみれば全く持って心外なこともかもしれないが。

シロはそんな2人を見て、今日も平和だなとぼんやりと考えていた。

九時を回り始めたところでクルトが起きてきて、それからすぐにゴルバが起きてくる。

響は昨日の気絶と、ドラム缶風呂に日本とは違う風情を感じたらし
くつついっ長風呂。

フェローとエンデが入ってから、入ったために夜遅くなり今はまだ
寝ていた。

「おはよう！！俺様の美少女達っ！！」

「今日の朝ごはんは誰が当番じゃったかのう？」

「ヒビキだったと思うけど？」

「マスターですね。」

「あれえっ！？俺様無視っ！？せめて”誰がお前のだっ！？”的なツッコミはくれないのっ！？」

クルトが騒ぎ立てても誰一つとしてリアクションを取らなかった。ゴルバは苦笑してただけである。

クルトのせいしんがらさがった。

こうげきりよくがらさがった。

にんたいがらあがった。

なみだがらながれた。

「そ、それじゃ私が作ろうかな。」

「またかの？」

「・・・胃袋を掴むといったとこじやろうか？」

「な、何のことかなっ！？」

フェローの鋭い指摘に、とぼけるエンデ。

顔を真っ赤にしている。

「違いますよ。グランドマスター。略してグラさん。」

「変な名前をつけて、なおかつそれを略称した名で呼ぶでないで、何がどう違うのじゃ？」

「将来に向けての下準備というより、昨夜の件に関する”仲直り”の面が大きいかと。」

「ふむ・・・なるほどのう。」

「だ、だから何のことかなっ！？さっぱりだよっ！！」

エンデはベリーの陰謀（？）によって響に非が無いにもかかわらず響をぶちのめしてしまった。

響からしたら「理不尽すぎるっ！」と言わんばかりの仕打ちであり、言わずもがな響が好きであるエンデにとって、好いて欲しい相手に対して取る行動ではまず間違いなくありえないことだ。

誤解が解けた後も昨晩は無視し続けていた。

エンデからしてみれば恥ずかしくてまともに顔も会わせられないという、心中さえ分かればいじらしくも可愛らしい理由なのであるが、心中を見れるはずも、にぶい響に察せるはずもなく。

響からしてみれば怒っていると取られているかもしれない。

いや、まず間違いなくそう取られているだろう。

別に仲直りをしたいという旨を話せば良いだけなのだが、それが出来れば昨夜の時点でそう言っている。

出来ないからこそ料理に気合を入れて、さりげなく響の皿にだけ多く取り分ける。

これによって怒ってないですよアピールをするのだ。

言葉ではなく、さりげなく行動でっ！！

これこそ良い女の証！！

名づけてオペレーション「恥ずかしくて顔もあわせられない！だけでもこのままでは嫌われてしまう。それだけは絶対いやだ！！しかし素直になれない、だって女の子だもん！！」を遂行するべくエンデは料理の仕込みにとりかかった。

ネーミングセンスにそこはかとなく自身を持っている。

そんなエンデを楽しそうに見るフェローとベリー。

クルトは「おいおいっ！？そんなに気合入れて・・・まさかっ！？俺様への愛情を伝えるために必要な言葉が思い浮かばずに・・・行動で示そうってのかっ！？くうっ！！良いっ！！良いよおっ！！君

みたいな女の子に俺様は始めてあつばがふっ!？」とか何気に鋭いけれど根本的なところで見当違いなことを言っていた。
途中でエンデに殴られたのは当然であり必然である。

「ぐる?」

とりあえず私には何がなんだか分からない。
でもおいしい臭いがするから今日のご飯は楽しみね。

シロはその場を後にした。
次に向かうのは響の天幕であり、彼を起こすのはシロのもう一つの
旅時の日課でもある。

「ぐるるるっ!」

「・・・ん?な?」

・・・ああ。シロ。おはよう。」

寝ぼけ眼をこすって起き上がる響。

「毎度ご苦勞様。」

結界のおかげでゆっくり眠れるようになったのは大きいね。うん。」
「グル!」

シロは気にするなとばかりに声をあげた。

「お前は本当に主人思いの良い子だよ。」
「グルル。」

そうだろうか?

私としては別に大したことをしてるつもりはないし、彼はいつも私の頭を撫でてくれる。

今しているように。

それがなんだかとても気持ちよくて、楽しくて。

暖かい気持ちになれる。

それが良いために起こしに来ている、というよりも撫でられにくるついでに起こしに来ている。

正直言ってそんなことを言われても決まりが悪いだけだ。

シロは目をそらした。

「それよりも・・・シロ。」

頭を撫でながら、響は言った。

「エンデ・・・まだ怒ってるかな・・・？」

「グルグル。」

態度を見る限り怒っているように見えないと判断してシロは首を横に振る。

「ほ、本当っ!？」

「ぐ、グルル!？」

いきなり迫ってくる響の顔に少し後ずさるシロ。

「その・・・やっぱりさ。ベリーの悪戯とはいえ・・・見ちゃったことには変わらないし・・・申し訳ないし・・・エンデは好きな男でもない奴に、そ、その、え、えっちいこと?っていうのかな?それをされるなら死んだほうがマシだって言うくらいプライド・・・」

といふかな？貞操観念？それが強い彼女からしたら同じく好きでもない僕に対して裸を見られたことはやっぱり結構辛いんじゃないかな・・・とか思うわけで、謝ることはぜんぜん構わないんだけど、許してくれないというか許してくれなさそうというか、それが普通というか・・・その、さ。でも、やっぱり僕は仲良くしたいわけさ・・・彼女からしたらどう思ってるかは分からないけど、友達だとも思ってるし・・・このまま絶好状態は嫌だ。仲直りするためには、ど、どうしたら良いと思う？」

そんなことを私に聞かれても困る。

しがたない竜に人間の機微がわかるはずもなく。シロには非常に手に余る案件だ。

「あれから何度か話しかけても無視されて・・・謝っても許してくれなくて・・・でもシロは許してくれてるって思ってるんだよね！？あれだけ無視され続けたのにっ！！

あのあとなかなか眠れなかったりしたり・・・それはまあどうでもいいや。

とにかく、ど、どうしてそう思えるのかな！？

はつきり言っただけかなり怒ってるようにしか見えないんですけどっ！？」

「グルグルウっ！？」

はつきり言っただけ響はかなりキテいるようだ。

シロはそんな鬼気迫る勢いの響に若干、いや、かなり引いていた。俗っぽく言えばドン引きである。

竜であるシロにそんなことが分かるはずもなく、また分かったとしても伝達手段は無く。

それすら考えに付かない響は結構追い詰められているのかもしれないな

い。

ストレスが溜まっていると、誰でもいいから愚痴を聞いてもらいたいと考えるのと同じだ。

シロはストレスの捌け口へと選ばれてしまったのである。

辟易としながら延々と愚痴染みた相談を受けること数十分。

シロの体感では一時間にも二時間にも感じられたスーパーストレスタイム（？）も終わりを告げた。

ベリーが朝ごはんの準備が出来たことを伝えに来たためにだ。

ベリーが響とシロの様子を見て、さすがにやりすぎたと感じたらしくやけに優しい手つきでもって響を誘導して行った。

シロも付いていくと、すぐさまおいしそうな香りが鼻一杯に広がった。

臭いの花が満開したみたいだ。鼻（花）だけに。

いえ、なんでもありません。

「はい、どうぞ。」

「ぐるっ！」

私はエンデから貰った自分の分のご飯にすぐさま食いついた。

エンデのご飯はいつも美味しいが、これは何時にも増して美味しい！！

「は、はい！」

・・・食べれば良いじゃないっ!？」

「ひあっ!？」

エンデによって、いささか乱暴な手つきで響の目の前に置かれたさらには大量の手作りご飯っ!!

シロはついついよだれをたらしてしまう。

いいな・・・彼はあんなにもらえて！

私の量の倍はある。

でも・・・食べきれないと思うんだけどな？

シロはとりあえず目の前の料理を片付けることに集中した。

「あ、あの？いささか量が多すぎない？」

響は頬を引きつらせながら目の前のどんぶりに目を落とした。

量的に言えば、グルメ番組とかで時たま見る”食べ切れれば無料”
という類のソレである。

「私の料理が食べられないって言うのっ！？嫌いなのっ！？」

訳すと”私がせっかく作ったのに・・・私の料理を食べてくれない
のっ！？私のこと嫌いになったから！？”

であるが、恥ずかしさからくる緊張のせいかぜんぜん違う意味の言
葉を投げつけてしまったエンデ。

「いえっ！綺麗さっぱりたべさせていただきますっ！！」

「そ、それでいいのよっ！！」

すぐさま気づいたが時すでに遅し。

恥ずかしがりやの彼女に一度出た言葉を引っ込めることが出来るは
ずも無く。

そんなエンデを見て、さすがのベリーも面白がることを通り越し、
呆れて目を伏せた。

フェローもため息を吐いて見なかったことにした。

「阿呆・・・さりげなくて、ちょっと多い程度でよかったじやろうに・・・多すぎじゃ。あれでは逆の意味にとられかねん・・・追い詰められておるのう。」

というフェローの呟きは同じ思いを抱くベリーのみが聞いていた。

響も最初はあまりの美味しさにががつと食べていたのだが、如何せん量が異常。

物理的にそもそも無理だろうと思われるし、なおかつ彼は少食である。

それはしばらく一緒に過ごしているエンデにも分かっているはずで、彼は一つの結論にたどり着いた。

「やっぱり怒ってたんだね・・・」

空腹も苦しいが、満腹も苦しい。

満腹なのにどんどん詰め込んでいかなければいけない。

これはある種の拷問であると言えるよう。

痛みとは違う一種の苦痛。

こうして響の誤解は深まり、エンデはまるで逆の結果をはじき出してしまったことに嘆き。

響が泣きながら完食を果たした頃には夕暮れとなり、その日はこの場所を動くことが出来ず終いであった。

第39節 響とエンデの仲違い1（後書き）

逆に分かりづらくなってたらしようとビクビクしながらの投稿です。（笑）

批判は結構ですが作者は打たれ弱い繊細なSなので、出来るだけ優しいお言葉をお願いします。

第40節 響とエンデの仲違い2（前書き）

やっぱりあまり慣れてないせいか、三人称は書き上げるのにいささか時間がかかっています。

ざっと二時間ほど。

二時間で六千文字近く。

これは早いのか遅いのか？

第40節 響とエンデの仲違い2

夜。

響は泣いていた。

食べ過ぎによる腹痛もそうだが、エンデが本格的に怒っていると勘違いしていたからだ。

ひとしきり泣いたらスッキリした。

そうなると考えが前に向く。

「ど、どうしよう・・・」

こんな拷問まがいのことまでしてくるなんて相当怒ってる証拠だ。一体どうしたら許してもらえるのか？

それが思考の大部分だった。

コレに対し、解決策が何も浮かばないと言うのが正直なところであり、いつそのことこのまま寝て明日考えよう！とテスト前日のダメ学生のような思考回路を形成したものの、まるで眠れない。

サンタや遠足を楽しみに待ち遠しくて眠れない子供のごとく。

否。

そうしたプラス的感情、もといウキウキワクワクで眠れないのであればまだ良かったのだが、今回のコレはそれとは全くの別物であり、むしろ真逆。

月とすっぽん。泣きっ面にハチ（？）である。

眠るべく心を無にして目を瞑るものの、次から次へと心底から湧き上がる不安という名のラプソディ。

ラプソディ・・・と言うだけあって気が狂いそうだ。ーというのは言い過ぎにしてもそれに準ずるくらいには狼狽しつつある響で

あつた。

そもそも今まで友達という存在すらまともにいなかった響に、年頃の女子の裸と出くわしたなどという、

フィクションにはありきたりとはいえ現実において酷く難しくありえないといっても良いシチュエーションに対する対応策などまずもってわからない。

おそらくエンデが男だったとして同性であつた場合でも多少なりとも慌てふためく程度には対人スキルが貧弱なのだ。

そんな響にこれからの応対を”謝る”以外に何かを考え出せと言うのがいかに酷なことかわかるかと思う。

などといったつつ結局のところ響の被害妄想、とまではいかずともそもそもエンデは怒っていないのであるからして、許しを請うのではなく誤解を解くだけで良いのであるが如何せん不器用な2人にはそれが難しい。

かたや、恥ずかしがりや。

かたや、にぶちん。

この二つが揃うことでここまで状況がこんがらがることを一体誰が予想できたか？

仮にこれが小説のネタだったにしろ、著者は思いもよらずに成り行きで書いてしまったと言うに違いない。

事実が小説より奇なりとは良くぞ言った物である。

閑話休題。

ともかくしてこの状況を解決しようとする一つの影が響に舞い降りた。

言わずもがなベリーである。

”こ”から始まる盲目的な何かを邪魔する者は古来から馬に蹴られてうんぬんと良く言われるが、さすがにこれには関与せねばなるまい。

もとい、ベリーのせいであるから尻拭いーーないしはお節介とも言えるので馬に蹴られることはまず無いだろう。その点は安心できる。

「マスター？」

「ん？何・・・ベリー？どうしたのこんな時間に。」

「いえ・・・お風呂でもいかがかと思ひまして。」

「えうつ！？」

昨日の今日でお風呂に行つて来いというお達し。

響はにぶちんであるがバカではない。

よつて当然のごとく警戒をした。

またもや何を企んでいるか知れた物ではない。

響が奇声を漏らすのも無理は無い。

「今日はいられていないでしょう？」

ずっと悶々としていましたから。」

「ベリーは僕をバカかそれに近い何か、とても思つてるの？」

さすがに昨日の今日で騙されるほど僕はバカじゃないよっ！！」

ふふんと胸を張る響。

とはいえベリーと話している現在も頭の片隅でエンデのことを考えているのかいささか強がつているように見える。

男の子と言ふ生き物は総じて見栄っ張りなのだ。

これテストにでますよ？

「無理が見え見えですよ？」

どうせ強がるならば態度のみならず、表情ももう少しどうにかしていただかないと・・・」

「うぐ・・・」

あいも変わらずポーカーフェイスの苦手な響である。

「まあそれを気づいてて知らん振りをするのが良い女・・・かもしれないね。」

とりあえず今のセリフは無かったことにしておいて上げます。」

「あ、ありがとう・・・ってバカにしてるのかっ!？」

「いいえ、コケにしています。」

「あまり変わらないよねっ!？」

「まあそれはどうでもいいので置いておきまして、マスターはエンデさんと仲直りがしたいのですよね？」

「ううっ!？」

「誤解は解いたはずなのになぜか無視され、拷問され。悲しいところにマスターの忠実な性的奴隷。」

ベリーちゃんが助けて差し上げます。」

「性っ!？せ、せいて、ど、どれいとか・・・ごによごによ・・・

と、とにかくっ!冗談でもそういうはしたないことを言うんじゃないじゃありません!！」

「てへ。」

「無表情でそのセリフは無いと思う。」

頭に片手を置いて、もう片方の手を腰に。

そして軽く体にしなりをつけて”テへ”と言うベリーは笑顔が伴っていればそれはもう可愛かっただろう。

「それで、……一つお風呂に入ってさっぱりしたらどうかと思いまして。助言は気分転換した後にでも。このまま悶々としてても何も変わらないのはお分かりでしょう？」

「確かに悩むだけ無駄っぽいし……気分転換には良いかもしれないけれど……どうも何を考えているか……」

「大丈夫ですよ。私の行動原理はおおよそ自分のためと残りがマスターのため……といって良いですから。」

「……。」

少しでも信じていいかと思った自分がバカだった。そう学習した響である。

「そんな顔しないでくださいな。今回はその残りの部分でのお節介ですからね？」

どうぞごゆるりと私に任せてくだされば万事解決、へへ屁の河童というものです。」

「……本当に信じて良いの？」

できれば頼りたくない物だけれど、今は藁でもつかみたい気持ちだ。そんな響にまともな選択肢を選ぶ余裕も無く。

「ええ。いけない企みなんで微塵も灰燼ありませんから安心して湯船に浸かってくださいませ。」

「……わかったよ。ベリーの言うとおりにしてみる。実際気分転換は必要だと思うし。」

「おういええー。任せてください。」

「……本当に大丈夫だよな？」

ふざけた調子のベリーにため息を吐きつつ。そう1人ゴチてから、響はドラム缶風呂へと向かった。

去り際のベリーの一言。

「他意はありますけれど。」

響には聞き取れなかった。

念のため遮音結界に入った直後に気配を探りながら恐る恐るむかうと誰もいないことがわかる。

押し寄せていた緊張が一気に緩んだ。

さすがに二回連続、二夜連続というのは自重したみたいで本当に良かった。

とりあえず服を脱いで、全裸になる。

魔法で水を虚空に作り出し、そこからシャワー状に水を切り離して頭を洗う。

魔法って本当に便利極まりない。

軽く体を洗い終えたあと、ドラム缶風呂に浸かると良い具合の温度に調整されていた。

ベリーがやっておいでくれたのだろうか？

なんにせよありがたい。

ゆったりとお風呂に浸かること10分。

ガタンと物音が鳴る。

結界魔術であるセイグリッド（遮音効果プラス）を張ってあるので魔獣は入れない。誰か入ってきたのだろうか？

でもこの結界には昨夜の出来事を踏まえて内側からしか外を見れず、外側からでは中を見れないという覗き防止効果をつけてある。なおかつ範囲や色を視認できるようにしてあり、中に人がいれば色が変わるようも創った。

間違って入ることはまず無いと思われるので、何か急ぎの用事だろうか？

と思い、音のした方向を振り向くとこれまた困った物に出くわした。タオル姿のエンデである。

「・・・」

思わず響は絶句。

なぜここに？

あれ？

昨日の二の舞ですか？

WHY？

エンデにもきっちり伝えたよね？

結界の色に関して。

青だったら僕が。赤だったら女性陣の誰かが。黄だったらゴルバさんかクルトが。

というかむしろエンデにこそ重点的に、念入りに、真っ先に教えたはずだ。

今日の前の光景がありえるはずが無い。

なんでかな？

裸にタオル一枚というエンデの艶姿にはもちろん、そういったことも含めて響の脳ミソはショートした。

そんな中でもとっさに股間を隠した響こそ紳士の鏡と言えよう。

そして驚くことに響に近づいていき、そのままドラム缶風呂にポチ

ヤン。

「……えー……っ」と?

「……な、なに!？」

なに!?!とはこちらのセリフだろう!?!とを考えてもすぐにそんな些細なことは飛んでいく。

目の前のエンデは酷く朱に染まった顔で、すでに茹っているのではないかと思うほどに真っ赤になっていた。

そしてエンデの双眸が捉えるのは眼前の響。

ドラム缶風呂は決して広いほうでは無く、お互いに向き合った状態で軽く密着気味だった。

はつきりと異議を唱えようっ!!

これは一体どんな状況なのかとっ!?

普通の男子学生からすればうらやましい状況かも知れぬが、いかにせん響の頭には処理能力オーバーである。

具体的に言うならメインメモリ128MB、無線LAN(電波強度50も無い)のパソコンでマビ。ギをプレイするような物だ。

確実に固まる。

というかそもそもプレイできない。

てつきり嫌われたと思った相手がいきなり風呂場に乱入。

乱入のみならず、混浴までしてくる。

さらには密着状態で叫び声ひとつ上げない。(自分からしておいてそんなことをするのも大概にして阿呆だが。)

なんだろうっか?

本当にわけが分からない。

これほど分からないのは数学の初めての証明問題ぶりである。

あれは話が分からないとか証明においての法則が分からないとかではなく、答え方がわからなかった。

問題の意図してることが分からなかった。

懐かしいなあ。と現実逃避気味の響。

「正直に言っただけがわからな過ぎ・・・」

とりあえず話を聞こうとコンタクトを試みてる物の。

これまたわけの分からないことが起こる。

いきなり泣き出しちゃったのだ。

誰が？

エンデが。

わけの分からないことのバーゲンセールである。

どこぞの主婦のおばさん方よ。

今ならタイムサービスゼロ円。

お願いだから目の前で起こっているこの事象を買い取ってくれまいか？と今にもこの場から逃げ出したくなる響。

でもさらに分からないことに、エンデは響の腕を掴んで離そうとしない。

「あ、のね・・・私・・・その、怒って無くてね・・・ぐず・・・ひつく・・・ひつく。」

「べ、別に無理しなくても良いと思うよ？」

とつとつと語りだすエンデに、何を無理してるのか良く分かってい

なかったが、とりあえず慰める響。

「そ、その・・・ね・・・私って・・・肝心なとき・・・ばっか失敗して・・・」

「・・・。」

とりあえず、空気に沈黙を選んだ響。

賢い選択である。それでこそ紳士だ。

「ほ、本当は・・・ぜんぜん怒ってなくて・・・でも、でもひぐつ・・・上手いかな・・・な”ぐて・・・ね・・・」

ぼろぼろと涙を垂れ流すエンデ。

開く口はまだまだ閉じない。

「は・・・恥ずか、しくて・・・なにも・・・言・・・なくて・・・ね。」

私って、どう、してこう、なんだろうって・・・思ったら・・・ひぐ・・・自分が情、けなく、なってきた・・・こんな、ば、かな・・・ぐず・・・案にすがってまで・・・ね・・・ひっぐ。

ビ、ビキと仲なお・・・りがしたぐで・・・ひっぐ。」

とどのつまりエンデは素直になれない自分に口惜しさを感じ、それにしたいて悔し涙を見せているというわけである。

もちろんそれだけではなく、自分は全く怒ってないし許してるつもりなのに、しょうも無いことで、自分が素直になれないというだけでこのまま仲違いしたまま嫌われたらどうしよう？と思う。

その結果本当に嫌いだと言われたときのことを考えると、それだけで胸が締め付けられるように感じたエンデ。

本当にそうなるかもしれないと妄想しただけで目から涙が溢れてく

るエンデ。

今、響と混浴しているのも「男なんて単純じゃからのう」というフエローの提案の元に過ぎず、バカみたいと思いつつもそれに縋るしかない自分の現状に、苛立ちを覚えて泣くエンデ。

恥ずかしくて無視してしまった晩など、恥ずかしさと不安でろくに眠れずそして泣くエンデ。

たった一日ちよつとの出来事だと言うのに、ちよつと距離が開いたくらいで不安で胸が一杯になり泣けてしまう自分の弱さになおのこ
と、軽蔑し、嘆き、泣くエンデ。

自分はなんてひ弱なのだろう。と絶望し、泣くエンデ。

なおかつ、目の前で裸一貫で響と相對した結果、今にも恥ずかしさで死にそうになる自分に何かを話すなんてことが出来るはずもなく。

すなわち、とにかく、つまり。

エンデはとりあえず、感情が暴走してしまったわけである。

そんなエンデに響ができることなどたかが知れており。

最初の緊張などどこへやら。

響はエンデを抱きしめて、ただひたすら頭を撫でていた。

夫が妻にするように。

彼氏が彼女にするように。

父親が娘にするように。

兄が妹に対してするように。

ただ、優しく優しく撫でていた。

第40節 響とエンデの仲違い2（後書き）

どうもエンデに対して感情移入し過ぎる傾向のある僕。

不思議と目が潤んじまったぜ（笑）

もうエンデがメインヒロインで良くない？と思い始めた今日この頃。
メインはセリアです。

次からは一人称に戻ります。なおかつ王都へ。

やりたい話が幾つかあり、それと挟めて大筋の物語も進む予定。

第41節 再会を中国語で言うとしたらツアイチェン

ぼ、ぼぼぼぼ、僕は！！

一体、何をやらかしてしまったのかっ！？

それが朝起きて第一に思ったことである。

昨日は自分でも不思議に思うほどゆっくり眠ることが出来、体調的には快調なのだけれど。

精神的にはパニックも良いとこの大暴落（？）だったりなんかしたりして！！

タオル一枚の女の子と抱き合い、頭を撫でる。

こうして完結にまとめてみると大したことない・・・こともないが、恥ずかしすぎて死にそうだ。

空氣的に自然とあんなことをしてしまった、いや、しでかしてしまったわけだが本当にあの対応で大丈夫だったのだろうか？

今思うと殴られなかったのが不思議なくらいだ。

あの後、しばらくしてエンデが落ち着いたと思ったたら慌てて風呂場から脱したエンデ。

恥ずかしかったのかな？

とてつもなく今更過ぎると思わないでもないけど、昨日の今日でどんな顔で会えば良いのだろうか？

「うむう・・・」

とか唸っていると、シロがやってくる。

「ぐる？」

「あ、いや、なんでもないよ。」

僕の考え込む顔を見て、「どうかしたかいなワレ？」とつぶらな瞳を潤ませて首をかしげるシロ。

嗚呼・・・癒される。

シロを見ると、にとり（ミドリガメ）をいやおうがなしに思い出させてくれる。

同じペットだからかな？

ペットとして扱うには無理があるほど賢いけどさ。

母さん、カメプロス（ミズガメ用の餌。）の補充をしてくれてるかなあ。

そろそろ切れる頃合だったし。

とか取り留めの無いことを考えていると、シロがパジャマの裾をひっぱってくる。

ちなみにパジャマはもちろん、イチゴ柄。

他にカボチャ柄とバナナ柄がある。

これらは最近ベリーに編んでもらったもので、見事な出来である。

魔法で合成繊維を作り出し、（そのための魔法は僕が開発した）ベリーがそれを編んでいく。

時に手で時に魔法で。その手並みは鮮やかの一言。

特にイチゴ柄パジャマは秀逸の一言である。筆舌に尽くしがたい。

元々パジャマであるベリーにはパジャマ作りという、一見無駄な特殊技能があつたのだ。

元はパジャマだからって何でそんな特殊技能がつくんだよ？と尋ねられても困る。

「お前ってどうして人間として生まれてきたの？」と聞くのと同じ

くらい変な質問だよそれは。
生まれてきたんだからしょうがない、パジャマだからしょうがない。
そういうわけである。

とにかく、一見無駄としたのは冒険においてたかがパジャマが一体
何の役に立つ？と思うのが普通だろうからだ。

だがしかし、よくも考えてみてほしい。

この世界の服の品質はまあ良い。

もともとはあっちの世界で言う蚕を大きくしたような魔獣、”シル
クル”から取れる繭を使つて糸を繰り、それが服の素材らしい。(カイク
どうも、もともとはパジャマだったせいか、服にやたら詳しいベリ
ーは一見してこれを見抜き、ゴルバさんにシルクルのことをやたら
尋ねていた。元が服だっただけに服飾関連に興味があるのかもしれない。)

このシルクルから取れる糸は非常に上質で、肌触りがかなり良い。
それは認めよう。

だがしかし、科学先進国日本生まれの僕としてはおなじみ合成繊維
のあの肌触りが良くてパジャマを愛用していると云うのにこちらの
世界では普段着と寝巻きの違いがまるで無い。

つまり何が言いたいのかと言うと、慣れ親しんだパジャマに使われ
ている合成繊維の肌触りでもって初めて安眠が出来る僕としてはこ
れって非常に重要なファクターなのである。

残念ながら、フェローとエンデには不評だったけれどいつか認めさ
せてやろうとひそかに決意してたり。

「ぐるるっ！」

「あ、ごめんごめん。」

とか考えていたらシロがより強い力で僕の裾を引っ張る。

朝ごはん前だからか、「あたちはもうお腹と背中がくっつきそなのっ！早く行こうよお兄たん！」と言いたげな目を向けてくる。

重ねて言おう。

癒される、と。

「とはいえ・・・憂鬱だな。」

どんな顔して行こうか？

いつそのこと仮面でも付けようかなと真剣に検討してみるが、仮面が無いので却下。

とりあえず目を合わせなければ良いよね。うん。

結論から言えば、気にしすぎだったと言わざるを得ない。

至って普通の受け答えをされて、むしろそれで戸惑ったくらいである。

ニヤニヤしながら見るフェローとニヤ成分と不機嫌成分が半分づつ表情に出ているベリーが印象的だった。

一体なんだっていうの？

「お、おはよ、エンデ。」

「う、うん！おはよう！」

ふあうっ！？

笑顔がまぶしいっ！？

一体なんなの？

このエンデのご機嫌モードは？

少し頬が赤いのを除けば、絶好調といった感じである。

「今日も私が作ったから・・・冷めないうちに早く食べてね。」
「う、うん。」

食事当番的なものがあつたが、ここ3日くらいは連続でエンデがやつている。

もともとローテーションを組んでいたのに、こう連日作ってもらつてると悪い気がしてくるのだけど、そのことを聞こうにも彼女のこのご機嫌具合の中、水をさすようなことを僕が言えるはずも無く。

とりあえずご飯を口に入れるとこれまたおいしい。

嫌がらせのように多かった料理は普通の量に戻っていて、内心ほつとした。

僕の好きなシジミの味噌汁の量だけが多かった気がするのは気のせいかな？

結局のところ昨日のあれで許してもらえたのだろうか？

いや、本当は怒ってないって言ってたっけ？

許すも許されるも無かったと言うわけだが、許していたなら許するとはつきり言っただけだったよ。

今思うと、僕かなり手ひどいことになってたよね。

具体的に言つとシロにーっとなあ、具体的にはいいよね、うん。

ちなみにこの朝食時には僕達以外にはゴルバさんのみが呼ばれ、クルトははじき出されていた。

エンデ曰く「殺したくなるほどに気持ち悪いことを言ったから。死ねば良いのに。」とのこと。

シクシク泣いていたクルトを見て、本当にキングなのか疑ったのは

やむをえまい。

一体なにをしたんだ？

「ご、ごちそうさま。」

あいもかわらず・・・というかどんどんおいしくなっていってない？」

「お粗末さまでした。」

当然だよ、好ごによごによ・・・に作る料理だからね。」

「ん？」

「べ、別になんでもない。」

「別の意味でお腹一杯じゃな。」

「ええ、これでよかったのでしょうけど・・・アレはやりすぎです。グランドマスターがとめなければ・・・私が引き剥がしに言っていたのに。」

「そういうな。もともとの引き金はおぬしの悪戯心じゃろ？」

「・・・はあ、分かっていますけどね。」

話してる内容は良くわからないけど、珍しくベリーがしおらしい。

てな感じの朝食タイムが終わり、今日は王都への道をえっちらおっちら馬車で走っている。

余談であるが、ドラム缶は泣く泣くインゴットに戻して持ち運ぶ。あのままじゃ持ち運べないことに後々ながら気づいたのである。遅すぎるよね・・・うん。せっかくの僕の作品がおじやんだ。

そんなこんなでそこそ順風満帆に王都への街道を進んでいくと、昼食を食べ終えた後すぐに中位竜種に出くわした。

ええ、驚きましたとも。

「うおおおっ!？」

なんでこんなところに竜種がつ!？」

ゴルバさんの驚きの声。

僕も驚いてるけど、フェローとベリーはなんのその。落ち葉の下にダンゴムシがいるのは当たり前、それと同じく竜種がいきなりでてくるのも当たり前。と言わんばかりのノーリアクションぶりだ。

エンデも少し身が縮こまっているけれど、表情は普通。

頭では危険がないと分かっているけど、それでも怖いものは怖く、体が微妙に反応してしまう。そんな感じだ。

僕は一杯一杯である。

いや、もちろん食われはしないし、能力的に考えれば殺せるだろう。最悪でも逃げることは120パーセント間違いなく出来る。

殺さないように倒すのだって出来そうだ。

それでも怖い物は怖いよね。うん。

お化けを見たこともないのに、お化けを怖がる子供と同じーって言えば分かりやすいかな？

そんな中、意外や意外。

クルトは平然としていた。

実は座ったまま気絶とか、そういうオチではないことを祈ろう。

中位竜種の名は”ギルブラ”。

上位竜種が持つ、おなじみ魔力による防御膜とプレス。

霊力による超感覚。

それを中位の竜種でありながら普通に使ってくる竜種だそうで、ワイバーン科。

一般に言うワイバーン的な形で、鱗は黒色。

口吻や爪、翼膜の部分などの鱗が生えてない部分は赤というメリハリの付いた配色をしている。

大きさは大型トラック二台分ってところ？

現在地が開けた丘の上なので、空を飛ぶ生き物にとって非常に狩りのしやすい場所なのだろう。

空からブレスを撃ち、獲物を軽く焼き上げてから巣に運ぶと言う習性を持つらしい。

いやな習性だ。

「妾が行くかの？

空に向けて放つなら、周りに被害は出ないじゃろうから。」

「私がいきましょう。せっかくですから魔術の練習がしたいです。」

「よ、余裕ね。わ、私はヒビキがいてくれるからここまで余裕でいられるんだけど・・・」

「言っておくけど僕はそこそ一杯一杯なんだよ。いや、倒せるかどうかで言えば・・・倒せるだろうけどさ。」

とかいう僕達の言葉には耳を貸さず、ゴルバさんはクルトに助けを求める。

まあ、強い方を頼りたくなるのは当然だよな。

ランクで言えば僕はナイトだし、フェローのルークは自称だし。

最高ランクであるキングのクルトに頼るのは必然か。

とはいえ、なんか面白くない。

「だ、大丈夫ですか！？クルトさん！？」

「ああ、はいはい。いけますいけます！

まかせてくださいな、ゴルバさん。

俺様にかかればこんなトカゲの一匹二匹余裕だから。

女の子達は俺が守るっ！！」

とやけに顔を決めてギルブラに相對するクルト。
最後の一言が余計だったみたいで女性陣がまあ冷たい目でクルトを
にらむ。

「守ってもらえずとも構わんぞ？」

「・・・クルト様は冗談が下手なようで。」

「男の人って独りよがりよね。概ね。」

これを聞いて泣きそうになるクルト。

く、クルトよ！

僕だけは応援してやろう！！

「あ、えと、がんばってください。」

とりあえず適当に応援してみた。

あわよくばそのまま倒してくれば良いと考えて。

食後はあまり動かない主義なのだ！

「くうっ！？ひ、ヒビキちゃんだけだよっ！！俺様に好意的なのはっ！！

俺様、君だけは絶対守っちゃうよっ！？」

あれ？

この人いまだに僕のことを女だと勘違いしてる？

「・・・死ねば良いのに。」

「あれ！？なんか俺様変なこと言っただっ！？いきなり怨嗟の言葉が聞こえてくるよっ！？」

というかそろそろわかってよ!?

「それだけヒビキの容姿が男の子離れしていて可愛いんでしょう?」

「そうじゃろうな。」

「ですね。」

ははは。何を言ってるのやらこの人たちは。

あっちの世界じゃ間違われたことなんてないんだZEEっ!?

という言葉にはパジャマとして向こうの知識を持っているベリーが
応えた。

「普通にオカマとして見られていたのでは?もしくはその逆か。」

「ほわっつ?」

あれ?この子何言ってるの?

「その顔で男子の制服を着ているのを見ていれば、ご学友は間違えないでしょうけど・・・普通の人から見たらコスプレ、もしくは女になりたくて整形手術をした学生、男の格好をしてる女性。これらのどれかと思われていただけでしょう?」

私服の場合は男の格好が好きな女の子・・・ですかね?」

・・・まっさかー。

「というか、関西人ならともかく。

都会の人は他人への関心が薄いですからね。ないしは気になってもわざわざ”貴方は男?女?”とか聞かないでしょう?」

「た、確かにそうだけど・・・」

「・・・それと、”お茶しない？”とか”道に迷ってるの？”とか声をかけられたりしませんでしたか？」

「結構・・・というかなんかある。」

そういう声をかけられるたびに都会もまだまだ捨てたもんじゃないな、と思ったことがある。

フランクだなあ・・・とかわざわざ声をかけてくるなんて親切な人だとか思っていた。

いきなり何の話をしだすんだろう？

「それ、ナンパですね。」

「・・・なんーーーですとっ！？」

あ、ありえん・・・いや、確かに親切にしてはヤケにしつこくまとわりつくなあとか、聞いても無いことを語りだすし、なんか目の前でどっちが僕と遊ぶかなんてことを言い争い始めた人たちもいた。親切やフランクという言葉では説明がつかないとは思っていたけど。

な、ナンパだったからか？

普通は男が女を誘うところを男が男を誘う。これが噂の”逆ナン”というやつかっ！？

「違います。」

「ひうぐっ！？」

スパーンと張り線でツツコミをされた僕。

一体どこから、というか特にボケてないよっ！？

「ハリセンって意外と痛い・・・というか、僕なんらボケてないよ？」

「はぁ・・・自覚が無いんですね。」

何の自覚!?

「話を戻しましょうか。」

とにかく、マスターは非常に女の子らしいです。

マスターが認めずとも、私が認めます。

保証します。保障しても良いです。」

・・・いやな保障です。

「結論を言えば、勘違いしてもしかたないってわけです。」

「ほ、本当にそうなの?」

「本当です。」

フェローとエンデもうんうんと頷いている。

ついでにここぞとばかりにセルシーもうんうんとーこちらは頷くのではなく、口で言っていた。

<いくら部外者がいるからと言って、私をずっとしまいこんでおくのは酷いと思うよ!!?>

というのは彼女(?)の後日談。

<こ、後日じゃないよ!!?今、今話してるじゃない!!?>

というのが彼女の最後の言葉だった。
彼女の行方を知るものはもういない。

<な、なんで行方不明者につ!!?>

いなくなっただはずのセルシーの声が頭に響いてくるっ!?

こ、これは僕が彼女を心の奥底では求めていたからだろうか？

もう彼女ほどの剣に出会えなくなると思うと確かに悲しいが・・・

もう終わっただっ!

彼女とはっ!!

僕はもう過去を振り返らないと決めたっ!!

<別れた恋人同士みたいなことを言い出し始めたっ!??>

「はい、これくらいで終わりね。今度のお相手は王都に付いてからということだ。」

<ちよ、ちよっとっ!??私の相手の仕方がひどくおざなりになってるよっ!??>

「仕方ないじゃないか。ほら、クルトさんはもう竜種を片付けたよ。うだからセルシーは黙っててね。」

<・・・ぜ、絶対、ひどい扱いに異議を申し立ててやるんだからっ!!!>

「はいはい。」

クルトが戻ってくると彼は片腕でトラック二台分はあろうかという大きな竜を引きずっていた。

剥ぎ取るのが面倒なのでこのまま引いていくと言う。

元々竜種の素材は内臓や肉、爪や牙はもちろん鱗の一つまで使えないものは無い。

分け前を約束に、シロに引かせることに。

一部はその場でシロのおやつと化した。

夕方頃。

王都”グランデ”に到着。

王都に入り、ゴルバさんとクルトと別れて（もちろんクルトからの分け前は受け取った）すぐにローブを目深に纏った人達に出くわして睨まれたが、とりあえずスルー。

睨まれる心あたりなんて微塵もないので、気のせいだろうと断じてローブの人達の脇をとり抜こうとしたら片方からいきなり抱きつかれるから驚いた。

「ひいあつ！？何っ！？」

「な、何者じゃ！？おぬしはっ！？」

「・・・殺しますか？」

「だ、誰！？」

ローブがはらりとめくれて、出てきた顔は知った顔だった。
この世界で始めてできた友達。

セリアだった。

第41節 再会を中国語で言ったらツアイチェン（後書き）

カメプロスと言うのは実際にある亀の餌です。

水の汚れと臭いを軽減するために開発された餌だそうで、響君のみならず、我が家の愛用飼料でもあります。

第42節 心配とストリップおばさん（前書き）

なんだこのタイトル？とこの程度でツッコんでは負けだぞ！

第42節 心配とストリップおばさん

「セリアっ!!」

無事についてて良かったよっ!」

これが僕の第一声である。

無事に戻れたようだなによりだ。

いきなり抱きつかれたのは予想外だったけど、そこまで懐かしんでくれていたということかな?

忘れられてなくて良かった。

少し思っていたことだったので、安心した。

「無事についてて良かったよ・・・じゃないですっ!!」

「ぐえっ!」?

セリアは抱きついた現状を利用して、そのままサバオリを決めてきた。

え!?

なんで怒ってるのっ!?

と、というか、胸が――胸が押し付けられて、あれだ。あれなのだ。

非常に気持ちいいような、居心地が悪いような。

とりあえず離れて欲しい。

背後から冷たい視線も感じるし。

「お嬢様・・・ここはいささか・・・」

という付き人らしき声。

良く見ると、リネティアさんだった。

上位竜種に襲われて、助けを求めていた人だ。

「リネティアさんもお久しぶりです。」

「・・・呼び捨てで良いと言わなかった？」

「そうだったね、ティア。」

「はい、久しぶり、ヒビキ君。」

それはそうと場所を移して良いかしら？

つもる話もあるでしょう？

護衛をする立場としても移動してくれると嬉しいわ。」

「う、うん、わかった。」

「では王城へ来てください。」

その方が遠慮なく怒れると言つものです。」

セリアが？

誰を？

怒ると？

「ヒビキを怒るに決まっています。」

H A H A H A。

一体何を言ってるんだ、ジョージ？

「誰ですか、ジョージって!？」

「いや、なんでもないです。」

なぜ、また彼女はここまで不機嫌なのだろうか？

「お友達の皆様も是非に来てください。」

ティアがそう言うと、エンデ達も当然だとばかりに胸を張る。

「お邪魔させてもらうかの。」

「言われるまでもなくマスターと一緒に。」

「・・・説明してもらうからね。」

フェローは面白そうに。

ベリーは努めて振舞うように。

エンデは不機嫌に。

三者三様のリアクションを見せてくれる。

微妙な空気になったのはどうしてだろう？

「通してください。」

「はっ！！」

王都グランデ、王城前、正門。

警備兵らしき人がセリアの一言でビシッと直立姿勢のまま了解の意をしめす。

先導されるまま、中へ。

案内されたのは客室である。

女性と男性で分けたらしく、僕は1人で客室とは思えない豪華さを誇る一室にいる。

いや、一人と一匹か。

シロを街の馬引きのところへ預けようとしたのだが、急ぎの話がセリアからあるみたいでその暇も与えられなかった。

一緒にいればいいとのこと。

まあ僕としては構わないんだけど、元の世界で言うなら家畜を自分が寝る部屋と同じ場所で飼うということである。

結構豪胆なことを言つてのけたのは、彼女の器が、よっぽど話したいことがあつたか。

どちらにせよ非常識なことなんだろう。

セリアの言葉を聞いたティアが呆れた表情をしていたし。

ちなみにセリアとティアはローブを着替えてくるとのこと。

お忍びでの城下町探索をしていた・・・ってところかな？

とか振り返っていたら、バックパックからいつのもように（？）声が上がった。

<ふふふ・・・私もいることを忘れて貰つては困るのよっ！！！>

毎度おなじみ（？）喋る剣。セルシーである。

たまには外に出たかろうと久々に出してあげた。

「そっぴやいたね。」

<最近・・・酷いよね。扱いが。>

いや、悪気は無いんだよ。

ついつい忘れてしまうのだ。

バックパックに突っ込んでたし、ここ最近はクルトとゴルバさんという第三者がいたし。

必然的にあまり喋れない。

武器として使うわけでもないからついつい忘れがちになる。

この声はファンタジー漫画によくある”頭に直接語りかけてくる”

とかではなく、剣の刀身が震えて大気を振動させて声を出しているため（こっちの方が凄いと思うのは僕だけじゃないだろう）他の人

にも聞こえてしまうのだ。

< まあいいわ・・・いつものことだし。 >

認めてしまうとこのまま影の薄いキャラが定着しちゃうよ？と思っただけ、言わないで置く。

世の中知らなくていいことなんてザラさ！うん！！

「ぐるる。」

< 慰めてくれるのね・・・私の気持ちを理解してくれるのはもはやあんただけなのよっ！・・・ぐすり。 >

シロは鼻先をこすりつけて「大丈夫大丈夫。私は忘れないからね。」
みたいなことを言ってる。ような顔だ。

「ん？」

外から足跡が聞こえる。

セリアかな。

「また黙っててくれる？」

< もう少し違う言い方はないの？苛められてる気分になるわ。 >

「悪かったよ・・・まあセリアなら構わないと思うけど、ここは王城だしね。王女様が見知らぬ人間を連れてきたとなると、どこで聞き耳をされてるか分かったもんじゃないし。」

< ここでこうして話してること自体、すでに手遅れな気もするけどいいのね。 >

まあそれはそうだけでも。

今更ながら結界を掛けてから喋ればよかったと後悔。

いざとなれば独り言をついつい喋ってしまうイタイ子としてデビュー

ーを飾ればいいかな？

いや、そんなアホな言い訳通用しないだろうし、元々そこまで秘密にする理由もないしまあよしとしよう。

セルシーをバックパックにしまい直したところでセリアが入ってくる。

ティアはいないようだ。

護衛役がない状態は信用されてるってことかな？

それとも国王の下には子供が沢山いて、あまり重要視されていないポジションだとか？

第13位王女とか？

「さっそくですけど、なぜ私が怒ってるか分かっていますか？」

「わかりません。」

セリアの疑問に即答する。

本当に分からないのだから仕方が無い。

「アースヘッド・・・これで分かりますか？」

「・・・えーつと？」

アースヘッドと言えば懐かしい。

先も言ったように（思ったように）ティアをピンチに陥れた上位竜種の名前がそれだったはずだ。

忘れもしない。

忘れられない。

なんせこの俺様を死の一手手前まで追い詰めた強者の名だかな！ふふふっ！！

とバトルジャンキーてきなことを言ってみたものの。

実際は二度と会いたくないです。

普通に致命傷だったし、今更ながらに生きていることに感慨深い思

いを抱かされる。

次に会うことがあつたら、少なくとも軽く身がすくむくらいには怖い。

「ティアを助けるために上位竜種に立ち向かったことを私は怒ってるんです。」

というか、なぜまたセリアは知ってるのかな？

てつきり知らされる必要の無いことだと思ってたのに。

わざわざ知らせて無駄に不安を煽る・・・というのは護衛兼友達というリネティア、ベリルの2人から見ればあまり必要性の無いことだと思うけど。

僕には知る由も無いことだったが、セリアはティアから聞いたそうだな。

あの時、ティアがベリルから聞いたのは「勇者として召喚されたけど、西大陸に組する者じゃない人間が助けに行く」といった概論のみ。

ベリルから聞いたのは僕がどんな人物か？警戒はしなくていい、というだけだそうで、セリアと僕に面識があるとは思わなかったらしい。

そしてティアが「あの人がうんぬん助けてくれた」とその時のこと、僕の名前を言ってしまったことも相まって無駄に心配をかけることになったみたい。

僕の「勇者の力があるから先に行け」みたいな死亡フラグをたてるであろうカッコいいセリフを聞いてティアはセリア達とロロリエで待つことを考えていたそうだけど、セリアから僕は勇者の才能が無く捨てられたという話を聞くと同時に、先にここグランデへ戻ることにしたそうなの。

死ぬ可能性が高いから。

少なからず急いでたらしいから、生きて帰ってくるか分からない相手を待つわけには行かなかったんだろぅね。
当然と言える選択だ。

実際、フェローがいなかったら死んでたし。

「聞いてるのですかっ!？」

「ご、ごめんなさいっ!？」

つまりだ。

彼女が怒ってる理由とは、無謀にカツコつけといて人に心配かけてんじゃないねゴラアと言うことなのだろう。

そりゃ、付き合いは短いかもしれないが見知った人間が死ぬかもしれない阿呆な行動にでるとなれば心配の一つや二つするよね。

後日ベリルとティアから聞いたことだが、セリアが助けに行くと行ってベリルとティアの制止を聞かないためにセリアを気絶させて東大陸に向かうことになったとのこと。

アスタナシアの森を抜けるしか無かったらろぅから、大変だったろぅ。

王城に戻ってからと言うものの、王城を出るまでは優しさと明るさで評判だった王女の姿は見る影もなく。

泣く、とまでは行かなかったが大層気落ちしていたとのこと。

そんなところに僕がひょっこり現れたらね。

誰だって抱きつくくらいはしますよね。

普通なら気持ち悪い男同士だったとしても多分、抱擁を交わすかも知れない。

申し訳ないことしました、本当に。

「――というわけでして・・・聞いてますかっ!？」

「ひゃ、ひゃいつ!？」

す、すいませんでしたっ!！」

そしてザ・説教タイムへ直行中の今現在。

心配してくれていたのは嬉しいけれど、コレには少々うんざりだ。セリアが将来、家庭を持ったら旦那さんは尻にしかれそうである。

「・・・。」

「な、何？」

いきなり言葉を止めて、じっと見つめるセリア。
照れるじゃないか・・・。

おい、や、やめろよおジョージ。

「だから、ジョージって誰ですか・・・はあ。
人の気も知らないで・・・。」

もうこれ以上は無駄だと分かったのか？

僕が反省してないように見えたのか？

いや、真面目に聞いていましたとも。

しかしですね。

徐々に似たような内容になっていき、後半は同じことを繰り返して
つてるような説教になってくるところからしてもうんざりするとい
いますか？

飽き飽きしてくるといいますか？

正直、本当ごめんなさい。

と思う反面、ここまで心配してくれる友達が出来たことが嬉しくて嬉しくて、ついニヤけてしまうのは仕方がないと言えよう。

冬香もこのくらいわかりやすかったらなあ・・・彼女ってまあ分かりづらいから困る。

冷淡と言うか、希薄と言うか。

とにかくそんな理由でニヤけているのであって、決して反省してないわけじゃないことを言っておこう。

そもそもこんな無茶はもうしないだろうし。

あれは僕の力なら最低でも逃げるくらいできるだろうと思ったから請け負っただけであり、死ぬような怪我を負うとは思ってなかったからだ。

お人よしではない僕としては命を掛けてまで誰かを助けようとは思わんっ！！多分。

「・・・本当に心配したんですからね。」

「ごめんなさい。」

とりあえずへりくだって謝ります。

心配ってかけられるほうはともかく心配するほうはシャレではないんだよね。

久しぶりに姉さんの話をするとしよう。

あれは姉さんに稽古をつけられ始めて間もない頃。

真剣をまだ使ってないくらいのときだった。

このときから、姉さんの武者修行旅行が始まった。

ふらふらと出かけてく姉さんを見ては「どこにいくんだろ？」と子供心そのままに疑問を抱いた物だったけど、今思うと知らなくて良かったことだった。

まあそれは関係ないのだ。

当時、近所では”ストリップおばさん”という奇怪な生き物・・・奇妙奇天烈な生き物が残存していた。どこから発生したのか？どこから出没するのか？もしくはメルヘン的な世界から唐突にやってきた侵略者なのか？まあそれはどうでもいい。

このストリップおばさんだが、これはおばさん自身がストリップするという露出狂ということではなく、道行く人を包丁で”服のみ”を切り裂いて強制ストリップさせるといふ迷惑極まりない、超絶阿呆的犯罪者のことを指す俗称であった。

このおばさんはシヨタコンだったようで近所の小学生の男の子が主なターゲットとなっており、僕もターゲットの1人になりそうだったのだ。

それはたまたま姉さんとの買い物帰り。

軽く薄暗くなっているけど、姉さんの強さは子供ながらに理解していたためまるで怖くなかった。

そんな時、目の前にそのストリップおばさんが現れたのである。

「ほうほう・・・これはこれは女の子のように見えるが・・・男の子の・・・可愛い可愛いぞうさんの臭いがするぞお」

と僕を睨みながら不気味にのたまうストリップおばさん。

長いのでストさんとする。

というか、生粋の変態である。

「だがしかし・・・ふむ。ウサギだと思って狩りに出てみれば・・・厄介な物を引き当てた物だ。」

とぼやくストさん。

僕の隣には警戒心バリバリの姉さんが。
どこからだしたのやら、木刀を携えている。

「が、難しい狩りほど萌え滾るというものよ。」

こいつは生粋の変態であり、類を見ないバカじゃないかとの時点で思った。
発言があまりにもあほ過ぎて恐怖よりも呆れが強かったことも覚えている。

「弟に何か用ですか？」

「いえ、何。
ストリップさせようと思ってね。」

その返事は明らかに無い。

というか子供の僕にはツツコメなかった。
あまりにもツツコミどころが多過ぎて。

というか、凄くアホらしい。

が、姉さんはあくまでも真剣な表情と構えを崩さない。
というか始めて見る真剣さだった。

「さあ脱がそうか。」

というストさんの開始の合図が聞こえた瞬間にギヤギャンと金属がすりあうような音が聞こえ（打ち合うにしても姉さんは木刀のはずなのに）、次の瞬間には姉さんが肩膝を付いていた。
あのときの僕の技量ではまず捕らえられなかった。

後にも先にも姉さんを心配したのはこのときだけである。

このときの僕の不安振りときたら。

始めて姉さんが膝を付いたのもそうだけど、脂汗を垂らして必死な表情の姉を見た瞬間に姉さんが殺されてしまうかもという心配で胸が押し潰れそうになって・・・今まで無敵だと思ってた姉さんへの幻想も一緒に打ち砕かれた。そして僕がした行動といえば姉さんの前に出て、結果姉さんを守るけなげな弟という構図が出来上がった。

まあこのときの心配と似たような物なのだろう。
セリア、ごめんね。

・・・ちなみに。

僕の姿を見たストさんは「強くなれ、少年」と場面が場面なら少年漫画の見せ場ともなる名台詞を吐いた後にどこへとなく消えたのだが、状況的にも会話の流れ的にもわけが分からないし、尚一層「こいつバカだ」という気持ちを強めただけだった。

ストさんの話はそれ以降出てこなかった。
それ以来。

あの街にこんな噂が出るようになった。

「妙齢の麗人と、なぞのおばさんが踊り狂うのは満月の夜」と。

響く金属音は打楽器顔負けの音の旋律となり、舞う血風は踊り舞う舞姫を飾る化粧となり、高らかに響く笑い声は天使をも魅了する歌声だと言う。

僕は何も知らない。
知ってたまるものかっ！！

第42節 心配とストリップおばさん（後書き）

反省はした。

しかし、後悔はしてない！

久々に姉のお話。

第43節 王族

いきなりでなんですけど。

僕は今謁見室にて王様と面談している。

いや、大した理由は無いんだよ。

どうしてもセリアが恩を返したいとか言うからね、まあ受け取らない理由も特に無いし。

西大陸にいるときはわざわざ礼を受け取りに東まで行く理由が無かったのとお金くらい余裕で稼げると思ってたから別に良いと思ってただけ、まあそこまで言うならね。

「か、かかか、体を求めるというのならその・・・いや、今すぐは無理ですけど、その、心の準備が出来た後なら・・・」みたいなことをセリアは言ってたけどそれは遠慮した。

別に好きでもないのにそこまでしなくていいって言ったら、不機嫌になられたけどまあこれまた良しとする。

大方、女性としての自身？プライド？といったものからくるものだろう。

ぼそりとセルシーがくにぶちん極まりないことに絶望したっ！>とか言ってたけど、ここまで分かっている僕を相手に鈍いなどと良くも言えたものだ。

この紳士っぷりが分からないとは。所詮しがない剣だっということかな。

<・・・それでいいや、もう。>

というセルシーのぼやきは聞こえなかった。

で、話を戻すけどその礼を受け取るべく王様に会ってもらわないと

いけないそうな。

娘を救ってくれた青年に是非とも直接礼がしたいとのこと。
なんでこんな面倒なことを。個人的に凄く会いたくない。王様って
なんか偉そうでちょっとしたことでも打ち首というイメージがある。
王様の前での礼儀なんて知るわけも無し。

と思わないでもないけど、セリアの父親がどんな人が知りたいとい
うのもあったのでこれはこれで。

例えるなら授業参観に来た友達の親がどんな顔をしてるか気になる
というあの感じ。

そして目の前の王様ときたらすごい眼力である。

三白眼ってやつかな？

こつちをすんごい睨みつけてくるような印象を受ける。

髪はセリアと同じ銀色。

その隣でほんわか笑みを浮かべてる王妃様は大層、綺麗でスタイル
も良い。

髪は目に優しい感じのピンクだった。

その背後にはセリア含めて三人の娘達が控えている。

王様ときたら一夫多妻。

娘も沢山いると勝手に思ってたけど、三人以外にはいないのかな？
それとも三人は腹違いの姉妹？

そして周りには王様達の側近護衛と思われる数十人の兵士。

顔やら腕やらにいくつもの傷跡があって、顔もいかつい人が多く、
ちょっと怖い。

「それで、君が娘を救ってくれたと言うヒビキ殿ですか？」

見た目と反して丁寧な言葉使いである王様。

「は、はい、成り行き上たまたま・・・。」

成り行き上なんてことをいちいち言わなくても良かったかと思ったけど、言ってしまったからには仕方が無い。
特別な反応はなく、王様は話を進めた。

「渋々という感じですな。のわりには、我が娘が懇意にしている臣下を進んで助けていただいたようだが。」

ティアのことかな？

「それも成り行き上・・・ですか？」

「いや、私に聞かれても困るよ。」

「で、ですよね。」

それを聞いてほほえましい物を見るかのように笑う王妃様。

セリア姉らしき人も軽く噴出したようだ。

セリア妹はこちらを見ていない。なんだか良く分からないけど嫌われてるのか？

顔には嫌悪感が見て取れる。

兵士達は嘲りを含んだ笑み。

本当にこんなヤツが上位竜種を倒す、ないしは竜種から逃げる事ができたのか？と思っているのだろう。

どうぞ見てくびってください。

下手に実力を出して警戒されるなんてごめんだからね。

こつちの世界に来た直後も身のこなしではれないように隠していたんだけど、ギルドにいたティリアさん

には即刻ばれたっけ。

今更だけど本当にあの人は何者だろうか？

フェローの知人みたいだから悪者ではないんだろうけどさ。

「まあ良い。して、君は何を求める？
出来る限りのことはしよう。」

見定めるような目で問いかけてくる三白眼の王。三白眼王と呼ばう。
こう呼ぶと三白眼の人間をまとめてる王みたいだ。
少し考える。

お金・・・はギルドミッションで稼ぐ予定である。
魔術と奇跡の練習も兼ねているからお金があるうとなかるうとやる
つもりだ。

となればお金でないほうが良い。
かといってこの世界で欲しい物なんて食べ物とお金くらいで、漫画
やゲームなんてものがあるはずもなし。
鳥獣戯画的なものならあるのかな？

あれって確か、最古の漫画・・・みたいなことを言われてた気がする。
る。

刀・・・なんてものも無いだろうな。多分。
そもそも右手の力で刀が生えてくるし。
少し黙考。

これで良いか。
うん。

「名前を教えてくださいますか？」
「・・・は？」

ぶっちゃけ、心中とは言えど三白眼王と呼ぶのは語呂が悪い。
文字数も多い。(漢字の読みとして)

出来ればジンとかトーマスとか短い名前であることを祈ってこんな
ことを聞いた。

その程度の理由であり、他に理由は無い。

王都と言う地にいるにも関わらず、その王都を治める人間の名を知らない。

民主主義ならばともかく、この世界は王政だからして結構な不敬罪
にあたるのではないか？

しかもそれを本人に聞くと言う暴挙。

要はそれを許してもらうことを礼ということにしたい。と暗に言っている。

周りの兵士達にもざわめきが広がる。

王様はもちろん王妃様も少し呆けて、セリア姉はぷつと噴出し(またか)、妹のほうは始めて僕と目を合わせる。

セリアは頭を抱えていた。口の動きから察するに「ばかです」と言っているように見える。

こゝここまで驚かれることだとは思ってなかったよ・・・うん。

もしかして僕って結構やばい？

やばいことやらかしちゃったっ!？

でも仕方ないじゃん!!

もともと異世界人の上に西大陸にいたんだ・・・もの・・・？

あれ？下手したら東大陸の人間じゃないってバレんじゃない？

多分、僕が勇者として召喚されたとまでは言っていないはず。

戦争中の上に勇者は東大陸の人間の頭を悩ませる種だろうから。

多分だけど、西大陸に潜入してまで世界を見て回る酔狂な東大陸人・

・・・みたいな感じに伝わってると思う。

でも東大陸の人間がその国の頂点である国王様の名前を知らぬはずが無い。

ひょっとしなくてもやらかしちゃったのか・・・な？

「くくく・・・はは・・・あはははははははははは！！」

うおっ！？

突然笑い出した三白眼王様。

あまりの怒りに一週回って喜びに変わったのだろうか？

「い、いや、失礼・・・くく、ふふ・・・」

「は、はあ・・・」

腹を抱えて苦しそうに笑いを抑える三白眼。

いや、もう王様って呼べば良くない？

別に三白眼つけなくてもいいじゃん？

三白眼王という表現にこだわる意味が無くないっ！？

今更そんなことに気づく僕。

というわけで、もう名前を知らなくて問題なしです。

いいですね。

やっぱり無かったことにしてください。

「す、すいません・・・えと、あれは、僕の故郷の冗談でして・・・なんちやってみたいな？」

「い、いや・・・くくく、くふ・・・よ、良い。良いよ。良いな。」

「は、はい？」

「す、すまない。そんなことを王である人間を目の前にして言ったと言う輩を今まで聞いたことがなくてな。」

や、やっぱり凄く失礼なことだったのか？
いつの間にか”ですます口調”も無くなっている。

「気にしなくて良い。娘と臣下の恩人だ。無礼などと口が裂けても
言えまいよ。」

私の名だが、私の名はバルムンク・メル・グランデ。
君の名を改めて聞いて良いか？」

「あ、はい！？」

えと・・・僕の名は山瀬 響。
響が名で、山瀬が氏です。」

「ふむ・・・珍しいな。ファミリーネームが前に来るのか。」

興味深げに頷くバルムンク王。

どちらにせよ名前は呼びづらかった。

心中ではバルっちと呼ぶことにした。

いや、やっぱり止めておこう。そんなことをしてバルっちなんてニ
ツクネームで間違っても呼べば今度こそ首が飛ぶかもしれないし。

「夫が名乗り出たのだから私も名乗り出なくてはなりませんね。」

王様の次は王妃様だと言わんばかりに王妃様は口を開く。

「私の名はフリーエ・メル・グランデ。この人の妻でもあるけど、
貴方と仲の良いセリアの母でもあります。よろしくね。」

にこりと笑いながら自己紹介する王妃様改めフリーエさんはとても
艶っぽく、色っぽく感じた。

もう少しすればセリアもこうなるのだろうか？

上手くいえないけど凄く”妻”って感じのする人だ。

将来的にはこんなお嫁さんが欲しい物だけど、難しいだろうな。

まずこの人レベルの女性に出会う機会がそうそう無いだろうから。あつたとしても相思相愛になる確率なんてどのくらいだろうか？

というか他の兵士さんたちの顔が怖い。

「テメー、何王妃様と気軽にいちやこら話してんだオラオラア」とか「調子のんなよボケガア」といわんばかりの視線を放ってくる。怖いと言っても、その辺の魔獣と比べれば赤子のようだが。

人相手は慣れてるのだ！

良くも悪くも姉さんのおかげでなあ！！

余談だけど、ドラ。エあたりでボケガアという名の呪文があつてもいいような気もする。

これで終わりかなと思っていると、娘達が前に出てきてなにやら名乗り出した。

セリアはともかく他2人にまで聞いたつもりはないんだけど？
ていうか知らなくて良いです。

名前を覚えるのは苦手なんだから・・・王様と王妃様の分で一杯一杯だもの。

「レヴァ・メル・グランデです。以後よろしく願いしますね？
白馬の王子様。」

セリア姉がそう名乗る。

白馬の王子様？

「ふふふ。セリアがあなたのことをー」

「ね、姉さまっ！？」

そ、それは言っではいけないことだと思いますっ！！

「あら？どうして？」

「い、いや・・・恥ずかしいですから・・・」

「別に恥ずかしいことではないわ。殿方を慕うという行為に恥ずか

しいことなど何も無いのよ?」

「べ、別にっ!？」

「・・・は、恥ずかしいというわけでは・・・」

「恥ずかしいのか恥ずかしくないのか、どっちなのよ・・・それに顔を真っ赤にして言っても説得力が無いわ?」

「ね、姉さまの意地悪。」

レヴァさんから、ぷいとそっぽを向くセリア。
ちょうど僕のほうへ向いて、目が合う。

「ち、違いますからねっ!？」

「な、何が?」

いきなり何を言ってるの?

「こ、こほん。」

改めまして。

私のフルネームはセリア・メル・グランデと言います。

その・・・今まで隠しててごめんなさい。」

「別に気にしてないよ。」

隠さなきゃいけない事情があったんでしょ?」

まあ、やんごとない身分だったのはバレバレでしたけど。

「そういつて貰えると嬉しいです。」

「そんなことで嫌われたら困るものね。」

「ね、ねね姉さまっ!？」

な、何を言ってるのかわかりません!!」

「あら?私は貴方を応援するつもりよ?多分母様も。」

よく分からないけど、応援するという言葉を聞いたのか母様もとい、フリーエ王妃が親指をグツと立ててにこやかに笑っている。意外とフランク？

そして最後、僕と最後しか目を合わせなかった三女、セリア妹。今現在も不機嫌そうに横を向いて僕と目を合わせようとしない。僕は初対面のはずなんだけど。

「レイフォン・メル・グランデ。」

・・・それだけ？

よろしく程度はあってもいいんじゃないかな？
子供好きの僕としては10歳くらいの女の子にワケもなく嫌われるのは堪えた。

ちなみにレヴァさんは20くらいに見える。

「だ、ダメですよっ！？レイー！！

この人は私の恩人です。いくら男の人が嫌いだからと言って・・・」

「い、いいよセリア・・・様。」

一応、王族だから様付けで。

すくなくとも王様の前だしさ。

「ですけど・・・さ、様？」

「うん。男嫌いなら嫌いで無理にはね。・・・様は呼び捨てはま
ずいかなと思つて・・・問題ないでしょ？」

「ええ、別にないですけど・・・」

「けど？」

「他人行儀で好きじゃないです。」

「い、いやでも・・・」

「私からもお願いできる？」

白馬の王子様。」

白馬の王子様は止めて欲しいです、レヴァさん。

「私としては構わんよ。王族だからとそこまで特別視する必要はない。」

とバルムンク王。

嬉しいような悲しいような複雑な表情をしてるが、何かあったのか？
対するように王妃はヤケに幸せそうだ。
幸せそうにフリーエ王妃は言った。

「私も構いませんよ。普段からそう呼んでいるのなら別ですけど。」

王様と王妃様に許可してもらえんなら別にいいかな。

「分かったよ、セリア。これでいい？」

「は、はい！」

たかだ呼び捨てでここまで満面の笑みを見せてくれるなんて・・・
女の子は良く分からないな？

後日ベリーやフェロー、エンデに「普通にため口のくせに今更何を
言ってたんだ？バカだろテメー」的なことを言われたのは言うまでも
無い。

そして、結局礼としては不十分だと言うことで、せめて王城に泊ま
っていけという好意を素直に受け取り、現在は先ほどの一室に戻っ
ている。

しばらくシロとじゃれていたけどー白竜は東大陸でも珍しく、
ずいぶん騒がれた。特にメイドさんたちーそれも飽きてきたの
で、エンデたちの部屋を訪ねることに。

近くのメイドさんに場所を尋ねーメイドさんがシロを抱きしめ
て恍惚とした表情をしてたー案内された部屋をノック。

「なんじゃ？」

「なんじゃとはご挨拶だね、フェロー。」

ドアから出てきたのはフェロー。

「他の2人は？」

「一緒に風呂じゃ。」

部屋に備え付けられてるとはさすが王城といったところかのう。」

そ、そうなのか？

広い家ならどこもどうだと思ってた。

ちなみにこの王城には大きな共同風呂もあるらしく、執事やメイド
さん、兵士はそちらに行くらしい。

「ところで・・・なぜ来たのじゃ？」

また覗くのか？」

「の、覗かないよっ！？」

何を言い出すのこの人は！？

人じゃないけどっ！

「なんじゃ、つまらん。」

「・・・もう勘弁だよ。」

また面倒なことになる。」

ベリーはともかくエンデに無視されたくは無い。

前回は恥ずかしかったとのことだが、今度こそは愛想付かされるかもしれないし。

「別に嫌がることはまず無いじやろうが・・・」

「はっ！何を言ってるのさフェロー！！」

女の子なのに乙女心がわかってないね！！」

「たわけが。」

「ぶはっ！？」

久々のビンタ！？

なおかつ魔力入り。

超痛いっ！？

「おぬしだけには言われとう無いわ。」

「・・・ご、ごべんなさい。」

え？なんで？

僕って結構わかってるほうだと思っよ？

男にしては。

「ふむ。」

ちょうど良いし、あやつらが風呂から上がるまで少し詳しい話をしておこうか？」

「ん？」

何の詳しい話？」

「精霊契約のことじゃ。」

簡単な話しかしてなかったじゃろ？

といつても特に難しい話をするつもりは無い。

これまた簡単なメリット、デメリットについて話すだけじゃ。」

「ふうん。もちろん聞くよ。」

「うむ。」

といつて聞いたのはホントに簡単だった。

精霊契約のメリットは以下の通り。

身体能力の上昇、治癒力の大幅な増進、契約した精霊の魔力と霊力が扱える、寿命が平均化（高位精霊の

寿命は500年。日本人の平均寿命は70〜80年。合計580年分だとしてざつと300年生きることになる。高位精霊の寿命を契約相手に分け与えるということ）、魔術と奇跡の才能が少し添加される、老化防止。

以上6点。

デメリットは精霊と契約した者本来の魔力ないしは霊力が使えなくなることで、契約した精霊が死ねば自身も死ぬと言う連動性。

これは単に寿命が延びてるのが精霊の魔力、霊力の恩恵のため、人間の歳が人間本来の寿命を過ぎていくところという結果となる。

またどちらかが死ぬまで契約が解消されることは無く、やり直しが効かないという点。

ふむふむ。

メリットのほうが大きいね。

寿命の部分で少し戸惑ったけどまあ300年くらいなんてことは無いだろう。

歳を取れば時間は早く過ぎるというし。

ちなみにセルシウスキャリバーことセルシーによる擬似精霊契約はデメリットが無い代わりにメリット部分が肌身離さず持つてる間のみという限定的な条件があるために擬似と呼んでるみたい。

ついでに軽く中級魔法のいくつかと上級魔法を一つ、二つ習ってなかなか風呂から上がってこないエンデとベリーに明日またくるとの言伝をフェローに頼んで、今日は寝ることにした。

追伸

メイドさんが夕食を部屋に運んできてくれたのだけど、なかなか美味だった。

エンデには劣るものだったけど。

エンデの料理の凄さが改めて分かったものである。

第44節 勘違いスパイラル

僕が王城に来て次の日。

エンデは王城限定料理をメイドさんに習いに行き、ベリーは武器屋を見てくると言って朝早くに部屋を出た。セルシーも置いてきた。昨日の一件以来シロに懷いてしまったからだ。

<もう少しシロで癒されたいのっ！この荒んだ私の心を癒せる存在はシロ以外に存在しないわっ！！>とはセルシーの談。

よってフェローと一緒にこの街の冒険者ギルドチエスに行くことにした。いわずもがな、ティリアさんが居る。

「おはようございます、ティリアさん。」

「もう驚かなくなっちゃったのね・・・残念だわ。」

本当に残念そうにするティリアさん。

「ふん、乳魔人のやることなんぞ、とうの昔にパターン化されて今頃教科書に載っておるわ！」

「そこまでなのっ!？」

「それは具体的にどこの教科書なんだよ・・・？」

「農家に決まっておるじゃろ？」

何を今更？みたいな顔で僕を見てくるフェロー。

「いや、初耳なんだけど？」

「今言ったからの。」

「あなた以上に生きてる私も初耳なんだけど？」

「そうか。よほど引きこもっていたのじゃな。このヒッキーめ。」

おぬしのような牛乳娘うしぢぢむすめは牛のように農家で管理されておればよいの

じゃっ!!」

「それは貴方じゃないのっ!? 5000年以上のヒキリストのくせしてっ!!」

「ひきりすとつて!?!」

ヒキリストつて何っ!?

「響君、ヒキリストつてのは簡単な話・・・ニートよ。いえ、ニートよりも酷いわ。」

軽度の物から言えば、引きこもり、ヒッキー、ヒキラー、ニート、ねおニート、ヒキリストがあつて、このうちの最悪のものを言うのよ。」

「おぬし・・・ひきりすとをバカにしおつたな? ひきりすとの誇りを馬鹿にしおつたなっ!?!」

ヒキリストの誇りつて何っ!?

引きこもりに誇りもクソもないでしょっ!?!

「ひきりすとは引きこもることのみに命を掛けた誇り高き戦士達に与えられる称号。」

それをニートや引きこもりなどと同じくするとは・・・万死に値する。」

その乳っ!!ちぎつてくれるわっ!!」

フェローは何を言つてらっしやるっ!?!

というか、もっと別のことに命掛けるよっ!?!

ヒキリストの皆さんっ!!

そして、なにげに最後の一言に集約されている気がするっ!?!

「これだから貧相な胸をもつおぼこい娘っ子はだめね。」

胸が貧相なら頭も貧相ってことかしら？」

全国のひんーごほん。

ひ、控えめな胸の人たちに謝ってくださいっ!?

それは偏見・・・ですらない、ただの暴論ですよっ!?

「な、何を言うかつ!?

妾よりも大きい女どもの乳を刈り取れば相対的に妾こそが一番の巨乳に・・・」

フェロー・・・お前ってやつは。

そんな虚しい願いを抱くほどのコンプレックスを・・・ぶがはっ!?

「な、なぜ・・・ビンタを？」

「声に出とつたわっ!?

阿呆がつ!!」

「じ、じーざっす・・・」

いい加減声に出す癖を直したい。

そのまま2人は取っ組み合いに入り、30分後。

お互いに服を髪を乱れさせて、はあはあと肩を上下させる2人。

よ、ようやく落ち着いたのかな?

周りの人は見て見ぬフリだった。

まあそれはそうだろう。

たとえ美女と美少女の2人組みだろうと鬼気迫る喧嘩の間に入るな
ど好んでする人間はまずいない。

もちろん僕も、いや、最初は止めようとしたんだけど無駄だったの
で止めた。

こういう時に自然と仲裁が出来る紳士になりたい。
神様に力を一つ与えられるとしたら仲裁の才能が欲しいと思った瞬間だった。

「見苦しいところを見せたわね。」

はははと苦笑しながら服を整えるティリアさん。
ええ、実に見苦しかったです。
フェローは未だにガンにらみである。
止めなさい、狂犬じゃあるまいに。

「魔術と奇跡の練習がしたいので、それに見合った相手・・・と言いますか？」

そんな感じのミッションはないですか？
あ、ここからあまり遠くないところで・・・徒歩で日帰りが出来る場所が望ましいです。」

「そうねえ・・・それじゃ、これはどうかしら？」

と言ってティリアさんが差し出してきたのは、
”魚^{ぎょ}崖^{がいりゆう}竜”の討伐とあつた。

「ぎょがいりゆう？」

「ええ。」

崖付近に巣食う特殊な繁殖形態を持つ魚竜ね。
竜としては中位。

ランクはビショップ？あたりだったかしら？
後で図鑑で確認しておいてね。」

「でもこの依頼書はルーククラスになってますけど？」

僕がそう言つと、ティリアさんは髪を手櫛ですきながら僕の疑問に

答えた。

「魚崖竜は特殊な繁殖形態・・・すなわち、同じく崖に巢食つ”桃色陸貝”の殻に卵を産み付けるの。」

卵が孵化するとこの桃色陸貝に寄生して幼体時代を過ごし、ある程度まで大きくなると宿主を食い破って外に出てくる。」

「なるほど・・・その桃色陸貝というのも同時に相手にしなくちゃならないと?」

「そうなるわね。」

桃色陸貝はタニシをそのまま桃色にして巨大化させた物・・・なんだけど、ちよつと獰猛だね。

魚崖竜自体は臭いなのか、フェロモンでも発してるのか?

不思議と襲われないんだけど、冒険者^{チエス}が魚崖竜を相手する場合は自然とそいつらも相手にしなくちゃなくなる。

もちろんこの桃色陸貝は一体一体がせいぜいナイト?あたりなんだけど・・・これが10匹以上の群れで襲ってくるから、魚崖竜と含めてこのランクってワケ。」

「ルーククラスだけど、貴方なら何も問題ないはずよ?」

「ええ、これにします。」

「分かったわ、がんばってね?」

「はい。」

「ふん、ヒビキにかかれば造作も無いのう。もっと手ごたえのある依頼をよこせば良いものを・・・乳魔人め。」

というフェローの言葉を華麗に無視するティリアさん。

大人気ないよ・・・フェロー。

見せてもらった依頼書をティリアさんに返そうとしたとき、その依

頼書を乱暴にひったくる手が横からぬつと出てきた。

「っ!？」

「おいおいっ!？」

坊主みたいなちんちくりんがこのレベルの依頼は無理だつてのっ!」

横から出てきた手の持ち主は髭面の、やけにゴツイおっさんだった。でかい斧を背負ってるのが特徴的だ。

その背後にも仲間と思わしき男達が数名。

「別に貴方に無理かどうかを判断してもらっ必要はないと思います。」

「

取り返そうとしたが斧のおっさんは依頼書を持つ手を上げた。

それでは身長の高い僕には届かない。

「この依頼は俺達が受けてやるよ、坊主。」

「僕が受けようとしてたんですけど・・・」

「坊主のクラスはナンだ？」

なんというか、分かりやすい視線を向けてくれるおっさんである。

「ナイト。」

「ぶわはははっ!」

な、ナイトでこのクラスの依頼を受けようってかつ!？」

連れは見たところそっちのちっこい嬢ちゃんだけみたいだが・・・無謀にもほどがあるぜっ!」

「だから・・・貴方にそれを判断してもらっ必要は無いと言ってるでしょうに。」

というか、それ以上挑発しないで欲しい。
キレてしまいそうだ。僕が、ではないよ？
紳士はそう簡単に怒りません。

隣にいるフェローが今にも暴発しそうなのだ。
フェローから殺気とも魔力とも霊力ともつかぬ、オーラが迸っている。

なんにせよ不愉快に思ってるのは間違いない。
頼むからこんなところで魔法をぶつ放さないでよ！？

「ん？良く見たら・・・お前？
女か？男装するにしてももう少しやりようがあるだろうに・・・」

斧のおっさん背後にいたローブを着込んだ男が言う。
そ、そこまで僕は女に見えるっていうのか・・・？
怒りよりも、悲しさがこみ上げてくる。
ま、まだ、な、泣いてないんだからねっ！？

「おいおい・・・瞳が潤んでるぞっ！？」
この程度で泣くようなやつがこの依頼は無理だつてのっ！？」
「泣かすなよな、ラルク？」
「まるで俺達が可憐な少女達に絡むゴロツキみたいじゃねえか？」
「お前はそうだろうが、ダイア。」
「ひ、ひでえっ！？」
「ちげえねえっ！」

勘違いで、あはははははと三人で笑いあう男達。
誰がラルクで、誰がダイアかは特に注視してなかったので分からないけど・・・というかやはり男装にしか見えないことにシヨックを

受けていてそれどころじゃないのだが、とにかくここで譲ると言うのはソレでこそ男が廃ると言うもの。

見た目はともかく、魂は男性的な何か？でありたいっ！！
というわけで反撃といこう。

「それで？」

口ばかり達者なオジサマ方のランクは？」

「ああん？言うじゃないか・・・それにしても。

俺達のことを知らないのか！？」

こりやとんだモグリもいたもんだっ！！」

知らんがな、あんたらみたいなお小物臭全開の奴ら。

大物臭のする香水を売ってやろうか？なんなら。

持つてないけどさ。

「俺達はルークさ。

それももう少しでビショップ入りのな。」

「そうですか。」

だからなんだ？という感じだ。

それが僕が受けるはずだった依頼を横取りする理由にはならない。
というか、その程度のレベルで知れ渡るレベルに達するのかな？

「で、それがなぜにまた依頼の横取りの理由になるのです？」

「先輩からの親切心ってヤツだよ？」

身の丈にあった依頼を受けろっていう。な。」

「そのまま貴方達に返します。

というか、先輩面しないでください、滑稽に映ります。」

「ナンだとっ！？」

斧のおっさんが掴みかかろうとするが、それをローブの男が止めた。意外と冷静な人がいるもんだ。ギルド内で騒ぎを起こせば、下手をすればギルドカードの剥奪もありえる。

ちなみに周りにいるギルド職員はあらら？という感じ。冒険者達チエスは我関せずの態度。

自分達でどうにかしてくれという感じた。

ティリアさんはいつのまにか湯飲みを持ってきてそれでお茶をすすっている。

楽しそうに。

「まあまあ待てよ、ハルド。」

「ここは俺達が人生つてもんを教えてやろうぜ？」

「・・・ほう？なるほど。」

おい、嬢ちゃん？ちよつと外へ出な。」

どうして？と聞くだけ野暮なんだろうな。

「嫌です、面倒くさい。」

「はっ、ビビってるのか？」

「まさか、虫けら相手にビビるワケが無い。」

「ゴキブリだってへっちゃらな僕ですから。」

「・・・い、言ってくれるな・・・ああん？」

青筋を立てて今にも殴りかかってきそうな斧のおっさん。

「あなたは周りを飛び回る羽虫をいちいち潰して回るんですか？
大抵は無視しますよね？

相手をしてもらえらると思ってる段階で付け上がりすぎです。
調子のんな、バカ。」

ぶちつと音が聞こえた気がした。

それと同時に男の拳が僕の顔面に迫る。

どうしようと考えて、とりあえず腕を一本、斬り捨てようと思った
ときに最後の1人、軽装の男が斧のおっさんを止め耳元でこによこ
によと。

そのままおっさん達は舌打ちをしてギルドから出て行った。

これが現世界版クレーマーというヤツかな？
いやそれとはまた違うか。

「ティリアさんも見てばかりじゃなくて少しは助けて欲しかったで
す。」

「助けがいるような君じゃないでしょ？」

「当然じゃっ！！」

あのようなゴミムシドモっ！！響にかかれば瞬殺なのじゃからなっ
！！」

そういうことを言ってるんじゃないんだけどね・・・フェローさん
よ。

というか、フェローが返事を言っでどうする。

そのとおりだけどさ。

結局、依頼を受けたのは僕達である。

依頼を受け、王都グランデから東に抜けたところの森に件の魚崖竜がいる崖はあった。

別名、ワーゴブリンの森と言ってワーゴブリンが多く出る森だそう
な。

実際ここまで何回か遭遇したが襲ってくると言っことは無かった。
ワーゴブリンはゴブリンの中でも知性が高く、警戒心が高いのが特
徴らしい。

大きさは通常のゴブリンの倍。

人間に害すると、自分達が狩られるということを理解してるらしく
滅多なことでは人を襲わない。

自分達の集落を守るか、自衛の時のみ牙を向くということとで基本的
に討伐の対象外になることが多いらしい。

戦闘力例えば一匹一匹がナイト？クラスであるが、その習性から
ポーン？まで格下げされてる魔獣とのこと。

個人的には共存すらもできそうな気がする。

身振り手振りで崖のある方を聞くと、ワーゴブリンが戸惑いながら
も道を教えてくれた。

言葉での意思疎通も可能なんじゃないだろうか？

真面目に魔獣学者としての道も悪くないなと思うこのごろ。

気分良く崖への道に向かっていくと、まあ意外ーーーーというほど
でもない人物達がいた。

「なんか用？」

「ああ、じゃなきゃこんなところまでくると思ってるのか？」

斧のおっさん達である。

面倒な人たちだよ全く。

「で、どういうつもりなのじゃ？」

呆れて声も出ない僕の代わりにフェローが聞く。

フェローも怒りを通り越して呆れているようだ。

わざわざこんなところまで追ってくる位なものね。

「こういうつもりだよー!!」

と言ったのはロープの男。

魔力を練っていたので、そうじゃないかとは思ったが捕縛用の魔法が僕達に襲い掛かる。

水のロープと言ったところかな？

それでグルグル巻きにされる僕達。

正直、すごいわらしい。

「それで？」

僕達をどうしたいのさ？」

「くくくっ！」

強がってんじゃねえよ、男装少女が。

純潔を守るために男装していたって所だろうが・・・いかんせん、俺達にそれを無理やり奪われるとなったらお前はどんな顔を見せてくれるだろうな!？」

く、下らなすぎて男だと訂正する気も起きないんだけどっ!？」

「なに、怖がることはねえっ！

それでも俺は床上手で通って・・・がはあっ!？」

「下品な奴らにはオシオキキックでありますっ！」

とりあえず斧の男の股間を蹴りぬいた。

両腕を縛ったくらいで勝ち誇るとは、バカにもほどがある。

悶絶してる斧のおっさん。

うむ、その痛みは分かるぞよ。

分かるゆえにこうして蹴ったのだからな、はっはっはっ。

「お、おいっ!？だ、だいじょうぶかつ!？」

「くそつたれがつ！」

もっぱつ食らえっ! アクアバインドっ!！」

今度は足目掛けて拘束魔法を使うつもりだろうが、今こそフェローに教わった中級魔法を使うとき。

今まで使っていたのは全て下級。

(オリジナル魔術は除く)

「ヒートブレスッ！」

体から沸きあがる熱の奔流。

それが一気に水のロープを蒸発させた。

迫りくるバインドもなんのその。

触れた瞬間に蒸発。

ヒートブレスは体表面に熱波を発生させる魔法。

術者に影響は無く、本来は寒さを防ぐための奇跡だ。

（目の前の奴らは東大陸の人間のため、念のために奇跡を使用）
常に体表面を覆うと言う結構テクニカルな操作が必要なために中級
となってる奇跡だ。

本来は寒さを防ぐだけだが、フェロー譲りのバカ魔力を注げば、ほ
れこのとおりっ！！

触れた瞬間、全ての物体を熱し、熱分解する極悪アーマーの完成で
すよ！！

銃弾すら無効化できるんじゃないだろうか？
それは置いといて。

「ねえねえ、そういえば僕の純潔を奪うとか・・・言っただけどさ？
それって抱くってことだよね？」

ニヤリとしながら悪魔のささやきを呟く僕。

それを見てただただ”ひいひい”と悲鳴を上げるしかない悶絶男他二
名。

体から煙が上がり、ジュジュジュジュという不気味な音を発て
て男たちに迫る僕。

彼等からしたら、さながら炎の魔人が迫ってくるといったところか？
煙は単にコントロールが甘くて服が燃え始めてるだけだし、ジュジ
ュジュジュジュというのは足元の土や草が燃えてる音。
ただ、それがまた良い味が出てるのだろう。

「そんなに抱きたいなら抱かせてあげようホトトギス。（？）
うりゃさっ！！」

とりあえずローブの男のほうの右手に掴みかかる。
もちろん縮地で瞬時に距離を詰めて、だ。

「ぎいあああああああつ!？」

ジューーーーーッ!!と焼肉を焼くような音を発して炭化していくローブ男の右腕。

宣言どおり抱きつくつもりだったけど、おっさん相手に抱きつくのは嫌なので止めた。

そのままぼとりと落ちるローブの右腕。

う、腕があーーーーうでがあーーーーと叫ぶが、気にしない。

もう1人が逃げようとしたが、その行く手をフェローが阻む。

「どけっ!！」

と言って殴りかかる軽装男。

しかし、その腕がひしゃげると同時に赤い花を咲かせた。

「ぐぎゃあああああつ!？」

魔獣の断末魔以上に醜い叫び声を上げる軽装。

骨やら筋肉、脂肪が露出していてグロイ。

何をしたんだろう？

と思っただのは一瞬。

男の右腕には黒い紐のようなもの・・・いつぞやに上位竜種であるアースヘッドを縛ったあの魔法が巻きついてた。

アレなら膨大な魔力、霊力で操作が困難なフェローでも使えるようである。

「さて・・・どうしようか。」

殺すのもどうかと思う。

盗賊を殺した今としてはそこまで人殺しに忌避感はない。それでも気分の良いものでないのは確かである。特にこんな奴らを相手にするととなると。

でも、殺しておかないと危ない気もする。

それは今回の一件で十二分に分かる。

僕は右手をローブの男の首に持って行き、せめてもの慈悲だとばかりに一思いに焼き千切った。

フェローも似たような感じである。

斧の男も殺しておく。

「酷い面じゃのう?」

「・・・そうかな?」

「殺すときは淡々とこなすくせに、後になって罪悪感が首をもたげ始める・・・そんなところかの?」

「う、うん・・・まあね。」

盗賊を殺したときもなんだかんだで・・・微妙だったし。なんなんだか・・・この気持ちは。」

「まあそれも、じき慣れる。」

「・・・慣れるのもなんか嫌だけどね。」

「忘れなければ良いだけじゃ。」

何を、とは言わないフェローだった。

「さて、気を取りなして行きますかっ！」

魚崖竜はまさしく魚と竜を足して2で割ったような外観で、鰓^{えら}が無かったことから陸上生活に適応してるようだった。

魚としての特徴を持つからというのではなく、見た目から魚という名が付いたのだと思われる。

大きさは20メートルほど。

高さは5メートルほどあった。

桃色陸貝は殻直径1メートルと言う結構巨大な貝だった。

魔術と奇跡で倒すと言う”縛り”で戦ったため、結構でこずったけれども良い感じの練習になった。

第44節 勘違いスパイラル（後書き）

今回は次の話のための「入り」のような物です。

次の話含めて6つ？ほどサブイベント（？）を挟みつつ、本筋が進む予定。

第45節 グランデ護衛騎士団の青年A（前書き）

久々の更新。

ファンフィクションの方に力を入れてたために更新が・・・これからはこつちもボチボチ更新していきますよ！！

今回は主人公のデザイン画もあとがきに。

とーしろの絵なんざみてられっかっ！！という人やすでに主人公に対して頭の中でイメージが決まってるという方は見てもらわなくても大丈夫です。

第45節 グランデ護衛騎士団の青年A

色々予定外の出来事はあったけれど、ギルドミッション自体はなんら問題なく遂行できた僕。

ティリアさんに報告した後、ティリアさんは望んでも無いのにあの人たちのことを勝手に聞かせてきた。

「殺したのかしら？」

「ええ・・・つとまあ。」

「まずかったですか？」

「いいえ、別に。むしろ助かったくらいよ？」

彼等はこちら最近、もう少しでランクが上がるからって浮き足立ちやってね。

手っ取り早く上げたいからって自分の身の丈に合わないミッションばかり受けるように・・・」

「それで失敗続き・・・と？」

「そのとおり。」

果てにはやつても無いくせにやってきたっていつ偽装までし始めたから、どうしようかと思ってたところなのよ。別に罪悪感を感じる必要は無いわよ？

どうせ殺される予定だったから。」

殺される予定？

「ミッションの偽装はギルドでやってはいけないことの中で一番悪いことなの。」

最近ではその偽装ばかりをやってたし、他の冒険者チエスにも迷惑なことばかりやってたからね。

度が過ぎて、ギルドに始末依頼がくるくらいだったから・・・」

わざわざ殺してくれと依頼されるほどまで色々やってたのか。
予想以上にバカなやつらだったみたい。

「ちなみにだ・け・ど。偽装は現在のところ不可能とされてるわ。
倒した魔獣の数が分かると言う最新技術がギルドカードに組み込ま
れてるからね。」

「そ、そうなんですかつ！？」

「ええ。とはいっても人によっては実力を隠したいとかそういう事
情持ちの人もいるし、基本的にギルド職員以外には閲覧不可能にな
ってるけどね。」

そんな機能が付いてたとは初耳である。

「さて、それじゃあ、換金と依頼量を払うからこっちへ来てね。」

といって、別室に案内される僕達。

結局その日はそのまま城に帰宅して、寝ることとなった。

数日後。

僕は毎日、ギルドミッションをクリアしていく日々が続く。

セリアは同じ時間に必ず来て、ちよつと僕と話をして部屋を出て行
き、エンデはあいも変わらず王城の料理。もとい王宮料理とでも言
うのだろうか？

そのの会得に励んでいた。

最初のうちは毎日付いてきたフェローも面倒くさくなってきたのか、
1人部屋で昼寝することが多くなっていき、僕の手伝いは全くしな

くなってしまった。

本当にヒッキーと化す日も遠くないかもしれない。

ベリーはベリーで知らず知らずにどこかへと行ってしまっし、シロはシロで王城の牧場にて悠然と走っていた。

王族専用の馬車レーンとも言うべきか？

コースがあつて、そこで日夜王族の馬達と走り競ってるらしい。なかなか楽しい日々を過ごしているようで何より。

「おい、男女!!」

あとは誰だとなると必然的に1人と1つしか残らなくなる。

「さて、今日も行くのか？セルシー。」

<はいはいなのよ。

というか、もう私を隠さなくて良いわけ？>

「何を言ってるのさ。」

セルシーのせいじゃないか。」

<・・・まあ、そうだけどさ。>

一応、喋ることを隠していたのだが、シロと駄弁ってる所を偶然にもメイドさんに見られたらしく。

それ以来セルシーの存在は王城にて公の存在となってしまった。

念のためバルっち・・・じゃなかった。

バルムンク王に口止めをお願いしたけど、効果は全く無かったようだ。

ないしはすでに遅かったのか。

「おーいつ!!」

あれから盗賊的な輩や、コレクターみたいな人たちに言い寄られて困る。

中にはミッション中に襲い掛かってくるヤツもいたりして本当にうんざりするものである。

ていうか、周りがうるさいな。

誰だよ！？人の呼びかけを無視してる奴は！

さつきから大声を上げて呼んでる人が可哀想じゃないか！！
さっさと返事してやれば良いのに。

「それにしても・・・コレクターの人間は特にうざったい。」

「い、一応、反省はしてるよ！？>

「はいはい・・・いっそのこと誰かに渡すか売ってしまえば・・・」
「ちょ、ちよつとちよつとっ！？」

そういうのは冗談でも笑えないわよっ！？>

「実は本気だったりする。」

<ま、マジでっ！？>

「本気と書いてマジと読む・・・って良く言っけど、どうしてこんな当て字が流行ったんだろうね？」

<それはしがない剣に聞かれてもなんとも応えようが無いわね。>

「マジって真面目の”真面”から取ったと思うんだけどどう思う？」

<そうなんじゃないか・・・としか言えないわよ。>

「使えない剣だね。」

<本来の剣の使用用途を遥かに逸脱してることに気づいて！？>

「やっぱり売るしかないよね。うん。」

<マジの当て字の由来を知らないから売られるって！？>

この外道！！

鬼畜！！剣にも人権はあるのよっ！？>

「その幻想をぶち壊すっ！！」

<こわしちゃらめえっ！！！>

まあ、その辺はまたとして。

<またこのやり取りがあるっていうの？>といううんざりとしたセルシーの言葉もまたとして。

今日も暇つぶし兼、実践訓練がてらのミッションである。

「おい。無視するなっ!!」

「ところでさ。」

今日の晩御飯はなんだろう？」

<私の言ったことは全て爽快なほどのスルーなのね。

・・・まあいいけど。

ていうかまたとして・・・って本当に私を売ったりしないよね？>

最近はエンデの料理が美味しくて仕方ないのである。

料理の腕がメキメキと上がっているエンデ。

料理が好きなんだろうなあ。

「待てッたらっ!!」

「もう、さつきからうるさいな。

誰だよ。人をシカトしてる奴は・・・全く。

というか、無視され続ける人も根気良く話しかけるな・・・傍から見るとバカみたーいあら？」

いつの間にか僕の背後には軽装に身を包んだ槍をもった20前後の青年が立っていた。

こころなしかプルプル震えてる。

お腹痛いのかな？

「なるほど。」

くそうじゃないでしょ……ヒー君。

「な、なるほど!!」

くそりや、きつと自分の存在のちっぽけさと世界の偉大さを比べて
あまりのちっぽけさに、悔しくて怒ってるのよ。 >

くええ．．．おそろしいわ。彼のその精神と考え方がある限りおそ
らく．．．私達の目の前に立ちふさがり続けるでしょうね。彼は。＞

彼はその類まれなる才能で世界を相手に――世界の化身とも言える私達に対してその磨きに磨いた牙を向け――>

ひ
あ
つ
!
?

「な、何が違うんだ？」

「だから、ちげえって言うてんだろっ！？」

自分のちっぽけさにいちいち怒ってられるか! ドあほう!」

なんだろう？

この20歳くらいの黒髪青年は。
ボケに決まってるじゃないか。

何を真面目にツツコンでるんだろう？

「引くわあ。」

<ドン引きね。>

まさか私達が本当に世界の化身だとも？

そんな設定ないのね！！>

「なんか知らないけど、俺が引かれたっ！？」

あまりにも酷すぎませんかっ！！？」

まあ無視してたのも認めよう。

面倒ごとの気配がしたので無視していたのだからして。

というか、初対面の人におい！という掛け声は無礼に過ぎると思う。

無礼には無礼を返したまでである！！

「で、何のようかな？」

「な、流しやがって・・・まあ良い。

俺はオマエが気に食わん！！」

「は？」

いきなり何を言い出すの？

この人。

「俺たちグランデ護衛騎士団はオマエを認めない！！」

「いや、だから・・・話が見えないんだけど？」

「早い話、お前らみたいな胡散臭いやつらを王女様に近づけるのが
気に入らねえんだよ！！」

「・・・血気盛んなことで。というか、本音はそこかい。」

「ち、ちつげえよ!!」

あくまでも護衛の立場としてだな・・・」

「はいはい。で、話は終わり？」

とつとミツシヨンに行きたいんだけど？」

「まだ終わりじゃねえ!!」

王様の礼に対して変な返しをして気に入られたってのも、胡散臭い!!

どうせ金が欲しかったんだっただろ!?

正直にお金欲しいとでも言っておけば良かっただろうに!!

そこも気に食わん!!

この偽善者が!!

その偽善にまだお若いセリア様は騙されたようだが、俺達プロの目は誤魔化されねえ!!」

まあ手助けは偽善だと認めたとしても、お金は本当に心底要らなかつただけだが。

そんな殊勝な心がけは無いです。

「今度こそ終わり?」

「だから、終わりじゃねえって言ってるだろっ!?

・・・てめえ・・・舐めてんのか!?

といって、殴りかかってくる青年A。

嫌だなあ、いちやもんをつけてくる言いがかり野郎は。

ここで反撃をしても後々面倒そうになりそうだし。

殴られてあげよう。

おちよくり過ぎた侘びも兼ねてね。

「あうっ!?!」

「こんなのも避けられねえのかっ!？
本当に竜を倒したのか・・・？」

僕はしりもちをつく。

一応、異議だけは申し立てておこう！

「どうして何もして無いのに・・・こんなことをするのっ!？」

ちよつとだけ目を潤ませて、青年Aを見上げる僕。

罪悪感を感じてもらおう!!

ちなみに、泣く演技は得意である。

・・・悲しいことを思い出せば良いだけだから・・・姉さんとの日々を思い出せばそれだけで泣ける。

僕ってつおい子!!

「ご、ごめーじゃなくて・・・こいつは男だ・・・男・・・男・・・」

軽く頬を染めて、男と何度も繰り返して唱える青年A。
どうしたんだろう？

「大丈夫？

青年A。」

「あ、ああ、大丈夫・・・じゃなくてっ!!
てか、青年Aってなんだこらっ!？」

「名前知らないし。

所詮モブキャラでしょ？アンタ。」

「な、なんて失礼なガキだ!!

お、俺の名前はジョンという名前が・・・」

ありきたりな名前だな。
まあいいけど。

「じゃあ、さようなら。」

「いや、だから待て待て!!」

「まだ何か用？」

<きつと、ヒー君に惚れちゃったとかじゃないの？>

「・・・ホモとか気持ち悪い。」

<まあ、そう言わないの。ヒー君。

人それぞれじゃない？>

「確かに僕もそう思うけどさ・・・その情念が自分に来るとなると・・・正直な話やっぱり怖気が走るよ・・・気持ち悪い。ホモの友達とか面白そうとか思ってるけどね。」

その・・・マジ惚れされるとやっぱり辛いです。

というわけでごめんなさい。

貴方の気持ちにはこたえられません。」

「告白したわけでも無いのに、勝手に勘違いして勝手に振られたあああああつ!？」

というか、その駄剣は黙ってるっ!!

ややこしくなる!!」

<乱暴な言い草ね。

そんなんじや異性・・・じゃなかった。

同性にモテないわよ？>

「モテたくねえ!!」

てか、ちげえっ!! ホモじゃねえよっ!!」

<じゃあ何さっ!？

ハッキリ言いなさいよっ!!

男でしょっ!!!>

「結構ハッキリ言ってた覚えが俺にはあるのだがっ!？」

「独りよがりの覚えて迷惑だよね。」

「独りよがりだったっ！？」

俺って独りよがりだったのかっ！？

っていうか、話が遅々として進まねえっ！！

ので、ちよっと黙ってくれるかなあっ！！！！」

とどのつまり、青年Aが言いたいのはお前らみたいな胡散臭いやからが王城にいるのは我慢ならん！！

俺と勝負して負けたらとっとと出て行け、とのことである。

仮にも王族の客人を勝手に追い出して良いのか？とも思ったが、その辺はセリアたちが見てこないところでこうして異議を申し立てるところから、わかっててやっているのだろう。

「あのリネティア嬢とも仲良くなりやがって・・・あの人がいる限り、王女様には絶対近づけないとまで言われてたのに・・・一体、どんな手を使いやがったんだ！！」

「成り行き・・・としか言えないけど。」

「この女男が！！」

「別に見た目は関係ないと思うのけど。」

「とにかく、勝負したら勝負！！」

「はいはい。」

勝負ね。

わかったから、とっとと構えろ。」

「・・・ふっ。」

ようやく認めたか。

おら、くらえっ！！」

「ぐあああ、やられたあ。（棒読み）」

槍で突きかかってくる青年Aの攻撃をそのままわざと、セルシーの刀身の腹で受けてそのまま後ろに倒れこむ僕。

「て、ててて、てめえはふざけてんのかあつ！！」

だ、だがなっ！！おちよくってられるのも今のうちだ！！
オマエは負けた！！

だからオマエはこの王城を出て――」

「負けたけど、出て行かないよ？」

勝手に君が言い出しただけの事だし。」

「てめえっ！！」

卑怯だぞっ！！」

「あまり五月蠅いと王様に言っちゃうよ？」

あなたの国の護衛騎士団がいちやもんを付けて来るんです。

あなたの国の騎士も高が知れてますね。つて。

「……ぐっ！

ひ、卑怯な。。。

「というか王女様の客人にあたる僕にこんなに突っかかってくるのもおかしいでしょ？」

「気持ちには分かるけどさ。」

「~~~~~!!」

て、てめえは……ぜ、ぜぜぜ、絶対ぶっ殺してやるからな……！！

3日後！！

大会がある！！

この王都で開催される名誉あり、歴史ありの何でもありの大会だ！！
そこでテメエの化けの皮を剥いでやるからな！！

絶対、出ろっ！！

[illegible]

「はいはい、分かりました、分かりました。」

もう面倒だな。

そのまま、僕は走り去る。
いい加減、相手が面倒だ。

いい加減、相手が面倒だ。

「おいこらーちやんと聞いてー」

後ろで青年Aの声が遠ざかっていくのを感じながら、僕はそのまま冒険者ギルドと向かうのであった。

もちろん、大会なんて出るつもりは無い。
 ということは言うておこう。

というふうには言っておいて。

第45節 グランデ護衛騎士団の青年A（後書き）

主人公ラフ

> i 2 5 3 6 9 — 2 2 3 8 <

黒と白のオッドアイと書き込まれてるのは契約による影響。
という設定。

服装は仮デザ。

常にこの服装だと思ってください。

次回はフェローかセリアあたりのデザインを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2094p/>

勇者時々へたれ魔王

2011年6月8日23時11分発行